

# 九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—9—

甘木市所在 塔ノ上遺跡の調査

1 9 8 7

福岡県教育委員会

# 九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—9—

甘木市所在 塔ノ上遺跡の調査

# 序

福岡県教育委員会は、日本道路公団の委託により、九州横断自動車道建設工事に先立つ発掘調査を昭和54年度から実施し、本年度すでに8年を経過しております。その間に調査が進捗し、昨年度末までに発掘調査の終了した鳥栖・朝倉間の一般供用が去る2月に開始されましたことは、私共にとりましてもまことに慶賀の念に絶えません。

本書は、昭和58・59年度に調査を行った甘木市塔ノ上遺跡についての調査報告書であります。この遺跡では奈良時代の一地方集落の一部が検出されました。この集落に住んでいた人々は、主に竪穴住居に住み、農業で生計をたてていたと考えられます。現在の周辺の環境も、農地が広がっている中に集落が点在する様相であり、1200年ほどの昔日の面影はないにしても、脈々とつづく営みの悠遠の流れを感じられるところであります。

本書が、人々の営みの累積という歴史を解きあかすことの一助ともなりうるならば望外の喜びとするところです。

発掘調査に関して、関係各位の御協力、御援助が得られましたことに深甚の謝意を表します。

昭和62年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友野 隆

## 例　　言

1. 本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託されて発掘調査を実施した、九州横断自動車道関係遺跡についての9冊目の報告書である。
2. 本書に収録したのは、1983・84（昭和58・59）年度に調査を行った塔ノ上遺跡である。<sup>とうじょう</sup>
3. 発掘で検出した遺構の実測・写真撮影は木下・伊崎・宮田が行い、実測にあたっては日高・平嶋の援助があった。
4. 遺物整理は岩瀬正信氏の指導に下に、九州歴史資料館と福岡県文化課甘木事務所において行った。鉄器は九州歴史資料館・横田義章氏のもとで保存処理を実施した。
5. 遺物は、実測を木下・伊崎・宮田と高橋章・平田春美・原富子の諸氏が行い、写真是九州歴史資料館の石丸洋・藤美代子氏と伊崎が撮影した。
6. 遺構・遺物の製図・浮書は松嶋邦子・塙足里美・原田和枝・豊福弥生・鶴田佳子・関久江の諸氏と伊崎が行った。
7. 墓書土器の判読にあたっては九州歴史資料館・倉住靖彦氏の御教示をえた。
8. 本書で使用した方位は全て真北である。
9. 本書中に記した面積はブランメーターによる測定値である。
10. 写真図版・挿図中においては、遺構番号の前に建物跡：B、土壙：D、溝：M、ピット：Pの略号を冠し、住居跡の場合は無冠の数字のみである。遺物は遺構毎に連番とし、遺構上面・搅乱部等出土のものはその前にOの略号を冠する。
11. 本書の執筆は木下修・伊崎俊秋・宮田浩之が分担し、本文目次に示すとおりである。なお、IV-1においては伊崎が助筆した部分がある。
12. 本書の編集は伊崎が行った。

# 本文目次

I. 調査の経過 .....	(木下 修) 1
II. 位置と環境 .....	(宮田 浩之) 5
III. 調査の概要 .....	(伊崎 俊秋) 9
IV. 奈良時代の遺構と遺物	
〈凡例〉 —— 遺構・遺物の説明のまえに —— .....	(伊崎) 12
1. 竪穴住居跡 .....	(宮田) 24
2. 樹立柱建物 .....	(宮田・伊崎) 106
3. 土壙 .....	(宮田・伊崎) 115
4. 溝 .....	(伊崎) 120
5. ピットその他 .....	(伊崎) 132
6. 遺物各説	
i. 接合資料・同一個体資料 .....	(伊崎) 141
ii. 墨書き土器 .....	(伊崎) 150
iii. 焼塗土器 .....	(伊崎) 152
iv. 瓦 .....	(伊崎) 162
v. 土製品 .....	(木下・伊崎) 163
vi. 石製品 .....	(木下・伊崎) 164
vii. 鉄製品 .....	(伊崎) 166
viii. 植物種子 .....	(伊崎) 169
V. その他の遺構と遺物	
1. 土壙 (おとし穴) .....	(宮田・伊崎) 170
2. 先土器・縄文時代の石器・土器 .....	(木下) 173
3. 中世の遺物 .....	(伊崎) 175
VI. 総括	
1. 須恵器について .....	(宮田) 176
2. 焼塗土器に関して .....	(伊崎) 179
3. 奈良時代の集落に関して .....	(伊崎) 183
あとがき .....	(伊崎) 190

## 図版目次

- 図版 1 塔ノ上遺跡全景  
上. 西からの航空写真 下. 東から
- 図版 2 塔ノ上遺跡全景  
上. 東から 中. 東北から 下. 西から
- 図版 3 上. 1号住居跡（南から） 中. 2号住居跡（東から）  
下. 1号住居跡カマド
- 図版 4 C・D群全景 上. 北から 下. 南から
- 図版 5 上. C群全景（東から） 中. D群全景（東北から）  
下. 43号住居跡カマド
- 図版 6 上. 46号住居跡カマド 中. 49号住居跡カマド  
下. 55号住居跡カマド
- 図版 7 上. E・F群全景（北から） 下. E～I群全景（西から）
- 図版 8 上. E・F群全景（東から） 中. G群全景（南から）  
下. 57号住居跡カマド
- 図版 9 上. 29号住居跡カマド 中. 59号住居跡カマド  
下. 64号住居跡カマド
- 図版 10 上. 8号住居跡カマド 中. 9号住居跡カマド  
下. 18号住居跡カマド
- 図版 11 I群全景 上. 西から 下. 南から
- 図版 12 上. 11・72号住居跡（南から） 中. 14号住居跡（南から）  
下. 14号住居跡カマド
- 図版 13 上. 15号住居跡カマド 中. 13号住居跡カマド  
下. 17号住居跡カマド煙道先端ピット（P701・703）
- 図版 14 37号住居跡 上. 全景（南から） 中・下. カマド
- 図版 15 E群掘立柱建物全景 上. 北から 下. 東から
- 図版 16 上. 10・11号土壙（南から） 中. 9号土壙（西から）  
下. 1号土壙（北から）
- 図版 17 溝1・2 上. 全景（東北から） 中上. 土層D（溝1）  
中下. 土層C（溝2） 下. 溝1 A群
- 図版 18 塔ノ上遺跡出土土器①（1～3・6・39～42・48～50号住居跡）

- 図版 19 塔ノ上遺跡出土土器② (43・46・58・55・28・25・35号住居跡)
- 図版 20 塔ノ上遺跡出土土器③ (51・52・60・64号住居跡)
- 図版 21 塔ノ上遺跡出土土器④ (59・8・19・20・32・18号住居跡)
- 図版 22 塔ノ上遺跡出土土器⑤ (33・11・38・14・13・15・17・37号住居跡)
- 図版 23 塔ノ上遺跡出土土器⑥ (B 2、D 9・10・1、M 1)
- 図版 24 塔ノ上遺跡出土土器⑦ (M 1)
- 図版 25 塔ノ上遺跡出土土器⑧ (M 1)
- 図版 26 塔ノ上遺跡出土土器⑨ (M 1)
- 図版 27 塔ノ上遺跡出土土器⑩ (M 2, ピット)
- 図版 28 塔ノ上遺跡出土土器⑪ (ピット, その他, 接合, 同一個体資料)
- 図版 29 塔ノ上遺跡出土土器⑫ (接合資料; 墨書き土器, 焼塙土器①)
- 図版 30 塔ノ上遺跡出土焼塙土器②
- 図版 31 塔ノ上遺跡出土焼塙土器③
- 図版 32 塔ノ上遺跡出土焼塙土器④
- 図版 33 塔ノ上遺跡出土焼塙土器⑤
- 図版 34 塔ノ上遺跡出土焼塙土器⑥
- 図版 35 土製品・瓦
- 図版 36 石製品 (上, 紡錘車, 下, 垣石)
- 図版 37 鉄製品①
- 図版 38 鉄製品②, スラッグ
- 図版 39 上, 3号土壤 (南から) 中, 4号土壤 (南から)  
下, 5号土壤 (南から)
- 図版 40 上, 6号土壤 (南から) 中, 7号土壤 (南から)  
下, 8号土壤 (南から)
- 図版 41 繩文土器
- 図版 42 上, 石器 中, 周辺出土土器  
下, 雪に覆われた遺跡

## 挿 図 目 次

第	図	頁
第 1 図	九州横断自動車道路線図 (約1/400,000) .....	x
第 2 図	周辺遺跡分布図 (1/50,000) .....	6
第 3 図	塔ノ上遺跡周辺地形図 (1/2,000) .....	8
第 4 図	塔ノ上遺跡の群と土層ポイント (1/800) .....	10
第 5 図	塔ノ上遺跡土層図 (A-A') (1/240) .....	11
第 6 図	竪穴住居跡模式図 .....	13
第 7 図	カマド類型一覧 (1/60) .....	13
第 8 図	須恵器種一覧 (1/6) .....	16
第 9 図	土師器器種一覧① (1/6) .....	19
第 10 図	土師器器種一覧② (1/9) .....	20
第 11 図	1号住居跡実測図 (1/60) .....	24
第 12 図	2号住居跡実測図 (1/60) .....	24
第 13 図	1・2号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	25
第 14 図	3・5号住居跡実測図 (1/60) .....	26
第 15 図	4・6・7号住居跡実測図 (1/60) .....	28
第 16 図	3・4・5・6号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	29
第 17 図	39・40・41号住居跡実測図 (1/60) .....	31
第 18 図	39・40・41号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	32
第 19 図	41号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	33
第 20 図	42号住居跡実測図 (1/60) .....	34
第 21 図	45号住居跡実測図 (1/60) .....	35
第 22 図	46号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	35
第 23 図	46・47・48号住居跡実測図 (1/60) .....	36
第 24 図	46号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	37
第 25 図	42・45・48号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	38
第 26 図	49号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	39
第 27 図	49・50・58号住居跡実測図 (1/60) .....	39
第 28 図	47・49・50・58号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	40
第 29 図	43号住居跡実測図 (1/60) .....	42
第 30 図	43号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	43

第 31 図	51・52号住居跡実測図 (1/60) .....	44
第 32 図	51号住居跡出土土器実測図① (1/3) .....	45
第 33 図	51号住居跡 (P 392) 出出土器実測図② (1/3) .....	46
第 34 図	53号住居跡実測図 (1/60) .....	47
第 35 図	55号住居跡実測図 (1/60) .....	48
第 36 図	52・53・55号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	49
第 37 図	44・56号住居跡実測図 (1/60) .....	50
第 38 図	44・56号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	51
第 39 図	57・60・61・62号住居跡実測図 (1/60) .....	53
第 40 図	60・61・62号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	54
第 41 図	28号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	55
第 42 図	29号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	56
第 43 図	28・29・31・54・66号住居跡実測図 (1/60) .....	57
第 44 図	29・54・57・66号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	58
第 45 図	59号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	59
第 46 図	25・59号住居跡実測図 (1/60) .....	60
第 47 図	26・27号住居跡実測図 (1/60) .....	61
第 48 図	25・27・59号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	62
第 49 図	21・22・23・67・69・70号住居跡実測図 (1/60) .....	64
第 50 図	63・64・65号住居跡実測図 (1/60) .....	66
第 51 図	64号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	67
第 52 図	23・28・69号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	68
第 53 図	63・64・65号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	69
第 54 図	8・30号住居跡実測図 (1/60) .....	70
第 55 図	8号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	71
第 56 図	8号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	72
第 57 図	9・33・36号住居跡実測図 (1/60) .....	73
第 58 図	9号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	74
第 59 図	9・30号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	75
第 60 図	33号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	76
第 61 図	10・32号住居跡実測図 (1/60) .....	77
第 62 図	10・32・36号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	78
第 63 図	18号住居跡実測図 (1/60) .....	79

第 64 図	18号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	80
第 65 図	19号住居跡実測図 (1/60) .....	81
第 66 図	18号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	82
第 67 図	19号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	82
第 68 図	19・24号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	83
第 69 図	20号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	84
第 70 図	20・24・35・68号住居跡実測図 (1/60) .....	85
第 71 図	20号住居跡出土土器実測図① (1/3) .....	86
第 72 図	20号住居跡出土土器実測図② (1/3) .....	87
第 73 図	21・22・35・68号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	88
第 74 図	71・73・74号住居跡実測図 (1/60) .....	89
第 75 図	71, 71・73・74号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	90
第 76 図	11・72号住居跡実測図 (1/60) .....	91
第 77 図	11号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	92
第 78 図	12号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	93
第 79 図	12・13・34・38号住居跡実測図 (1/60) .....	94
第 80 図	12・34・38号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	95
第 81 図	13号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	96
第 82 図	13号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	97
第 83 図	15・16・17号住居跡実測図 (1/60) .....	98
第 84 図	15号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	99
第 85 図	15・16号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	100
第 86 図	P 701・703実測図 (1/10) .....	101
第 87 図	17号住居跡出土土器実測図① (P 703) (1/3) .....	101
第 88 図	17号住居跡出土土器実測図② (1/3) .....	102
第 89 図	14号住居跡実測図 (1/60) .....	103
第 90 図	14号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	103
第 91 図	14号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	104
第 92 図	37号住居跡実測図 (1/60) .....	105
第 93 図	37号住居跡カマド実測図 (1/30) .....	105
第 94 図	37号住居跡出土土器実測図 (1/3) .....	105
第 95 図	1号掘立柱建物実測図 (1/60) .....	106
第 96 図	2号掘立柱建物実測図 (1/60) .....	107

第 97 図	3号掘立柱建物実測図 (1/60)	108
第 98 図	4号掘立柱建物実測図 (1/60)	109
第 99 図	5号掘立柱建物実測図 (1/60)	110
第 100 図	6号掘立柱建物実測図 (1/60)	111
第 101 図	掘立柱建物出土土器実測図 (1/3)	111
第 102 図	7号掘立柱建物実測図 (1/60)	112
第 103 図	8号掘立柱建物実測図 (1/60)	113
第 104 図	9号掘立柱建物実測図 (1/60)	114
第 105 図	1号土壤実測図 (1/20)	115
第 106 図	1号土壤出土土器実測図 (1/3)	116
第 107 図	9・10・11号土壤実測図 (1/40)	117
第 108 図	9号土壤出土土器実測図① (1/3)	118
第 109 図	9号土壤出土土器実測図② (1/3)	119
第 110 図	10号土壤出土土器実測図 (1/3)	120
第 111 図	溝1・2土層断面図 (1/60)	121
第 112 図	溝1出土土器実測図① (1/3)	122
第 113 図	溝1出土土器実測図② (1/3)	123
第 114 図	溝1出土土器実測図③ (1/3)	124
第 115 図	溝1出土土器実測図④ (1/3)	125
第 116 図	溝1出土土器実測図⑤ (1/3)	126
第 117 図	溝1出土土器実測図⑥ (1/3)	127
第 118 図	溝1出土土器実測図⑦ (1/3)	128
第 119 図	溝1出土土器実測図⑧ (1/3)	129
第 120 図	溝1出土土器実測図⑨ (1/3)	130
第 121 図	溝4断面図 (1/80)	131
第 122 図	溝2・4出土土器実測図 (1/3)	131
第 123 図	P275実測図 (1/20)	132
第 124 図	ピット出土土器実測図① (1/3)	133
第 125 図	ピット出土土器実測図② (1/3)	134
第 126 図	ピット出土土器実測図③ (1/3)	135
第 127 図	ピット出土土器実測図④ (1/3)	136
第 128 図	ピット出土土器実測図⑤ (1/3)	137
第 129 図	ピット出土土器実測図⑥ (1/3)	138

第 130 図	遺構上面・その他の出土土器実測図① (1/3) .....	139
第 131 図	遺構上面・その他の出土土器実測図② (1/3) .....	140
第 132 図	接合資料実測図 〈J1-J10〉 (1/3) .....	142
第 133 図	同一個体資料実測図① (1/3) .....	144
第 134 図	同一個体資料実測図② (1/3) .....	145
第 135 図	同一個体資料実測図③ (1/3) .....	146
第 136 図	同一個体資料実測図④ (1/3) .....	148
第 137 図	同一個体資料実測図⑤ (1/3) .....	150
第 138 図	墨書き土器実測図 (1/3) .....	151
第 139 図	焼塙土器分類図 (1/4) .....	152
第 140 図	焼塙土器実測図① (1/3) .....	154
第 141 図	焼塙土器実測図② (1/3) .....	156
第 142 図	焼塙土器実測図③ (1/3) .....	158
第 143 図	焼塙土器実測図④ (1/3) .....	160
第 144 図	瓦実測図 (1/2) .....	162
第 145 図	土製品実測図 (1/2) .....	163
第 146 図	石製品実測図① (1/3) .....	165
第 147 図	石製品実測図② (1/4) .....	166
第 148 図	鉄製品実測図① (1/3) .....	167
第 149 図	鉄製品実測図② (1/2) .....	168
第 150 図	2・3・4・6号土壙実測図 (1/30) .....	171
第 151 図	5・7・8号土壙実測図 (1/30) .....	172
第 152 図	先土器・縄文時代の石器 (1/2) .....	174
第 153 図	縄文土器実測図 (1/3) .....	174
第 154 図	青磁実測図 (1/3) .....	175
第 155 図	塔ノ上遺跡住居群変遷図① (1/800) .....	184
第 156 図	塔ノ上遺跡住居群変遷図② (1/800) .....	185
第 157 図	塔ノ上遺跡周辺出土土器実測図 (1/3) .....	187

付 図 塔ノ上遺跡全体図 (1/200)

## 写 真 挿 図

Fig. 1	作業風景①	ix
Fig. 2	作業風景②	2
Fig. 3	43号住居跡遺物出土状態	42
Fig. 4	19号住居跡	81
Fig. 5	3号掘立柱建物	108
Fig. 6	作業風景③	115

## 表 目 次

第 1 表 ①~③塔ノ上遺跡竪穴住居跡一覧表	折込
第 2 表 ①~③塔ノ上遺跡出土土器法量表	191~200



Fig. 1 作業風景①



第1図 九州横断自動車道路線図（約1/400,000）

## I. 調査の経過

塔ノ上遺跡は、分布調査の段階で第19地点の遺物散布地として登録されていた地点の一部である。昭和58年6月～9月にかけて、小郡市から朝倉町にかけて試掘調査を実施し各地点の遺跡の性格を把握した。その結果、甘木市大字牛鶴から朝倉町大字石成間の第19地点をA～D区に分け、塔ノ上遺跡は第19-A地点とし、東西140mに及ぶ範囲を調査区とした。

調査は前後2回に分けて行った。第1次調査は遺跡の西端部700m<sup>2</sup>で、昭和59年2月3日～2月9日に実施した。横断道路建設に関連した甘木市金川地区圃場整備事業に伴う、水路とボックス工事に先立つものである。竪穴住居跡7、掘立柱建物跡1及び柱穴群を検出したが、台地の最西端部10m程には住居跡が認められず、また、1号住居跡は北に1軒のみ離れて検出された。この住居跡は第2次調査の結果と合せても独立して位置している。

第2次調査は昭和59年10月22日から60年2月8日の3ヶ月半にわたり、残りの8,200m<sup>2</sup>を調査した。横断道路はこの年の初めから各工事区に工事が発注され、従前のようない側道・ボックス優先の調査は時間的にロスが多いため、側道（工事用道路）を確保しつつ全面の調査を実施し、未調査箇所を後送りしない方法を各地点で取るように甘木工事事務所と協議した。当遺跡では、当初は南北の側道部を残して中央部の調査を行い、北側の側道は大部分の調査が終了した段階で側道を付け換えて調査を続行した。

表土剥ぎの最中から、後に集落の中心部とされる内域東群の箇所では、一帯に拡がる黒色土中にカマドと考えられる焼土や粘土の集中部が点々と出現し、多数の住居跡が複雑に重複している事が予想された。その結果、2条の溝に囲まれた東西60mの範囲（内域）に奈良時代の竪穴住居跡66、掘立柱建物跡8の他に土壙が、溝の東側（外域）には住居跡1と多数の柱穴群や落とし穴状の土壙7を検出した。特に内域の密集した住居跡の調査は非常に難行し、カマドの残存から住居跡の存在を知るものが多々あった。また、外域とした溝の外側に1軒のみ存在する37号住居跡は注目された。

この遺跡の中央部は旧地形で凹地になっており、ここに黒色土が堆積している。奈良時代の各遺構はこの黒色土を切り込んでいるが、層中より縄文時代早・前期の遺物が若干出土した。71号住居跡付近にトレンチを設定し、下層の調査を実施したが、遺構は検出されなかった。

以下に日誌から調査経過をふりかえっておく。

昭和59年

2月3日 表土剥ぎ開始。

2月6日 住居跡・建物跡の調査。

- 2月8日 写真撮影の後1/20で実測。
- 2月9日 実測後器材撤去。
- 10月22日 第2次調査開始、表土剥ぎ。
- 10月29日 土量が多い為ダンプを入れる。黒色土中にカマド跡が点々とみられる。
- 11月5日 第16地点の調査が終了したので、本日より作業員を入れ調査を開始する。
- 11月6日 這撲検出作業をするが、住居跡の重複が著しく、切合い関係が不明な箇所が多い。
- 11月8日 12~15号住居跡の調査。
- 11月10日 13号住居跡付近を掘り始めるが、7~8耕種重複しているらしい。
- 11月22日 3~6号遺物跡及び8~24号住居跡等の写真撮影。
- 11月28日 上部の調査済住居跡について1/20にて実測を随時開始し、順次下層の調査に入る。
- 12月4日 溝1の調査、溝2はほぼ掘り終る。
- 12月7日 溝の東側調査区の柱穴群等を調査するが建物としてはまとまらない。7ヶ所程落とし穴状の土壤を検出。
- 12月20日 東側調査区(外城)の調査終了後、直ちに盛土工事が行われる。

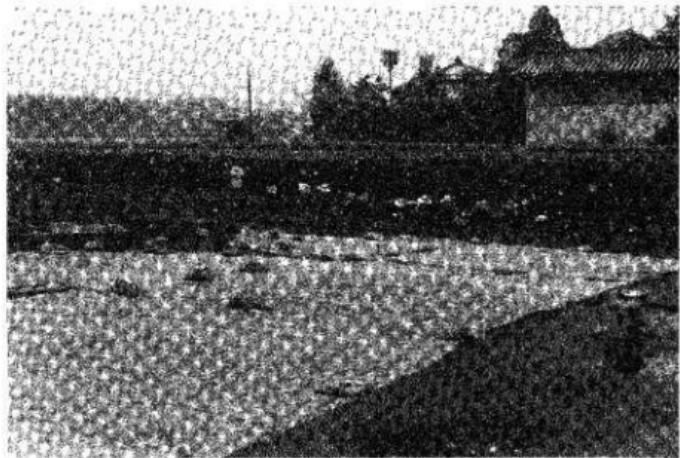


Fig. 2 作業風景②

昭和60年

- 1月7日 新年の仕事始め。西側調査区(内城西群)の遺構検出作業を行い、16軒程の住居跡を確認。
- 1月14日 昨夜來の大雪の為作業中止。
- 1月16日 39~55号住居跡周辺の実測及びエレヴェーション。
- 1月18日 9号土壤の調査。筋縫車、須恵器片等出土。
- 1月21日 全体の清掃。
- 1月22日 高所作業車にて全景写真の撮影。
- 1月23日 39~55号住居跡の床面下層の調査。
- 1月25日 3・4号獨立柱建物の柱穴断面の写真撮影と実測。
- 1月27日 北側工事用道路の付け換え。
- 1月28日 北側側道の表土剥ぎ。
- 2月1日 側道部分の調査に入り、71号を始め3軒の住居跡を検出。
- 2月6日 溝1・2の土層図作成。
- 2月7日 繩文時代の調査及び残りの実測。
- 2月8日 午後より器材を撤去し調査完了。

調査にあたっては道路公团甘木工事事務所、甘木市教育委員会をはじめ、牛鶴区長や地元の作業員の皆さんの協力を得た。また、整理作業については九州歴史資料館、文化課甘木調査事務所で実施したことを記して感謝の意を表したい。

なお、昭和58・59年度における調査関係者は次のとおりである。昭和61年度については「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-10-」を参照されたい。

日本道路公团福岡建設局

局長	今村 浩三
総務部長	落合 一彦(前任)
管理課長	梅田 道人(前任)
管理課長代理	野口 利夫(前任)
	佐伯 豊

日本道路公团福岡建設局甘木工事事務所

所長	桑松 紀三
副所長	西田 功
副所長(技術担当)	中村 義治

庶務課長	松下 幸男 (前任)	徳永 登
用地課長	岩下 哲	
工務課長	山口 宗雄 (前任)	後藤二郎彦
小郡工事区工事長	友田 義則	
甘木工事区工事長	猪狩 宗雄	
朝倉工事区工事長	平沢 正 (前任)	小手川良和
杷木工事区工事長	前田 雄一 (前任)	山中 茂

#### 福岡県教育委員会

##### (總括)

教育長	友野 隆	
教育次長	安部 徹	
管理部長	伊藤 博之 (前任)	大鶴 英雄
文化課長	藤井 功 (前任)	前田 栄一
文化課課長補佐	中村 一世 (前任)	平 聖峰
" 課長技術補佐	宮小路賀宏	
" 參事補佐	栗原 和彦	

##### (庶務)

文化課庶務係長	松尾 満 (前任)	平 聖峰 (兼任)
" 事務主査	長谷川伸弘	

##### (調査)

文化課第二係長	栗原 和彦 (S 58年度) 宮小路賀宏 (S 59年度・兼任)
" 主任技師	木下 修 (現、京葉教育事務所技術主査)
" 技 師	伊崎 俊秋
" 臨時職員	日高 正幸
" "	宮田 浩之 (現、小郡市教育委員会)
" 調査補助員	武田 光正
" "	平鳴 文博 (現、大分県国東町教育委員会)

## II. 位置と環境

塔ノ上遺跡は、福岡県甘木市大字牛鶴塔ノ上に所在する。

筑後川中流の右岸域、朝倉山塊から発した小石原川、佐田川、荷原川の各扇状台地に挟まれた地域には重要な遺跡がある。遺跡は、佐田川と荷原川の開析による扇状地状の台地、段丘の西端部標高30-32m位に位置し、佐田川の左岸低位置丘上に占地している。

塔ノ上遺跡周辺の遺跡群は、先述の各河川のつくる段丘・台地上に数多くみられ、各時期ごとにながらめてみよう。

先土器時代の遺跡は今のところ多くないが、横断道路線内大刀洗町春園遺跡（9地点）からはナイフ形石器・縄石刃などの石器が出土した。

縄文時代では、甘木市内で馬田中原遺跡（早期）、馬田上原遺跡（晩期）、上川原遺跡（早・前・晩期）、小隈神藏遺跡（早・前期）、屋永遺跡（後・晩期）、頓田遺跡（早・前・後期）、堤大岩遺跡（早・前期）、柿原野田遺跡（前期）、田中原遺跡（早・晩期）、柿原古墳群（晩期）、三奈木小学校遺跡（早期）、山の鼻遺跡、城原遺跡（晩期）、高原遺跡（後・晩期-16地点）、朝倉町では押塚遺跡（早期）、八並遺跡（晩期）、治部ノ上遺跡（22-A・B地点）、長島遺跡（27地点）などがある。塔ノ上遺跡でも中央部の黒色土中より早期の押型文などが出土したが、明確な遺構は検出されなかった。

弥生時代では、弥生時代前期の遺跡は断片的な資料しか発見されていない。柿原野田遺跡、横断道路線内は西原遺跡（15地点）等で知られるが、今後先述した各河川に挟まれた段丘上の調査が行われれば、徐々に明らかになるだろう。

中期の遺跡としては、前期末から営まれる下原遺跡（15地点）、中道遺跡（20地点）、小田集落遺跡などがあり、墓地では、上川原遺跡、連弧文昭明鏡・鉄戈・貝釧・丹塗土器多数が出土した栗山遺跡などが調査されている。

後期の遺跡は少ないが、小田道遺跡、上々浦遺跡（14地点）、西原遺跡（15地点）、高原遺跡（16地点）などを数えることができる。

古墳時代になると、塔ノ上遺跡より西方約3.2kmの平塚大願寺方形周溝墓から三角縁神獣鏡が出土し、また神藏古墳は全長40m程の前方後円墳で、前方部の長さは8mと短い。内部主体は竪穴式石室で盗掘されていたが、副葬品として三角縁神獣鏡1面、鉄劍・鉄斧などが出土した。これらの古墳の被葬者は、4世紀代における朝倉東部を支配下に治めた首長であろう。

5世紀代になると陶質土器・初期須恵器を伴った、池の上・古寺墳墓群、柿原古墳群（57地点）、小田茶白塚古墳などがみられる。これらに副葬・供獻されている初期須恵器は、陶邑窯跡



第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

15 (西) 下原遺跡	22 (西) 橋場南遺跡	61 持丸古墳群	73 大願寺遺跡
(東) 西原遺跡	(東) 治部ノ上遺跡	62 鬼の枕古墳	74 小田通遺跡
16 高原遺跡	23 座得守道路	63 池の上古墳墓群	75 小派出口遺跡
17 ロノ平遺跡	24・25 才田、東才田遺跡	64 大岩南郷古墳群	76 神嶽古墳
19 A 塔ノ上遺跡	57 稲原古墳群	65 大岩東郷古墳群	77 小坂松山遺跡
B 大庭港遺跡		66 道登古墳群	78 小田茶白塚古墳
C-D 石成久保遺跡		67 船尾野田古墳	79 小田小坂古墳
20 中道遺跡		68 野田東部古墳群	80 小田島落遺跡
21 A 西法寺遺跡	以上。横断道関係遺跡	69 植原大谷古墳群	81 中島田遺跡
C 大庭久保遺跡	(数字は地名に同じ)	70 古熊古墳群	82 石成古墳
D 上の原遺跡		71 馬堀院古墳	83 犀塚古墳
		72 宮地原古墳	

と別系統で朝鮮半島から北部九州に受容され、花立山の東裾部で確認された小隈・山隈遺跡などで生産され、朝倉産の初期須恵器は北部九州一円に及んでおり、甘木・朝倉地方の新たな一面が窺われる。

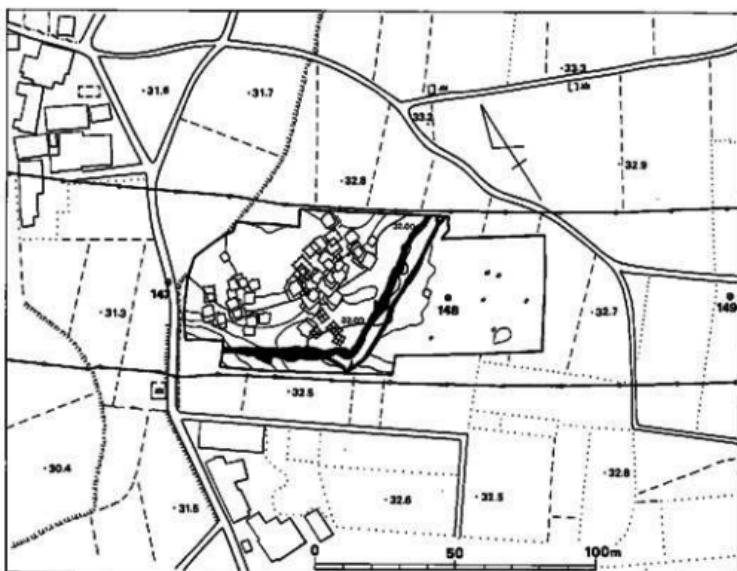
これまで、集落の調査はあまり行われておらず、横断道路に伴う調査で資料は増加した。その中で、塔ノ上遺跡の時期は8世紀中頃～後半にかけて短時間に営まれた集落である。このような奈良時代を前後する時期の集落は、横断道路線内で多数確認されている。小都市では向築地遺跡、千瀬遺跡、前伏遺跡（2地点）、井上薬師堂遺跡（5地点）、薬師堂東遺跡（6地点）、大刀洗町では春園遺跡（9地点）、甘木市では宮原遺跡（11地点）、高原遺跡（16地点）、朝倉町で太遠端遺跡（19-B地点）、石成久保遺跡（19-C・D地点）、中道遺跡（20地点）、西法寺遺跡（21-A地点）、大庭久保遺跡（21-C地点）、上の原遺跡（21-D地点）、狐塚南遺跡（22-C地点）、才田遺跡（24地点）、長島遺跡（27地点）、中妙見遺跡（28地点）などがある。墓地としては太遠端遺跡と立野遺跡の土壙墓、柿原古墳群がある。なお、太遠端遺跡は当遺跡より東へ約300m離れて位置し、塔ノ上遺跡と同一集団の墓地の可能性がある。

塔ノ上遺跡においては、製塩関連の遺物がかなり多く出土し、横断道路線内の宮原遺跡（11地点）、高原遺跡（16地点）、狐塚南遺跡（22地点）、才田遺跡（24地点）等、また、筑後川の左岸に位置する久留米市の筑後國府でも確認され、搬入経路に関しては当時の甘木・朝倉地方の生活様相を知る上で貴重な資料であろう。

#### 註

1. 甘木市教育委員会「甘木市史・上巻」 1982
2. 未報告
3. 甘木市教育委員会「甘木市史・上巻」を参考し、以下に列挙する。
4. 甘木市教育委員会「柿原野田遺跡」 1976
- 5～8. 未報告
9. 註4に同じ
10. 福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-(1)-」 1982
11. 福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-(2)-」 1983
12. 甘木市教育委員会「小田集落遺跡」 甘木市文化財調査報告 第2集 1974
13. 甘木市教育委員会「上川原遺跡」 甘木市文化財調査報告 第13集 1982
14. 甘木市教育委員会「栗山遺跡」 甘木市文化財調査報告 第12集 1982
15. 甘木市教育委員会「小田遺跡」 甘木市文化財調査報告 第8集 1981
16. 未報告
17. 註1に同じ

18. 甘木市教育委員会「神藏古墳」 甘木市文化財調査報告 第3集 1978
19. 甘木市教育委員会「池の上墳墓群」 甘木市文化財調査報告 第5集 1979
20. 甘木市教育委員会「古寺墳墓群」 甘木市文化財調査報告 第14・15集 1982・1983
21. 福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-(6)-」 1986
22. 甘木市教育委員会「小田茶臼塚古墳」 甘木市文化財調査報告 第4集 1979
23. 甘木市教育委員会「甘木市史資料編」 1985
24. 小都市教育委員会「向榮地遺跡」 小都市文化財調査報告書 第5集 1978
25. 福岡県教育委員会「干渉遺跡I」 福岡県文化財調査報告書 第59集 1980
- 26~29 未報告
30. 埋蔵文化財研究会第19回研究集会「海の生産用具」 1986



第3図 塔ノ上遺跡周辺地形図 (1/2,000)

### III. 調査の概要

九州横断自動車道第19-A地点<sup>塔ノ上遺跡</sup>では、1984・1985年の調査において、SAT.147+00~148+33の間約8,900m<sup>2</sup>の中に次の如き遺構・遺物を検出した。

#### ●奈良時代

〈遺構〉	・豈穴住居跡	74軒（1～74号）
	・掘立柱建物	9棟（B1～B9号）
	・土壙	4基（D10・11・9・1）
	・溝	（大）2条、（小）2条、（M1～4）
	・ピット	多数（遺物の出土したものは500個弱）
〈遺物〉	——須恵器、土師器、焼塙土器、瓦、土製品（土鍋など）、石器（砥石・紡錘車）、鐵器（鎌・鋤先・斧など）	

#### ●先土器～縄文時代

〈遺構〉	——なし
〈遺物〉	——細石刃、スクレイバー、打製石器、押型文土器、曾畠式土器

#### ●中世

〈遺構〉	ピット（明確に知りえたのはP223のみ）
〈遺物〉	——青磁

#### ●時期不詳

〈遺構〉	・土壙（おとし穴）	7基
	・溝	数条
	・ピット	多数

塔ノ上遺跡の主体を占めるのは奈良時代の集落である。以下、この時期について触れておく。  
〈集落のあり方〉

本報告書中の説明の便をはかる為、住居・建物群等について現象面から第4図のように群を設定しておく。

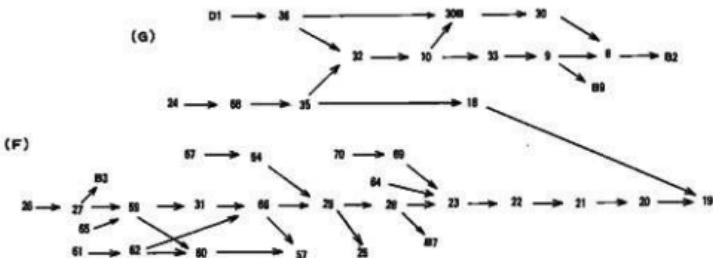
まず、溝1・2で区画された風の内側と、ただ1軒（37号住居跡）のみの外側（J群）に分

け、用語として妥当とは思わないが、前者を内域、後者を外域とする。

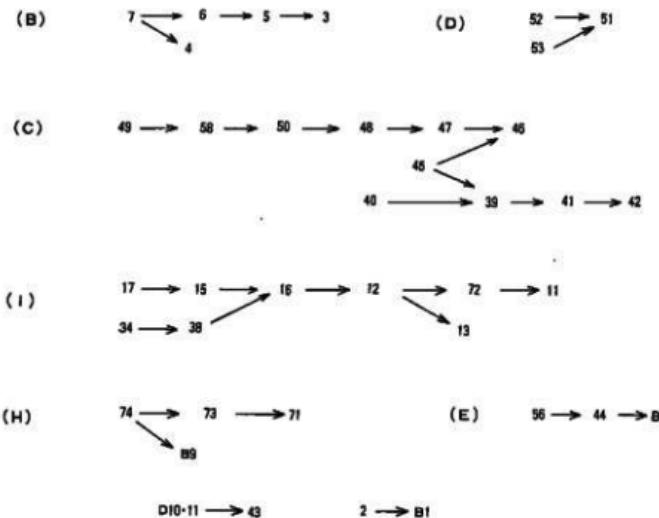
内域は座標軸Y = -28.620kmの南北ラインの付近でもって大きく西群と東群に分かれる。この東西両群の間にある若干の空白地帯は、両群中における住居群の重複の仕方からすれば意味あるものと捉えうる。次に、西群をA～Dの4群、東群をE～Iの5群に分ける。東群のF・G群などは連続した重複があって、線引すること自体が不自然であるが、あくまでも便宜上のこととする。

外域のJ群は、あるいは内域の東群との関連で捉えるべきかも知れないが、やはり溝1・2の存在を重視しておく。

各住居跡等の新旧関係は次のようになる。(古→新を示す)



第4図 塔ノ上遺跡の群と土層ポイント (1/800)



#### 〈土層〉

やや片寄った場所での土層図（土層A）であるが、第5図に示す。遺構検出面の上にのる①表土（茶褐色土）、②耕作土（同）、③黒褐色土（遺物包含層）、④淡黒褐色土等は大略北から南へ向かうに従って薄くなつてゆく。特に遺物包含層が溝1のあたりで途切れることは、北方にある“集落主体（中心部）”から南へ向かって、遺物を含む層の形成がなされていることを示している。遺構を検出した面は、基本的には黒褐色を呈する所謂黒ボク層である。これの下位には押型文土器等を含み、更にその下層には淡茶褐色粘質土がある。

遺構検出時には旧地形の凹凸もあって、溝1のあり方とは平行する如く内域は黒ボク層の堆積が残存し、その除去された部分には淡茶褐色粘質土が現出している状況であった。

なお、遺物の中で須恵器の特に蓋・高环からの転用硯、土師器にみる墨書き、そして多量の焼塙土器は特に注意される。

（註） 2・3・6・43・55・44・56・8・30・10号の各住居跡については2軒、51・63号住居跡については3軒の重複もしくは建て替えの可能性がある。これらが確実とすれば最大数で88軒となる。



第5図 塔ノ上遺跡土層図（A-A'） (1/240)

## IV. 奈良時代の遺構と遺物

### 〈凡例〉 —— 遺構・遺物の説明の前に ——

塔ノ上遺跡で検出したおもな遺構は竪穴住居跡であり、遺物の主体を占めるのは須恵器・土師器の土器である。

竪穴住居跡は規模において大小の差、プランの若干の相違等があるが、どれ一つをとっても他と同じものはない。細かく見るならば諸要素においてかなりヴァラエティに富んでいるといえる。しかし、時期的に近接した期間の所産であることから、共通した要素が多いこともまた事実である。

土器においては、微視的には個々に手づくりの妙味が伺えるものの、むしろ、時期的に近接した中での専業化した産物としての共通項の方が卓越して目をひく。

のことから、ここで、数量の多い竪穴住居跡と土器（須恵器・土師器）について概略しうることを示しておいて全体像を捉えやすくし、かつ各々の説明を簡便にすることとしたい。

なお、各住居跡等で出土した遺物は、須恵器・土師器のみを各遺構の直後に説明し、各住居・土壙・溝等からの同一固体と思われる資料、接合した土器、焼塗土器・土製品・瓦・石製品・鉄製品については別に項を設けて説明を加えていくこととする。

#### A. 竪穴住居跡（第6図）

74軒の全ての竪穴住居がカマドを有している（有していた）ので、カマドの中心を通る線を主軸とする。そしてその主軸方位に関係なく、常にカマドを上方において表示することとする。第6図の模式図をもとに第1表の計測値を示すが、もとより主柱穴の欠落する住居、大半を切られている住居においては空欄が多くなるのはやむを得ない。床面積については、カマドの焚口部分は含めるが、突出部分は含めていない。

○プラン —— 方形（A型とする）もしくは方形に近い長方形をなす。（長）方形といえども幾何学的な方形をなすものはまずなく、やや歪む形状をなすものが多い。長方形を呈するものは、カマドが長辺に付く横長タイプ（B）と、短辺に付く縦長のタイプ（C）とがある。各コーナーは隅円というほどに角のとれたものは殆どない。

○床面 —— 殆ど全てが貼床とし、よく踏み固められていた。主柱間エリア面は特によく固まっている。

○主柱穴 —— 4本主柱を基本とするも、主柱穴を検出しない住居もいくつか存した。

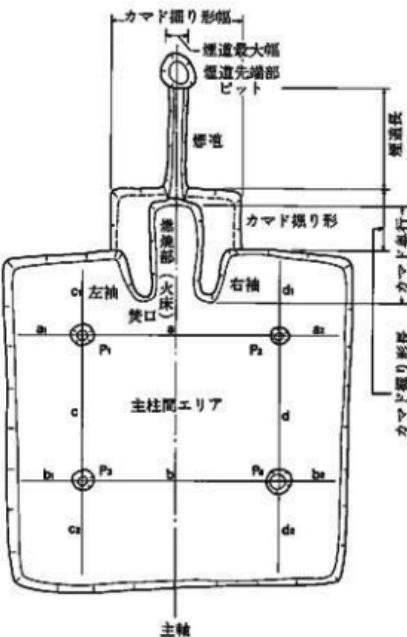
○壁小溝 —— G・I群の住居に6軒程みられたのみである。細い溝であり、小ピットを連結したものもある。壁材に関与する“造構”であることは間違いないと思われる。

○カマド(第7図) —— 大きく3つの形態がある。

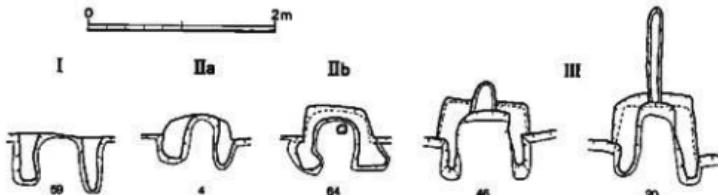
I. 住居の壁を越えることなく、内側に構築される。非突出型である。  
II. 住居の壁から外側へ突出して築かれたものである。突出した部分がごく僅かで、燃焼部はあくまでも住居内にあるもの(a)と、かなり突出して燃焼部を壁ライン外におくもの(b)とがある。もちろん両者の中間形態もある。

III. IIbに、煙道が水平方向に伸びて付設されたもの。煙道にも長短があり、特に長い煙道を持つもので、その先端(煙出口)に土器の入ったピットのある例をいくつか見る。

支脚は土製・石製の両者がそのまま残存した例を見るも、土師器の壺を転用して倒立して使いたい例は明確にはなかった。なお、カマド内から焼塙土器の破片が出土している例を多く見るのは注意される。



第6図 窪穴住居跡模式図



第7図 カマド類型一覧 (1/60)

## B. 土器

まず、須恵器と土師器の出土した全器種を呈示する(第8~10図)。各器種の呼称、特に壺・塊・皿については明確な区分の基準が得がたい、つまり、必ずや中間の位置にくる器体が存するので、当報告書においては筆者の現時点での判断によるものとする。後に器種名の変更がなされることに拘泥するものではない。各個体の法量については巻末の第2表を参照のこと。

### I. 須恵器

壺・塊・皿・高壺・壺・甌・甌がある。明確に鉢としうるもの、平瓶等はなかった。これら全器種を通観しての胎土・焼成・色調についてまず触れるが、もとより、この範囲から逸脱した例の多々あるは自明のことである。

〔胎土〕 微砂粒を含むも、概ね良質である。例外的に大きめの砂粒を混ぜたものがある。

〔焼成〕 大多数は堅焼といえる。良好な焼上りを示す。灰被りの状態にあるものも數例が見られる。焼成不良にしてもろいのは僅かである。

〔色調〕 須恵器に通有のくすんだ様な灰色を基調とするが、やや黒ずんだ例が多い。

〔成形〕 卷上げ・水ビキ法である。一本ビキ法はない。

蓋　　壺蓋が1点あるのみで、他は全て壺に対応する。壺蓋は浅い壺を逆さにした様な形状で、天井部外面が回転ヘラ削り、周内面はなで、他は回転なでである。以下は壺の蓋について述べる。

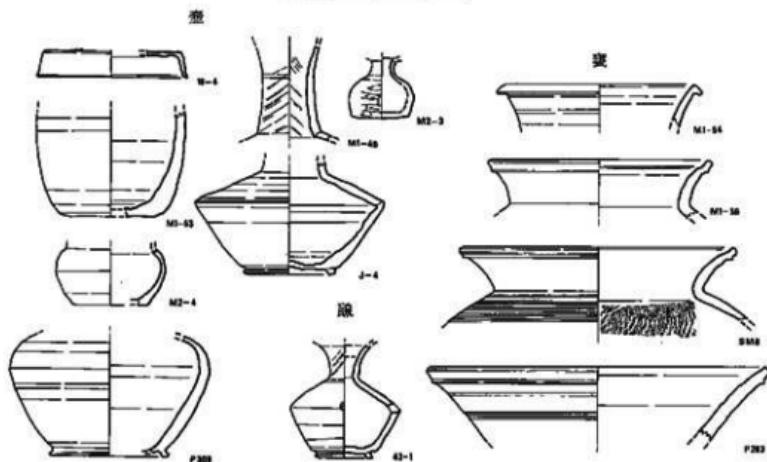
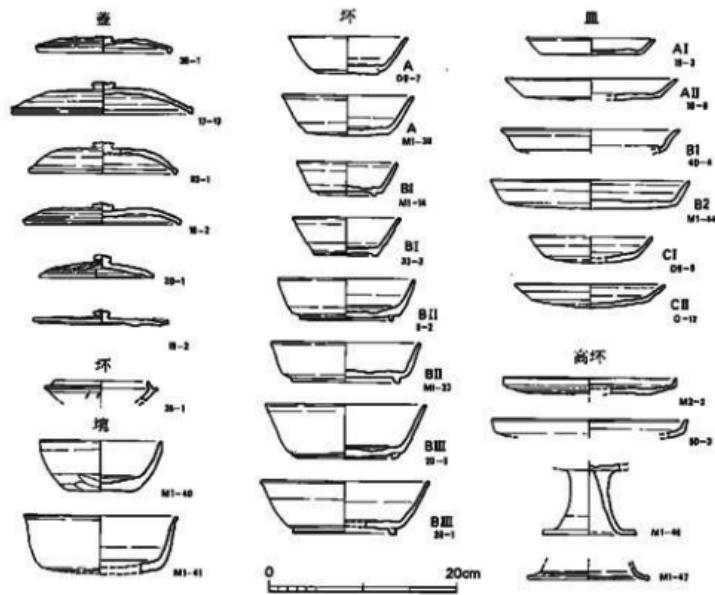
器形　　本来は全てが器を有するものと思われる。全体に器高があまりなく低平な感じを受ける器形が多い。口縁部と天井部との境目部分において器肉が最も厚くなるのは調整法の境がここにあるからである。撥は円形鉗状で、中央部の盛り上がるものと逆にくぼむものとがあるが、下述する時期差とは無関係である。

調整　　口縁内外と撥周辺は回転なで、天井部内面はなでという調整が例外なく施される。天井部外面については回転ヘラ削りを施すものが大半を占めるものの、ケズルことなく強くなれたままのものも見られる。

口縁端部断面の形態で若干の時期差を指摘できる。まず鳥嘴状に尖り気味で、接地面から約5mm以上の間隔をとり、外側に窪みを有するものが古く、次いで接地面からの間隔が徐々に狭くなって、つまり、全体により扁平になってゆき、断面三角形を呈する様になる。そして次には、口縁端部が地にはう如くとなって、内面に僅かな段がつく程度の形態となり、所謂おとし蓋の形状を呈するものさえある。

壺　　器形　　貼りつけ高台を有するもの(B)と、無高台のもの(A)とがあり、孰れも塊と区別しにくいものがある。

		Aはやや不安定な平底から、体部は外上方に60°前後の角度で直線的に開き、口縁端部がごく僅かに外反する例が多い。口径12~13.8cm、器高3.4~4.3cmでこれはBのIとIIの中間位の大きさとなる。
	B	Bは大略小中大の三形態がある。 (I)小型は口径10.8~12.8cm、器高3.2~4.5cmで、整美なプロポーションをなし、安定感のある底部からやや外反気味に体部が伸び、口縁は僅かに外反する。まれに内湾気味になる体部もある。 (II)中型は口径13.2~15.6cm、器高3.5~4.5cmで、体部の内湾気味になる例が多く、体部の立上り角度が急で、また体部の低い(深みがない)ものが多い。この点においてどっしりした感をうける。 (III)大型は口径16.3~19.1cm、器高5.1~5.6cmになりスマートな器形である。安定した底部からやや外反気味に体部が立上る。
調整		Aは底部外面がヘラ切り離し後になで、同内面はなで、体部は回転なでである。Bは内底面と高台内側の外底面がなで、高台から体部は回転なでを施す。外底面には粘土紐を螺旋状に巻いた痕跡を留めるものが数例見られる。
皿	器形	殆ど平らに近い部分から大きく外方へ開くA、体部の形状がAと異なるB、底部がやや丸みをもつCとがある。Cは坏に近い形状の例もあるが、深みがないことより皿とする。 Aは底部から40°~50°の角度で外方へ開く。口径12~15cmの小型になるA Iとそれ以上のA IIとに分けうるが、両方とも深さは殆ど変わらない。新しくなるにつれ口径が小さくなるという傾向があるらしい。 Bは立上り角度はAとはほぼ同じだが、少しく外反気味に開くB 1、底部から60°前後で立上るB 2とに分けられる。
調整		A~Cともに体部は回転なで、底部はなでを施す。ただBの外底部のみは回転ヘラ削りを行った痕がみえる。外底部のなでは雑であり、未調整に近いと言ってよい程のものが多い。
塊	器形	2個体しかなかった。平底もしくは平底に近い底部から内湾しつつ立上り、口縁端部は僅かに外反する。
調整		体部は回転なで、外底部はヘラ削りの後なで、内底部はなでを施している。
高坏	器形	個体数は少ない。坏部は坏蓋の口縁部がやや発達した程度の立上りを有し、深みがありない。脚部は2形態があるらしい。ひとつは裾部端が坏蓋の口縁部と同様に内面に段を有するものである。その断面は三角形を呈す。これの脚高はあまりない。他は裾部端に段がなく、全体に細身の形状をなす。これは脚高がやや



第8図 須恵器器種一覧 (1/6)

	高くなるらしい。
調整	壺部については壺蓋を裏返しにして見た場合とは同様である。外底部は回転ヘラ削りの後などで行い、脚部との接合部付近になると回転などでなる。脚部は殆ど全て回転などで行い内面にしばり痕を認める。
壺 形	広口壺とその蓋、無頭壺、短頭壺、長頭壺としうる器形があるが、完形になるものではなく、全形を伺い知れないものが殆どである。胴部下半の破片が多い。壺本体はおよそ肩部の張るものが多いらしい。長胴形の瓶に近いものを1点だけ見る。長頭壺は胴部が算盤玉状を呈し、高台が付くもので、整美なプロポーションになろう。細頭の短頭壺(M2-3)は特異である。
調整	各個体で少しうる異なるが、基本的には口頭部は内外とも回転などで、胴部上半も内外ともに回転などで施す。胴部下半は内面が回転などでなかで、外面は回転などのものとヘラ削りのものとがある。高台の付く個体は高台周辺が回転などで、他は内外ともなで行い、平底になるものは外底部全体にヘラ削りが及ぶ。
頭 形	1個体しかない。穿孔(注口)がなければ細頭壺としてよいものである。注口は胴部中央の屈折部上方に穿けられる。調整は壺におけるそれと変わらない。
器 形	全て破片のみで、全形を復しうる資料はない。きわめて大型になるものは少なく、多くは中型程度の大きさと考えられる。口頭部は朝顔形に開き、その端部の形状はさまざまである。
調整	口頭部は内外ともに回転などを施す。胴部は破片資料をみるとおいては、外面が格子目・平行割み目のタタキを施す。そしてその上を個体により、また部位により、カキ目を施したりなどたりする。内面は例外なく同心円の当具痕を見るが、一部に格子目のものもある。この上を大多数はなでているが、なで消すまでには至らない。同一個体資料のSJ5・6、SL18等での同心円弧と直行する刻みを入れたもの、SN15・4・2・3・6・1・9等でみられる同心円の中央を星形に刻んだものは注意されよう。

## II. 土師器

壺・壇・皿・蓋・高壺・壺・鉢・鍋・甕・瓶がある。まず、土師器全体が大きく精製土器と粗製土器とに分けうる。壺・壇・皿・蓋・高壺・壺・鉢においては精製のみで、鍋・甕・瓶は精粗両方を見る。全体とすれば精製土器の方が量的にはるかに卓越している。次に、精製土器の中に須恵器の手法・器形をとり入れた一群がある。これは、土師器工人が須恵器をまねて作ったものと、須恵器工人が土師器を作ったものとの両方があるように思われる。

- (胎土)** 精製土器は、水ごしした様なきわめて精良な胎土と、やや粗さのある胎土のものなど、厳密にみれば一括しきれないのであるが、粗製土器に比べると明らかに良質である。粗製土器は、粗い粒子の砂を用いるとともに長石・赤褐色粒などをよく含み、角閃石・金雲母片を混じえるものもある。
- (焼成)** おおむね良好な焼き上がりである。稀にややあまい焼きものを見るが量的に少ない。なお、特に壺において二次火熱を受けた個体を見る。
- (色調)** 土師器に通有の黄褐色系を基調とし、橙褐色、橙黄色、黄茶褐色等を呈するのが殆どである。二次火熱を受けた個体は桃黄色に変色している。使用によって生じたと思われる黒っぽい変色が壺の内底面によく見られる。須恵器模倣の土器は化粧土をかけたものが多く、それは赤みがかった橙色をなす。
- (成形)** 須恵器をまねた個体は、巻上ヶ・水ビキ法である。他の大多数は粘土紐巻上げのみらしい。壺・皿類の体部においては、薄い粘土帯を貼り合わせた痕跡が破片の断面にて見られる例が多い。
- |          |                |  |
|----------|----------------|--|
| <b>蓋</b> | 静形             | 須恵器模倣のもののみである。須恵器壺蓋の中頃か新しい段階に属するのと同じ口縁形態をなす個体が多い。皿の蓋になるのもあるらしい。  |
| 調整       |                | 口縁周辺は回転なで、天井部は内外ともミガキを施す例が多い。稀に、天井部外面に回転ヘラ削りを行ったものがある。   |
| <b>壺</b> | 土器             | 土器の中で最も多い器種である。  |
|          | 器形             | A～F類に分ける。  |
|          | A              | 須恵器を模したもので、須恵器壺BII類の体部の形状をなすA <sub>1</sub> 、同A類に似たA <sub>2</sub> 、須恵器皿C Iに近いA <sub>3</sub> がある。  |
|          | B              | 須恵器壺Bと同じで、高台が高く、その径の小さい類と、高台が低く径の大きいものとがある。底部のみしかなく、全形の知れる資料がない。   |
|          | C              | 全体の形状と口縁形態などからC <sub>1</sub> ～C <sub>4</sub> に細分するが、各々は基準を持つた厳密な区分ではない。法量による分類は行っていない。   |
|          | C <sub>1</sub> | C <sub>1</sub> はその中で、更にいくつかに形態分類が可能と思われるが基準は明確でない。底部は丸味を帯びたもの、平らに近いもの(a)がある。口縁部は底部から明瞭な屈折を持って立上り、直口又は外反するもの(c)と、緩やかな丸味をもって直口もしくは内湾するもの(b)とがある。口唇部内側に溝を持った個体が多いのが特徴である。 |
|          | C <sub>2</sub> | C <sub>2</sub> は直口かやや外反する口縁部で、C <sub>1</sub> に比べ深みを持った丸底風になるものをさす。   |

C<sub>5</sub>は平底に近く、全体が蓋形としてよい形状をなす。坏A<sub>1</sub>に似る。体部はやや内湾している。

C<sub>6</sub>は平底で皿に近い形状をなす。

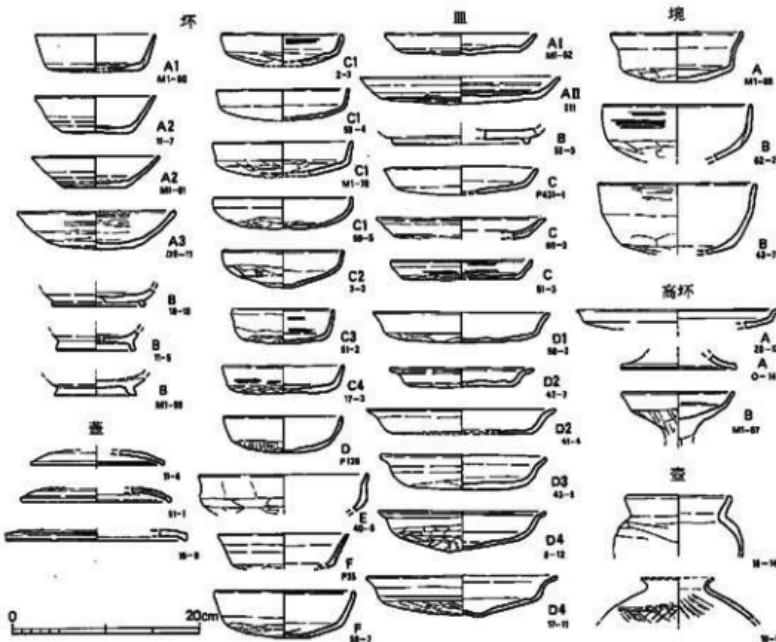
D——底部から口縁部へすんなりと移行する器形で、境に近い形状であるが深みがあまりない。法量に大小がある。

E——口縁部がS字状にカーブするもので量は少ない。

F——C<sub>1</sub>・C<sub>4</sub>よりも深みのある器形である。法量に大小がある。

調整 Aは体部が回転なしで、外底部は回転ヘラ削り、内底部はなでを施す。D9-11は体部内外に横ヘラミガキを施している。

Bは高台周辺は回転なしで、内底部はなでかミガキ、外底部は回転ヘラ削り、なで、ミガキの三者がある。

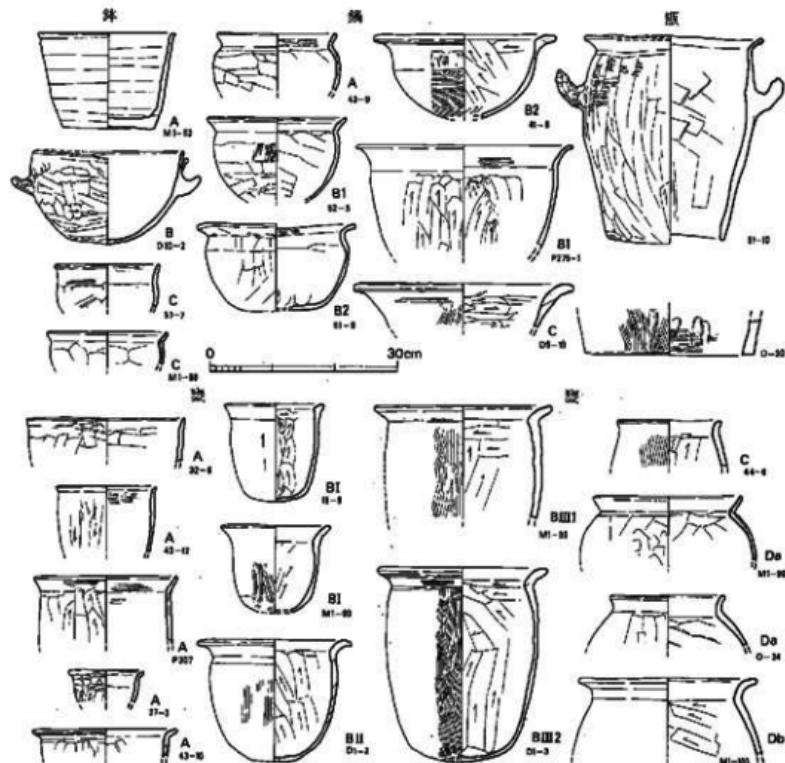


第9図 土師器器種一覧① (1/6)

C～Fは一様に、外底部が手持ちヘラ削り、内底部がなで、体部（口縁部）は回転なでを施す。外底部のヘラ削りは器体中心から見て同心円状あるいは求心状に施した後、一方向に施す例が多い。口縁部内外はカキ目風の断続横刷毛目が施されたあと、回転なでを行っている。

**塊 器形** 坯の深めのものと区別しづらいが、坏Eより深くなったAと、坏Dに似るB<sub>1</sub>、坏Fに似るB<sub>2</sub>がある。いずれも量は少ない。

**調整** A・Bとも上記の坯のそれに準ずるが、B<sub>1</sub>でヘラ削りが口縁下まで及ぶものが見られる。Bに断続横刷毛目がある。



第10図 土師器器種一覧② (1/9)

	皿	大きく4類に分け、A類をI・IIに、D類を1~4に細分する。
器形		Aは、須恵器模倣形態で、法量によりI・IIに分ける。A Iは口径14.8~17cm, A IIは21~24cmになる。
	B	Bも須恵器を模したもので、高台径が大きい。
	C	Cは須恵器皿AとC IIに似た器形である。
	D	Dは断面がS字状に屈曲するもので、形態差により1~4に分ける。D <sub>1</sub> は口縁の外反があまりなく、須恵器B <sub>2</sub> に近い。D <sub>2</sub> は口縁端部が外反し平底になる。深みがあまりない。口縁外反度の強いものと、次のD <sub>3</sub> と同じ形状のものとある。D <sub>3</sub> はやや深みがあり、平らな底部から体部へは緩やかな弧線を描いて立上り、口縁が大きく外反する。D <sub>4</sub> はD <sub>2</sub> ・D <sub>3</sub> とも近い口縁形態ながらも底部が平らにならず、きわめて特徴的である。
調整		坏C~Fの調整と全く同じである。
高坏		須恵器を模した坏部・脚部片数点(A)と、通常の土師器1点(B)がある。
器形		Aは口縁と裾部周辺の破片しかない。須恵器模倣といえども、やや器肉に厚みがある。口唇部上端に面をとる。
	B	Bは1点のみで脚部は欠失する。坏C <sub>1</sub> 類に棒状の筒部を接合した形状である。
調整		Aの口縁・裾部周辺は回転なので、坏部底面に内外ともミガキを施す例を多く見る。
	C	Bは坏部底面から筒部にかけては、縦方向ヘラ削りである。
臺	器形	はっきりと臺と言いうる資料は少なく、全形を知れる個体はない。胴中位に最大径をとり、胴径が口径を凌駕する。むしろ増と表記すべきかもしれない。
	D	口縁部周辺は回転なので、胴部内面はなで、外面はヘラ削りのものとなるものとがある。
鉢	器形	直口平底の、瓦賀に近い施成を示すものが1点(A)ある。他は丸底で、口縁の形状によりB・Cに分ける。
	B	Bは丸底から丸味をもって、まっすぐ口縁に至る形状であるがやや内傾するものもある。把手が付いて片口になる優品1点を含む。
	C	Cは口縁が外反する。外反の度合が強いものと如意形になるものとがある。前者は臺ともしうるが、深さがあまりない様なので鉢に含めておく。
調整		Aは胴部の内面全体と外面上半が回転なので、同下半は回転ヘラ削り、内底部はなでを施し、外底部は未調整のままで板圧痕がみられる。B・Cは臺に同じ。
鍋	器形	3つの形態がある。
	A	Aは胴部径が口縁径を上回るもので、一見して臺にすべき器形であるが、煤の

付着した個体やカマド内から出土したものがあるので鍋としておく。胴部最大径は肩部付近にある。

Bは口縁径が最大径となる。口縁がくの字形になるB<sub>1</sub>とL字形を呈すB<sub>2</sub>がある。前者は丸底のみで、後者になると丸底・平底の両方があるらしい。

Cは粗製土器のみで、丸底から直線的に外上方に開く器体に、大きく外反する口縁部の付く形状となろう。

**調整** A・Bは鉢B・Cの調整と同じである。B<sub>1</sub>の外面ヘラ削りは、上半が横方向、下半は縦方向になるものがある。横方向ヘラ削りのうち、板小口を強烈におしつけた為に、縦方向の平行タタキに見まがうほどの小口痕を認めるものもある。また、B<sub>2</sub>においては胴部外面に刷毛目を残す個体がある。Cは胴部内面がヘラ削り、外面が刷毛目を施している。

**塵 器形** 形態で4種に分け、そのうちのBを法量で3つに分ける。A・Bは口縁径が、C・Dは胴径がその器体の最大径となる。

Aは直口もしくは如意形に開く口縁部を有するもので、やや外反度の強いものまでを含める。胴は殆ど張ることがなく、全て精製土器である。

Bは量の多い一般的な甕である。B Iは小型で口径13~19cm、器高12.2~15cmの間にある。口径16cm前後が最も多い。口縁が大きなカーブで外反するもの、内面に明瞭な稜をもってくの字状に屈折するもの、その内面の稜の所が肥厚するものなどを見るが、これらは時期差の表象と思われる。口縁端部を窪めて片口状にした器体を若干数見出す。B IIは中型としてよいものの量が少ない。口径20~23cmになる。B IIIはほぼ直立した胴部に、くの字状もしくはL字形に近い口縁部がつくB III<sub>1</sub>と、肩部以下にやや張りをもたせたB III<sub>2</sub>とがある。しかし、その区分は厳密ではない。口径24~32cm。

Cは数点しかなく全形のわかる資料はないが、肩部が張らないまま全体が袋状を呈するような器形になろうか。

Dは精製・粗製の両方があるので、前者をDa、後者をDbとする。Daはあるいは壺形とすべきかもしれない。球形胴にあまり張らない肩部、それに外反しつつ立上る口縁部がつく。口縁の外反度に強弱があり、その端部を肥厚させる例が大半を占める。口径は17.4~31cmと幅がある。DbはBの胴部が張り、結果として頸部がしまったものである。肩部には張りはない。口径22~30cm。

**調整** Aは鉢B・C、鍋A・Bとはほぼ同じであるが、外面のヘラ削りは縦方向のみに施す。木の小口にて削ったために木目が表出している例を見る。口縁下のカキ目風横刷毛目も多く見られる。成形は巻上げというより、薄い粘土板の貼り合わせ

によるものが多いらしい。

B・Cは口縁内外は回転なで、胴部外面は基本的にたて方向の刷毛目、同内面は斜め及びたて方向のヘラ削りを施す。胴部外面に横刷毛目、同内面に刷毛目を残すもの、ヘラ削りが横方向にあるもの、口縁内面に横刷毛目を施すもの等がある。刷毛目は精粗両方を見るが、粗々しい例が多い。

Daは胴部内面が擦過もしくはケズリの後なで、同外面はヘラ削り、口縁内外は回転なでを施す。口縁内面に横刷毛目の残る個体がある。DbはB・Cと同じである。

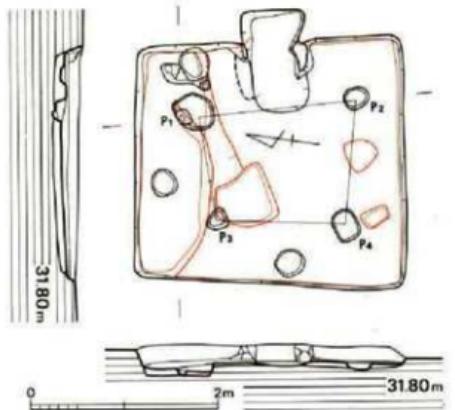
質	器形	量は少ない。精製と粗製の双方があるも、精製の方が多い。胴部にやや張りを持った土管状の形態が大半をしめるのであろう。口縁部は他の部位に比してかなり経身となる。底部周辺が若干肥厚する例を見る。把手はやや扁平気味のものを貼り付けている。
調整		口縁部周辺は回転なで、胴部内面はヘラ削り、強烈なでつけ、刷毛目を施したあとになで等を行い、同外面は、精製土器はたてヘラ削り、粗製土器はたて刷毛目を施す。底部周辺は回転なでだが、刷毛目の残るものもある。
土製支脚	器形	7軒の住居から出土した。 截頭の角錐状になる例も10角・11角と多面を有するので殆ど円柱状になるとよい。
調整		器表面はヘラ削り、もしくは擦過のあとなどでいる。これの成形は粘度を固めただけのものと、粘土板を螺旋状に貼りあわせたものとがある。

#### 〈第1・2表の説明〉

第1表(須恵)(土師)の欄は確認した個体数である。(塙)は焼塙土器の破片数を示す。(その他遺物)のJ1-J11は接合土器、SA~SLは同一個体資料をさす。

第2表(遺構)欄は、数字のみは住居番号、Bは掘立柱建物、Dは土壙、Mは溝、Pはピット、Oはその他をさす。(法量)は①口径、②底径、③器高、④胴部径である。(残)は実測個体の完形品に対する残存度であり、1/2以下の個体の法量は全て復原値となる。(備考)における床面、カマド内、床下層は出土部位をさし、これ以外は埋土中から出土した。また土師器においては「粗」は粗製品であり、それ以外は精製品である。

## 1. 壇穴住居跡



第11図 1号住居跡実測図 (1/60)

### 1号住居跡 (図版3、第11図)

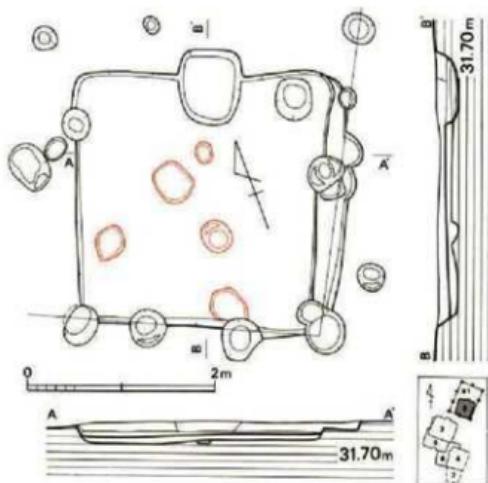
C群の北にあって、切合い関係がなく存在する住居跡である。A群として分けた。やや台形に近いB型プランをなし、主柱穴配置もほぼ同様である。北壁下に掘り込みがある。

**カマド (図版3)** IIbのタイプで、焚口の窪みはかなり前面にまで及ぶ。奥幅53cm。袖は灰色粘土の上に黒灰色土をおき、その上は黄灰色粘土で天井部を構築していたらしい。

### 出土遺物 (図版18、第13図)

土器の量は少ない。1・2はカマド

内より出土した。3は床面からの出土で円柱状を呈しよく熱を受けている。焼塙土器が床面・カマド内にあった。



第12図 2号住居跡実測図 (1/60)

### 2号住居跡 (図版3、第12図)

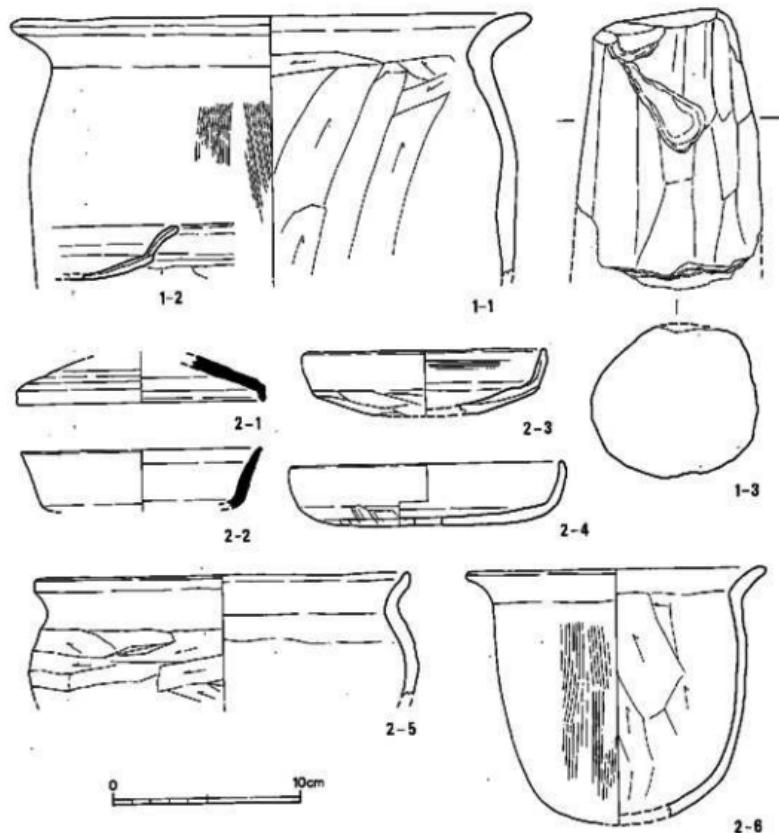
他の住居とは切合い関係はない。B群中最も北に位置し、1号掘立柱建物のピットに切られている。3号住居跡とほぼ主軸を同一にする小型の住居である。床面はよく固められている。床面下層でも主柱穴は明確でなかった。東壁のあり方から2軒の重複の可能性もある。

**カマド** IIbのタイプになら

う。袖は明確にしえなかった。

出土遺物（図版18、第13図）

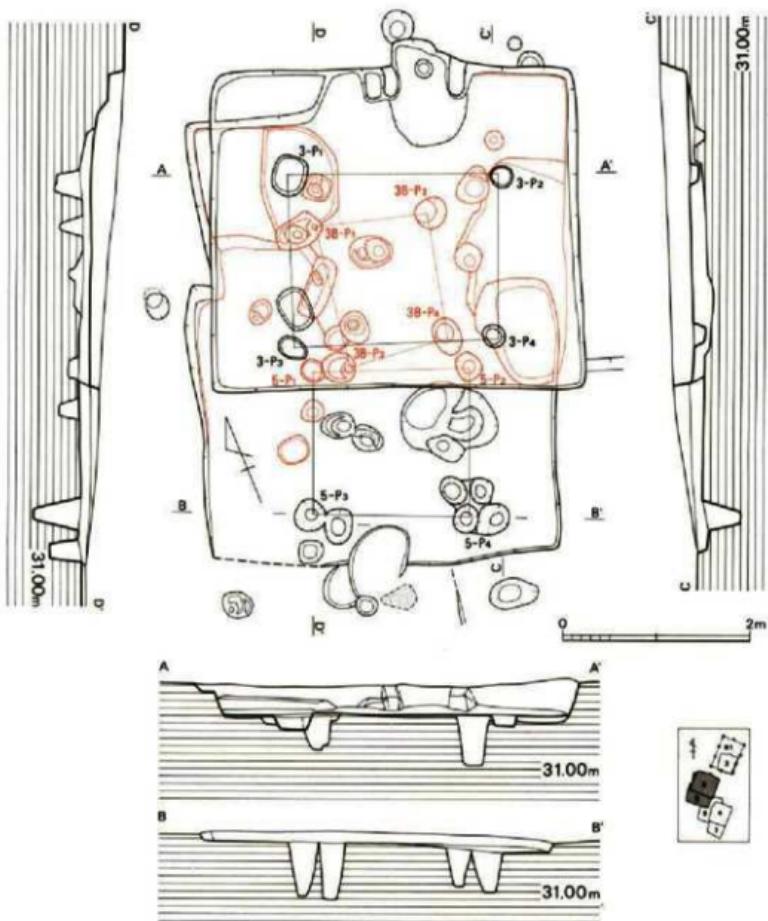
床面から一括で出土している。1・2は須恵器壺・坏で床面から出土した。3・4・5はカマド内より出土した。3は外面に煤が付着し、4の底部には焼成前の穿孔がある。5は精製の鍋で丹塗磨研らしい。焼塙土器7片が床面から出土した。



第13図 1・2号住居跡出土土器実測図 (1/3)

### 3号住居跡 (第14図)

B群のはば中央部に位置し、5・6号住居跡を切って営まれている。横長のプラン (B型) を呈し、主柱穴もそれと同様である。床面下層は北西・北東辺に土壤状の掘込みを検出した。



第14図 3・5号住居跡実測図 (1/60)

壁面は略垂直に立上り、カマドは北辺に付設されている。北西コーナー部分の段と、西壁の外にある三角形状の掘り込みから類推すれば、もう1軒の住居跡が存在した可能性があるので、これを3B号とすると、これはほぼ方形に近いプランとなろう。

カマド IIa型になり、支脚を抜いたらしいピットを中央にみる。

#### 出土遺物（図版18、第16図）

土師器の出土量は一般的であるが、須恵器は出土していない。1は床面に存した須恵器を模倣した土師器である。2は床面より、3は埋土中より出土した精製の壺である。4は床面下層より出土した皿である。5は床面から出土した精良の鍋である。6は埋土中より出土した粗製の甕である。口縁部分は片口状に指押えを行っている。7は甕の底部部分で床面から出土した。焼塙土器も出土している。

#### 5号住居跡（第14図）

B群に属し、3号住居跡に切られ、6号住居跡を切っている。3号住居跡と同様に横長プラン（B型）になろう。下層に現れた段、北東コーナー部分の土壠等で規模はおおよそ復原可能である。南西辺は10cm弱の壁高しかない。カマドは北辺に付設されていたと思われる。

#### 出土遺物（第16図）

出土量はごく僅かしかなかった。1は須恵器蓋でカマド内より出土し、内面には墨の付着があり、硯に転用した可能性がある。2・3は土師器壺で精良なつくりである。5は中型の甕である。1以外は全て埋土中より出土した。

#### 4号住居跡（第15図）

B群の中で東端に位置する住居跡である。6・7住居跡を切っている。東辺は1・2次調査の発掘区間にあたったこともあって明確に検出しえなかつたが、全体のプランは横長のB型となろう。柱穴は床下層でP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>を見るもののP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が明確でない。

カマド 西辺のかなり北寄りの所に設置されている。IIa型で、奥行45cmとかなり小さい形状を示す。

#### 出土遺物（第16図）

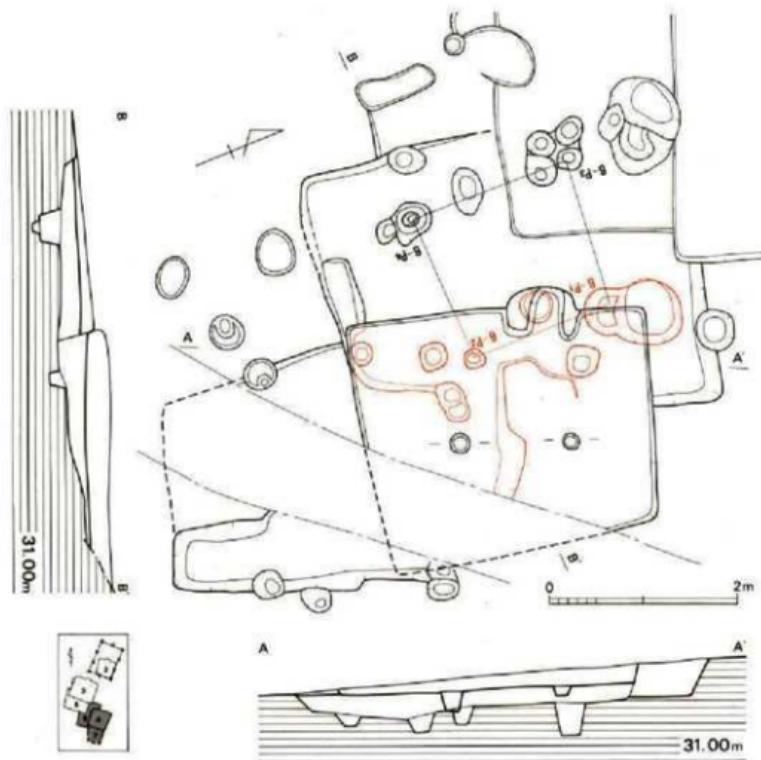
出土量は極めて少ない。1～3は孰れも埋土中より出土している。1・2は精製の壺・皿で、2は二次火熱をかなりうけている。焼塙土器も出土している。当住居跡出土の須恵器甕口縁と6号住居跡北側床面出土のものと接合した（J6）。

## 6号住居跡 (第15図)

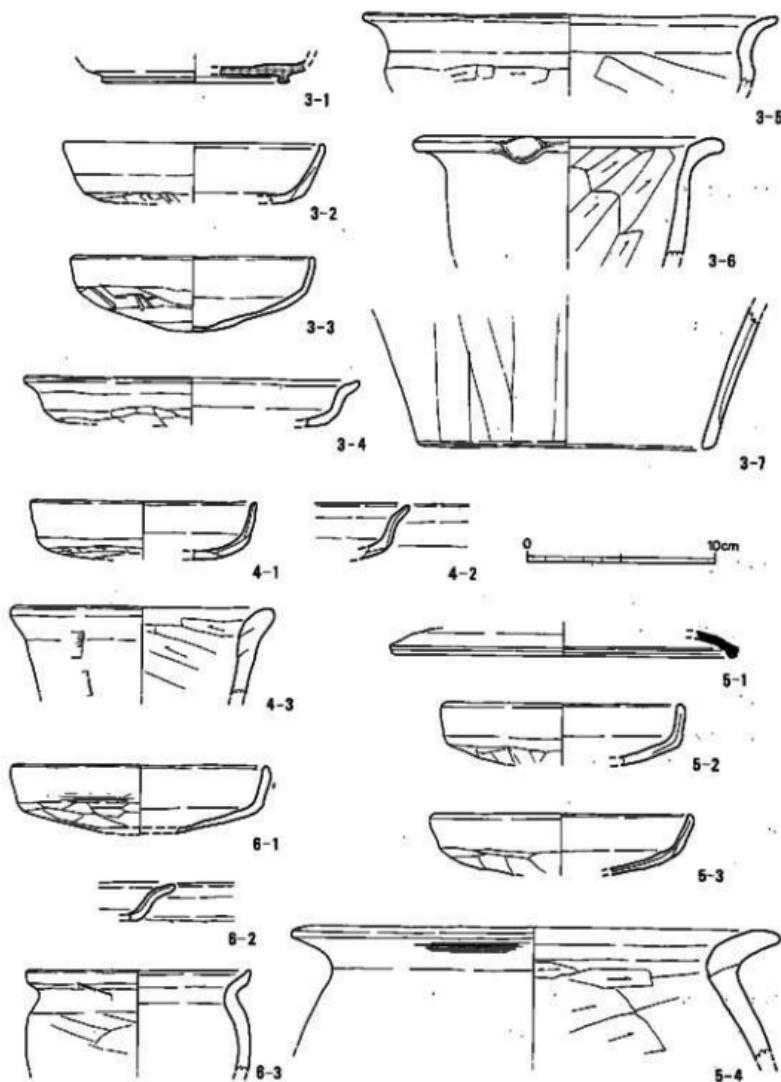
4・5号住居跡に切られている。残存状況は悪いが、下層に見られる段や柱穴配置等から復原すれば、カマドが東邊につくやや横長のプランとなるらしい。柱穴のあり方からして、もう1軒が存した可能性もある。

## 出土遺物 (図版18、第16図)

総出土量はかなり少ない。1~3は全て北側床面から出土した精製土器である。焼塙土器は埋土中から出土している。別に接合資料J6がある。



第15図 4・6・7号住居跡実測図 (1/60)



第16図 3・4・5・6号住居跡出土土器実測図 (1/3)

#### 7号住居跡 (図版5, 第15図)

B群中で最も南端に位置する。4・6号住居跡に切られている。遺存状況が悪いため規模、主柱穴等は不明である。

#### 39号住居跡 (図版5, 第17図)

40号住居跡を切り、41号住居跡に切られている。北辺に比して南辺が長い。主柱穴のP<sub>2</sub>は検出できなかった。床面は良く踏み固められていた。カマドは東辺に付設されているが、大半を41号住居跡のカマドに切られるため詳細は不明である。

#### 出土遺物 (図版18, 第18図)

絶出土量はそれ程多くない。床面のピットから土師器の小片が出土している。1は須恵器蓋、2は須恵器を模倣した土師器の高杯である。3は床面から出土した土師器の壺で、内外面とも黒塗りを施した精製土器である。4は床面下層から出土した。焼塙土器も出土している。また、接合資料J7がある。

#### 40号住居跡 (図版5, 第17図)

C群中最も北側に位置する。39・41号住居跡に切られているが、各々の下層に現れた段等で本来の規模は復原でき、中規模程度のやや横長プランの住居になる。柱穴配置は縦長の形状を示す。北辺にカマドがある。

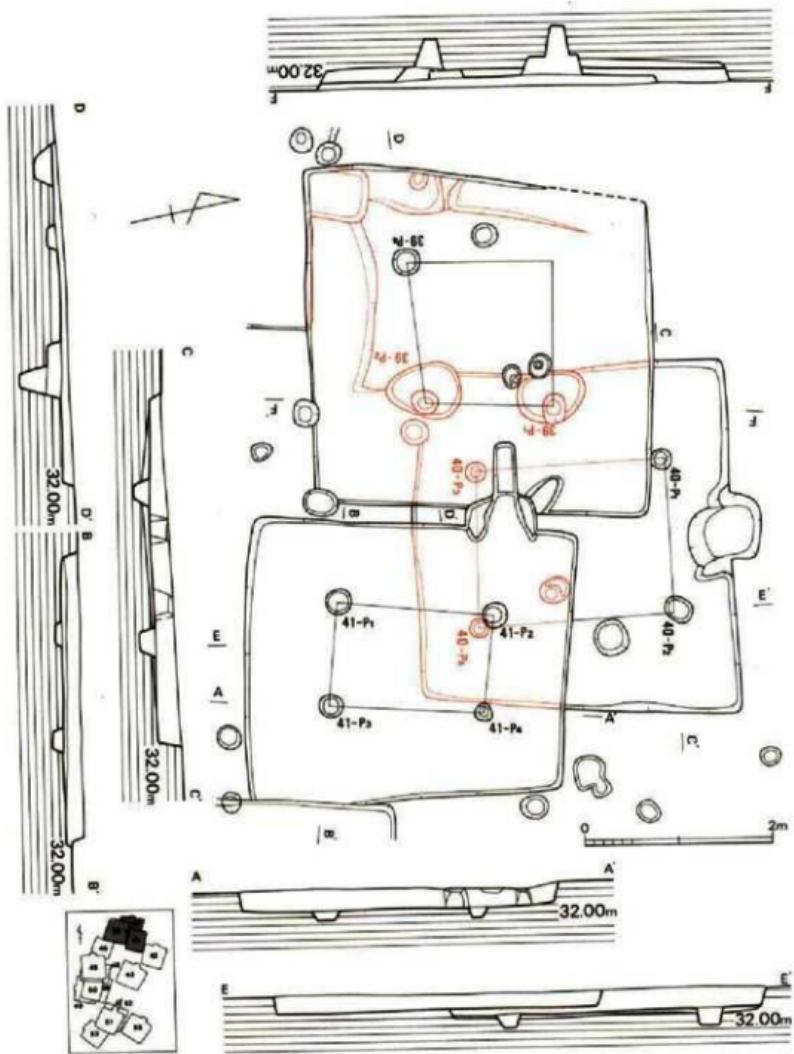
カマド IIb型で、奥壁幅45cmを測る。

#### 出土遺物 (図版18, 第18図)

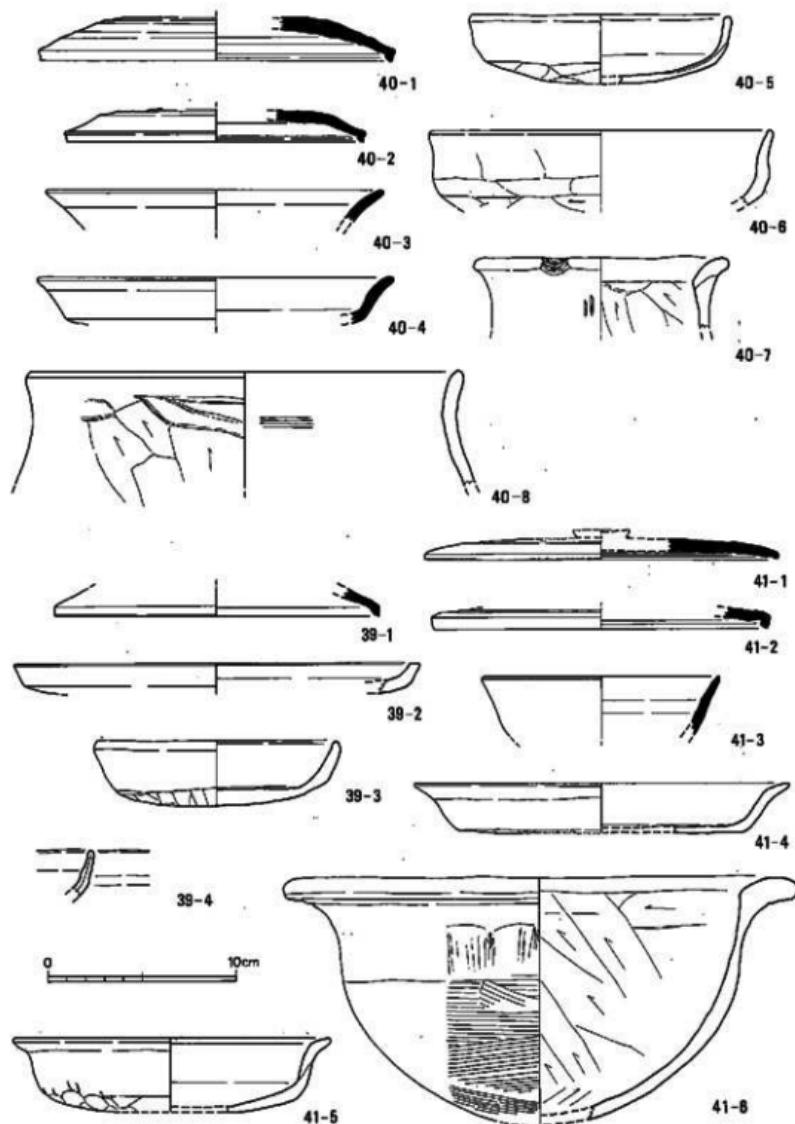
39・40号住居跡に大半以上切られているが、それに比して出土量が多い。1・2は須恵器蓋である。1は床面下層より、2はカマドより出土した。3・4は土師器の皿で、孰れも床面下層より出土し、精良なつくりである。5・6は皿で精製土器である。7は粗製の甕で、口縁部分は片口状になる。8はカマド内より出土した精良の甕である。布目窓をもつ焼塙土器・スラッグも出土した。接合資料J3と同一固体資料SAがある。

#### 41号住居跡 (図版5, 第17図)

C群に位置する。39・42号住居跡に切られ、40号住居跡を切っている中型規模の住居である。平面形態は横長を呈し、主柱穴配置もそれに同様である。壁面は略垂直に立上がる。カマドは造り直していると考えらえる。最初は北辺に造られたらしく、床面では焼土を検出した。二度



第17図 39・40・41号住居跡実測図 (1/60)



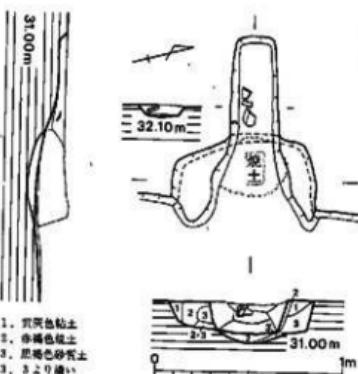
第18図 39・40・41号住居跡出土土器実測図 (1/3)

目は西辺の中央部より北西コーナー部に隣接した所に突出型のカマドを設置していた。造り直しの可能性を指摘しておきたい。

カマド(第19図) 突出型(III)のカマドである。突出部掘り形の幅40cm、長さ75cmを測る。左袖は長さ15cm、最大幅25cm、右袖は遺存が悪く長さ10cm、最大幅10cmを計測する。黄灰色粘土を使って本体を構築している。火床面には焼土が遺存した。

#### 出土遺物 (図版18、第18図)

總出土量は僅かである。1~3は須恵器で、2・3は床面下層より出土した。4・5は土師器の皿で、カマド及びカマド煙道内から出土した精製土器である。6は埋土中より出土した土師器鏡である。焼塙土器も出土している。床面下層からは不明鐵器が出土している。



第19図 41号住居跡カマド実測図 (1/30)

#### 42号住居跡 (図版5、第20図)

C群中で最も東側に位置し、41号住居跡の南東隅を一部切っている。やや横長のプラン(B型)を呈する。主柱穴は下層の掘り込みの内側に位置する。床面からは土師器甕が出土している。壁面は緩やかに立上る。

カマド IIb型で、掘り形の奥壁に段がつく。

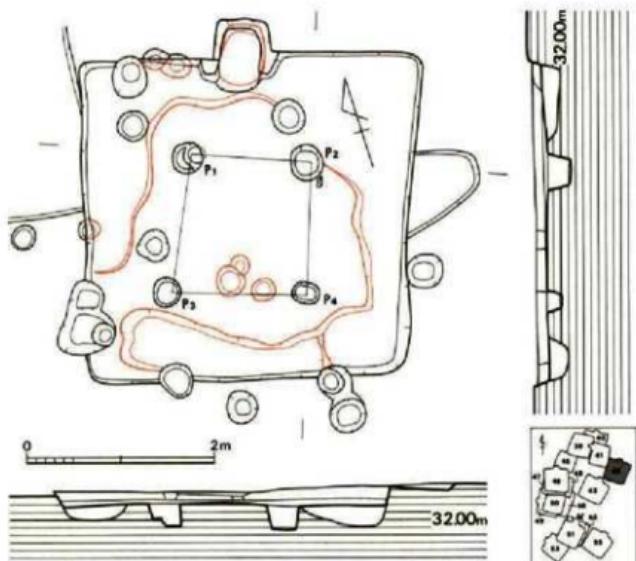
#### 出土遺物 (図版18、第25図)

1~3は須恵器の坏である。1は床面下層より、2・3は埋土中より出土した。3は生焼けである。4~8は精製の土師器の坏である。4は埋土中と床面下層が接合した。6は口縁部内面に粗痕がある。8は底部内外面に粗痕を確認した。9はカマドより出土した甕である。10は埋土中より出土した粗製の土師器の鍋である。焼塙土器も出土している。

#### 45号住居跡 (図版5、第21図)

C群に属し、39・46号住居跡に切られている、小型の住居跡である。P<sub>2</sub>はやや内側に寄っている。カマドは39号住居跡によって破壊されているがプランは確認できた。

カマド IIb型で、掘り形の長さ50cm、幅55cmである。



第20図 42号住居跡実測図 (1/60)

#### 出土遺物 (第25図)

総出土量は極めて少量で、須恵器は散片のみ出土した。1~3は精製の土師器の壊である。全て埋土中より出土した。4は精製の鉢である。5は土師器壺の底部付近である。焼塙土器も出土している。接合資料J2・J3がある。

#### 46号住居跡 (図版5、第23図)

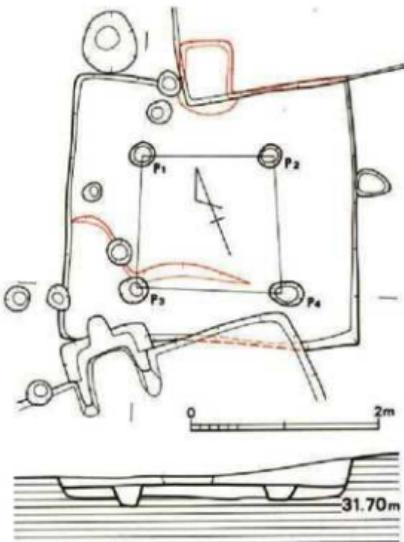
C群に位置し、45・47・48号住居跡を切っており、この辺りで最も新しい住居になる。プランとしてはやや西に傾斜した如き様相を示している。

カマド (図版6、第22図) 北側の中央部に設置された突出型のカマドである。両袖は共に長さ45cm、幅20cm前後を測り、黄灰色・灰白色粘土を積み上げている。掘り形は二段掘りとなり、上段の長さ30~40cm、幅100cm、燃焼部の幅は60cmを測る。火床面は水平で、奥壁中央部から長さ20cm程の突出しが延びる。壁面はよく焼けている。

### 出土遺物

(図版19、第24図)

1・2は須恵器の蓋である。3~6は精製の土師器の坏である。3は床面下層より、4・5はカマド内より出土している。7は精製の土師器鉢である。焼塙土器片も多い。接合資料J2・J3・J9がある。



第21図 45号住居跡実測図(1/60)

### 47号住居跡 (図版5、第23図)

C群に位置し、48・49・50号住居跡を切り、46号住居跡に切られて1/5程しか残っていないかったが、46号住居跡の下層に、この住居の横長になるプランが現われたので規模の復原は可能である。主柱穴は明確にしえない。カマドは北辺にあった。

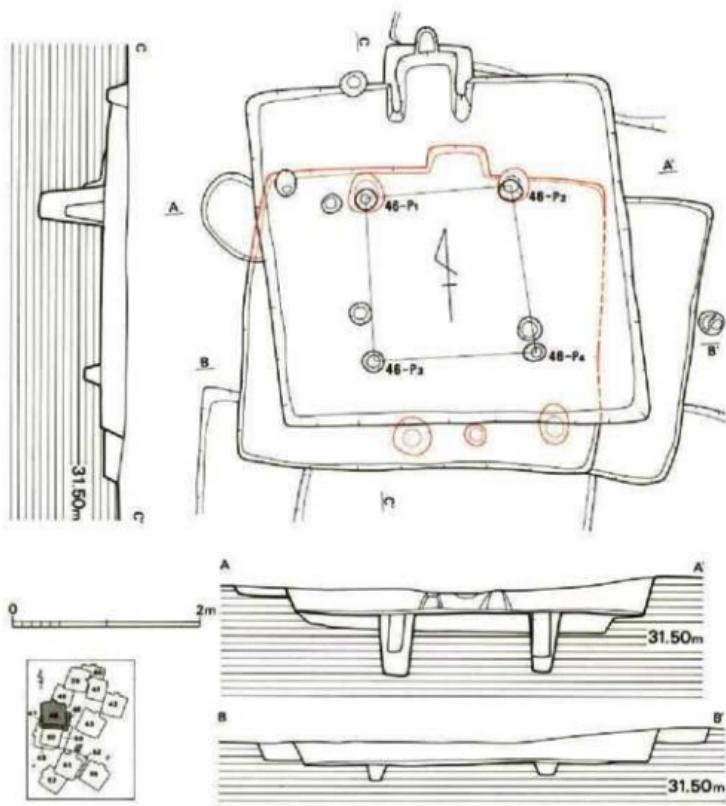
カマド 残存度が悪いが、IIaタイプにならうか。掘り形の長さ35cm、幅65cmを測る。

### 出土遺物 (第28図)

総出土量は少ない。1は床面下層より出土したもので、須恵器を模倣した土師



第22図 46号住居跡カマド実測図(1/30)

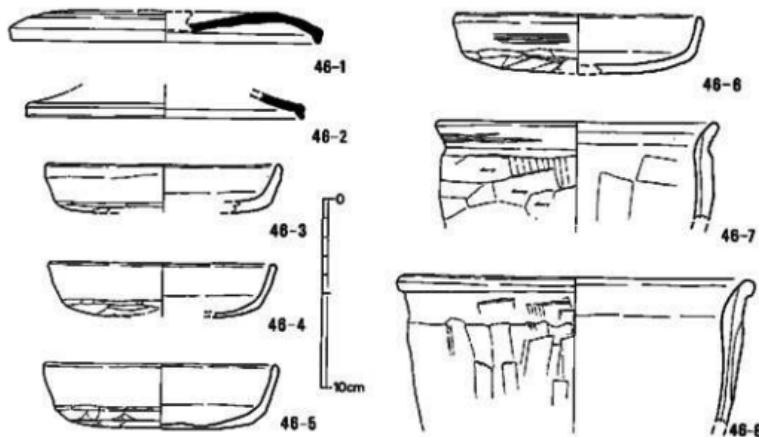


第23図 46・47・48号住居跡実測図 (1/60)

器である。2～4は精製の土師器の坏である。焼塙土器も出土した。接合資料J 9がある。

#### 48号住居跡 (図版5、第23図)

C群に位置し、50・58号住居跡を切り、47号住居跡に切られて2/3程しか残っていなかった。東辺のみの遺存で、小型の住居に属すると思われるが、詳細は不明である。主柱穴も明確にし



第24図 46号住居跡出土土器実測図（1/3）

えなかった。

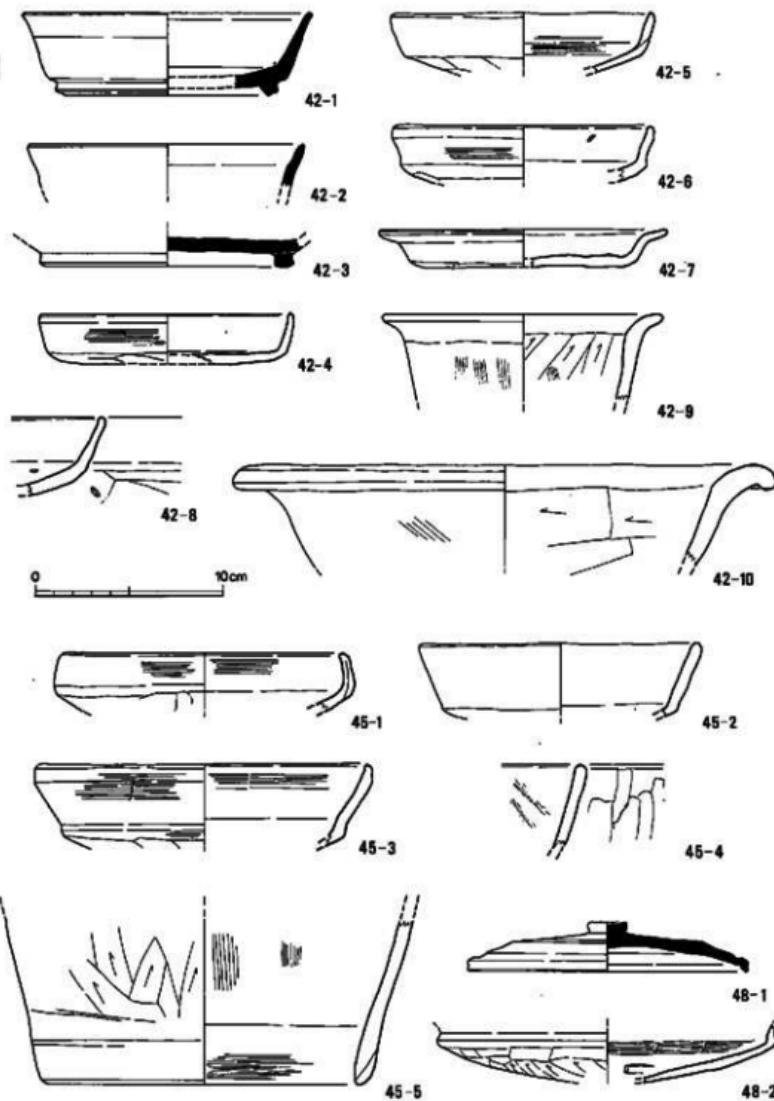
#### 出土遺物（図版18、第25図）

出土量は少ない。1は埋土中より出土した須恵器の蓋である。内面天井部は墨が付着し、表面は若干摩滅しているので、硯に転用されたと考えられる。2は埋土中より出土した。焼塙土器も出土している。

#### 49号住居跡（図版5、第27図）

C群中で最も西側に位置し、47・50・58号住居跡に切られている。二邊しか残存しないものの、下層プランより復原すれば台形氣味となり、主柱穴を結んだ形状もやや台形氣味である。南北壁際には小ピット群の連結した小溝を検出した。カマドは西邊に付設されている。

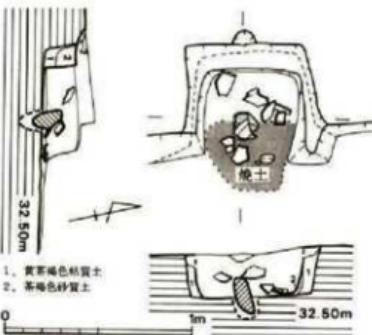
カマド（図版6、第26図） 西壁中央部に付設されている突出型（IIbもしくはIIIのタイプ）のカマドである。左袖は既になく、右袖のみ存する。最大幅は20cm、長さは18cm程である。掘り形の長さ47cm、幅70cmで燃焼部幅は50cmを測る。火床面は水平に造られ、石製の支脚は火床面を掘り込んで立っていた。煙道の一部分が摺鉢状に残存するが、これが水平に長くのびるのか、立上るのはわからない。支脚の前方に焼土の広がりがあった。土師器片と焼塙土器片も出土している。



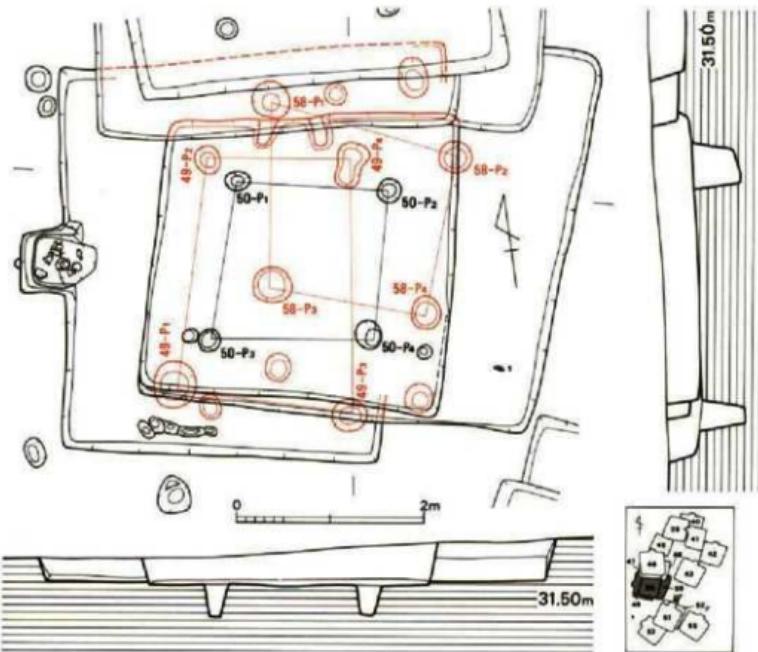
第25圖 42・45・48號住居跡出土土器實測圖 (1/3)

**出土遺物** (図版18、第28図)

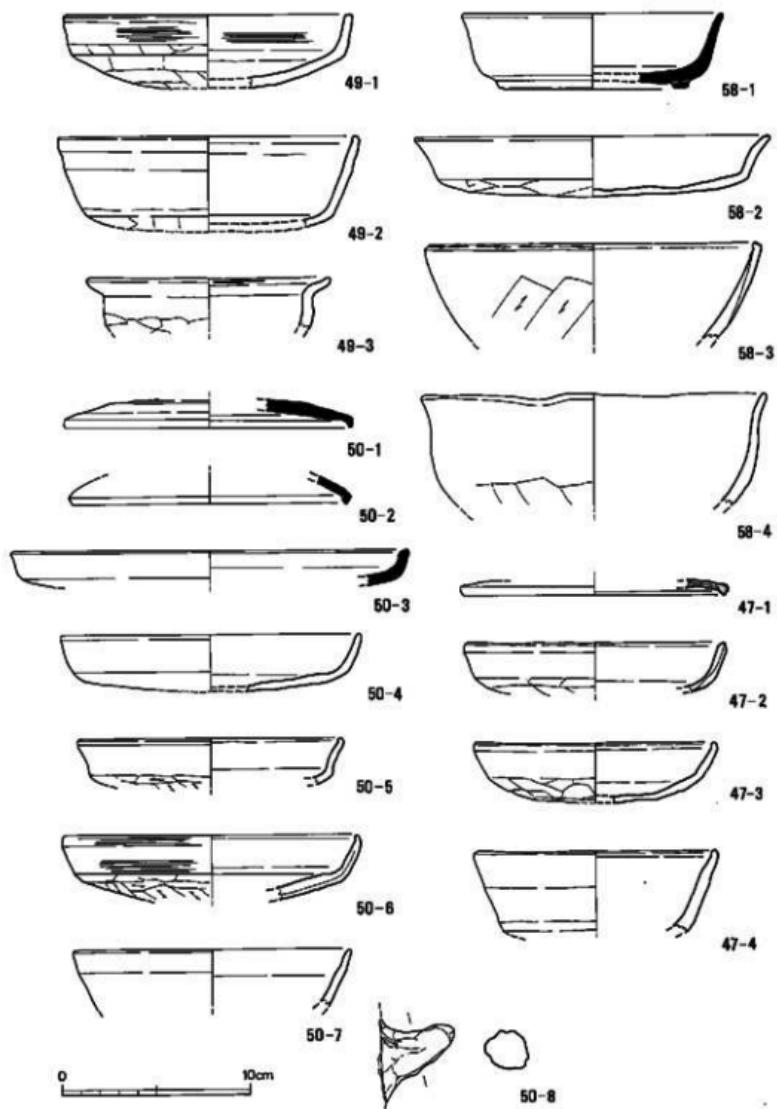
出土量は極めて少ない。1~3はカマド内より出土した精製の土器である。1・2は壊で2は床面下層の出土品と接合する。焼塙土器も出土している。



第26図 49号住居跡カマド実測図 (1/30)



第27図 49・50・58号住居跡実測図 (1/60)



第28圖 47・49・50・58号住居跡出土土器実測図 (1/3)

カマドを付設している。主柱穴を結んだ形状は台形気味である。壁面は垂直に近く立上る。

カマド 両袖部分が住居内側にあり、突出部を認めなかつたのでI型としてよいだらう。焚口幅45cm。

出土遺物 (図版18、第28図)

出土量は少ない部類に入る。1~3は須恵器で、1・2は壺、3は生焼けの高坏である。4~7は土師器の坏で、孰れも精製土器である。焼塙土器も出土している。埋土中よりスラッグ、鉄器が出土している。

58号住居跡 (図版5、第27図)

C群に位置し、49号住居跡を切り46・47・48・50号の各住居跡に大半を切られている。西辺は50号住居跡のそれとほぼ同一にならう。床面レベルは、49・50号住居跡ともあまり変わらない。主柱穴はややいびつな配置をなす。カマドは北辺にあったものか。

出土遺物 (図版19、第28図)

出土量は僅かである。1は須恵器の坏で床面下層から出土した。2~4は精製の土師器である。2は壺、3は壺で、4は口縁部分の一部が片口状になる。焼塙土器も出土した。床面からスラッグが出土した。

43号住居跡 (図版5、第29図)

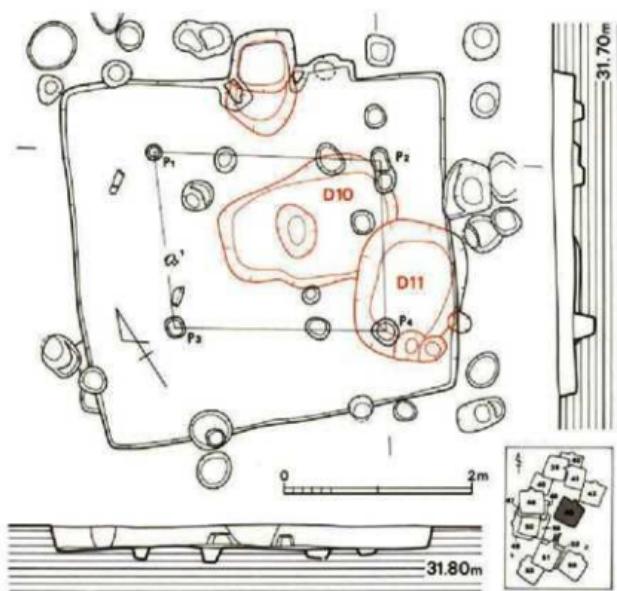
C群中で、D群との間にあり、他の住居跡と重複することなく単独で存在する。西辺に比して東辺が短く、横長のプラン (B型) を呈する。床面下層は部分的に掘り込みが見うけられる。中央部から東壁にかけて2基の土壇を検出したが、これは10・11号土壇という単独のものとして後述する。なお、カマドの東側に若干の張り出しがあり、床面のピット数が多いことから、2軒の重複の可能性もあるが、調査時には確認しえなかつた。

カマド (図版5) 北辺にあり、IIbのタイプである。握り形の長さ50cm、幅70cmで、両袖は一部のみ残存する。

出土遺物 (図版19、第30図)

出土量は少なくはない。1は須恵器の壺である。口縁部は欠損しているが略完形である。2~13は精製の土師器である。4・5は床面下層より出土した壺である。5は内面に墨の様な黒いものを塗布している。7は埋土中より出土した壺である。内面は黒ウルシを塗るが、その下に墨書きか又は暗文の如きものが見える。8・11は床面より、9はカマド内より出土した鍋である。12は床面下層より出土した甕である。13は床面から出土した鍋である。内面は黒塗りの

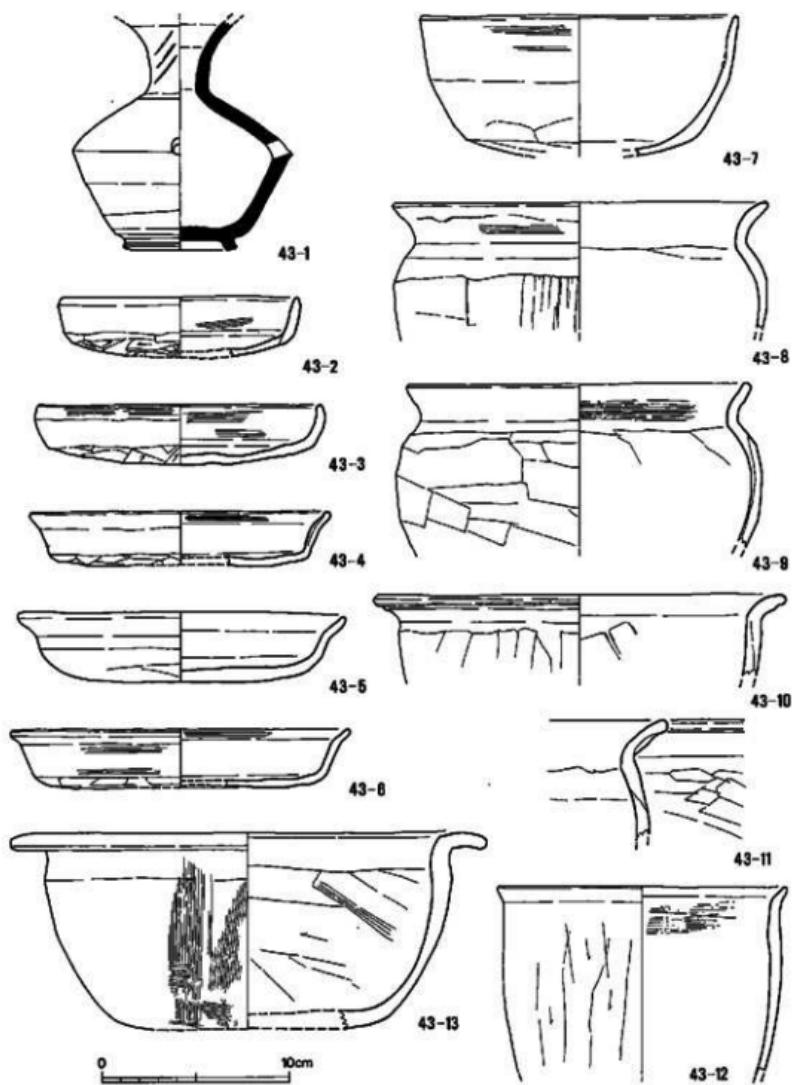
あとがみえる。焼塙土器・鉄器、そして同一個体資料 S A がある。



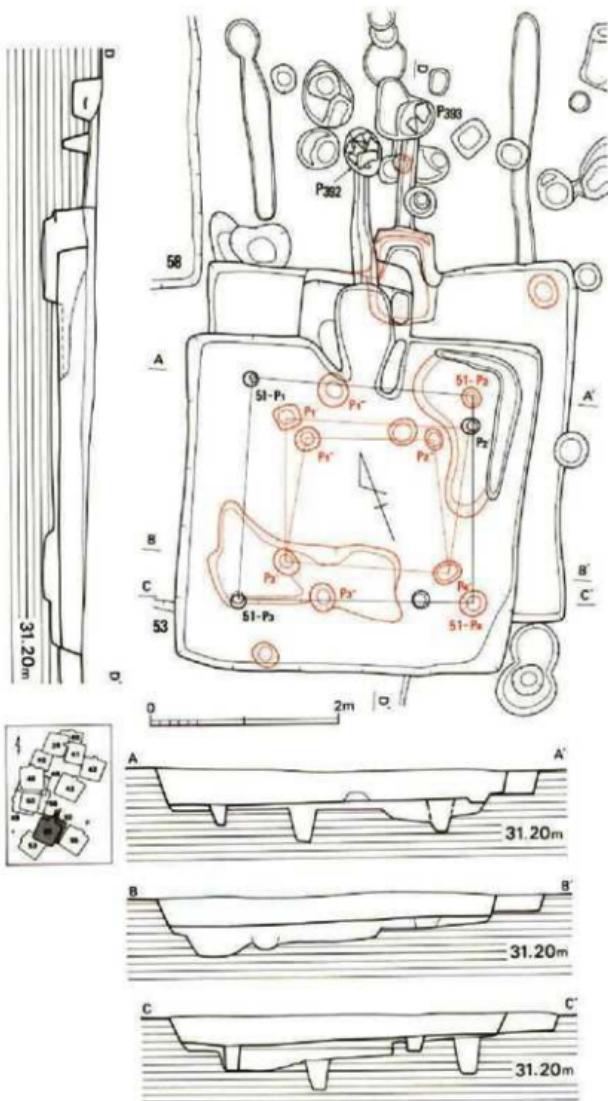
第29図 43号住居跡実測図 (1/60)



Fig. 3 43号住居跡遺物出土状態



第30図 43号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第31図 51・52号住居跡実測図 (1/60)

### 51号住居跡 (図版5, 第31図)

D群にあり、52・53号住居跡を切っている。ほぼ正方形のプラン (A型) をなす。P<sub>1</sub>の横にL字状の深い溝があることと、柱穴の数が多く見られることより、最低1回、多分2回の建てかえ (増築) がなされていると考えられる。しかし、柱穴配置が多様に考えうることから、いまはその建てかえ回数とその都度の規模を明確にしえない。

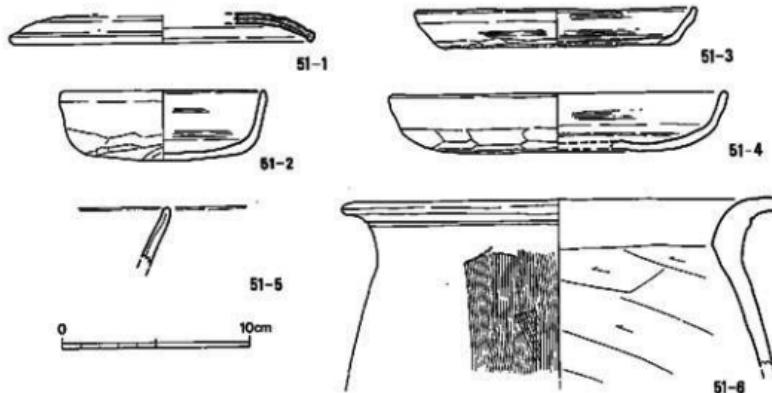
カマド 北辺中央部にあり、大きな掘り形と長い煙道を持つ。掘り形は長さ72cm、幅117cmで、燃焼部は幅60cm、奥行110cmになる。焚口部は両袖が寄っていて27cmの幅しかない。煙道は120cmの長さがあり、煙出しの方へ高くなっている。煙出入口には40×52cm (深さ22cm) の楕円形ピット (P392) があり、土師器が出土した。

### 出土遺物 (図版20, 第32・33図)

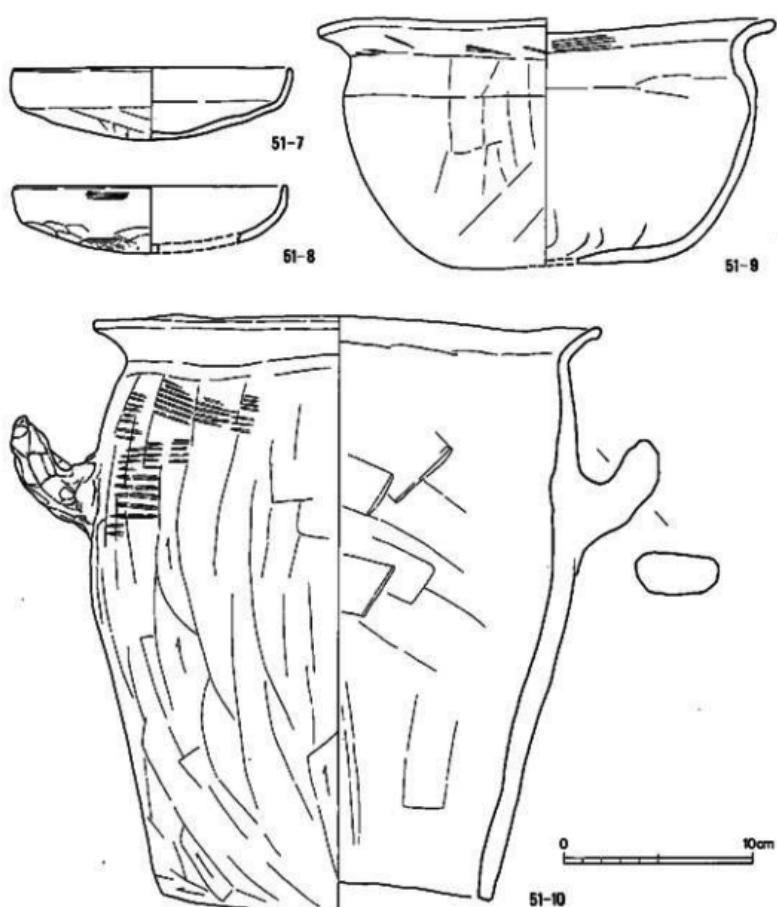
土師器ばかりで、須恵器はなかった。7～10はP392から出土した。1は須恵器を模倣した土師器蓋である。2は床面下層より出土した。9は精製の土師器鍋である。内外面は黒塗りを施し、外面は更に煤が付着する。10は精製の土師器瓶の略壳形品である。把手はソケット式である。床面から鉄鎌が出土し、焼塙土器もあった。

### 52号住居跡 (図版5, 第31図)

51号住居跡に2/3程を切られているが、51号のP<sub>1</sub>付近にある床下層の掘り込みがこの住居のもとのとしても差しつかないので、全体の形状は知りうる。規模は51号よりもやや大きめとなる。



第32図 51号住居跡出土土器実測図① (1/3)



第33図 51号住居跡 (P 392) 出土土器実測図② (1/3)

主柱穴は明確でないが、あるいは51号住居跡の下層に出てきたP<sub>1</sub>', P<sub>2</sub>, P<sub>3</sub>', P<sub>4</sub>'がやや南に偏するものこれに伴う可能性もある。

カマド 51号住居跡のカマドにて一部が損壊するも全形は知れる。長い煙道を持つⅢのタイプ

である。掘り形は長さ45cm、幅65cmとあまり大きくない。奥壁は段がついて立上る。煙道は長さ95cmで先端にピット（P393）を持つ。P393は二段掘りになった不整形をなし、最深部で30cmを測る。土師器が入っていた。

#### 出土遺物（図版20、第36図）

出土量は少なく須恵器はなかった。3は床面下層より出土した甕である。5・6は精製の土師器鍋である。焼塙土器も出土している。

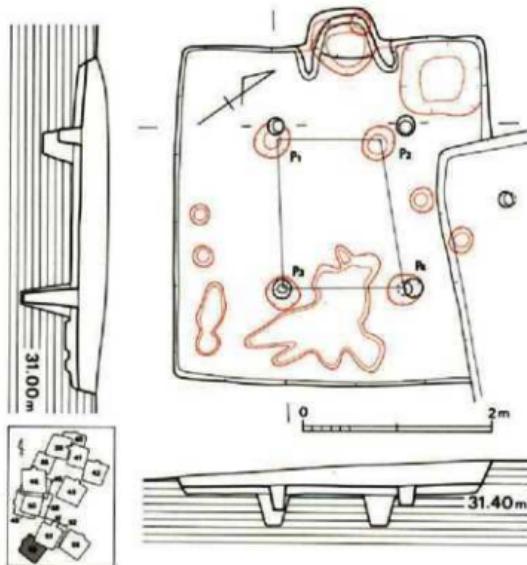
#### 53号住居跡（図版5、第34図）

C群の南端に位置し、51号住居跡に一部を切られて存した。やや縱長プランで主柱穴のP<sub>2</sub>が南西側に偏して配置されている小型の住居である。カマドは西辺に付設されている。床面下層で北隅コーナーに検出した土壌は深さが40cm強を測る。

カマド II b型で掘り形の長さ35cm、幅75cmを測る。両袖は外開き状にて検出した。

#### 出土遺物（図版36図）

出土量は少ない。1はカマド内より出土した須恵器の甕である。  
2～5は精製の土師器の甕である。3は内面底部にヘラ記号を施す。  
焼塙土器も出土している。



第34図 53号住居跡実測図 (1/60)

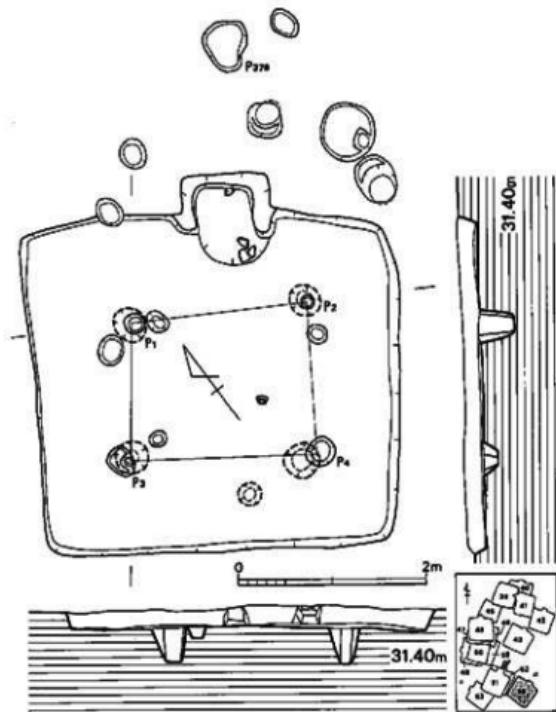
55号住居跡 (図版5, 第35図)

C群で最も東に位置し単独で存する。平面形はやや横長プラン (B型) をなし、主柱穴配置は台形状を呈する。北辺中央やや東寄りには突出型のカマドを付設している。壁面は垂直気味に立上がる。柱穴のあり方から類推すれば、建て替えを行っている可能性もある。

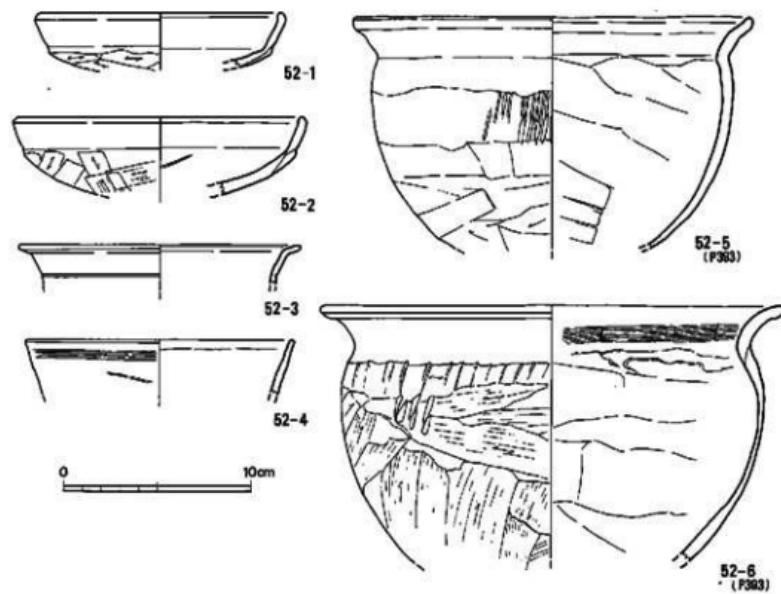
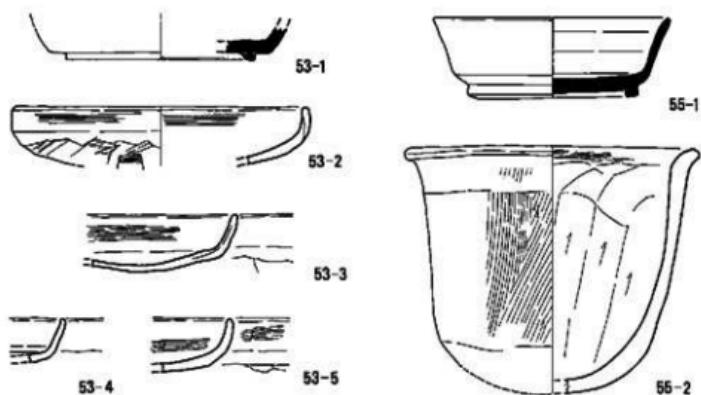
カマド (図版6) IIb型である。掘り形の長さ40cm、幅95cmを測る。このカマド主軸の延長上にあるP379は、あるいは何らかの関連を有するピットかも知れない。

出土遺物 (図版19, 第36図)

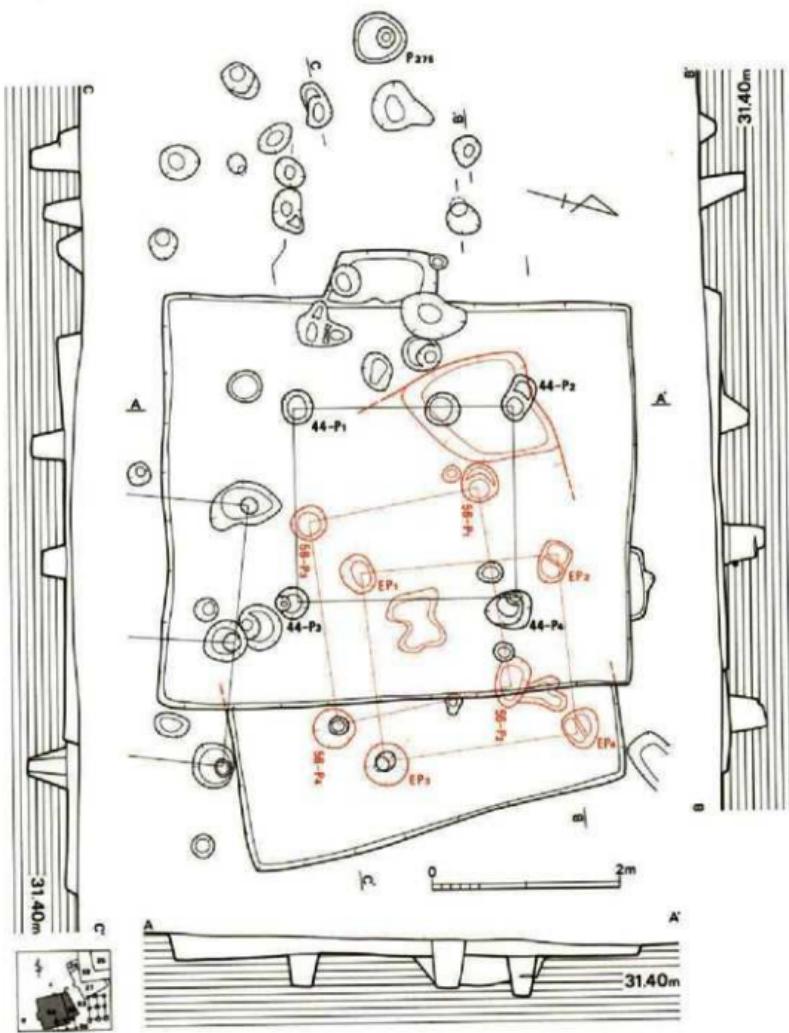
遺物は殆どない。1は床面から出土した須恵器壺である。2はカマド内より出土した略完形の土師器壺である。焼塙土器がカマド内から出土している。



第35図 55号住居跡実測図 (1/60)



第36図 52・53・55号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第37図 44・56号住居跡実測図 (1/60)

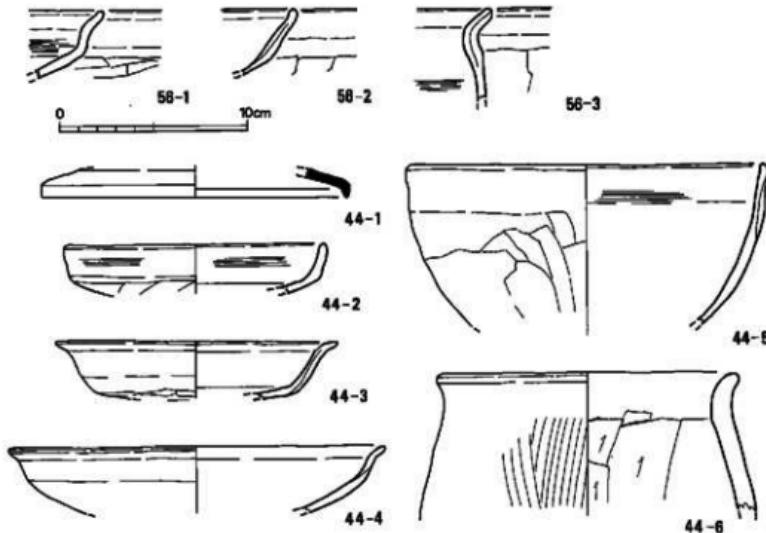
44号住居跡 (図版7・8、第37図)

E群とした中にあり、56号住居跡を切り、6号掘立柱建物に切られている。平面プランは横長(B型)を呈し、主柱穴もこれに同様である。 $P_1 \cdot P_3$ の近くに別のピットがあるのと、 $P_2 \cdot P_4$ が2段掘りになっていることからすれば、あるいは現位置での建てかえがあったのかもしれない。カマドは西邊に付設されている。

カマド 新しいピットで一部が損壊していることもある、袖は検出しえなかった。掘り形の長さ55cm、幅120cmである。なお、このカマドの奥壁から西に2.25mの所にピット(P275)があり、土器が入っていた。このP275は住居・カマド主軸の延長上にあることと、出土した須恵器の破片がこの44号住居跡埋土中出土の破片と接合はしないものの同一個体とされること(SH12と17)から、住居(カマド)に関連するものともとれる。P275については後述する。また、カマドとP275までの両側にいくつかのピットが、囲いの如くあるのは偶々の所産なのか、あるいは関連するものなののかはわからない。

出土遺物 (第38図)

出土量は少ない。3はカマド内より出土し、5は土師器の甕で二次火熱を受けている。焼塗土器・鉄器も出土した。埋土中の須恵器甕胴部片と構2の出土品が接合した(J8)。



第38図 44・56号住居跡出土土器実測図 (1/3)

### 56号住居跡 (図版7・8、第37図)

44号住居跡・6号掘立柱建物に切られている。44号住居跡の下層にて、この住居の下層の一部が現れたが、その北西コーナー部分は深さ30cm程の土壤状の掘り込みになっている。やや横長のプラン (B型) になろう。なお、プランは全く把めなかったが、この住居と44号住居跡の下層ではほぼ方形に配置される柱穴を確認した(EP<sub>1</sub>~<sub>4</sub>)。四方へ展開して掘立柱建物になる様にも思ないので、浅くて残存しえなかつた住居がもう1軒存したのかもしれない。

カマド 44号住居跡に切られて奥壁付近の一部のみ残存する。IIbかIIIのタイプになろう。幅は78cm。なお、このカマドの延長上にもピット (P401) がある。

### 出土遺物 (第38図)

総出土量は極めて少なく、須恵器は出土していない。2は床面から出土した土師器坏である。3は床面下層より出土した精製の土師器甕である。

### 57号住居跡 (図版7・8、第39図)

F群の中で北側に位置する。60・61・62・66号住居跡を切り、この近辺では最も新しい住居である。平面プランは台形状を呈し、柱穴配置もそれに準ずる。床面が高い位置にあるため、切られた住居の床面がこれの下層から現れた。

カマド (図版8) 北辺の中央よりやや西に偏した所にある。III型で掘り形の長さ60cm、幅90cm、焚口幅40cm、煙道の長さ70cmを測る。

### 出土遺物 (第44図)

総出土量の大半以上は埋土中より出土している。7は土師器の鉢で二次火熱を受けている。焼塙土器・鉄錠・スラッグもある。また、同一個体資料のSE・SGがある。

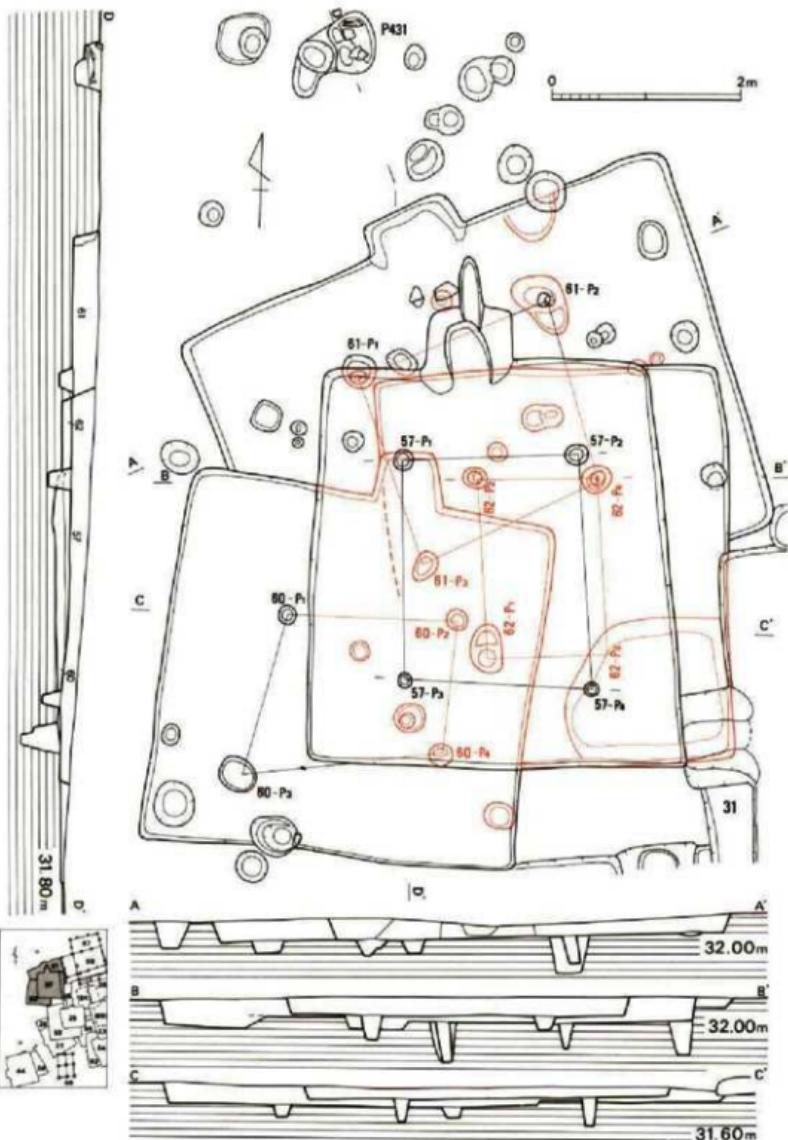
### 60号住居跡 (図版7・8、第39図)

F群内で西端に位置し、61・62号住居跡を切り、57号住居跡に1/2程切られている。57号住居跡の床面下で、カマドと残りの壁・床面を検出した。ほぼ方形のプラン (A型) としてよいが、主柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>の位置が南にずれすぎている。

カマド 遺存状態はよくない。IIbのタイプになる。長さ50cm、幅75cmを測る。焚口の前面に土製支脚が転がっていた。

### 出土遺物 (図版20、第40図)

出土量は少ない。1はカマド内、3は床面より出土した。7の土製支脚は断面が10面体をなす。焼塙土器と同一個体資料SC・SGがある。



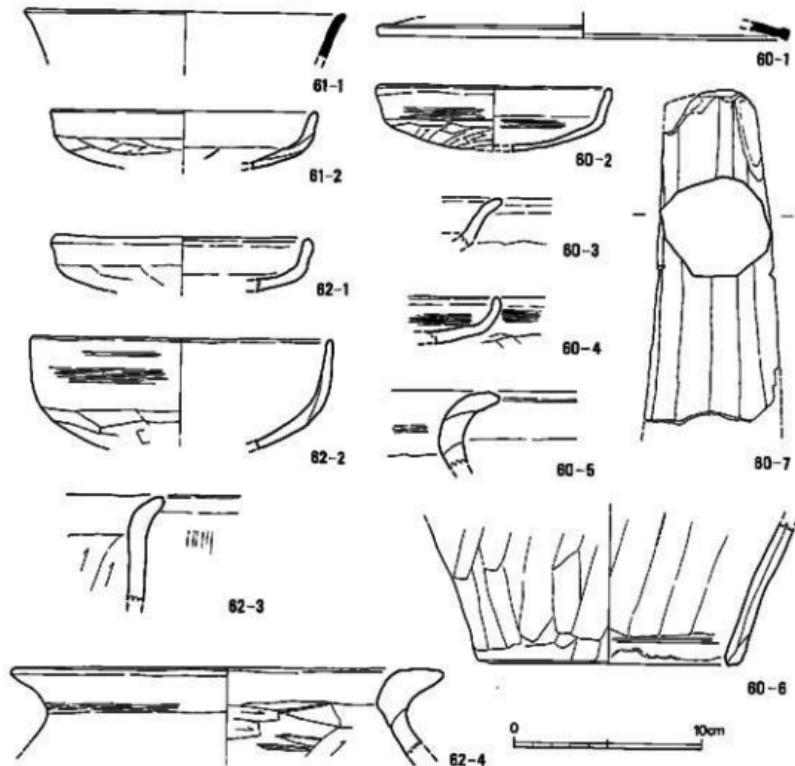
第39図 57・60・61・62号住居跡実測図 (1/60)

61号住居跡 (図版7・8、第39図)

F群中で最も北側に位置し、57・60・62号住居跡に1/3強を切られている。62号の床面が深いので、重複部分には床面の残存はなかった。平面は横長プラン (B型) を呈するが、柱穴配置は極端な横長とはならない。

カマド 北辺の中央にある。両袖ともに少しあり残存しないが、IIaのタイプとしたがよからう。掘り形の長さ30cm、幅100cmである。このカマド奥壁から主軸上1.8mの所に深さ30cm程のピット (P431) があり、土器が入っていた。44号住居跡におけると同様のものであろうか。

出土遺物 (第40図)



第40図 60・61・62号住居跡出土土器実測図 (1/3)

土器は埋土中・カマド内・床面から出土した。1は須恵器坏である。焼塙土器は埋土中から出土した。紡錘車は床面から出土している。また、カマド前面の床面にあった須恵器壺片は、同一個体資料S Lである。

#### 62号住居跡（図版7・8、第39図）

F群中で北側部分に位置し、61号住居跡を切り、57・60・66号住居跡に切られている。西辺は60号住居跡の方が深いことから床面は残存しない。カマドもこの西辺にあったものと思われ、横長のB型プランになろう。主柱穴はP<sub>3</sub>を明確に検出していないがかなり横長となる。そのP<sub>3</sub>の付近には床下層で土壤状の掘り込みがあり、丁度P<sub>3</sub>のあたりが最も深い(32.56mの標高)ので柱穴があったものとしてもよいだろう。

#### 出土遺物（第40図）

遺物は床面及び床面下層から僅かに出土し、須恵器は出土していない。1は床面下層から出土した精製の坏である。外面は煤が付着している。2・3は床面から出土している。布目痕を含む焼塙土器が出土している。

#### 28号住居跡（図版7・8、第43図）

F群の中で東側に位置する。21・22・23号住居跡に切られ、29・54号住居跡を切る。また7号掘立柱建物にも切られる。主柱穴はP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>がかなり東壁寄りとなるが、その配置は正方形に近いので、住居プランもA型になろう。

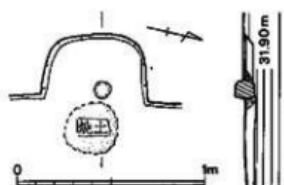
カマド（第41図） 西辺にあり、突出部は長さ30cm強があるものの、支脚が住居の壁ライン上より少し奥まっただけの所にあるのでIIaタイプとしたがよかろう。明確な袖はなかった。支脚はやや北に偏して遺存していた。

#### 出土遺物（図版19、第52図）

總出土量は少ない部類に属する。2はカマド内より出土した。布目痕のある破片を含めた焼塙土器・土鍬、そして同一個体資料のSC・SGがある。

#### 28号住居跡（図版7・8、第43図）

当遺跡中で最も多く切合った住居群の一帯に位置する。54・66・67号住居跡を切り、23・25・28号住居跡に切られている。また、7号掘立柱建物とも重複している。平面プランは横長の長方形になろう。主柱穴配置は北に偏



第41図 28号住居跡カマド実測図  
(1/30)

して横長の台形状を呈する。カマドを通る主軸は66号住居跡の主軸と殆ど同一である。

**カマド** (図版9、第42図) 西壁の中央部より北に偏して付設されている。一部を後時のピットに切られているが形状は知れる。IIbタイプで奥壁に近い中央付近に、円柱状をなす土製の支脚を検出した。それは5cm程掘り込んで、灰黄色砂質土をおいた上に支脚をすえ、さらに灰白色粘土で基部を固定していた。灰白色粘土はカマド使用面より下位にあるが、熱を受けて黄橙色に変色している。両袖は遺存しない。

#### 出土遺物 (第44図)

遺物は埋土中より僅かに出土している。3は土師器の壺であろう。焼塙土器と同一個体資料SC・SIがあり、粗底を持つ土器片もあった。

#### 31号住居跡 (第43図)

59号住居跡を切るも、25・66号住居跡に殆どを切られているので、詳細は分からぬ。遺物は全くなかった。

#### 54号住居跡 (第43図)

F群中で最も重複が激しい所に位置し、23・25・28・29号住居跡に切られる。28・29号住居跡の下層にあるが、長くのびた煙道がなければその存在もわからぬ程度であった。規模は下層掘り込みの段などから、ある程度復原可能であるが床面は既にない。主柱穴は特定できない。

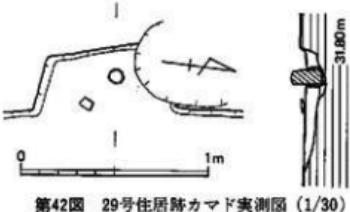
**カマド** 北壁中央にあるということは知れるが、大きさ等は不明である。煙道は140cm程にはなろう。その先端に25cm程の深さのピットがあるも土器は出土していない。

#### 出土遺物 (第44図)

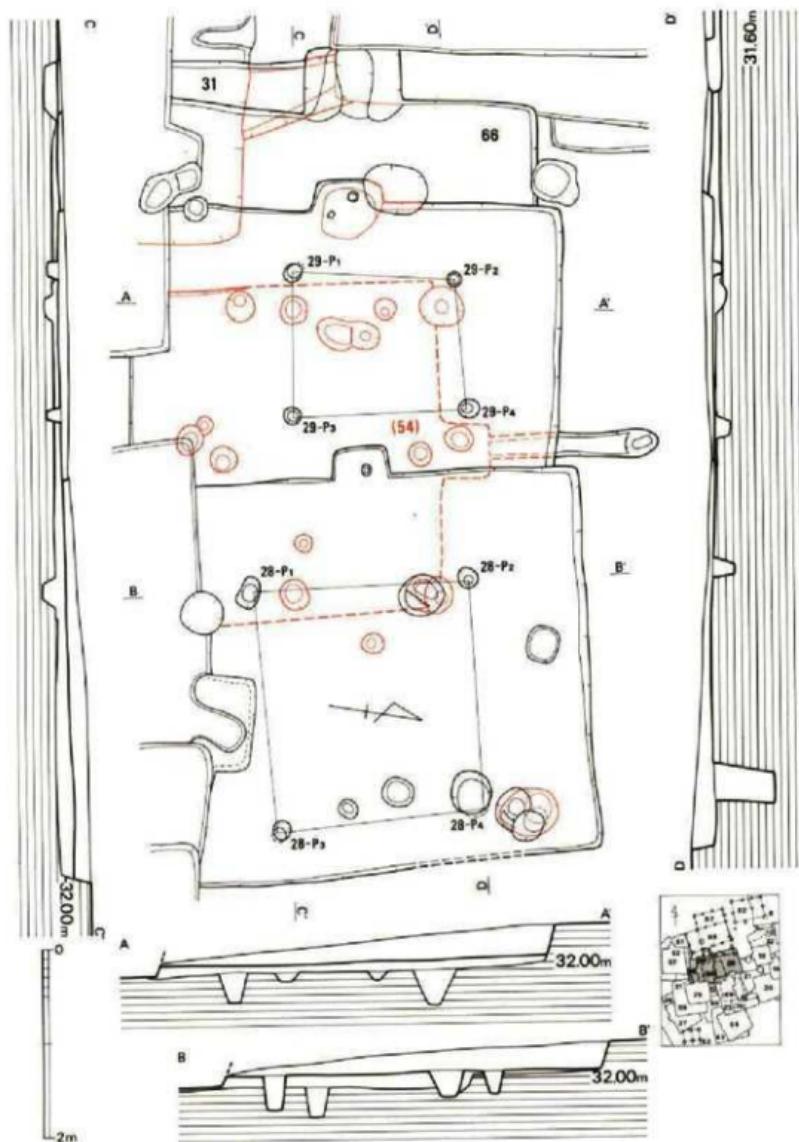
遺物は床面下層から3点を見るのみである。1は土師器の鉢であろう。2は鍋であろう。

#### 66号住居跡 (図版7・8、第43図)

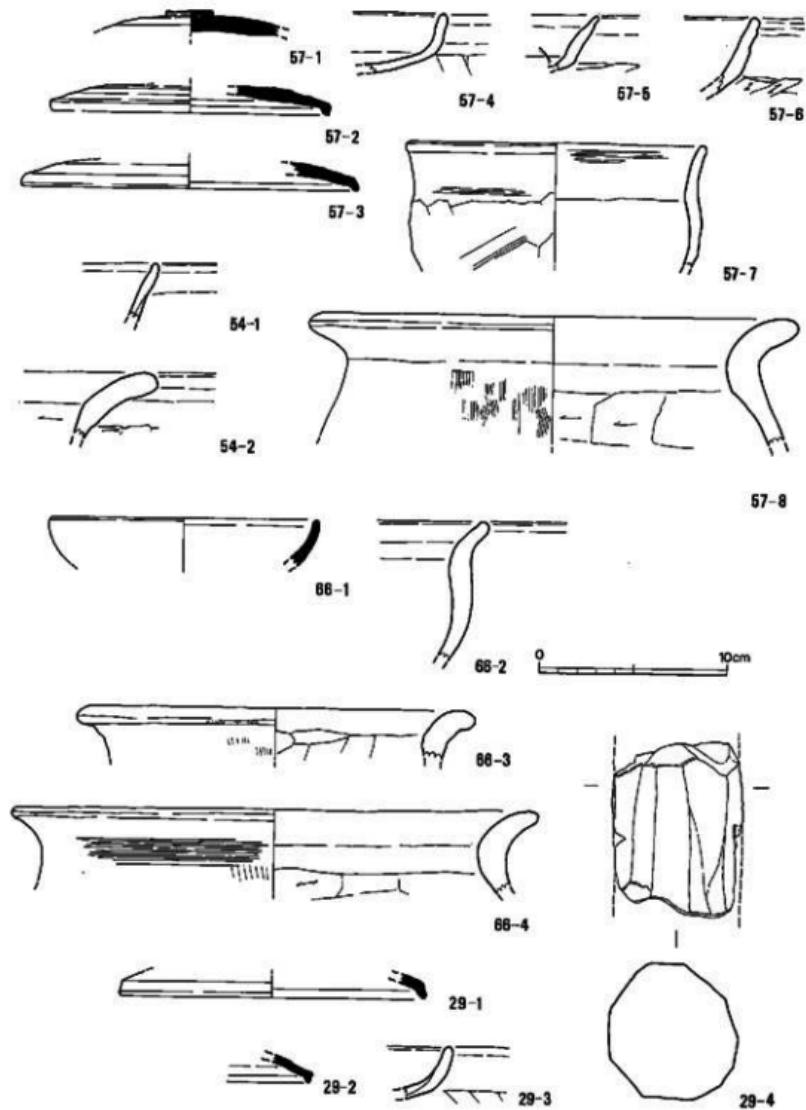
F群にあり、31・59・62号住居跡を切っているが、25・29・57号住居跡に切られた部分の方が多いので、不明な点が多い。ただ、29号住居跡と主軸をほぼ同じくするので、同様の形状で



第42図 29号住居跡カマド実測図 (1/30)



第43図 28・29・31・54・66号住居跡実測図 (1/60)



第44図 29・54・57・66号住居跡出土土器実測図 (1/3)

あったとも考えられる。主柱穴は不明。

カマド 西壁に存したが、掘り形のプランがわかるという程度の遺存状態であった。掘り形の長さ65cm、幅103cmを測る。

出土遺物 (図版44図)

総出土量は少ない。1~4は埋土中より出土した。焼塙土器と同一個体資料SEがある。

25号住居跡 (図版7・8、第46図)

F群のはば中央部に位置する。31・54・59・66・67号住居跡を切っており、近辺で最も新しい住居である。平面形態は横長プランをなし、柱穴配置も同様になろう。カマドは北辺に付設されているが、床面直上に土製支脚を検出し、それとカマドとの間には灰白色粘土が広がっていた。カマドを演した結果かと思われる。

カマド IIb型になり長さ35cm、幅70cmの掘り形がある。遺存状態は前述のとおりである。

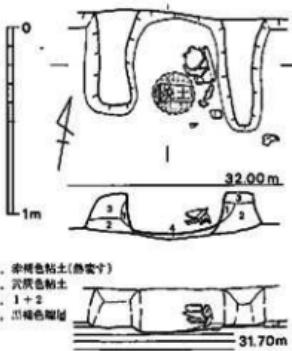
出土遺物 (図版19、第48図)

出土量は極めて少ない。2は完形品である。3は須恵器を模倣した土師器皿らしい。土縄は埋土中より出土した。

59号住居跡 (図版7・8、第46図)

F群内で西側に位置し、26・27・65号住居跡を切り、25・31・60・66号住居跡に切られている。この近辺では23号住居跡と同じく大型の住居である。カマドは北辺につくられている。壁面は10cm強しか遺存していない。殆ど方形としてよいが、北辺がやや短くなり、台形気味のプランを示す。それは主柱穴の配置も同様である。

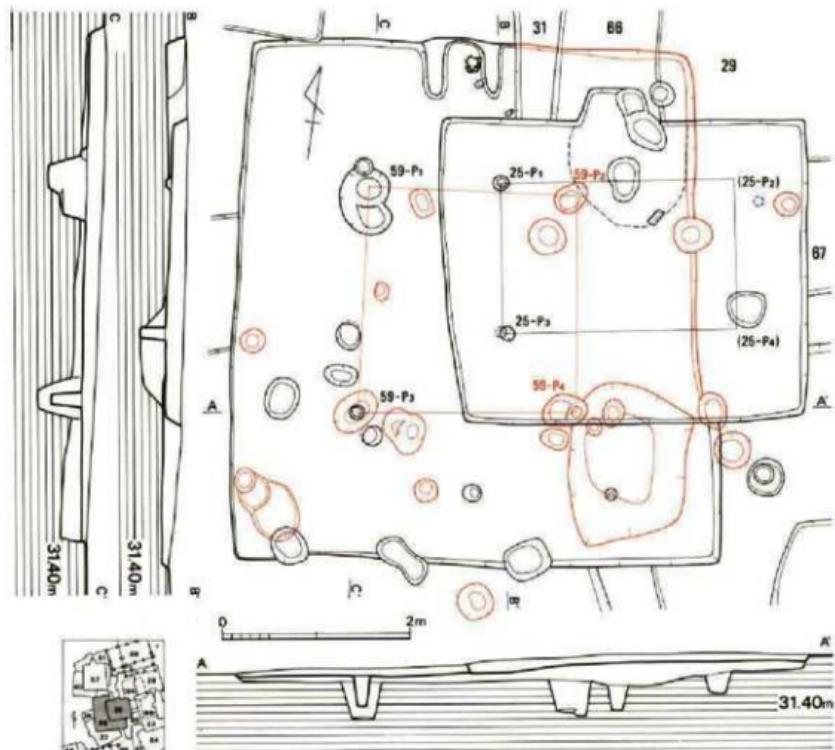
カマド (図版9、第45図) 北壁中央部のやや西寄りに設置されている。当遺跡中で数少ない非突出型(Aタイプ)になる。焚口幅45cm、奥行60cmで、左袖は長さ50cm、最大幅26cm、右袖は長さ55cm、最大幅25cmを計測する。両袖とも黄灰色粘土を積み上げて構築している。火床面は窪み気味に造られ、焚口部には焼土が残存し、両袖の内側は赤褐色を呈してガチガチに焼けていた。また、右袖寄りに土師器が潰れて存した。



第45図 59号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物 (図版21、第48図)

図示できた個体数は多い方である。2・3は須恵器を模倣した土師器である。4～7はカマド前面及びカマド内で出土した土師器の杯である。3は底部外面にヘラ記号のような線刻があり、7は内外面とも黒塗りである。9はカマド内より出土した。焼塙土器と同一個体資料S.E.がある。



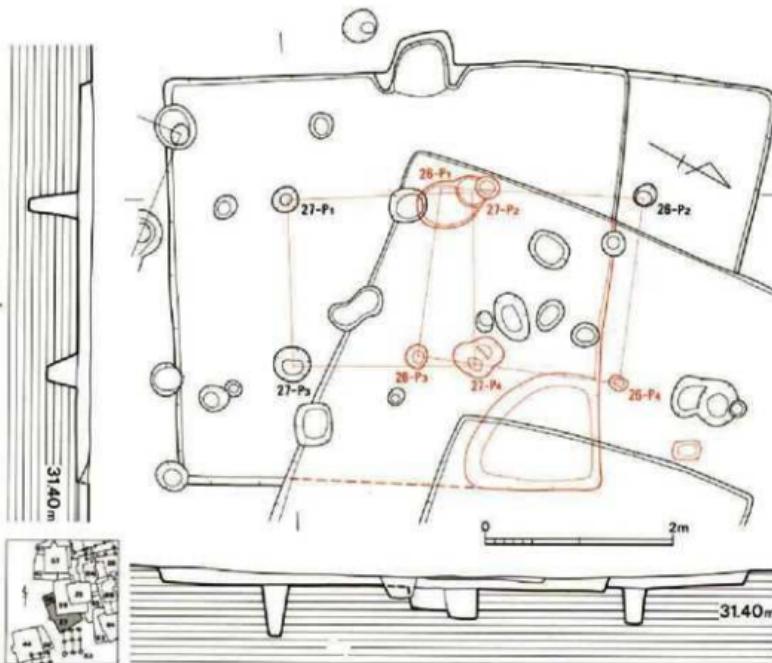
第46図 25・59号住居跡実測図 (1/60)

### 26号住居跡 (第47図)

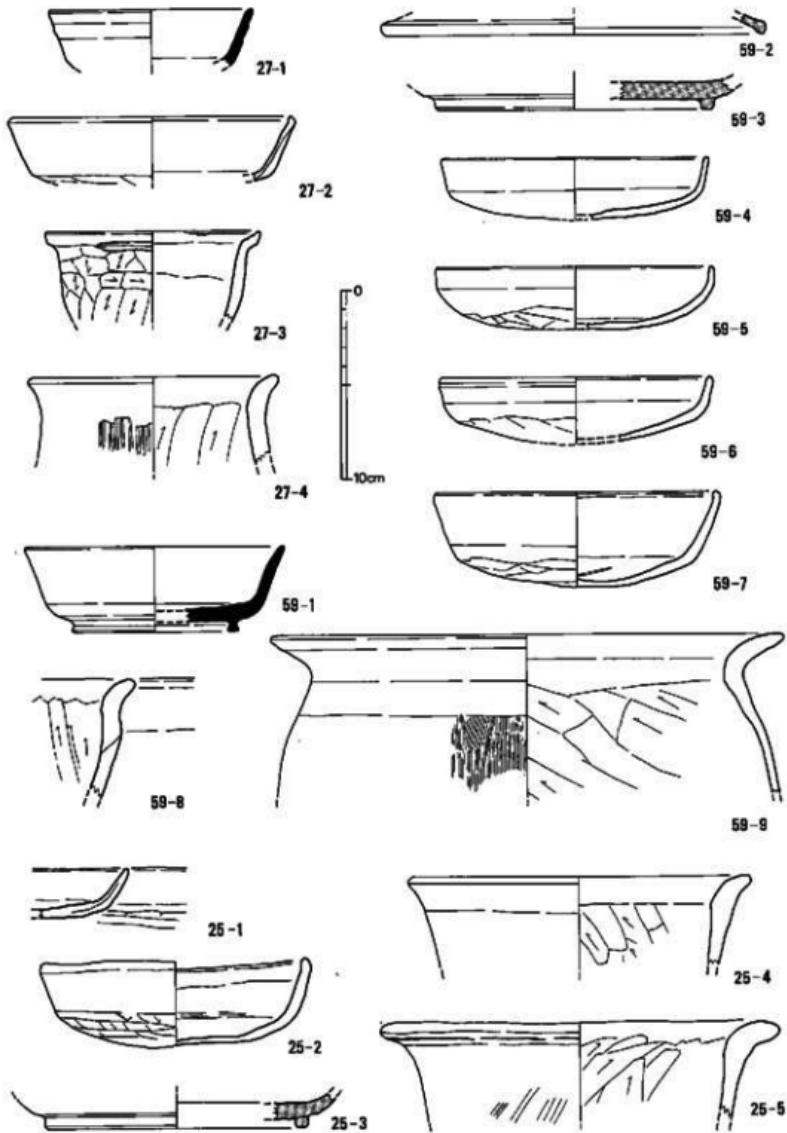
F群中でもE群に近い所に位置し、27・59号住居跡に殆ど切られているが、主柱穴配置より類推すると27号住居跡とあまり変わらない規模になろう。発掘時において、当初は27号住居跡との切合が不明確だった為、遺物を27号と一緒に取り上げたので、この住居に属する確実な遺物はない。しかし、残存状況からしてもごく僅かの土器しかなかったと記憶する。

### 27号住居跡 (図版7・8、第47図)

26号住居跡を切り、25・59号住居跡に1/2程切られ、さらに3号掘立柱建物のP<sub>3</sub>に切られる。25・59号住居跡の下層で検出したコーナー部分は扇形をした土壤状の掘り込みとなる。プランとしてはややいびつな方形を呈するが、主柱穴配置はやや横長の整った形状としてよい。



第47図 26・27号住居跡実測図 (1/60)



第48圖 25・27・59号住居跡出土土器実測図 (1/3)

カマド IIb型で西辺のやや北寄りにある。掘り形の長さ35cm、幅65cm。

出土遺物 (第48図)

総出土量は僅かである。1~4は全て床面下層より出土している。焼塙土器と軽石も下層から出土した。

21号住居跡 (図版7・8、第49図)

F群中で最も重複が激しい所である。22・28・68・69・70号住居跡を切り、20号住居跡に切られる小型の住居である。主柱穴等は床面下層においても検出できなかった。残存壁からするとカマドは東辺に存したのであろう。

出土遺物 (第73図)

総出土量の1/2強は床面下層より出土した。2は須恵器の蓋である。焼塙土器と同一個体資料SCがある。

22号住居跡 (図版7・8、第49図)

23・28・69・70号住居跡を切り、20・21号住居跡に切られる。柱穴は、はっきりと確認できなかった。

カマド 西壁中央にある。IIb型で掘り形の長さ60cm、幅70cmを測る。

出土遺物 (第73図)

出土量は極めて少ない。3はカマド内より出土した土師器の甕である。焼塙土器・スラッグが出土している。

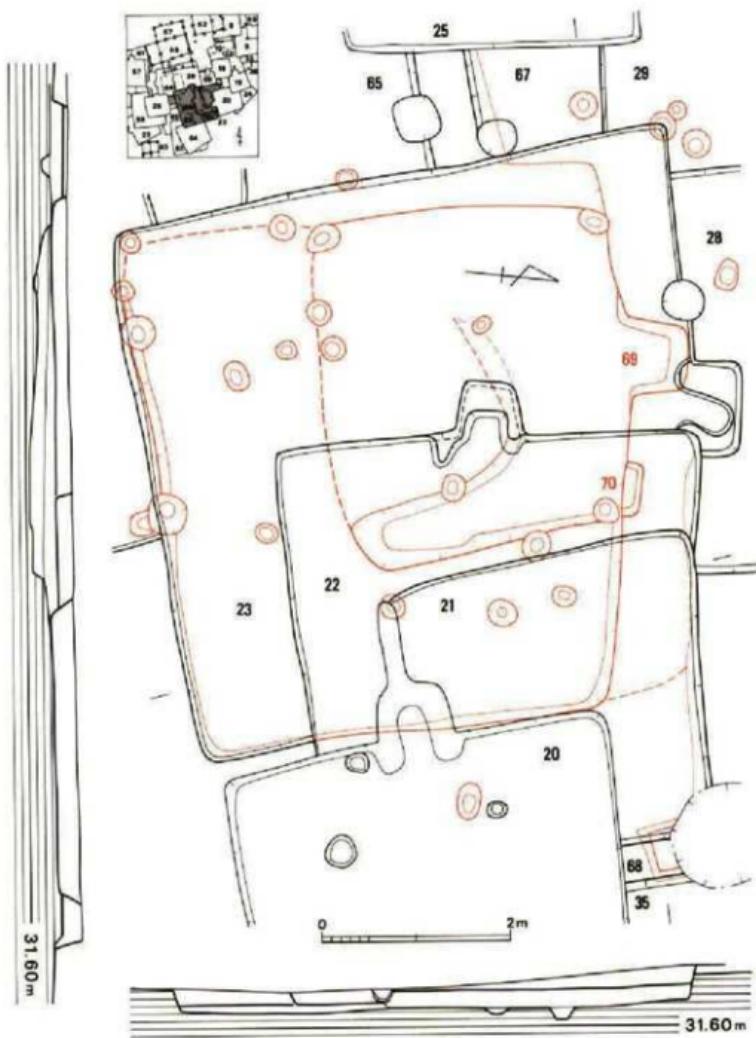
23号住居跡 (図版7・8、第49図)

28・29・54・63・64・65・67・69・70号の各住居跡を切り、21・22号住居跡に半分程が切られている。この遺跡で検出した中では最大規模の住居跡である。柱穴はいくつか想定しても特定できない。

カマド 北辺中央にあるIIbタイプである。掘り形の長さ45cm、幅100cmを測る。

出土遺物 (第52図)

総出土量は少ない。1~4は床面下層より出土した。焼塙土器もある。



第49図 21・22・23・67・69・70号住居跡実測図 (1/60)

### 67号住居跡 (第49図)

23・25・29号住居跡に切られ、南辺の一部が知られるのみで全貌は殆どわからない。床下層から土師器1個体になろうかという破片5点が出土したのみである。これは図示にたえない。

### 68号住居跡 (第49図)

23号住居跡下層より検出した小型の住居で、プランはおおよそつかめたが主柱穴はわからない。

カマド 北辺中央部で僅かに焼土を検出した。掘り形の長さ60cm、幅80cmを測る。

#### 出土遺物 (第52図)

遺物はカマド付近と床面下層より出土した。2は土師器の皿である。3は土師器の要で二次火熱を受けている。焼塙土器も出土している。

### 70号住居跡 (第49図)

22・23号住居跡の下層から検出した。23号住居跡と2辺が殆ど重複している為、当初はその存在に気付かなかったが、床面下層の段階でカマド・焼土を確認した事によって初めて認知した。69号住居跡に切られている。カマドは北辺にあって掘り形の一部が知れるのみである。遺物は出土していない。

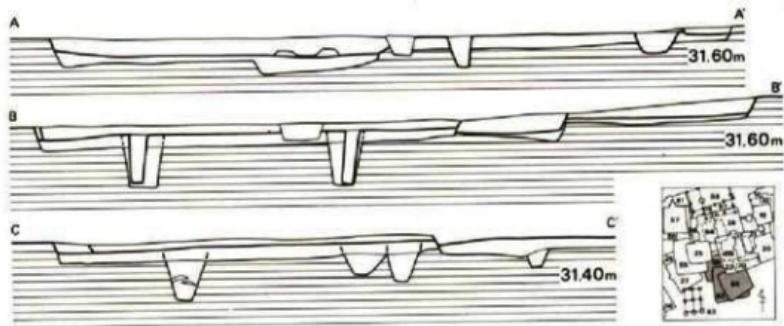
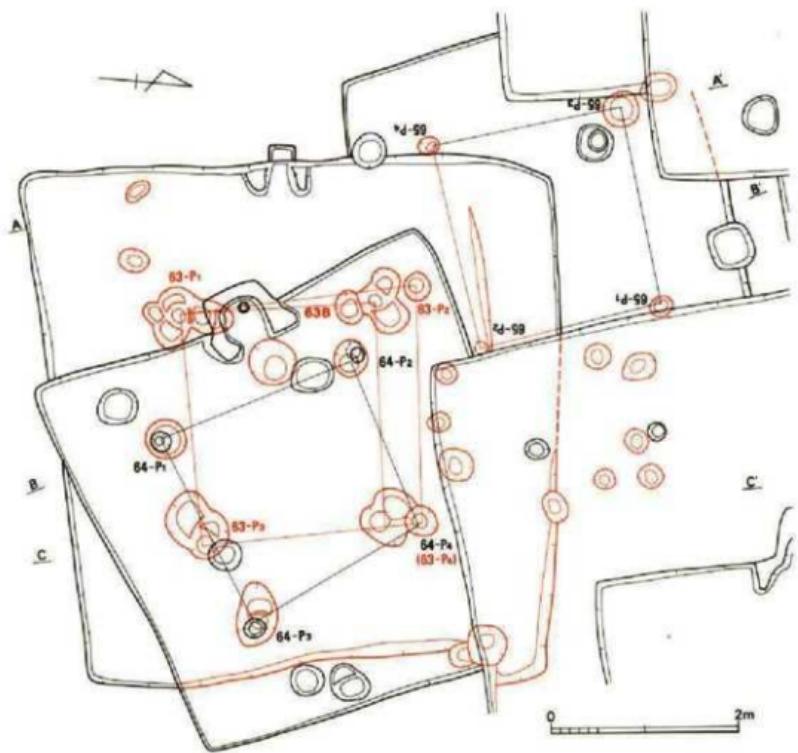
### 63号住居跡 (図版7・8、第50図)

F群の中で南端に位置する。65号住居跡を切り、23・64号住居跡に切られている。規模は59号住居跡と同じ位の大型の住居跡である。平面プランはほぼ方形としてよからう。主柱穴に重複があるのと、P<sub>2</sub>の北側に下層で段が知られたことより、建てかえを行ったものと思われる。このとき古い住居(63B)からの拡張であるが、2回、3回に及ぶ建てかえかもしれない。

カマド 西壁の中央部で検出したが遺存状態は悪い。灰白色粘土を用いた袖が壁より内側に残っているものの、その焚口幅は僅か25cm、奥行35cmしかない。また、両袖間の壁外には幅28cm、奥行15cmで深さ10cm程の張り出しがある。この張り出しを煙道の基部とし、カマド本体は突出しないI型と考えるが妥当と思われる。

#### 出土遺物 (第53図)

総出土量の1/3は埋土中より出土した。2・3・5・6は床面下層から出土している。5は甕である。焼塙土器も出土している。



第50図 63・64・65号住居跡実測図 (1/60)

#### 64号住居跡 (図版7・8、第50図)

23号住居跡に切られ、63号住居跡を切っている。ほぼ正方形プランとしてよい。床面の貼床はよく踏み固められていた。P<sub>4</sub>は63号のP<sub>4</sub>と同一ピットを用いたが、やや西に偏しすぎるくらいはある。

カマド (図版9、第51図) 西壁中央部に設置されている。IIaに近いがIIbタイプとしてよく、掘り形は長さ35cm、幅70cmを測り、左袖は長さ30cm、幅30cm、右袖は長さ30cm、幅40cmが遺存する。焚口幅は30cm、奥行57cmで、壁面はよく焼けている。土製支脚は奥壁に近い所に立ったまま遺存していた。この支脚は灰白色粘土で固定されていた。

#### 出土遺物 (図版20、第53図)

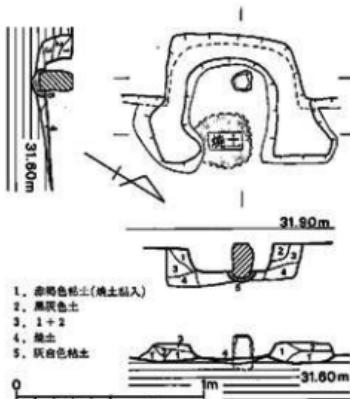
出土量は極めて少ない。1～3は精製の土師器の坏である。5はカマドの支脚で、円柱状を呈して断面はやや方形に近い。焼塙土器がカマド内からも多く出土している。

#### 65号住居跡 (第50図)

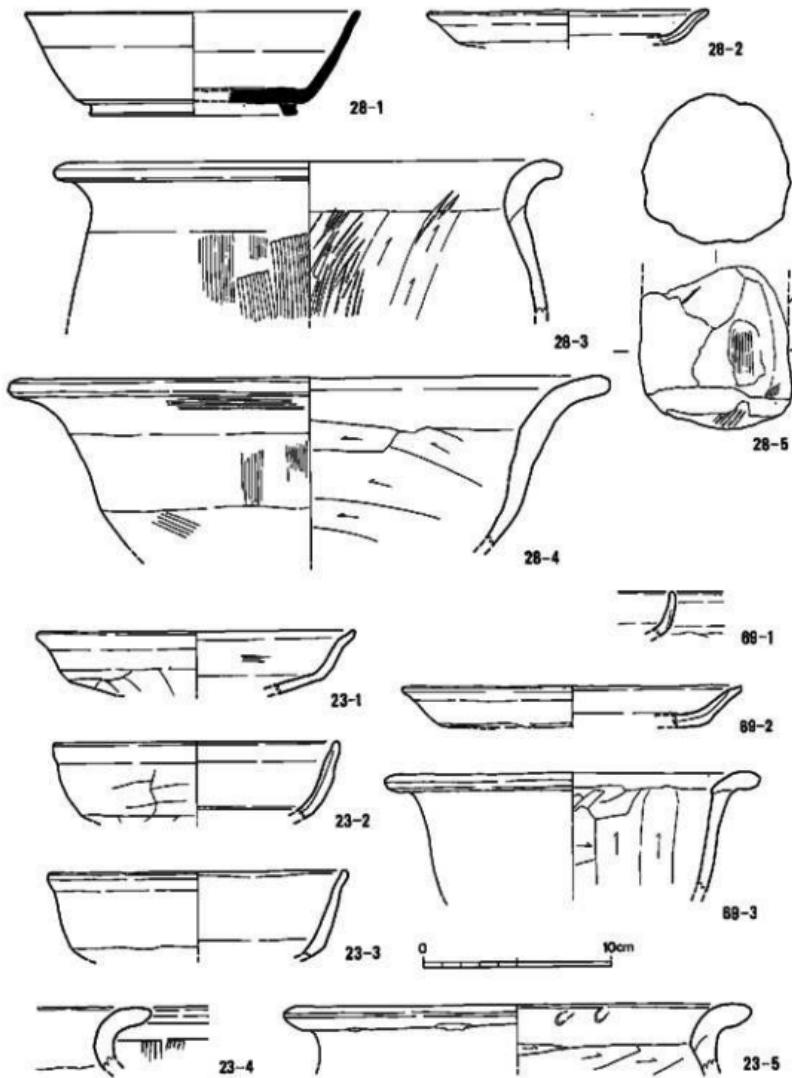
23・25・59・63・64号住居跡に切られている。南西コーナー部分と北辺の一部分のみの残存であるが、下層より検出した柱穴配置からすればほぼ方形のプランになろう。カマドは東辺にあったものと思われる。

#### 出土遺物 (第53図)

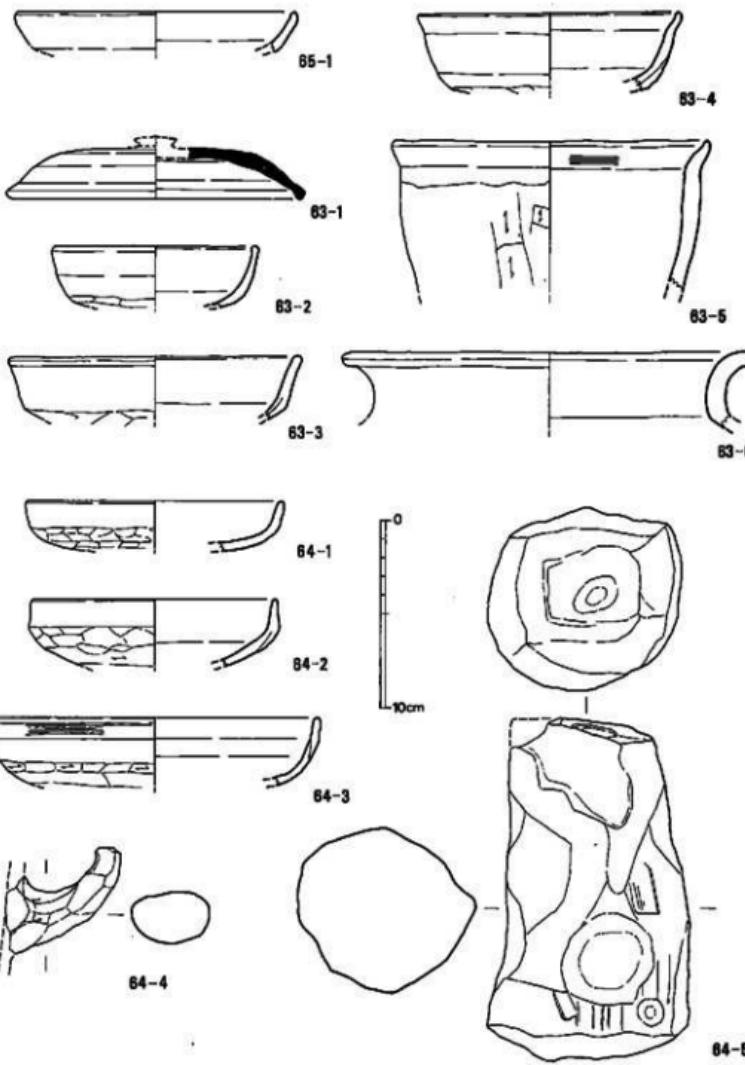
床面から出土した土師器坏1点のみしかない。



第51図 64号住居跡カマド実測図 (1/60)



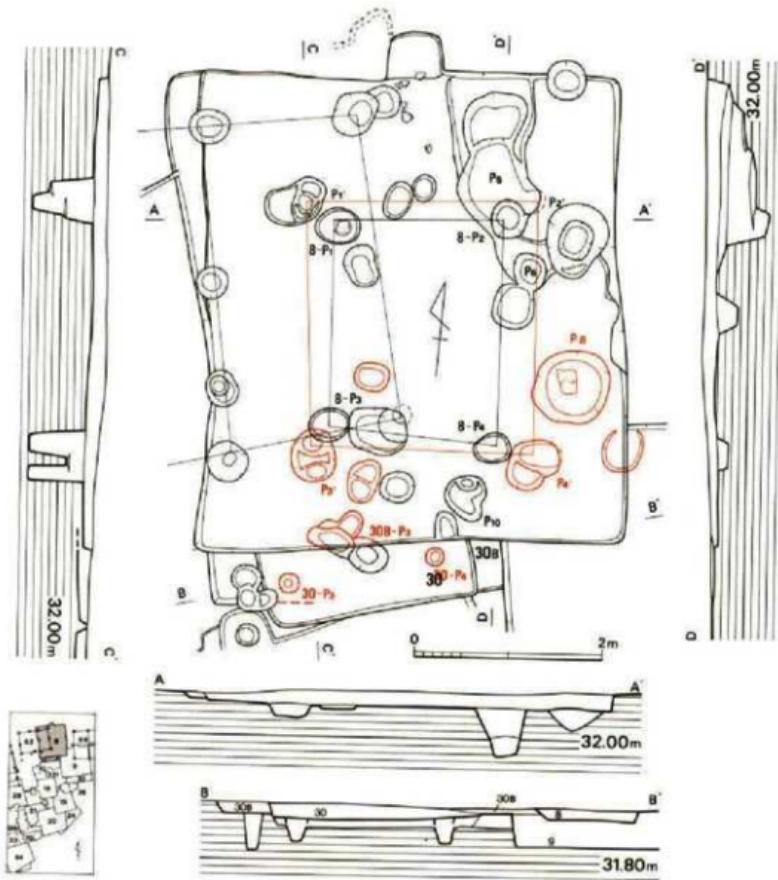
第52図 23・28・69号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第53図 63・64・65号住居跡出土土器尖測図 (1/3)

8号住居跡 (図版8, 第54図)

G群とした中の北端に位置し、9・30号住居跡を切り、2号掘立柱建物に切られている。平面は縦長プランのC型で9号住居跡とはほぼ同一の主軸方向である。床面はよく踏み固められていた。柱穴数が多いこととその配置、および北西コーナー部分のあたりが2段になっていることから、建てかえのなされている可能性が高い。P<sub>1</sub>からはほぼ完形の土師器壺が正立で出土し



第54図 8・30号住居跡実測図 (1/60)

た。 $P_8$ はこの住居に確実に伴うものか否か確定しれないが、須恵器甕の破片が出土した。これは接合資料J7である。

カマド（図版10、第55図） 北壁のほぼ中央部やや東寄りに設置されている。IIb型で突出部の北西壁は搅乱によって削平を受けており、袖・支脚等は検出できなかった。掘り形の長さ50cm、幅60cmを測る。前面の50cm程までに焼土が広がり、須恵器・土師器が散乱した状況であった。焼塙土器片もあった。

#### 出土遺物（図版21、第56図）

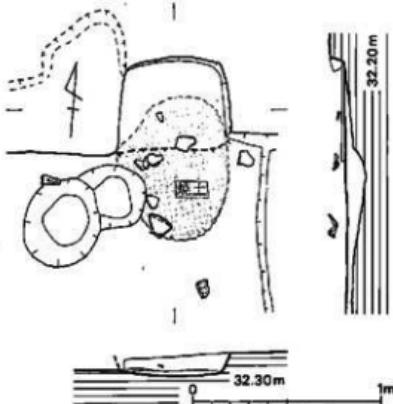
遺存状況が良い分だけ出土量も多く、床面やピットから多くが出土した。1～6は須恵器である。2は $P_5$ より、3は $P_4$ より、5は床面下層より出土した。6は長頸甕で口縁部は欠損する。7・8は須恵器を模倣した土師器である。9・13は床面から、12は $P_1$ より、14・15は甕で床面下層から出土した。16はカマドの支脚とは思われず、カマド整体の一部である可能性をもつ。焼塙土器と接合資料J7が出土したことは前述のとおりで、ほかに鉄鎌、スラッグ、軽石、根痕のある土器片が出土している。

#### 30号住居跡（図版8、第54図）

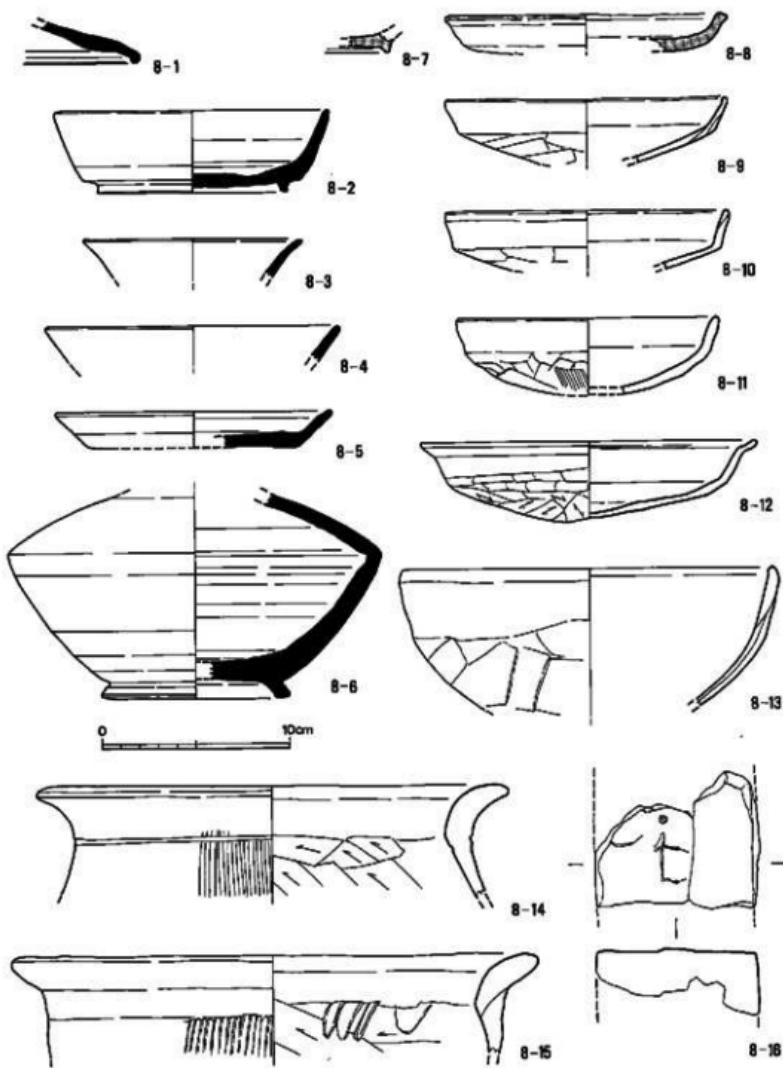
8・9・10号住居跡に大半を切られ、南西コーナー部分のみ存する。規模等は不明である。当初は8・9号住居跡に切られた1軒があるとしていたが、2軒の切合いと思われる所以30B号を設けておく。30号は8号住居跡に切られ10号住居跡を切る小型の住居であり、 $P_1$ は不明である。30B号は8・9・30号住居跡に切られ、10号住居跡を切っている。これは主柱穴も $P_5$ を除いてはっきりしないものの、8号住居跡とあまり変わらぬ規模になろうかと思われる。

#### 出土遺物（図版9）

30号住居跡は大半を他の住居跡に切られているため、出土量も少ない。1は土師器の壊である。2は30B-P<sub>5</sub>の南にあるピットから出土しているので、あるいは30B号に伴うものか。焼塙土器もある。30B号住居跡からは遺物は殆どないが、ただ $P_5$ から同一個体資料S-Bがある。



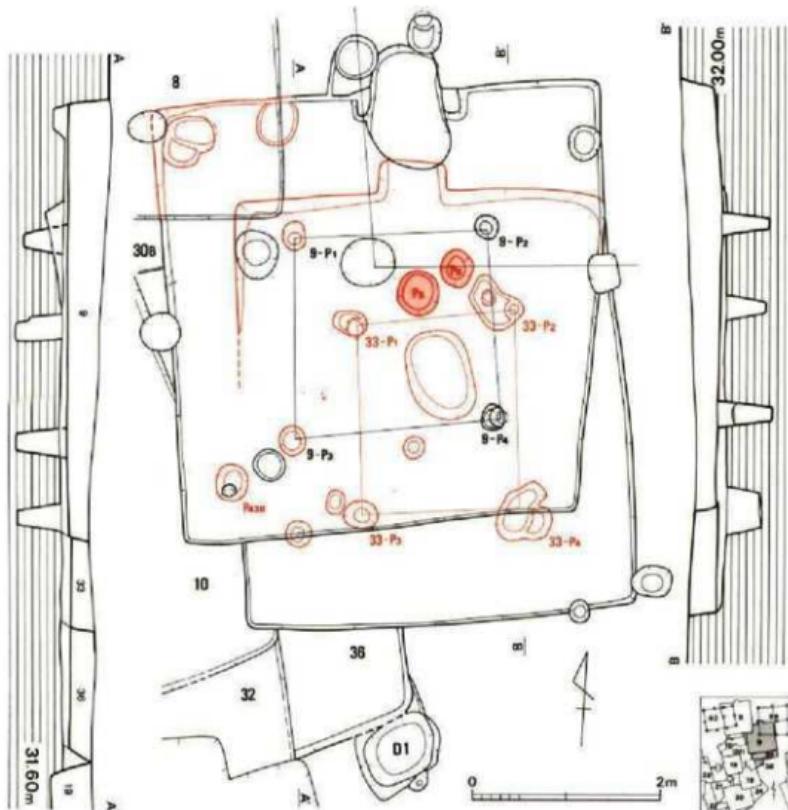
第55図 8号住居跡カマド実測図 (1/30)



第56図 8号住居跡出土土器実測図 (1/3)

**9号住居跡** (国版8、第57図)

G群の中で東側に位置する。10・30B・32・33号住居跡を切り、8号住居跡に北西コーナー部分を切られる。また、8号掘立柱建物にも切られている。埋土は黄褐色土であった。主柱穴配置は住居平面プランに相似するも、やや南に偏っている。床下層にて33号住居跡のプランとピットを検出したが、そのうちP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>には焼土が入っていた。この2個のピットが孰れの住居に伴うか確定しえないが、遺物はこの住居のものとして報告する。またP438には土師器壺が出土している。



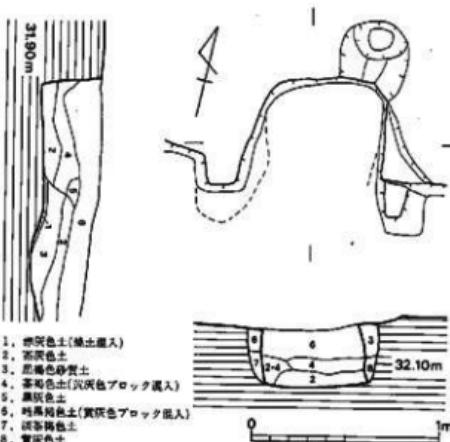
第57図 9・33・36号住居跡実測図 (1/60)

カマド(図版10、第58図) 北辺のやや東寄りにある。IIb型で、左袖は長さ20cm、最大幅30cm、右袖は長さ25cm、最大幅28cmが屋内へのびている。掘り形は長さ55cm、幅75cmで、燃焼部幅は55cmを測る。

#### 出土遺物 (第59図)

わりに多くの量が出土し、大半は埋土中からであった。1~4は須恵器である。2・3・4は床面下層より出土した。4は底部内面に墨が付着し、硯に転用されたと思われる。5~10は土師器である。6~8は床面下層より出土し、9はカマド内から

出土した。スラッグと同一個体資料SMがある。



第58図 9号住居跡カマド実測図 (1/30)

#### 33号住居跡 (図版8、第57図)

10・32・36号住居跡を切り、9号住居跡に2/3程を切られた住居である。9号住居跡の下層に現れた段と主柱穴とにより、本来の規模は復原可能である。これによると、平面は縦長プランを呈し、柱穴配置も同様である。

カマド 北辺の中央にあるIIb型である。掘り形の長さ35cm、幅73cmのみが知られ、袖は確認しえなかつた。

#### 出土遺物 (図版22、第60図)

遺物は埋土中から大半以上が出土した。1は天井部内面に墨が付着し、硯転用の可能性がある。11・13はカマド内より、12はP<sub>4</sub>より出土した土師器の甕である。ほかに焼塙土器とスラッグ2点、同一個体資料S E・S Gがある。

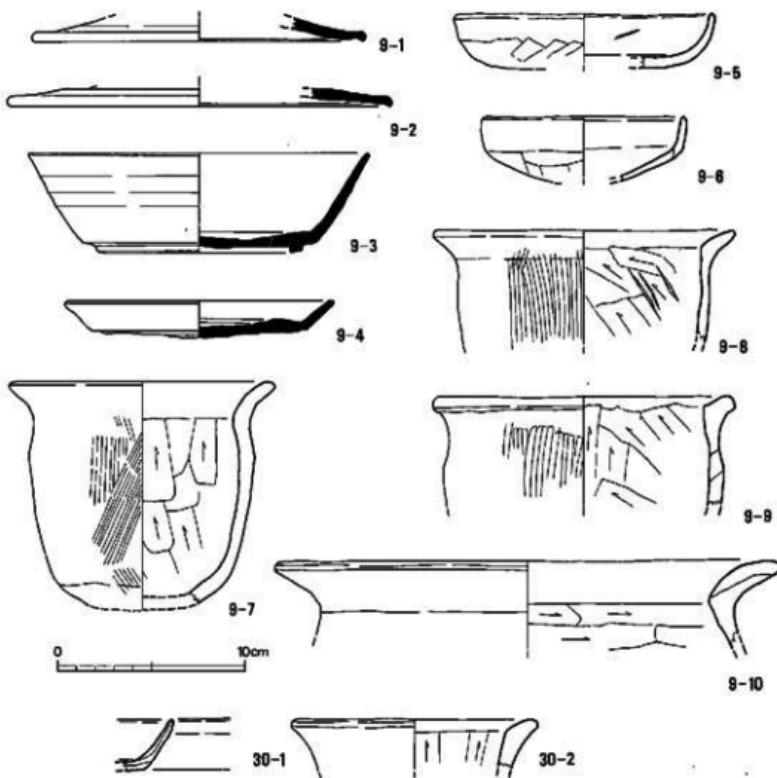
#### 38号住居跡 (第57図)

10・19・32・33号住居跡に切られ、南東コーナー付近のみ遺存する。そのコーナー付近で1

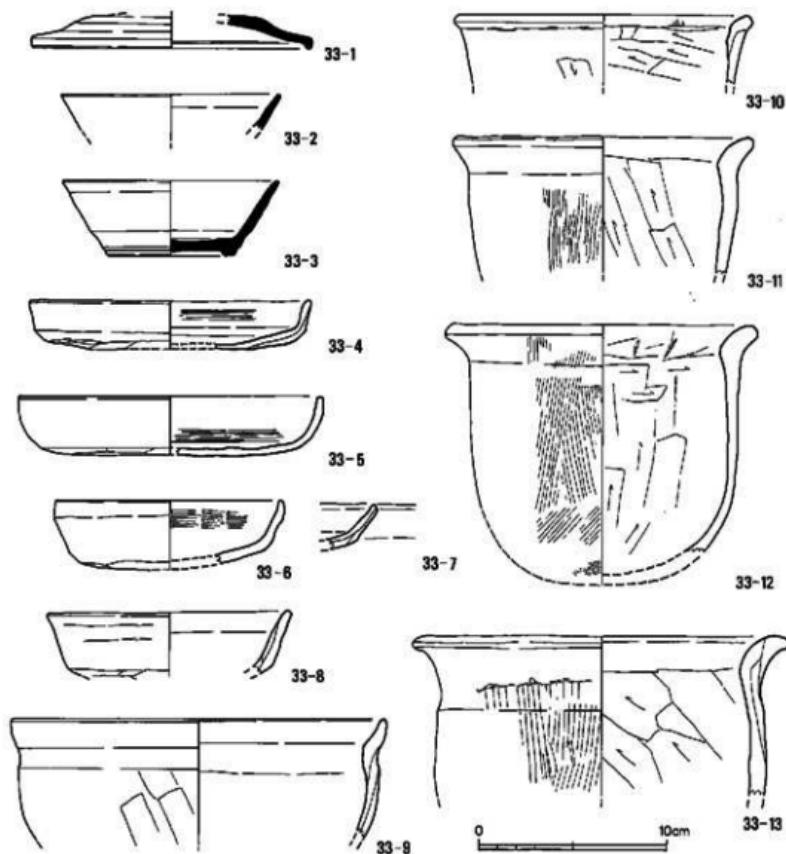
号土壙を切っている。規模・柱穴・カマド等は不明である。

出土遺物（第62図）

出土量は少ない。1は須恵器の蓋である。2～4は土師器の坏で、4は大型品である。焼塙土器と同一個体資料S 1がある。



第59図 9・30号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第60図 33号住居跡出土土器実測図 (1/3)

#### 10号住居跡 (図版8、第61図)

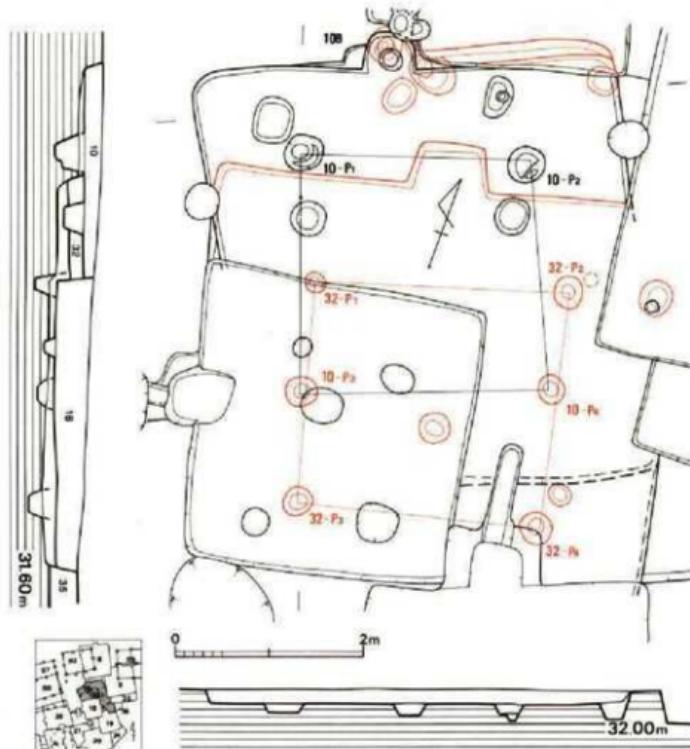
G群の中央にあり、32・36号住居跡を切り、9・18・30・33号住居跡に切られて1/3弱が遺存している。主柱穴配置より規模の復原は可能で、やや縦長のプランになろうか。カマドは北壁に付設されている。調査時には確実には捉えられなかつたけれども、この部分で重複があるよ

うで、2軒が切合っている可能性がある。古い方を10B号としておくが、この主柱穴は特定できない。

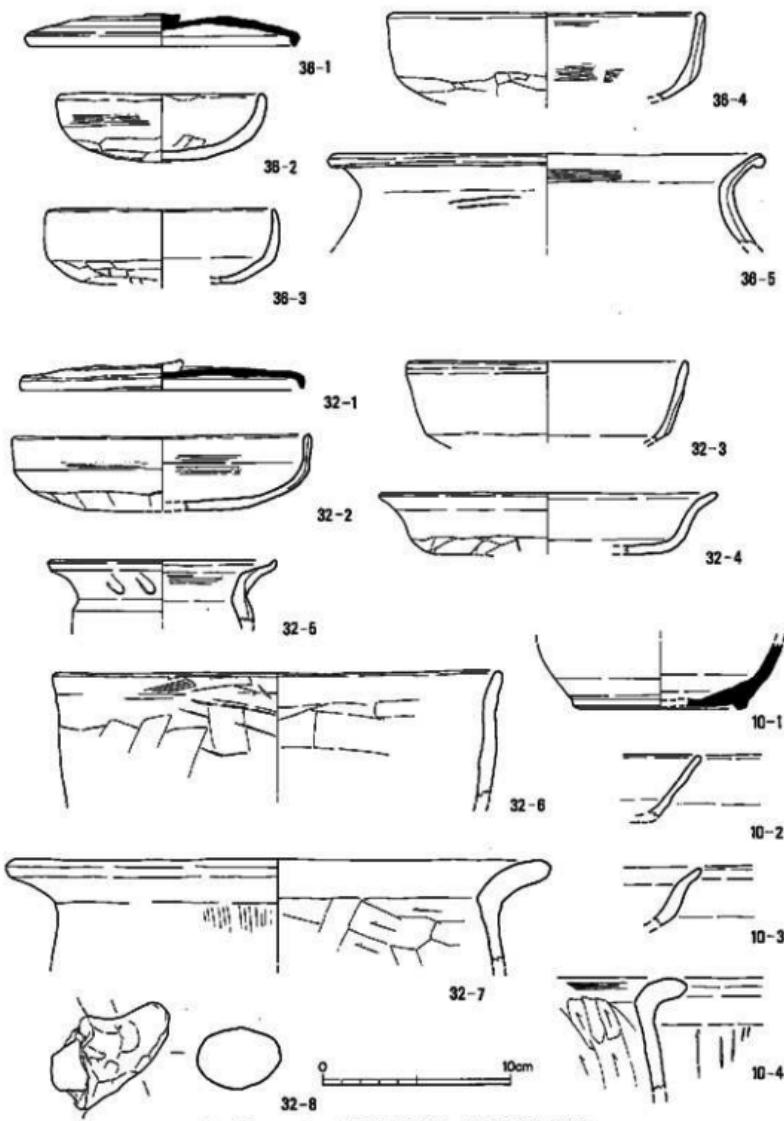
**カマド** 北壁のやや西寄りにある。燃焼部中央に新しいピットが切り込んだりして残りが悪い。IIbタイプで長さ40cm、幅56cm。10B号の方はIIaタイプかと思われるが詳細はわからない。

#### 出土遺物（第62図）

出土量は極めて少ない。1は須恵器壺の底部であろう。焼塙土器と、床面よりU字型鋤先が出土した。



第61図 10・32号住居跡実測図 (1/60)



第62図 10・32・36号住居跡出土土器実測図 (1/3)

### 32号住居跡 (図版8, 第61図)

G群のほぼ中央に位置し、9・10・18・19・33号住居跡に大半を切られ、36号住居跡を切っている。10号住居跡の下層にて北辺にカマドが現れた。主柱穴も下層から現れ、台形状に配されている。一辺4.5m程の方形に近いプランとなろう。

カマド IIbタイプで北辺のほぼ中央にある。掘り形の長さ45cm、幅80cmを測る。10号住居跡の鐵先はこのカマドの直上から出土した。

### 出土遺物 (図版21, 第62図)

総出土量はあまり多くない。1は須恵器蓋である。2~8は土師器である。2は床面下層より、3・5は床面より、4・7はカマド内より出土した。焼塙土器・スラッグ・軽石の出土がある。

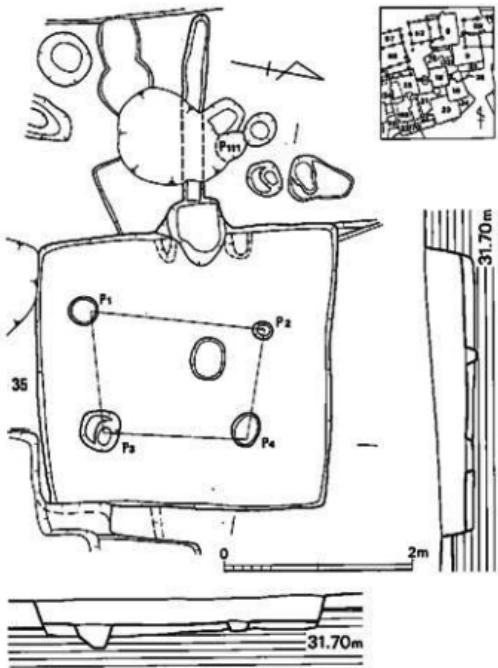
### 18号住居跡

(図版8, 第63図)

10・32・35号住居跡を切り、南西コーナー部分は19号住居跡カマドに僅かであるが切られている。平面はやや横長に近いプランを呈し、この近辺では19号住居跡と並んで小型の住居跡である。床面は茶褐色粘質土に黄灰色ブロックを混入した土で、かなり踏み固められていた。柱穴はやや不整であるも図のようにしておく。

#### カマド (図版10, 第66図)

西壁中央部に設置されているIII型のカマドである。両袖とも長さ30cm程が存したが、左袖の一部は地山を削り出していた。掘り形は長さ33cm、幅60cm、深さ35cmがあり、長さ200cmに及ぶ煙道がつく。煙

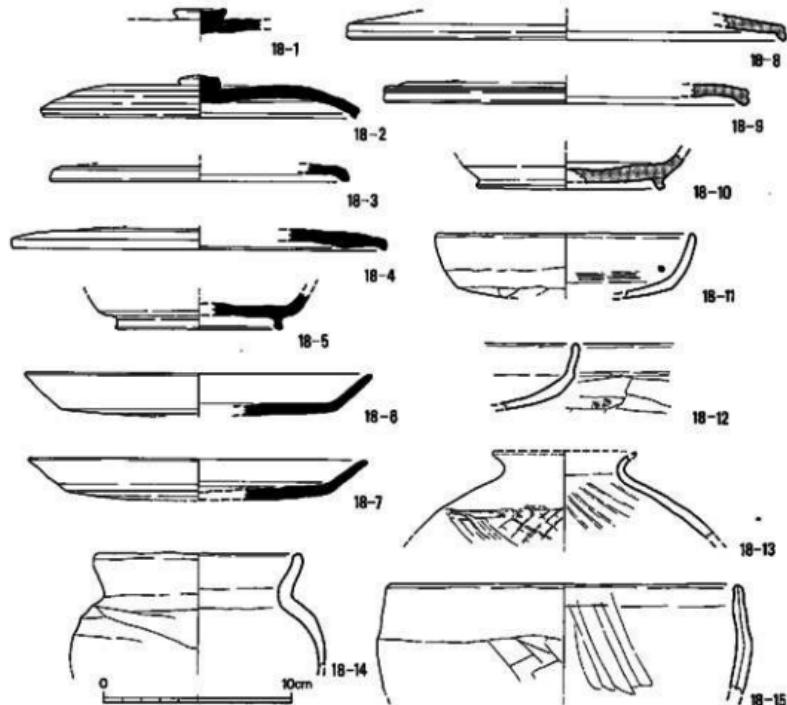


第63図 18号住居跡実測図 (1/60)

道は後時の搅乱によって中程が切られている。火床面はやや座みをもつ。奥壁は高温を受けて赤変していた。

出土遺物 (図版21、第64図)

總出土量は多くないが、須恵器の出土量の割合は高い。1~7は須恵器である。1・4・5は床面より、2はカマド右袖付近より、3は床面下層より出土した。8~10は須恵器を模倣した土師器である。13・14は土師器の壺である。焼塙土器・鉄器と同一個体資料S H・S Iがある。



第64図 18号住居跡出土土器実測図 (1/3)

### 19号住居跡 (図版8、第65図)

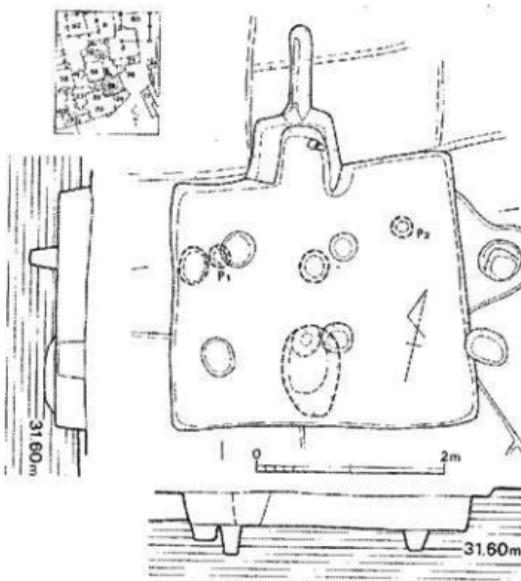
重複の著しい中にあり、18・20・24・32・35・36号住居跡を切っていて、最も新しい。18号住居跡と同様に小ぶりでやや横長気味の住居である。主柱穴は床面下層でみても明確でない。

**カマド(第67図)** 北辺の中央部やや西寄りに設置している。突出型の田タイプのカマドで、奥壁の中央付近から長さ90cm、最大幅25cmの煙道が伸びる。左袖は遺存が悪く、右袖は長さ30cm、幅30cmが残っていた。掘り形の長さ70cm、幅90cm、燃焼部の幅45cmを測る。硬砂岩と思われる円柱状の支脚がかなり東に寄って斜めに立っていた。

#### 出土遺物

##### (図版21、第68図)

出土量はあまり多くない。1～4は須恵器である。2・3は床面より、4はカマド内より出土した。2は外面にヘラ記号を施している。5・7・8・10は床面より、6は床面下層より出土した。焼塙土器はこの遺跡の住居の中では最も多く出土した。軽石と同一個体資料S Hが床面から出土している。



第65図 19号住居跡実測図 (1/60)

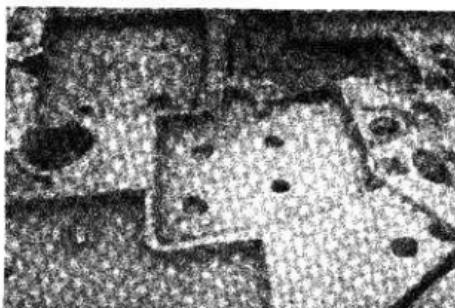
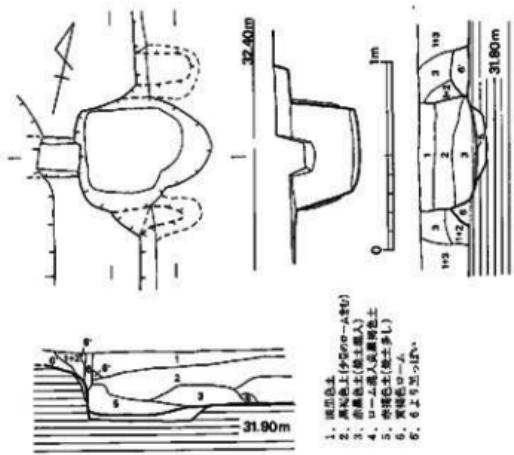
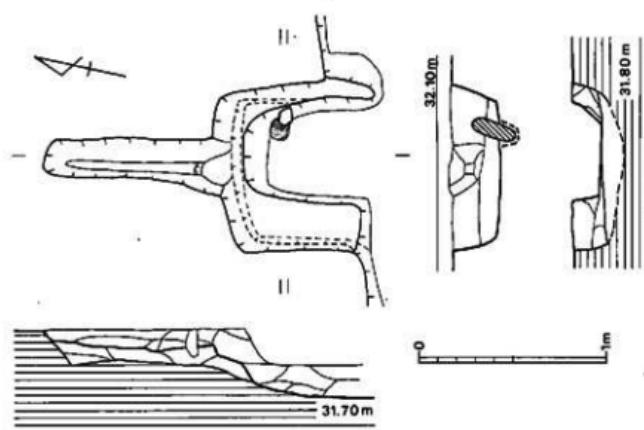


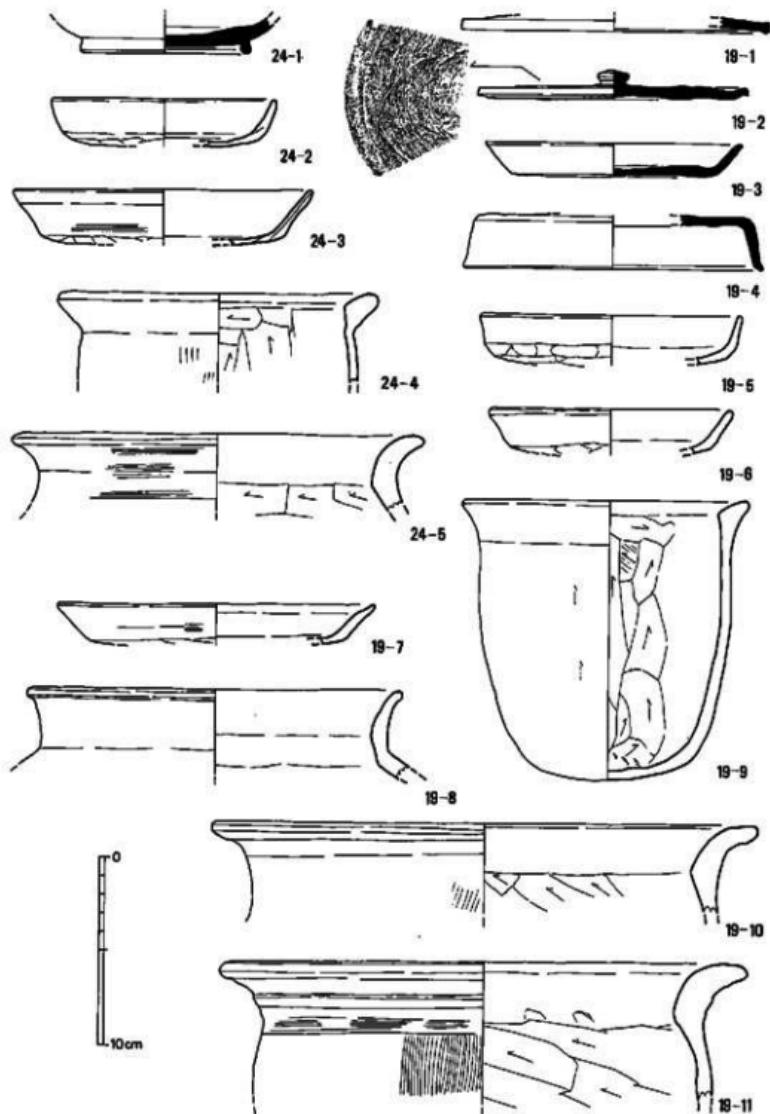
Fig.4 19号住居跡

第66図 18号住居跡カマド実測図 (1/30)



第67図 19号住居跡カマド実測図 (1/30)





第68図 19・24号住居跡出土土器実測図 (1/3)

## 20号住居跡 (図版8, 第70図)

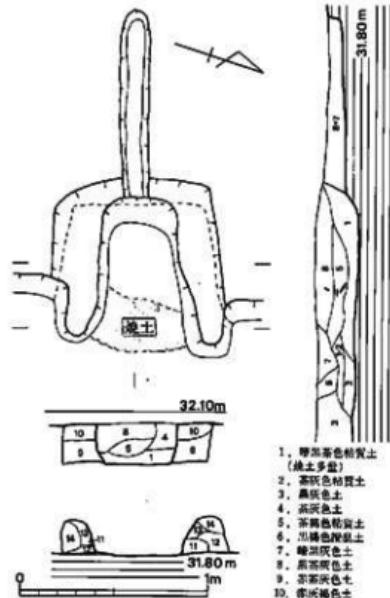
F・G群の重複の著しい中にある。21・22・24・35・68号住居跡を切り、19号住居跡に切られている。縦長のC型になり、主柱穴も同様に配されている。埋土は暗黒茶色砂質土であった。床面は踏み固められていた。

**カマド (第69図)** 西辺の略中央部に設置されたIII型のカマドである。掘り形の長さ65cm, 幅90cm, 燃焼部幅37cm, 奥行70cmを測る。奥壁の中央部から長さ100cm, 幅15cmの細長い煙道が延びる。火床面から煙道にかけては緩やかな勾配で昇り、煙道は若干水平である。

### 出土遺物 (図版21, 第71・72図)

総出土量は住居跡群中で多い方である。1～7は須恵器蓋である。1の外面には板状压痕がある。3・5～7は床面下層より出土し、4・5の天井部内面は墨の付着がみられ、硯として使用された可能性が高い。8～11は須恵器坏で、8・9は床面から出土した。12は須恵器を模倣した土師器の高坏である。13は床面より、14は床面下層より出土した。14は胴部内面に標痕がある。

16～19は土師器の裏である。18・19は床面より一括で出土した。焼塙土器、鐵鎌、紡錘車、軽石と同一個体資料S Bが出土している。紡錘車はカマド上面の出土である。



第69図 20号住居跡カマド実測図  
(1/30)

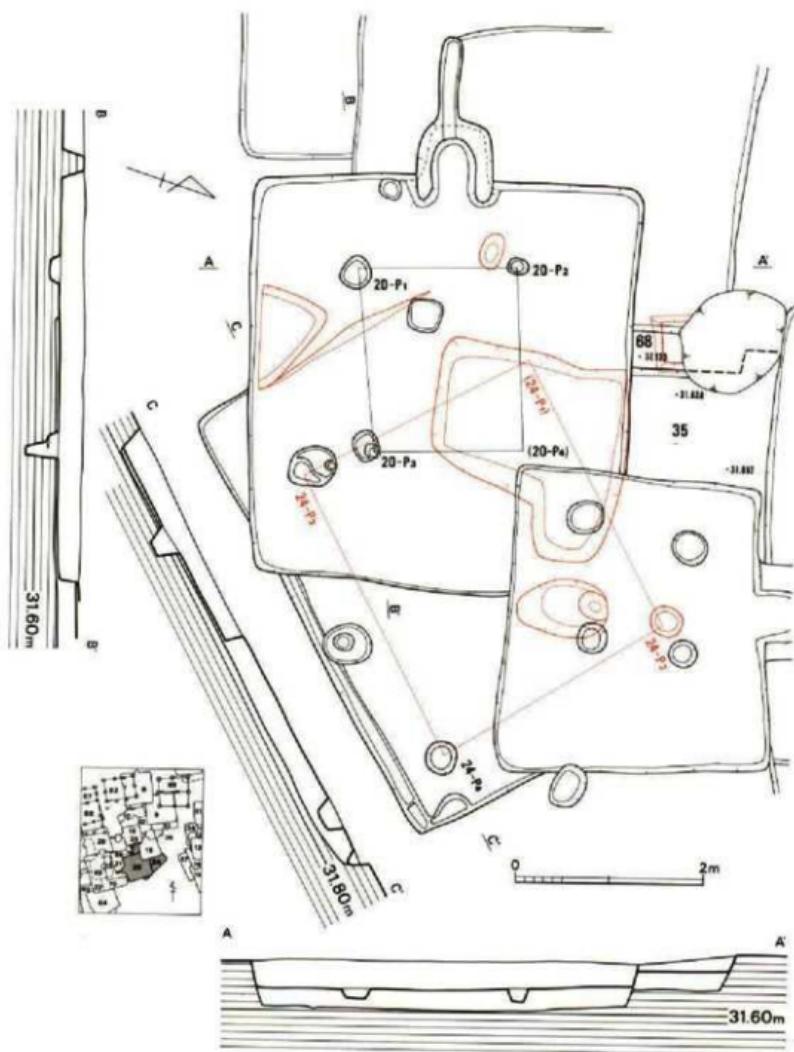
## 24号住居跡 (図版8, 第70図)

G群の最南にあり、19・20号住居跡に切られている。恐らく35・68号住居跡にも切られている。暗黒茶色及び暗黒褐色を埋土としている。カマドがどちらにとりつくのか判らないが、孰れにしても長方形プランとなろう。いまはカマドが北側につくとしておきたい。P<sub>1</sub>を欠くも主柱穴は壁に近い所に配される。南壁の一部にやや幅広の壁小溝がある。

### 出土遺物 (第68図)

他の住居跡に切られ遺存状況が悪いため、出土量は僅かである。1は須恵器の坏で床面下層より出土した。生焼けである。2～5

- 11. 暗黒茶色砂質土  
(地土色)
- 12. 暗黒色砂質土
- 13. 暗灰茶色土
- 14. 暗灰茶色土
- 15. 暗茶色砂質土
- 16. 出雲色砂質土
- 17. 焼垣灰茶色土
- 18. 暗茶色砂質土
- 19. 暗茶色砂質土
- 20. 暗茶色砂質土  
(生土色)

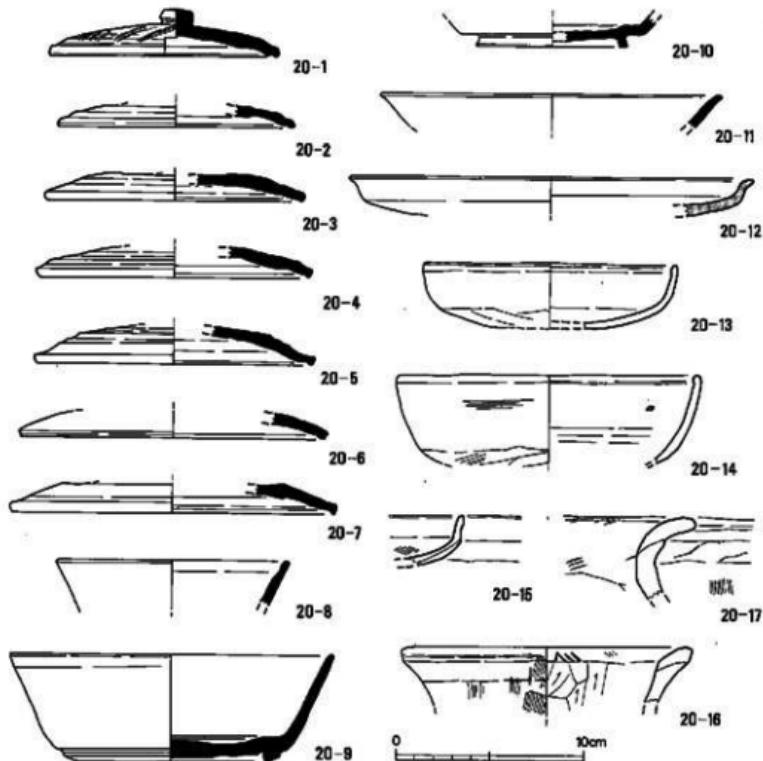


第70図 20・24・35・68号住居跡実測図 (1/60)

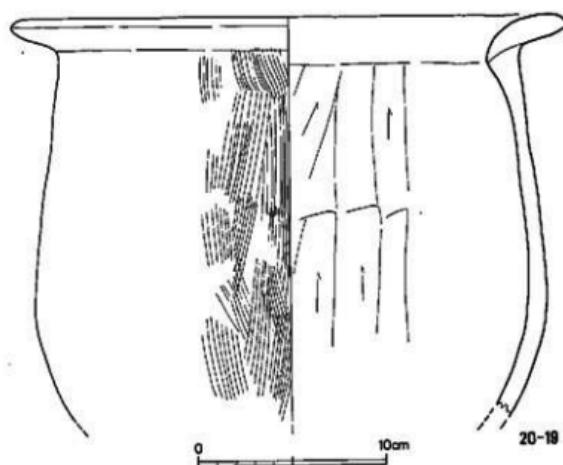
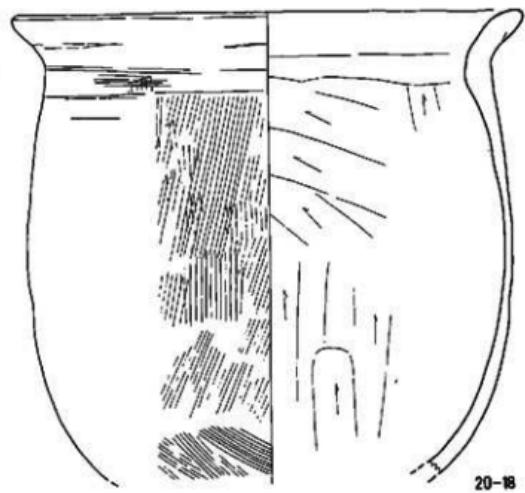
は土師器で2・5は床面下層より、3・4は床面から出土した。焼塙土器と同一個体資料S Iがある。

### 35号住居跡（第70図）

G群中にある、18・19・20号住居跡と搅乱壙に切られ、68号住居跡を切る。一边の一部のみの遺存で詳細は不明とせざるをえない。ただ、搅乱壙の壁面に焼土がみられたので、カマドは西壁にとりつくものと思われる。



第71図 20号住居跡出土土器尖測図① (1/3)



第72図 20号住居跡出土土器実測図② (1/3)

### 出土遺物 (第73図)

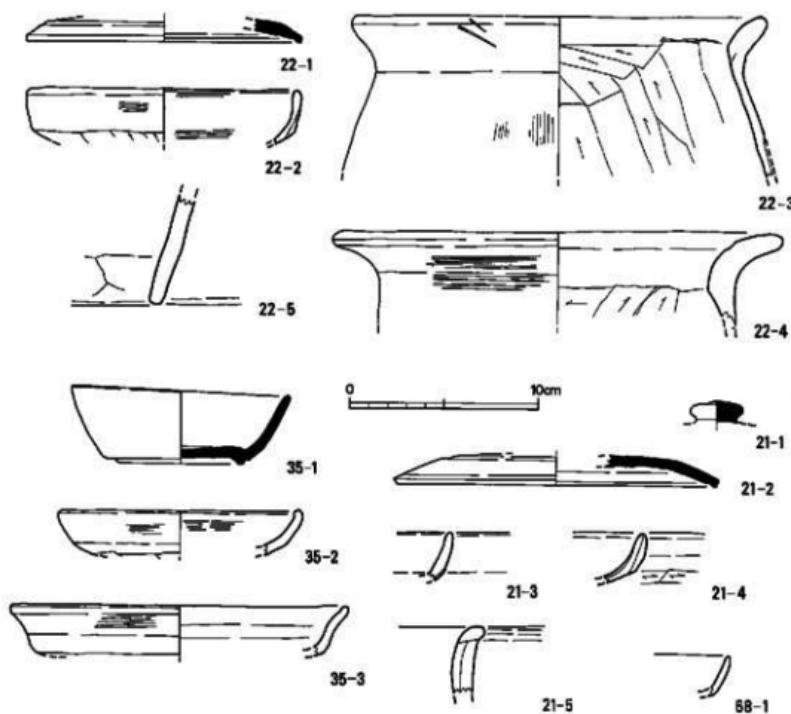
出土量は少ない。1は須恵器の壺の完形品である。3は土師器の皿である。布目痕を含む焼土器がある。

### 68号住居跡 (第70図)

F・G群の境界にあり、18・19・20・21・35号住居跡と攪乱層に切られ、知られるのは床面の一部のみである。

### 出土遺物 (第73図)

遺物は床面下層より2個体分出土したのみである。1は精製の土師器壺である。



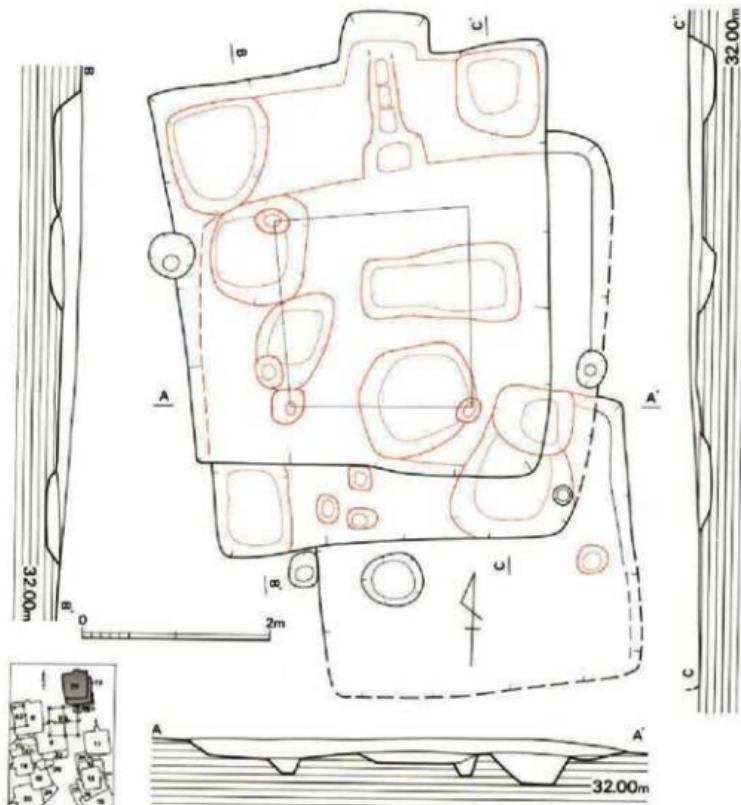
第73図 21・22・35・68号住居跡出土土器実測図 (1/3)

71号住居跡 (第74図)

H群に位置し、73・74号住居跡を切って営まれている。北辺にはカマドを付設しているが、搅乱によって袖・火床面は破壊されていた。主柱穴はかなり南に偏して配置されている。P<sub>2</sub>は73号住居跡の掘り込みが深く残存していない。北西・北東各コーナー部に土壤を検出した。

カマド IIaタイプにならうか。掘り形の長さ50cm、幅95cmを測る。

出土遺物 (第75図)



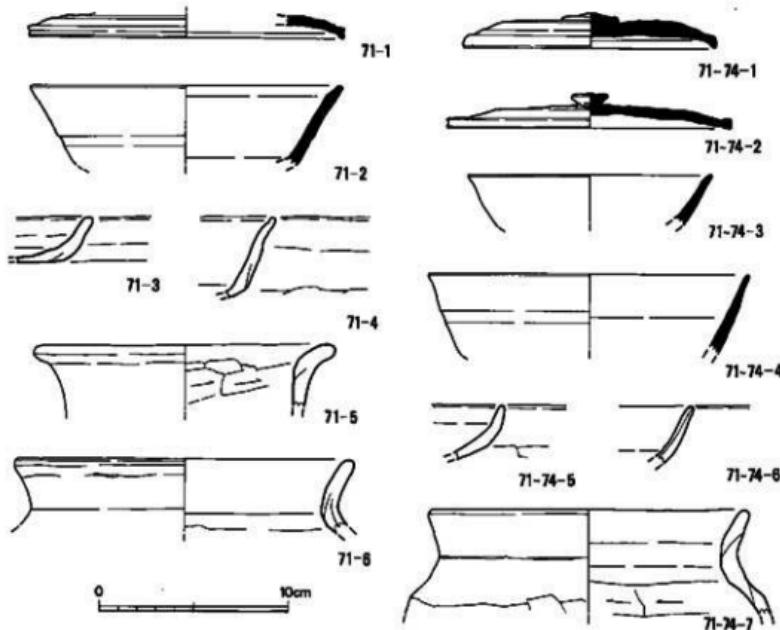
第74図 71・73・74号住居跡実測図 (1/60)

遺物はカマド内・床面下層に若干があるが、大部分は埋土中より出土した。1・2は須恵器である。6は土師器甕の口縁部である。他に焼塙土器と瓦片、鉄錐、スラッグ、それに同一個体資料SG・SJがある。なお、一部にはこの住居に属していたであろう土器が73・74号住居跡下層の土器にも混入している可能性がある。

### 73号住居跡（第74図）

H群にある。74号住居跡を切り、71号住居跡に切られている。搅乱によって貼床面、主柱穴等は確認できなかった。北西・南西・東の各コーナーに土壇状の掘り込みを検出した。なお、出土遺物は下層として74号住居跡とも一緒に取り上げたので後述する。

カマド III型になるものであるが、袖の有無はわからない。長さ35cm、幅67cmの掘り形に現存で90cmの長さの煙道がつく。



第75図 71, 71-73, 74号住居跡出土土器実測図 (1/3)

#### 74号住居跡 (第74図)

H群にあり、71・73号住居跡に切られている。周辺の擾乱のため、およその輪郭がわかる程度しか残存せず、主柱穴も不明である。

#### 71・73・74号住居跡出土遺物 (第75図)

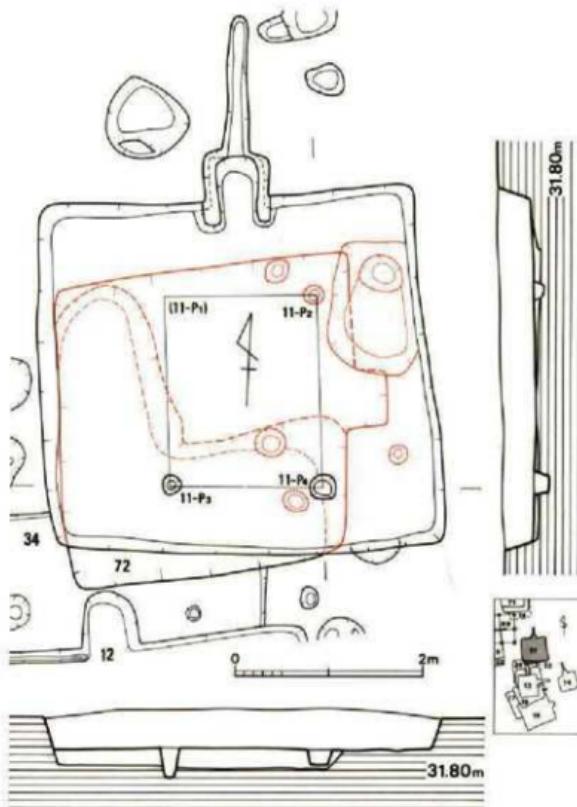
73・74号住居跡は前述したように、擾乱等によってプランが明確には確認できなかったため、遺物の大半は71号住居跡の下層も含めて一括で取り上げを行った。これらが孰れかの住居に伴っていたであろうことは間違いない。1～4は須恵器である。  
5・6は71・73号住居跡のカマド付近より出土した。73号住居跡より焼塙土器が出土している。

#### 11号住居跡

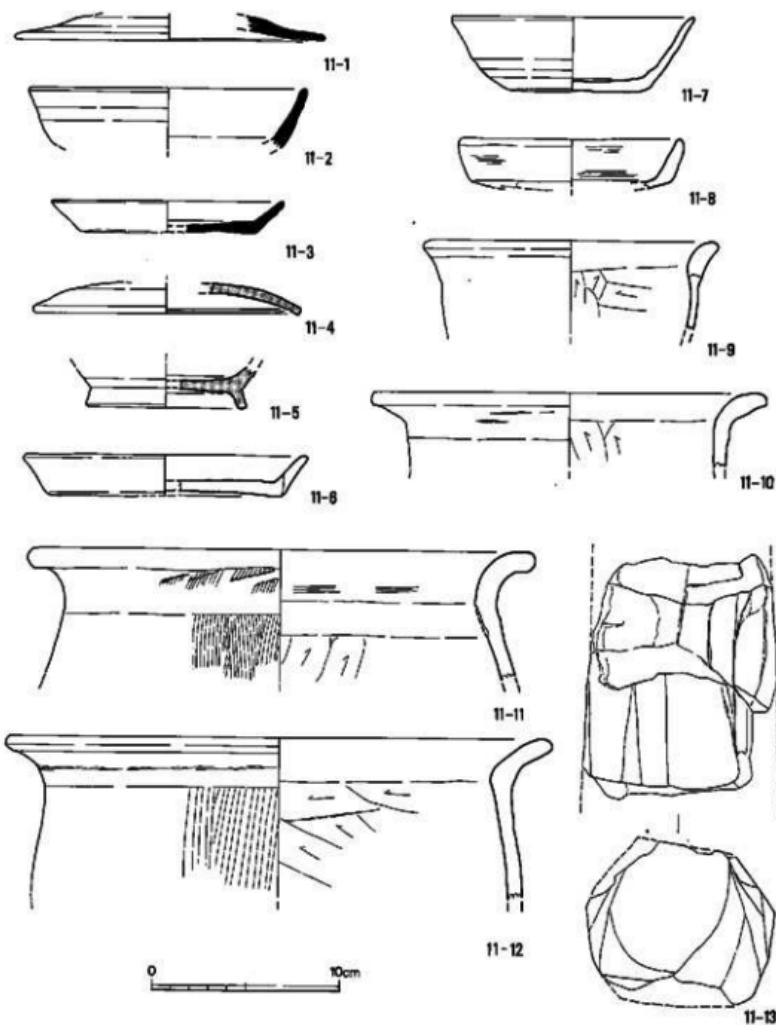
(図版12、第76図)

I群中で最も北側に位置し、34・72号住居跡を切る、ほぼ正方形のプランをなす。主柱穴はP<sub>1</sub>が欠落するも長方形に配されている。北東壁際には下層で土壤を検出した。

カマド III型で北辺中央につくられている。長さ55cm、幅70cmの掘り形に長さ150cmの煙道がとりつく。両袖ともに20cm



第76図 11・72号住居跡実測図 (1/60)



第77図 11号住居跡出土土器実測図 (1/3)

程が室内へ張り出していた。燃焼部の幅は約30cm。

#### 出土遺物 (図版22、第77図)

遺物は大半が埋土中より出土した。1～3は須恵器である。4・5は須恵器を模倣した土師器である。8は床面から出土した。9～12は甕で、11はカマド内より出土した。13は埋土中より出土した。焼塙土器・瓦片・鐵器、そして接合資料J5と同一個体資料SFがある。

#### 72号住居跡 (第76図)

I群の中で北側に位置し、11号住居跡に切られ、34号住居跡を切る。小型の方形プランで、床面下層はL字状を呈する掘り込みが存在する。主柱穴は検出できなかった。土製の支脚が11号住居跡床面上で出土したが、これは72号住居跡カマド支脚に使用されていた可能性が強い。カマドは西辺に焼土が見られたのでIIbタイプのものが存したと思われる。遺物は土師器甕片1点を見るのみである。

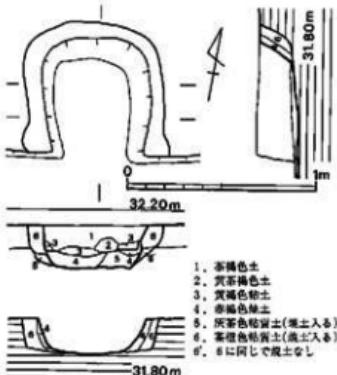
#### 12号住居跡 (図版11、第79図)

I群の中央部に位置し、16・34・38号住居跡を切り、13号住居跡に切られている。横長プラン (B型) の住居跡である。主柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>しか判然としないが、平面プランと同様の配置になろう。北壁と西壁の一部に細い壁小溝が巡る。

カマド (第78図)。北壁中央部のやや西寄りに付設されている。袖は検出できなかった。突出部は長さ70cm、幅70cmの掘り形で、壁面に茶橙色  
粘質土を貼りつけて構築する。燃焼部の幅は40cm、奥行55cmを測る。

#### 出土遺物 (第80図)

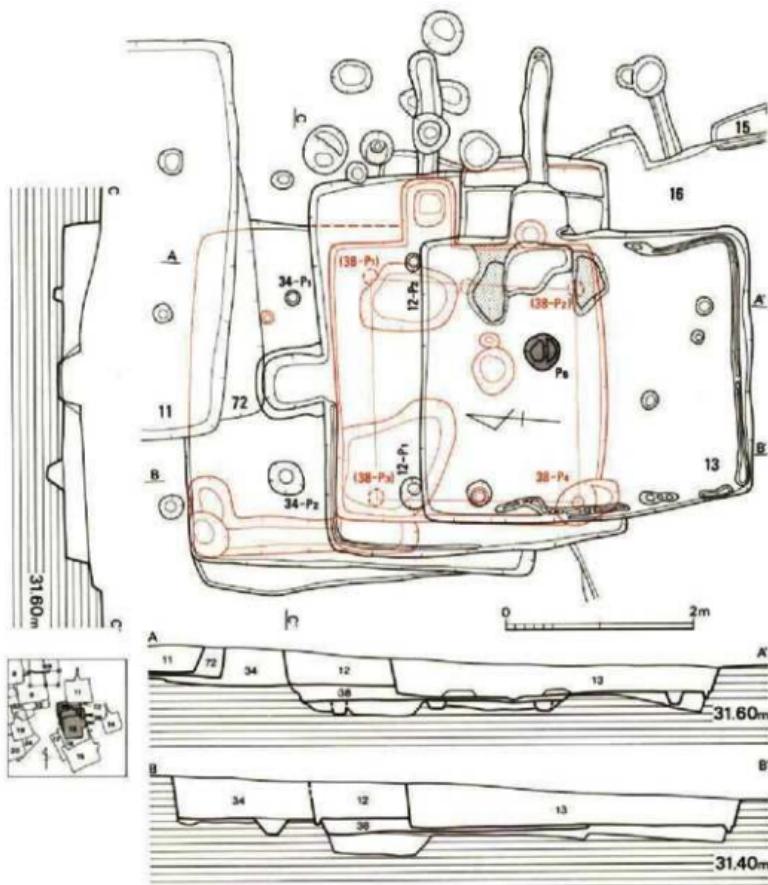
総出土量の1/3は床面より出土した。1～4は須恵器。2は天井部内面に墨の付着がみられ、現に転用したものと思われる。4は無頭壺の肩部である。2・4・6・8・9は床面から出土した。焼塙土器と接合資料J5・J11 (墨書き土器) がある。



第78図 12号住居跡カマド実測図 (1/30)

13号住居跡 (図版11、第79図)

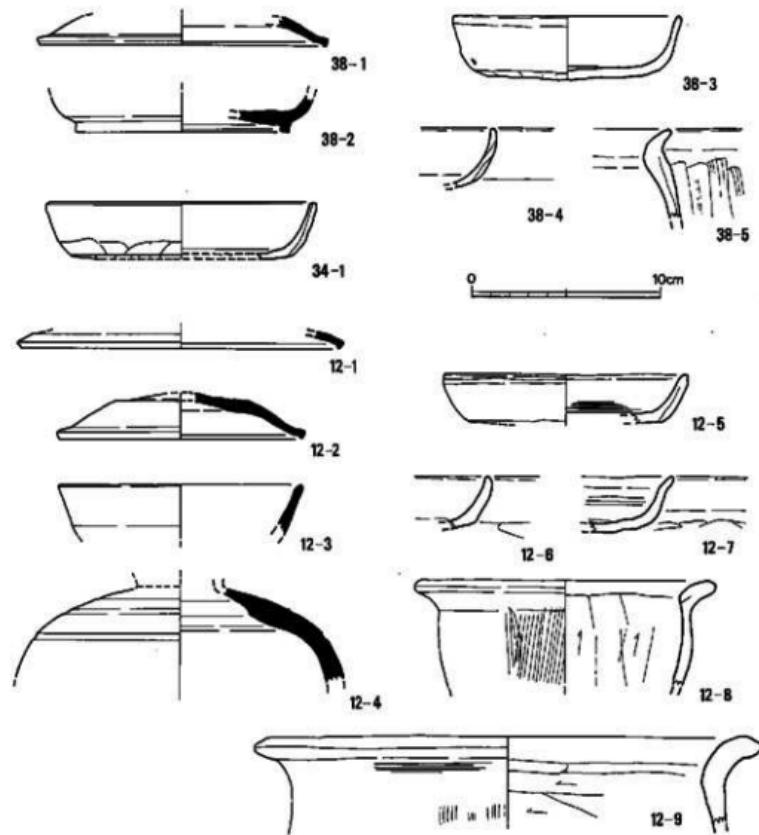
I群のはば中央部に位置する。12・16・38号住居跡を切り、近辺で最も新しい住居跡である。平面は横長プラン (B型) を呈し、小型の住居である。床面はよく固まっていた。壁小溝は南辺を要にコの字状に3辺に巡るが、西壁下においては小ピットの連結状となっている。主柱穴



第79図 12・13・34・38号住居跡実測図 (1/60)

は床面下層をみても明確でないが、各コーナーに近い位置に存した可能性が強い。

カマド(図版13、第81図) 東壁の北寄りにあり、大きな掘り形を持つⅢタイプである。掘り形は長さ35~55cm、幅155cmの長方形で、その中にカマド燃焼部をおくが、さらに同じ幅で長さ30cm程のテラス部が煙道の方に設けられている。従って、見た目には70~85×155cmにもなる長方形の掘り形があるよううつる。燃焼部は幅60cm、奥行50cmで、煙道は140cmの長さをもつ。焚口前面には深さ10cm弱の深い窪みがあり、その両側の床面上に灰黄色粘土が低平ながらも袖



第80図 12・34・38号住居跡出土土器実測図 (1/3)

の如くに遺存していた。焼土も混ざっているのでカマド本体の崩れ去ったものであろう。また、それよりもさらに前面に35×43cmの小ピット（P 5）があり、この中の下の方には焼土が入っていた。なお、このカマドを通る主軸は横軸（長方形の長軸）の1/3強の所にある。

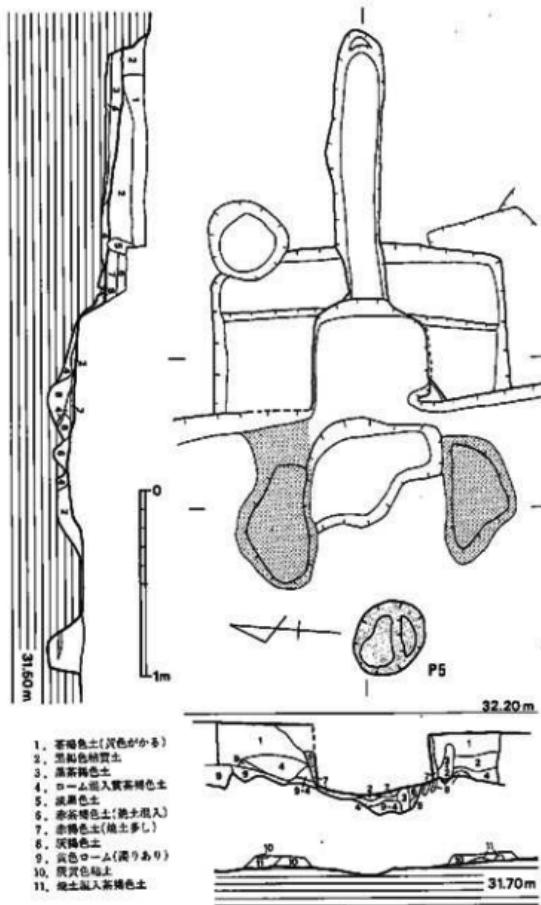
#### 出土遺物

（図版22、第82図）

総出土量の1/2はカマド付近で出土した。

1～7は須恵器である。  
1は床面P 5より出土した。10は塙であろう。

焼塙土器・接合資料  
5・J 11があり、粗痕のついた土器片もある。



第81図 13号住居跡カマド実測図 (1/30)

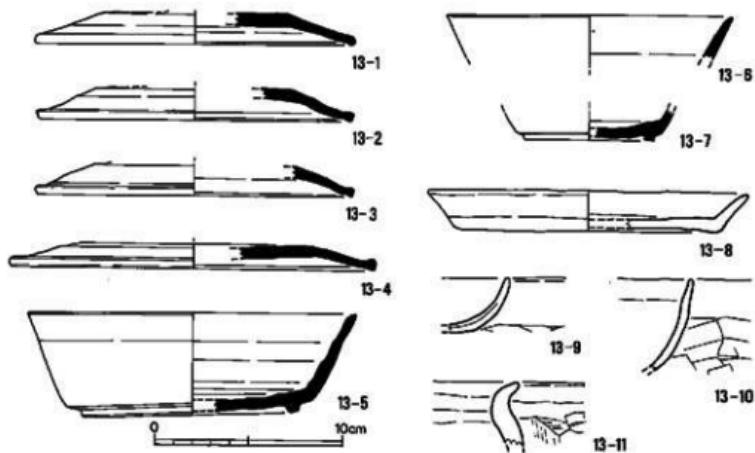
#### 34号住居跡

（図版11、第79図）

I群にあり、11・12・72号住居跡に切られ、1/2程しか遺存しない。西壁が2段になっていてことから、床面が高い位置にある（浅い）。住居がこの34号と重複して切られて存した可能性があるけれども、柱穴もないゆえ不明とせざるを得ない。カマドの位置も確定しえない。西壁下の床面下層には溝状の掘り込みを検出した。

#### 出土遺物 (第80図)

出土量は極めて少な



第82図 13号住居跡出土土器実測図 (1/3)

い。1は土師器の环である。接合資料J 11が埋土から出土している。

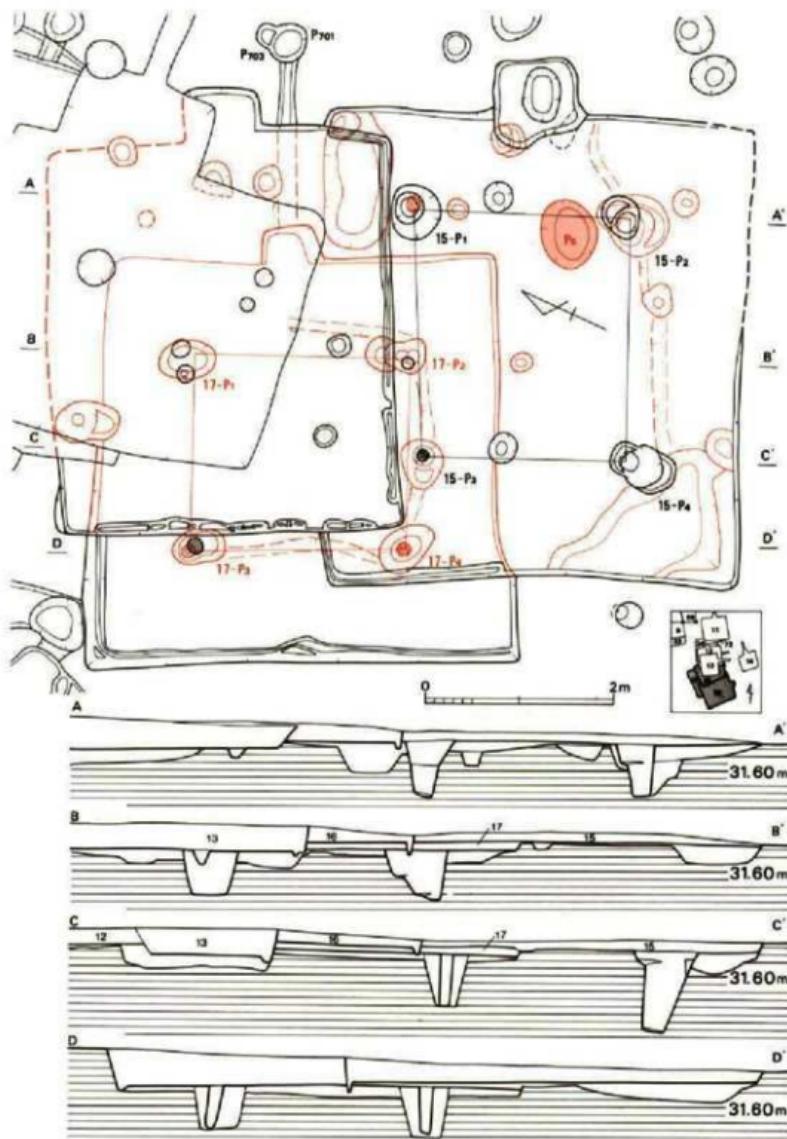
### 38号住居跡 (図版11, 第79図)

12・13号住居跡に切られて、全輪郭がこれら下層に隠れており、僅かに長い煙道のみが知れていた。12号住居跡のプランの中にすっぽり納まっている様相である。ほぼ正方形になるが極めて小型である。主柱穴はP<sub>4</sub>を除いて、孰れも床下層で浅いくぼみ状に検出したものをとりあげる。恐らく四隅に近く配されるこれらを主柱穴として誤りなかろう。下層で、カマド前面とP<sub>1</sub>付近コーナーに土壙がある。

**カマド** 東辺の北寄りにあって、13号住居跡のカマドとほぼ平行する。III型で、長さ55cm、幅65cmの掘り形に長さ135cmの煙道がつく。袖はなかった。燃焼部には深さ10cm程のピットがある。

### 出土遺物 (図版22, 第80図)

出土量は極めて少ない。1は床面より、2は床面下層のカマド前面土壙内より出土した。3・4は床面より、5は床面下層の西側土壙内より出土した。



第83図 15・16・17号住居跡実測図 (1/60)

### 15号住居跡 (図版11, 第83図)

I群の中で南側に位置する。16号住居跡に切られ、17号住居跡を切っている。縦長のC型のプランを示し、主柱穴配置も相似形になる。北西コーナー部分には壁小溝を確認した。またP<sub>2</sub>の北側にあるP<sub>3</sub>には灰白色粘土と若干の焼土が入っていた。P<sub>3</sub>の柱痕は直径14cmの円形を呈していた。

カマド (図版13, 第84図) 東壁中央部に設置されたIIbのものである。掘り形は長さ58cm、幅85cmを測る。本体を構築する粘土は灰色を呈していて他との区別が容易でなかった。両袖は、前面の断面ではそれらしい高まりを確認したもの、両袖間が焚口としても狭すぎるくらいがある。

### 出土遺物 (図版22, 第85図)

遺物は若干が床面及びカマド付近より出土し、大部分は埋土中からである。5はP<sub>3</sub>より出土した土器器の坏である。6は床面より、7・11はカマド内より、9はP<sub>3</sub>より出土した。焼塙土器と同一個体資料のSG・SIがある。

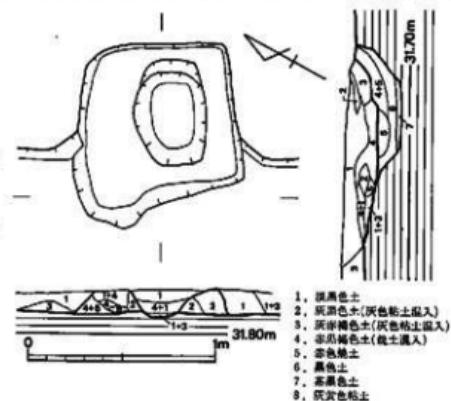
### 16号住居跡 (図版11, 第83図)

I群にあり、12・13号住居跡に切られ、15・17号住居跡を切っている。平面形は縦長のC型プランを呈し、残存する2辺には壁小溝が巡る。特に西辺のそれは小ピットを連結している。主柱穴は床面下層でみても明確でなかった。

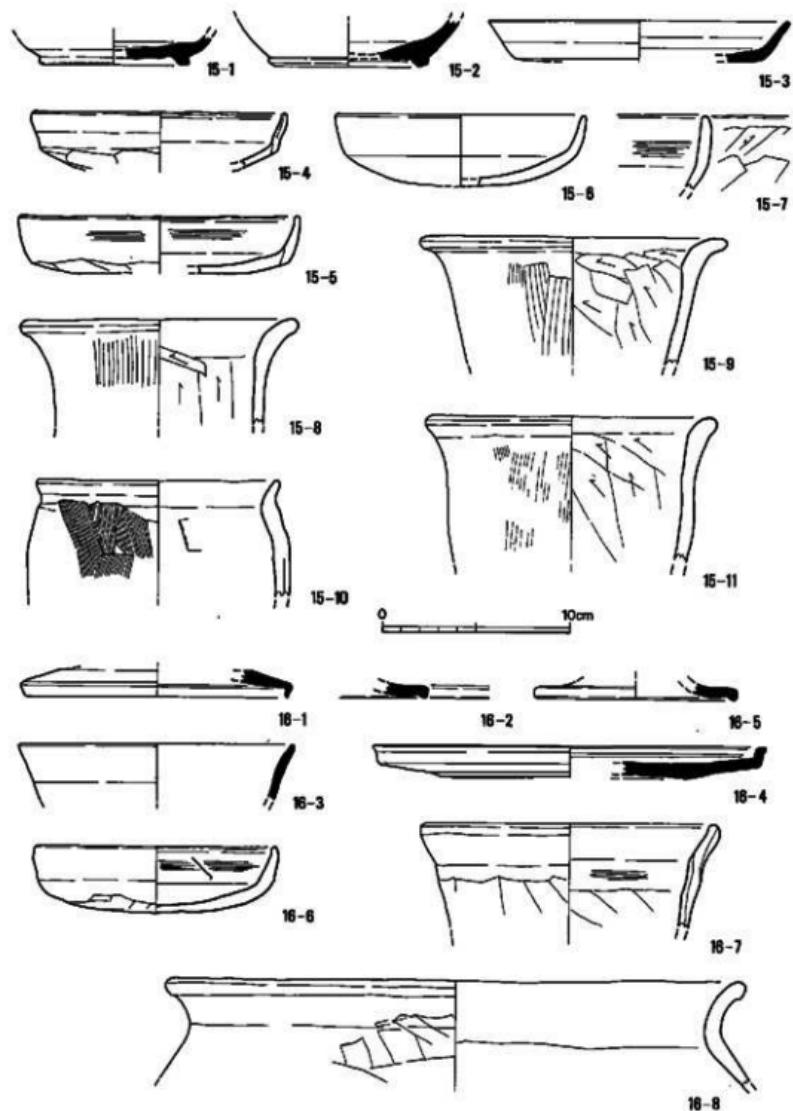
カマド 東辺の中央部にIIbタイプがつくられている。掘り形の長さ40cm、幅80cmで、袖はなかったがその前面には灰青色粘土の広がりがあった。

### 出土遺物 (第85図)

出土量は少ない。1～5は須恵器である。4は高坏の坏身部分である。内面は硯として使用したため墨が付着していた。5は高坏の脚部である。8は大型甕の口縁部である。3以外は全て床面出土である。焼塙土器のほかに铁斧・铁鎌・土鍤が床面から出土している。



第84図 15号住居跡カマド実測図 (1/30)

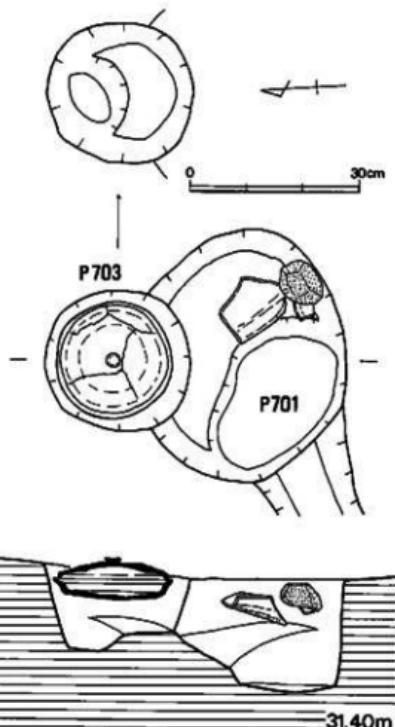


第85図 15・16号住居跡出土土器実測図 (1/3)

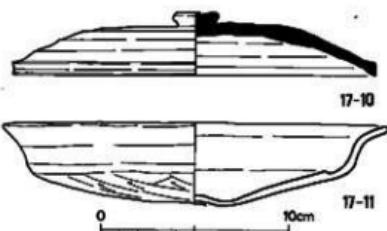
17号住居跡 (図版11・13、第83図)

I群中最も西側に位置し、12・13・15・16号住居跡に切られ1/4程しか残っていないかったが、これらの住居跡の下層に現われた残余の部分を見ると、ほぼ方形に近いプランとしてよい。西辺と北辺には細い壁小溝を検出した。この西辺の壁小溝は、カマドの中心を通るこの住居の主軸の所で屈折部分がある。壁下の三角形状テラス部分は床面の高さと殆ど変わらず、段にはなっていないが、丁度カマド対面ということで、何らかの意味があるのかかもしれない。 $P_3$ ・ $P_4$ は柱痕を検出したが、 $P_4$ のそれは12~14cm前後の槽円形気味の平面形を呈する。 $P_3$ の柱痕断面は先端が若干尖っている。床下層の掘り込みは各柱穴の外側に全周していたのであろう。

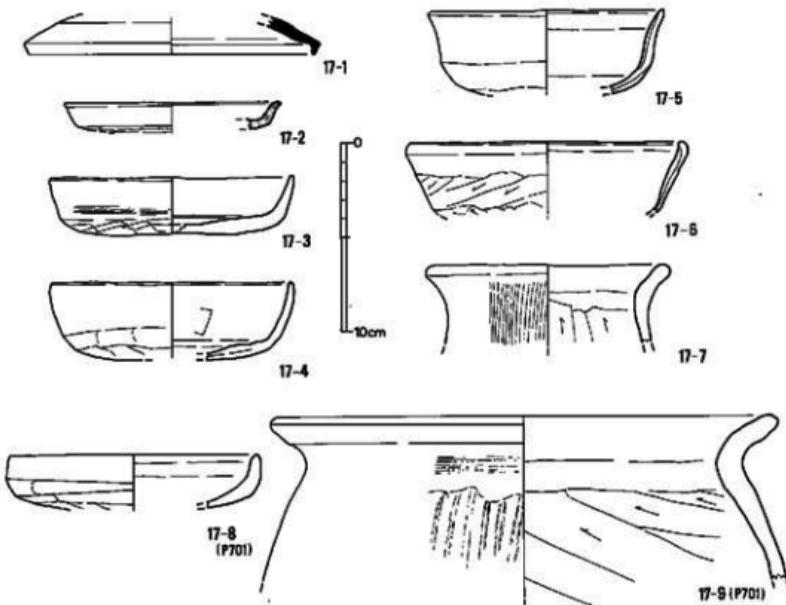
カマド 東壁のはば中央につくられており、13・16号住居跡の下層で痕跡的に検出した。III型で掘り形の長さ40cm、幅65cmが残っている。これから煙道がのびてゆき、175cmの所でピット ( $P701$ ) に至る。 $P701$ には土師器の壊と壺の破片が、それに石が転がっていた。また、それを切る $P703$ には土師器皿と須恵器蓋がセットになって置かれていた。このような、煙道部先端及びカマド奥壁から外側へ延長した所につくられたピットは44・51・61号住居跡等にも見られる。これらは壁穴住居を構築するときに“地鎮祭”的な役目を果たすものと考えられる。



第86図 P701・703実測図 (1/10)



第87図 17号住居跡出土土器実測図① < P703 > (1/3)



第88図 17号住居跡出土土器実測図② (1/3)

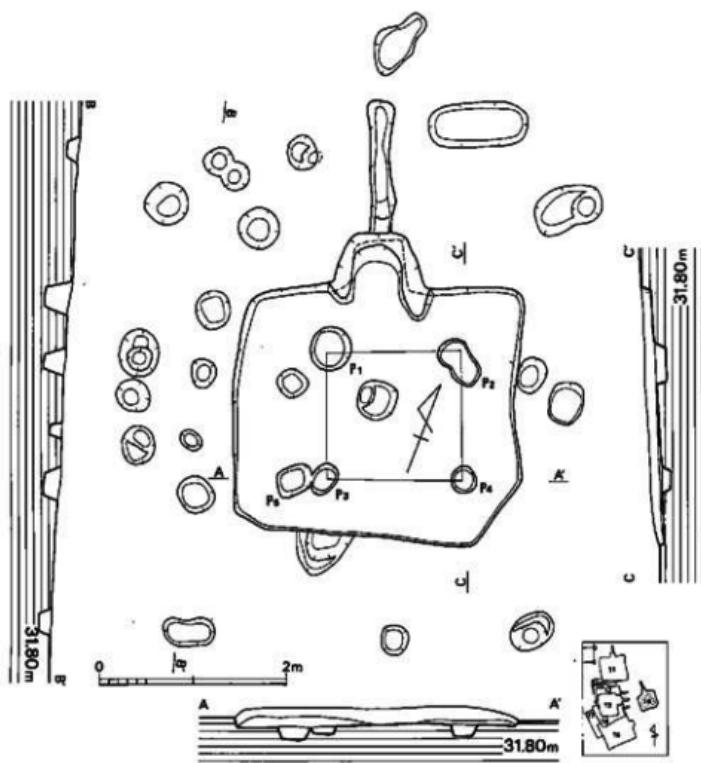
**出土遺物** (図版22、第87・88図)

出土量は少ないが、床面からかなり出土している。2は高環で須恵器を模倣した土師器である。3～6は精製の土師器底である。10・11はセットでP703より出土した。10は須恵器の蓋である。焼塙土器と接合資料J5、同一個体資料S-Eがある。親痕をもつ土器片もあった。

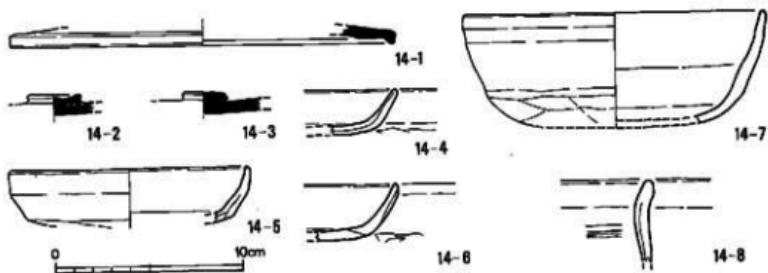
**14号住居跡** (図版12、第89図)

I群中最も東側に位置し、切合の関係がなく単独で存在する。この近辺では38号住居跡と同じく小ぶりの住居である。横長のプランを呈するが、P<sub>4</sub>の付近は外側へ張り出している。主柱穴はやや北東に偏して存在する。床面自体が茶褐色の粘質土であり、よく踏み固められていた。壁面は遺存状況が悪く5～10cm程しか残っていない。

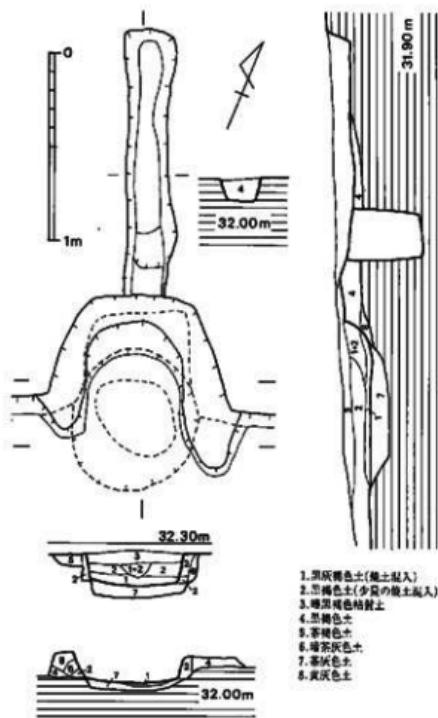
**カマド** (図版12、第91図) 北壁中央部よりやや西寄りに設置されている突出型のカマドであ



第89図 14号住跡実測図 (1/60)



第90図 14号住跡出土土器実測図 (1/3)



第91図 14号住居跡カマド実測図 (1/30)

幅30cm、奥行き40cm。灰白色の粘土を用いて壁体を構築する。奥壁の中央部付近からは、長さ65cm、幅10cmの煙道が伸び、先端はピットになる。煙道の入口部には燃焼の効力を上げるための補強として使われた土器窯が出土している。

#### 出土遺物 (図版22、第94図)

出土量は少ない。2は精製の土器窯で、外面はかなりの二次火熱を受けている。3・5は外面はほぼ全体に煤が付着している。3は床面より、5はカマドの煙道内より出土した。焼塙土器・紡錘車がある。同一個体資料S.L.はカマド周辺より出土した須恵器蓋片であるが、これは溝2の出土品と同一個体と思われる。このことは両者がほぼ同じ頃に存した可能性を示唆する。

掘り形は長さ56cm、幅70cmで左袖は幅25cm、長さ20cm、右袖は幅30cm、長さ30cmを計測する。燃焼部は幅50cm、奥行65cm。煙道は長さ140cm、幅25cmで略水平に造られている。

#### 出土遺物 (図版22、第94図)

出土量は僅かである。4~6は土師器の壊であろう。1~6・8は床面より出土し、7はP.より出土した。焼塙土器もある。

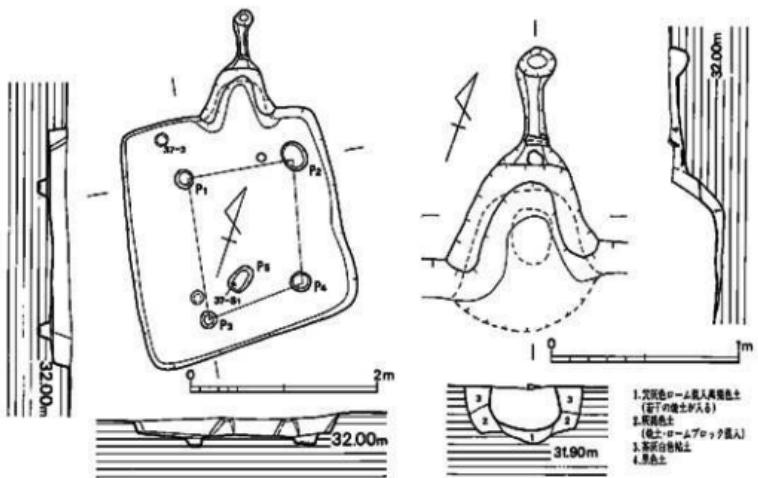
#### 37号住居跡 (図版14、第92図)

外堀とする中で丁群としたが、単独で存在する。これは住居群中最も小型の住居跡である。並んだ縦長プラン (C型) を呈し、柱穴配置もやや南に偏してプランと同様である。

カマド (図版14、第93図) 北壁中央部より東寄りに設置されている。

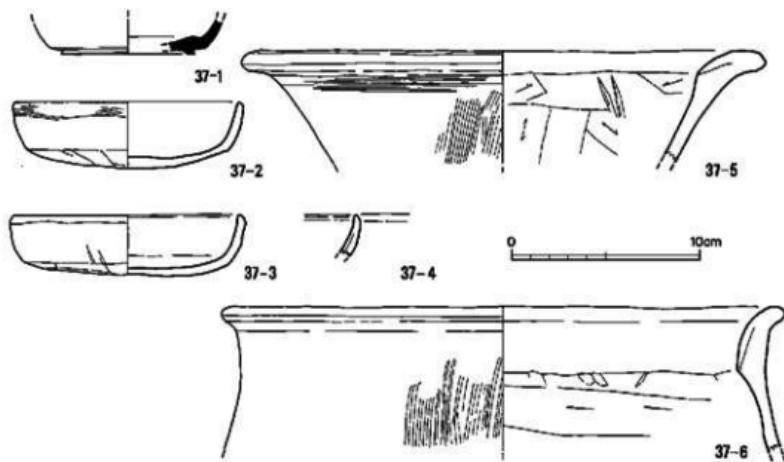
明確な袖は当初から存在しない。Ⅲのタイプであるが、掘り形は角張らずに釣鐘のような平面プランとなる。

基底部幅80cm、長さ55cm。燃焼部は



第92図 37号住居跡実測図 (1/60)

第93図 37号住居跡カマド実測図 (1/30)



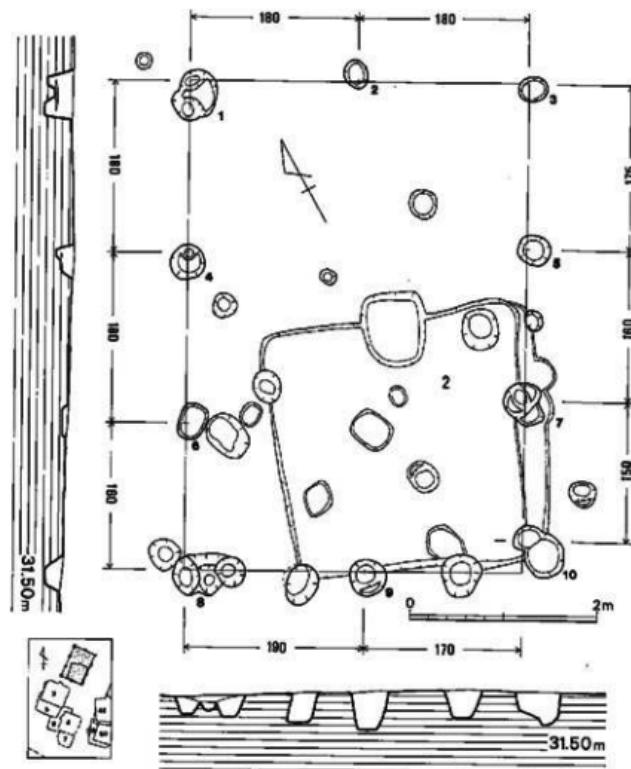
第94図 37号住居跡出土土器実測図 (1/3)

## 2. 掘立柱建物

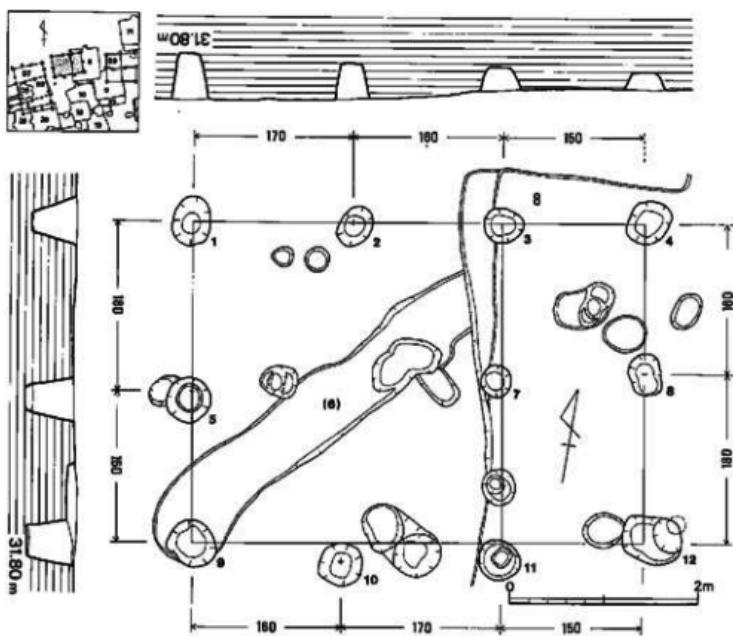
### 1号掘立柱建物 (第95図)

B群中で最も北側に位置し、南側は2号住居跡を切る形で存在する。梁行2間×桁行3間の10本柱である。柱穴掘り形は円形・楕円形で素掘りと二段掘りがある。径は最大で40cm前後を測る。規模は平均で梁行180cm×桁行167cm、桁行方向はN-29°-Eである。総面積は18.71m<sup>2</sup>。

(宮田)



第95図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)



第96図 2号掘立柱建物実測図 (1/60)

### 2号掘立柱建物 (第96図)

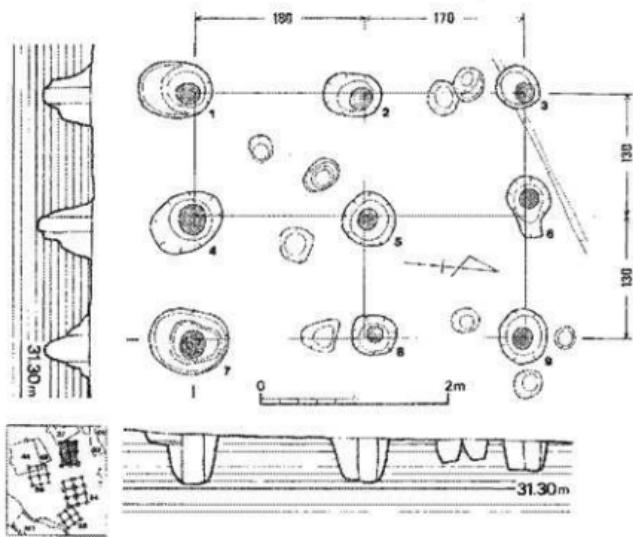
G群中の北西端に位置する。8号住居跡を切り、略東西に主軸をおく。2間×3間の11本柱による建物である。柱穴掘り形は円形あるいは橢円形を呈する。径は30~60cmで、深さ30~50cmである。規模は平均で梁行170cm×桁行160cm、桁行方向はN-78.5°-Eである。総面積16.34m<sup>2</sup>。

### 出土遺物 (図版23, 第101図)

1・2はP<sub>12</sub>より、3はP<sub>8</sub>より出土した。他に焼塙土器片がP<sub>8</sub>より出土している。(宮田)

### 3号掘立柱建物 (図版15, 第97図)

E群・F群の間にあり、27号住居跡の南側コーナー部分と重複している。2間×2間の略南



第97図 3号掘立柱建物実測図 (1/60)

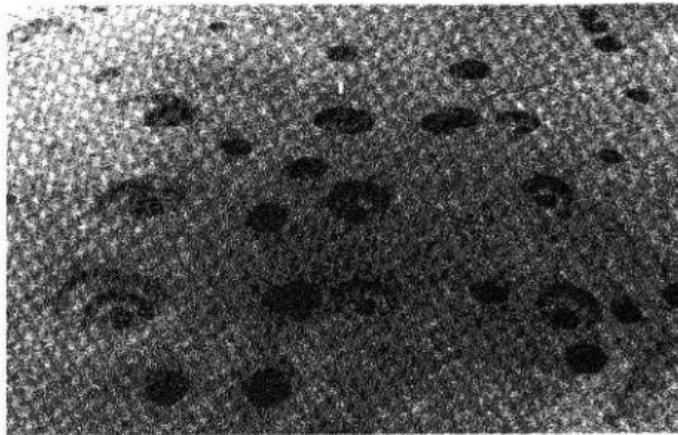


Fig. 5 3号掘立柱建物

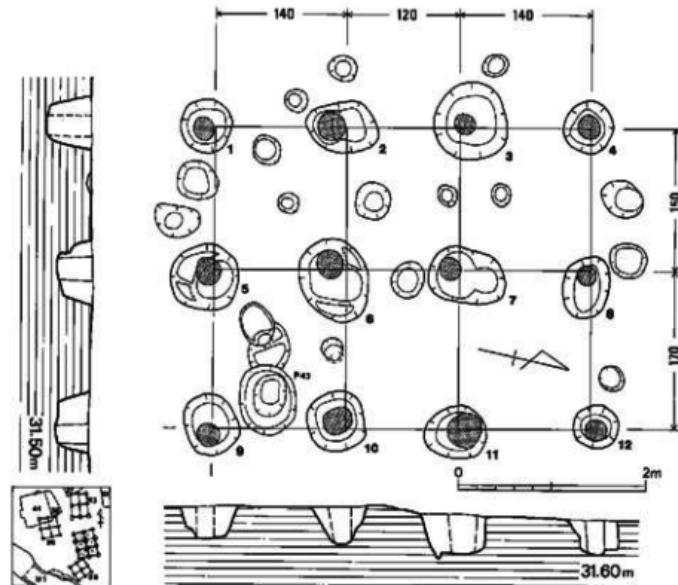
北に主軸をとる長方形プランを呈する9本柱の建物である。柱穴掘り形は円形・楕円形で素掘りと二段掘りがある。径は50~70cm、深さ50~60cmである。柱間寸法は梁行が130cm、桁行が170cmと180cmを測る。桁行方向はN-5°-Wである。総面積9.18m<sup>2</sup>。

P<sub>8</sub>より焼塙土器片が出土している。(宮田)

#### 4号掘立柱建物 (図版15、第98図)

F群に位置し、3号掘立柱建物の南東2.5mに位置する。2間×3間の12本柱の建物である。柱穴掘り形は円形・楕円形で、素掘りと二段掘りとがある。径は40~70cm位で、深さ50cm前後である。柱間寸法は梁行が150cmと170cm、桁行が140cmと120cmを測る。桁行方向はN-13°-Wである。総面積12.92m<sup>2</sup>。

布目痕のある焼塙土器片がP<sub>2</sub>・P<sub>8</sub>から出土した。(宮田)



第98図 4号掘立柱建物実測図 (1/60)

### 5号掘立柱建物 (図版15、第99図)

E群中で南端に位置し、溝1に近接する。2間×2間のほぼ正方形に近いプランを呈する9本純柱の建物である。柱穴掘り形は殆ど円形で、径は60cm前後、深さは30~50cm位である。柱穴P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>~P<sub>9</sub>は径10~20cmの柱痕を検出した。規模は梁行が130cm、桁行は110cmと140cmである。桁行方向はN-56.5°-Eである。総面積6.50m<sup>2</sup>。

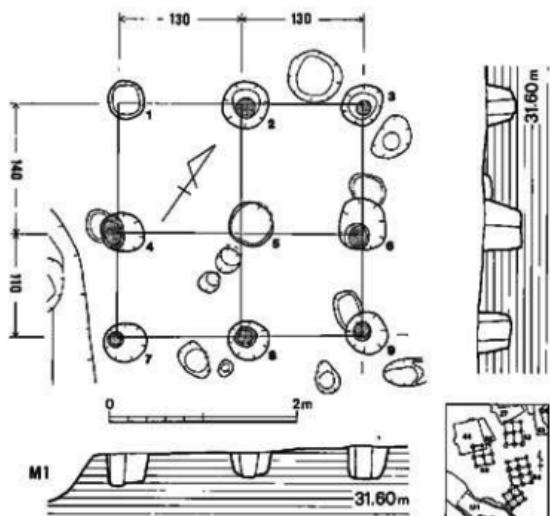
(宮田)

### 6号掘立柱建物 (図版15、第100図)

E群に属し、44号住居跡の南側を切っている。2間×2間の正方形に近いプランを呈する9本純柱の建物である。柱穴掘り形は円形で、素掘りと二段掘りがある。径は20~30cm、深さ15~25cmである。柱間寸法は梁行が140cm、桁行が140cmと170cmを測る。桁行方向はN-12°-Wである。総面積8.74m<sup>2</sup>。

(宮田)

### 7号掘立柱建物 (第102図)



F群の北東端に位置し、28・29号住居跡を切っている。3間×5間の略南北に主軸をおく建物とした。土壙9、8号掘立柱建物とも重複するが先後関係はわからない。桁行方向はN-14°-Wとなる。総面積35.04m<sup>2</sup>。

#### 出土遺物

(第101図)

P<sub>10</sub>より出土した壺である。

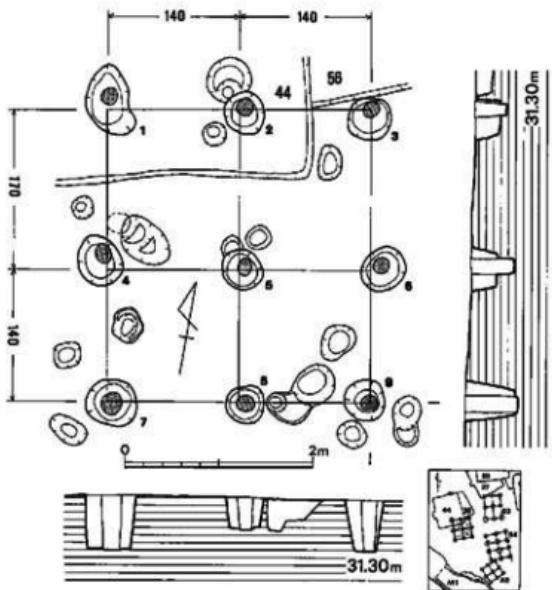
(宮田)

第99図 5号掘立柱建物実測図 (1/60)

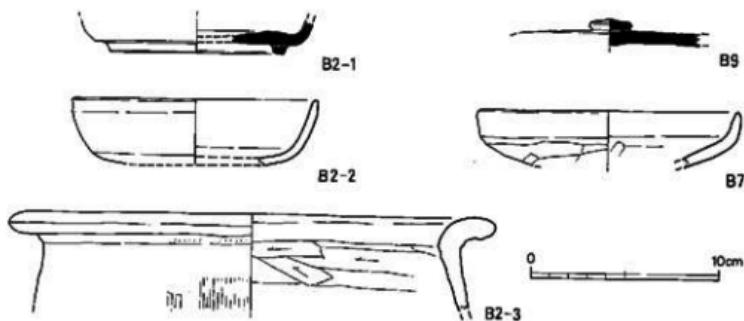
8号掘立柱建物 (第103図)

7号建物と直交気味に重複して存在した。その中に土壙9を包み込む格好となる。2間×4間とするが、あるいはP<sub>4</sub>～P<sub>11</sub>の2間×2間になるのかもしれない。桁行方向はN-72°-Eとなる。総面積22.07m<sup>2</sup>。

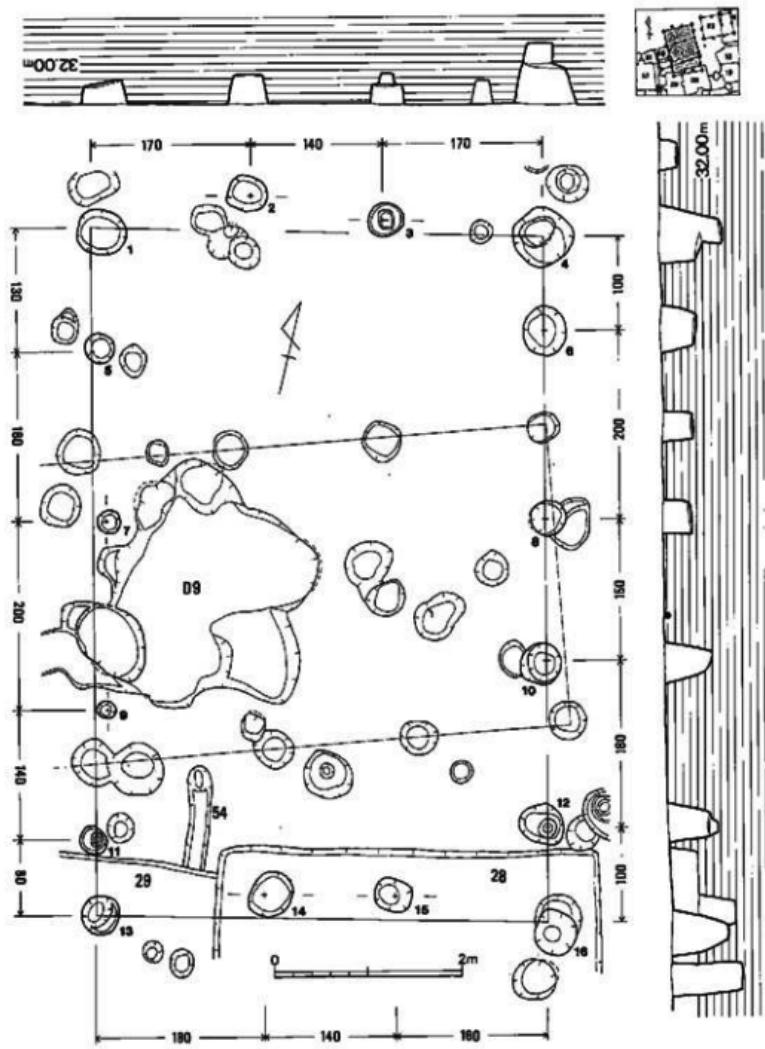
(伊崎)



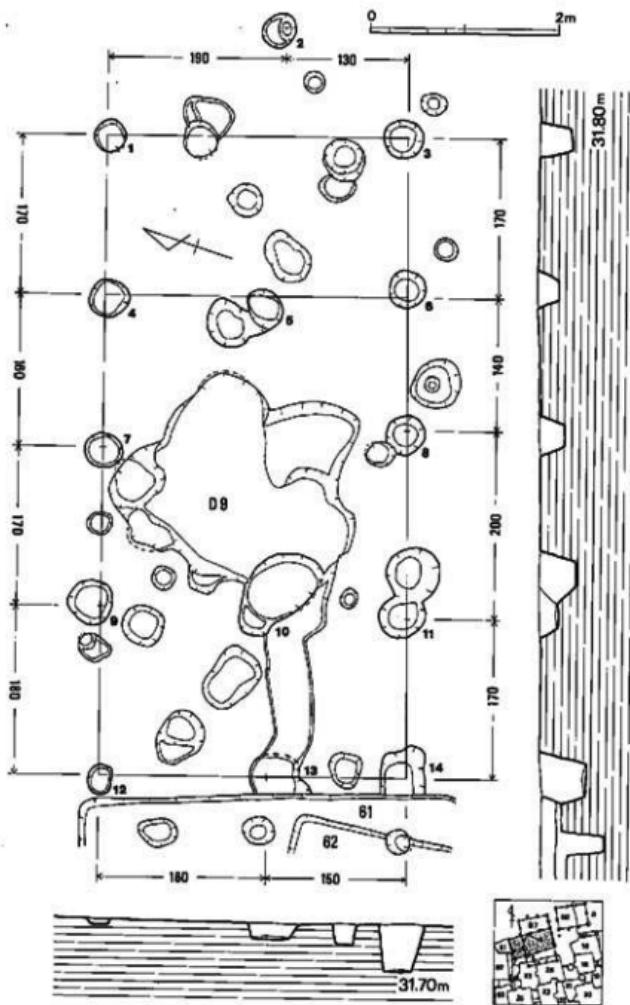
第103図 8号掘立柱建物実測図 (1/60)



第101図 掘立柱建物出土土器実測図 (1/3)



第102図 7号掘立柱建物実測図 (1/60)



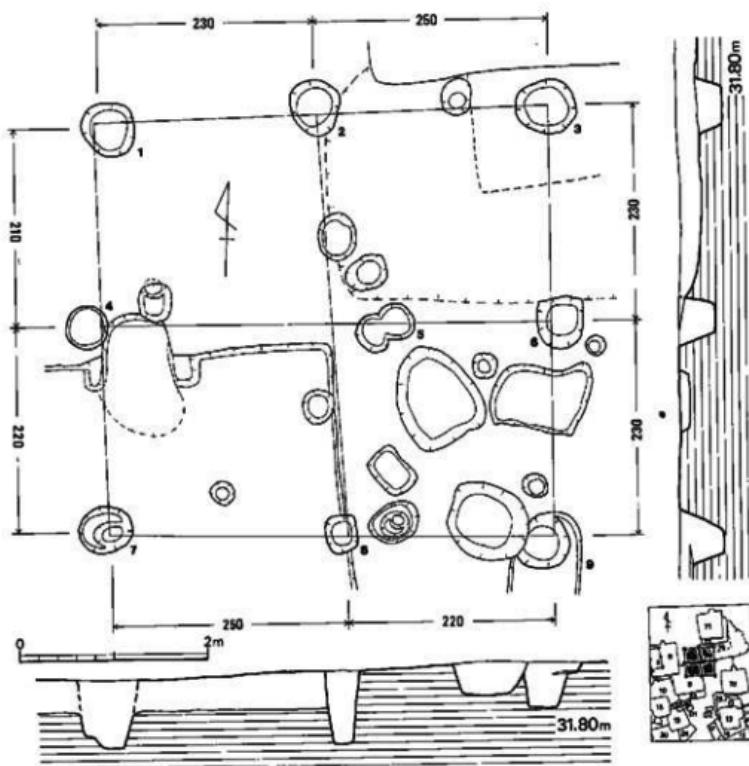
第103図 8号櫻立柱建物実測図 (1/60)

**9号掘立柱建物 (第104図)**

G群の北東側に位置する。梁行2間×桁行2間の8本柱の建物である。9・33・74号住居跡と重複する。柱穴掘り形は円形・楕円形で素掘りと二段掘りがある。規模は平均で梁行222cm×桁行237cm、桁行方向はN-86°-Eである。総面積21.48m<sup>2</sup>。

**出土遺物 (第101図)**

P<sub>o</sub>より出土した須恵器壺のつまみ部分である。(宮田)



第104図 9号掘立柱建物実測図 (1/60)

### 3. 土壙

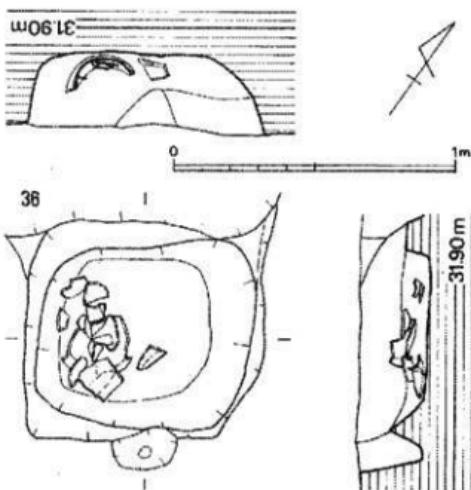
#### 1号土壙 (図版16, 第105図)

36号住居跡の南東側に隣接している。平面形態は圓丸長方形を呈する小型の土壙である。規模は長軸89cm、短軸77cmを測る。深さは27cmを計測する。

#### 出土遺物 (図版23, 第106図)

土師器のみ出土した。2は中型の甕である。外面には煤が付着している。3は長脚の甕である。焼塗土器片も出土した。

(宮田)



第105図 1号土壙実測図 (1/20)

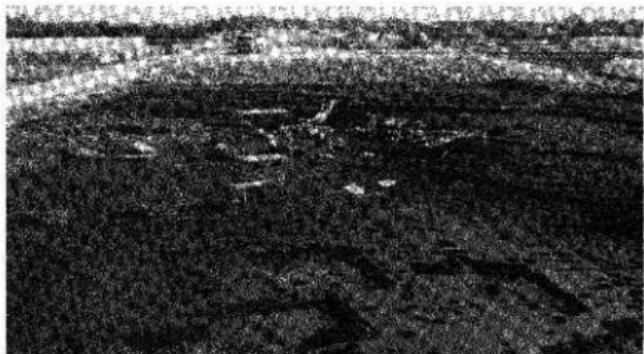
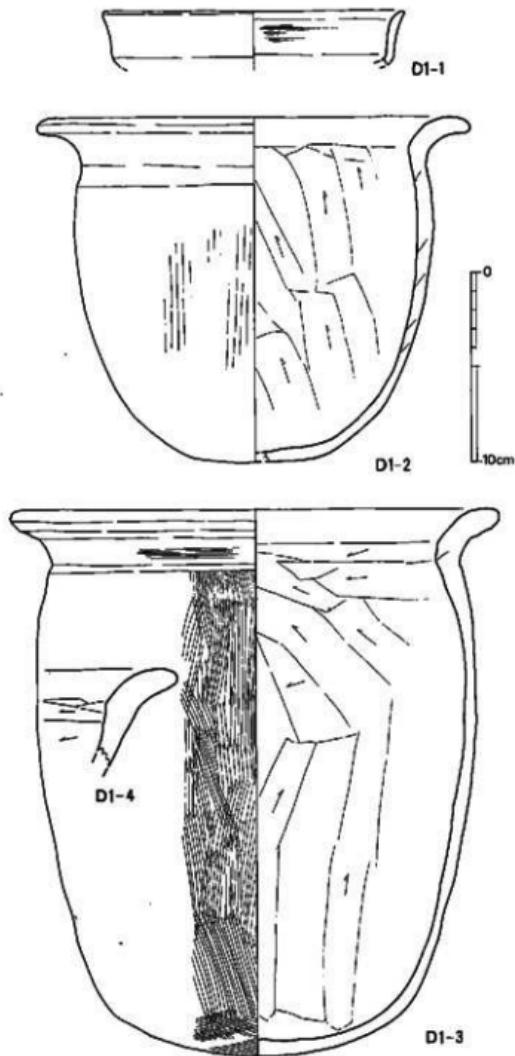


Fig. 6 作業風景③



### 8号土壙

(図版16、第107図)

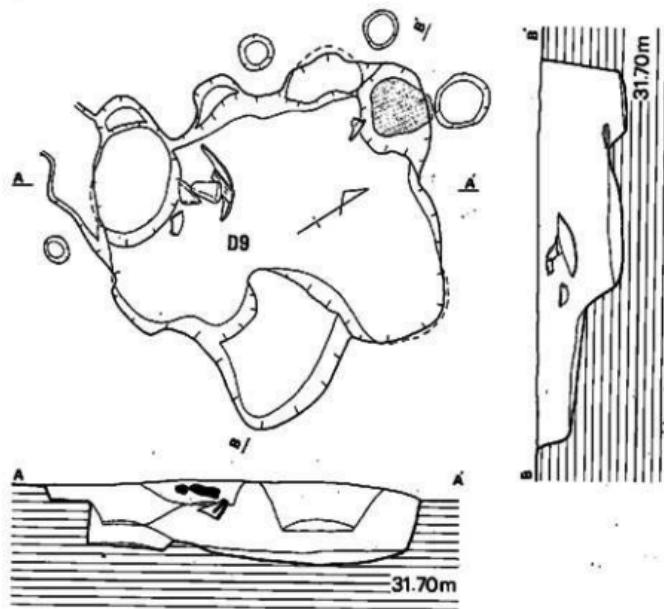
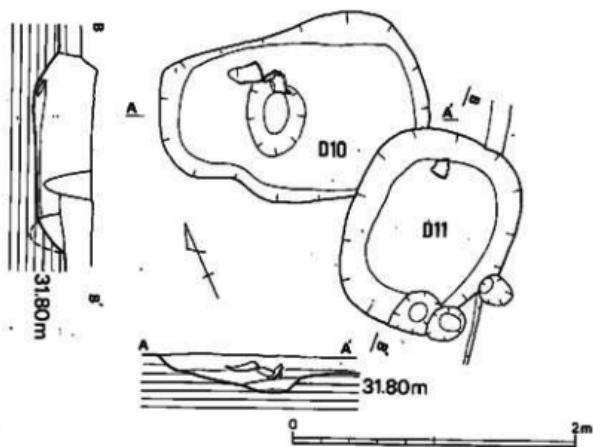
F群中の北東側に位置し、7・8号掘立柱建物と重複した形状になるが先後関係はわからない。台形状に近い不整形を呈し、長軸は235cm、短軸は190cmを計測する。深さは60cm前後である。北西側のピット内では焼土を検出した。

### 出土遺物

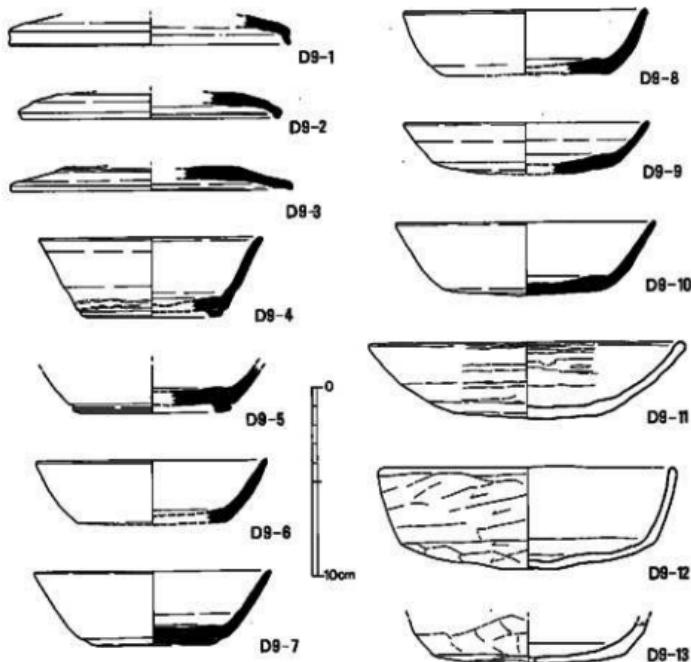
(図版23、第108・109図)

遺物の量はかなり多い。1~10は須恵器である。11は精良な土師器坏である。内面は横ヘラ磨きを施し硬質である。搬入品の可能性もある。13は底部内面に擦痕がある。18は口縁内面に煤が付着し、同一個体と思われる他の胴部片は、高熱を受けてボロボロになっており、製塩か何かに使用された可能性がある。焼塩土器、筋継車、そして同一個体資料SFがある。(宮田)

第106図 1号土壙出土土器実測図 (1/3)



第107図 9・10・11号土壤実測図 (1/40)



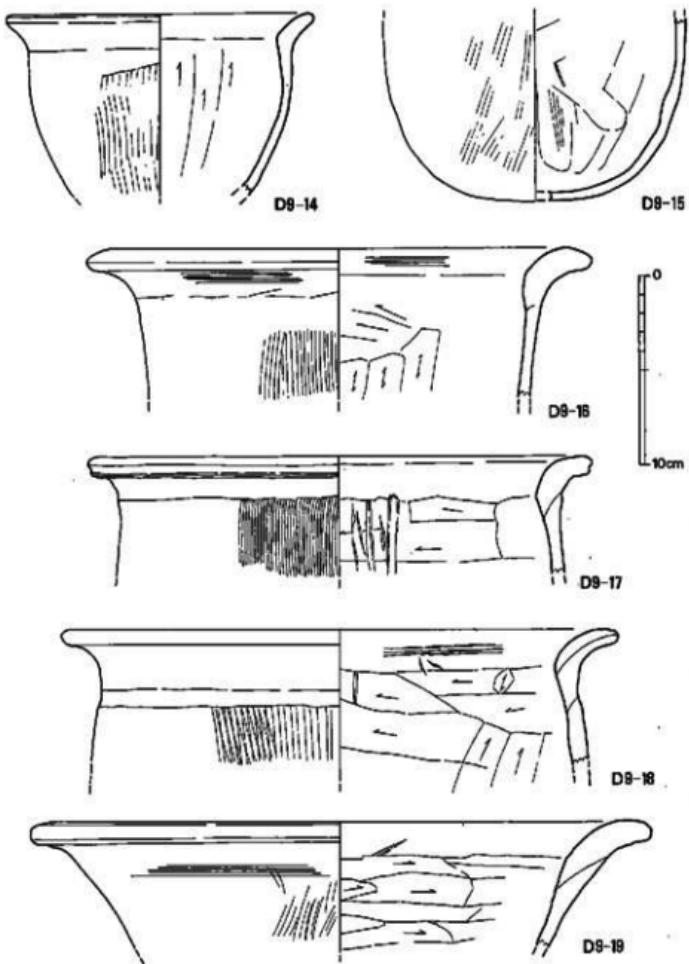
第108図 9号土壌出土土器実測図① (1/3)

#### 10・11号土壌 (図版16, 第107図)

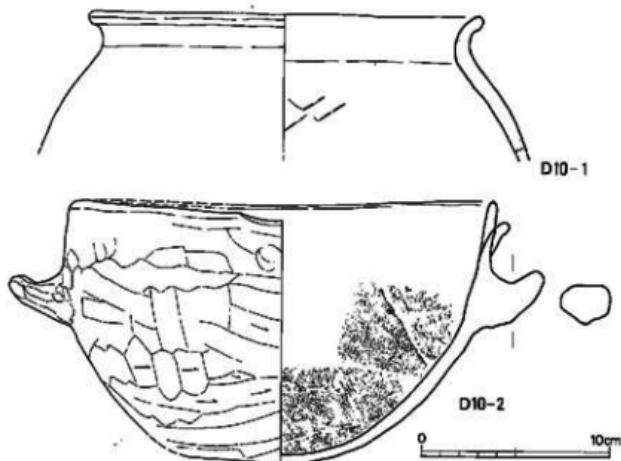
C群中、43号住居跡の下層にて検出した土壌である。住居跡の貼床下層に見られる、いわゆる中央土壌の可能性もないではないが、11号土壌が43号住居跡の壁外に延びることから、住居を構築する以前に存した土壌として扱う。検出時には11号が10号を切っている状況であったが、出土した遺物が接合するのではなく同時に存したものとする。

10号は長軸180cm、短軸130cm程の不整橢円形を呈し、深さは最深で20cm。中央西寄りに小ピットがある。

11号は隅円の長方形で145×110cm、深さ20cmを測る。



第109図 9号土墳出土土器実測図② (1/3)



第110図 10号土壌出土土器実測図 (1/3)

**出土遺物** (図版23、第110図)

1は10号から出土した。2は把手付の片口になる体で、内面に布目痕がみられる。これは、10・11号から出土した互いの破片が接合している。

(伊崎)

#### 4. 溝

III. 調査の概要の中でも触れたとおり、集落を囲むような形状で溝1がある。また、これの南東部分とほぼ平行して溝2がある。溝2は溝1が折れ曲がる付近(E群の南方)で調査区域外へと延びてゆくが、溝1と2とは溝4によって連結されている。また溝4と直交する如くに溝3が溝2から派生しているが、遺物の出土がないので、これ以上触れないでおく。調査区の東端に近く、略南北方向に走る溝が数条あるも近代の所産であるので、ここでは特に触れない。

#### 溝1 (図版17、第4図、付図)

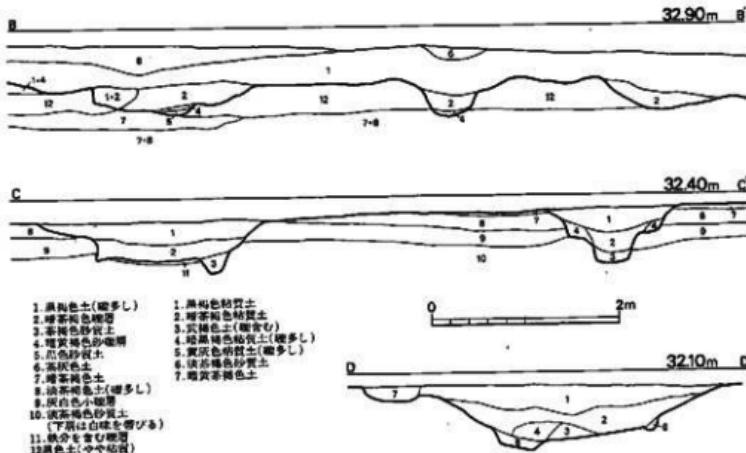
大まかには、発掘区の東から西南方向へ延びて、折れ曲がってからまた北西方向へ向きをか

えて延びてゆく。これの内側に住居・建物群が営まれているという様相である。座標で言うならば、 $X = 43.900$ ,  $Y = -28.560$ 付近(仮にM<sub>1</sub>ポイントとする)から延びて、 $X = 43.873$ ,  $Y = -28.607$ あたり(M<sub>2</sub>ポイント)において120°前後の角度で折れ曲がり、 $X = 43.900$ ,  $Y = -28.645$ (M<sub>3</sub>ポイント)の方へ続いてゆく。M<sub>1</sub>ポイントの東側については、やや北向きに延びてゆきそうであるがはっきりしない。M<sub>3</sub>ポイントの西側は地形自体が低く傾斜してゆくので、もうあと若干延びたあと自然消滅するものと思われる。

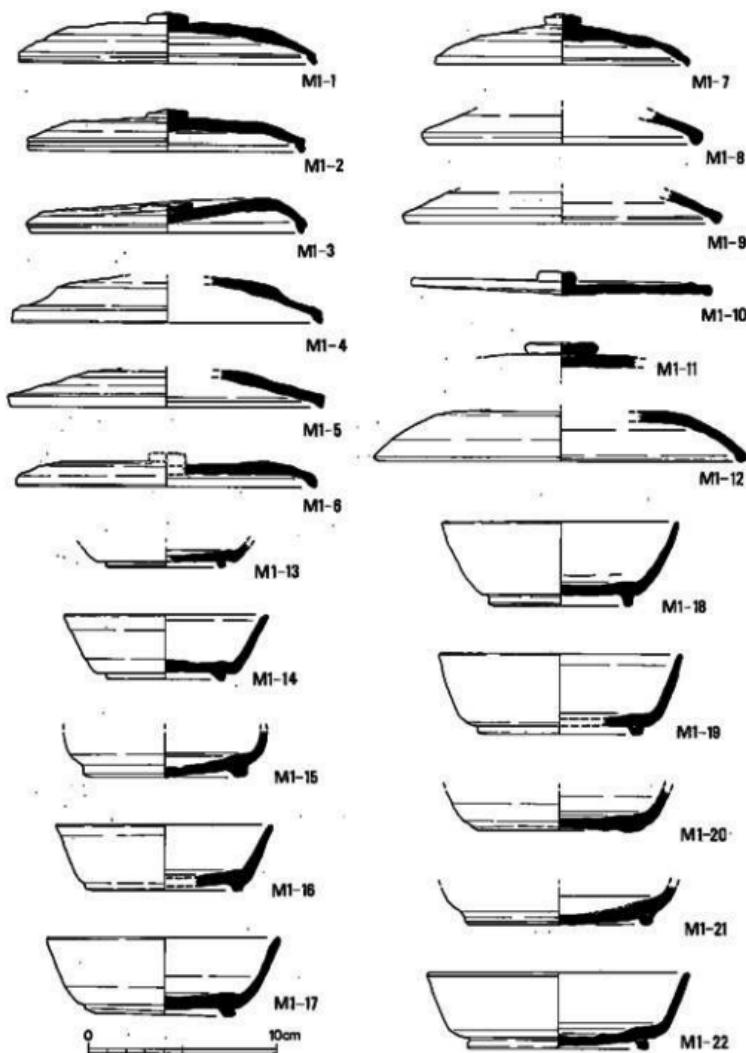
溝幅は1.5~4m程で所により狭くなったり広くなったりしている。溝底レベルはM<sub>1</sub>ポイントが31.98mで、土層Cの所で31.71m, M<sub>2</sub>ポイントで31.60m, 土層Dで31.28m, M<sub>3</sub>ポイントで31.15mとなり、M<sub>1</sub>・M<sub>2</sub>・M<sub>3</sub>各ポイントへ向かってだんだん低くなっている。溝は全体に浅く、最も深い所でも検出面から60cm程しかない。埋土は大きく2層に分かれ、下層が暗茶褐色疊層、上層が黒褐色土層である。これらは自然堆積の様相を示している。

#### 出土遺物 (図版23~26, 第112~120図)

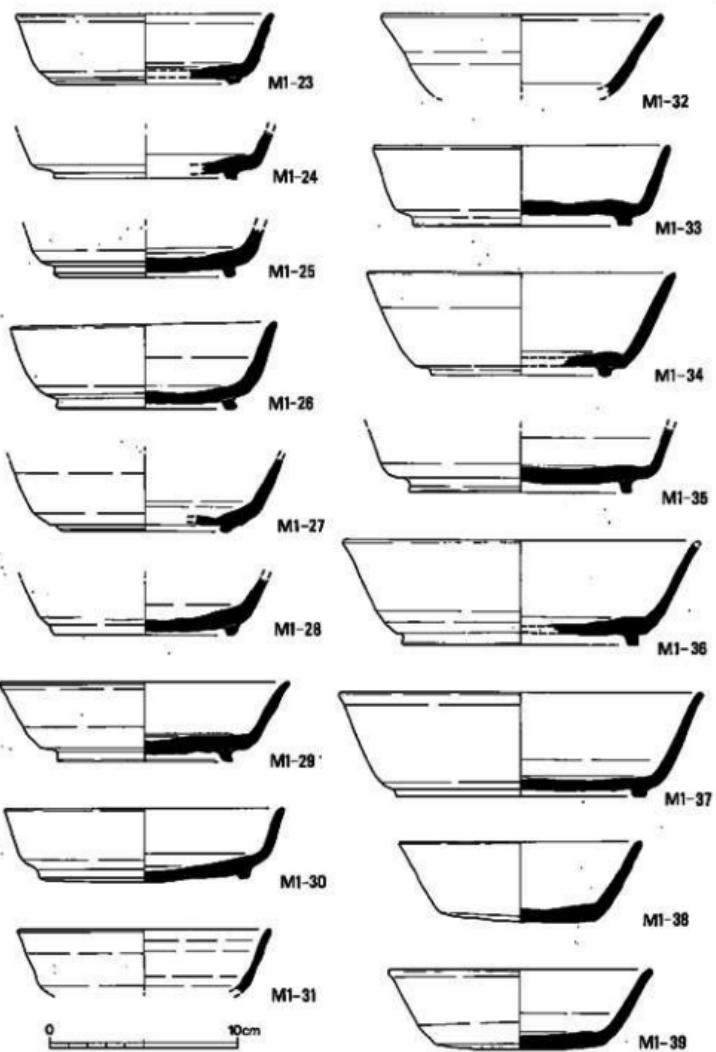
溝内からは比較的多くの土器と、焼塙土器、鐵器等が出土し、全出土量はこの塔ノ上遺跡の一遺構内では最も多い。土層DとM<sub>3</sub>ポイントの間、M<sub>1</sub>ポイントと土層Cの間で量的に多く出土している。溝内出土の遺物は全て住居群等からの投棄によるものであろう。図示していないけれども、M<sub>3</sub>ポイントと土層Dの中間あたりから花崗閃綠岩もしくは閃綠安山岩と思われる石が3個出土し、これらはかなりの熱を受けるとともに表面が磨れているので、何か熱を必要とする



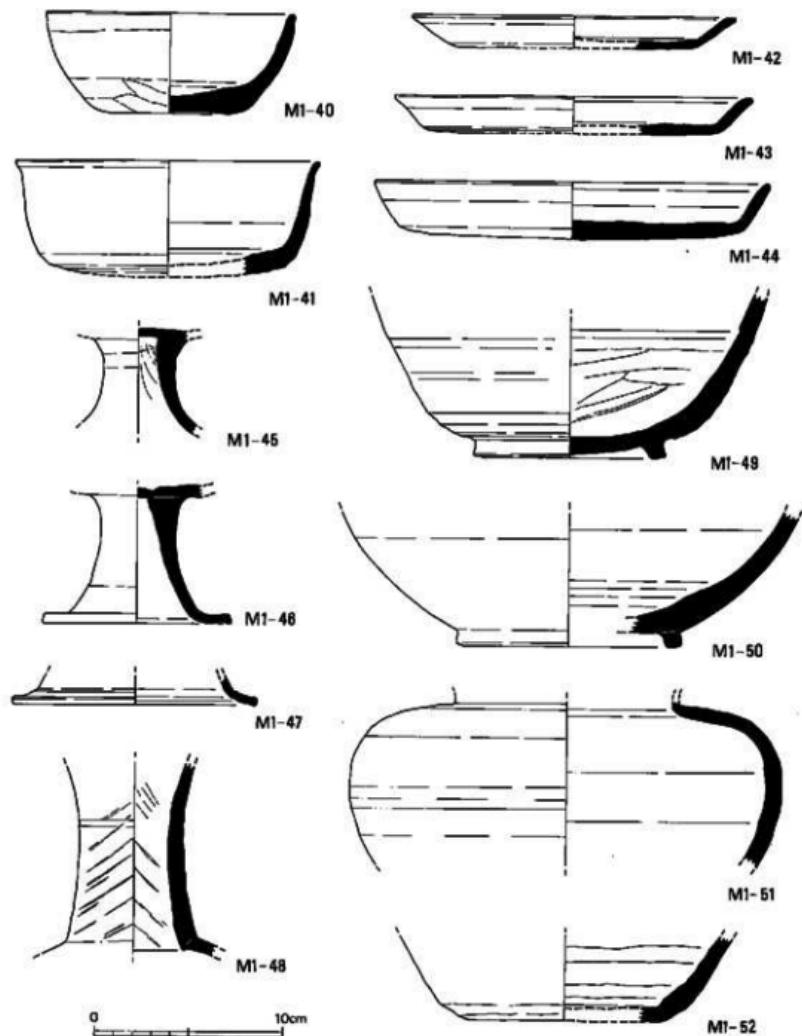
第111図 溝1・2土層断面図 (1/60)



第112図 清1出土土器実測図① (1/3)



第113図 溝1 出土土器実測図② (1/3)



第114図 溝1出土土器実測図③ (1/3)

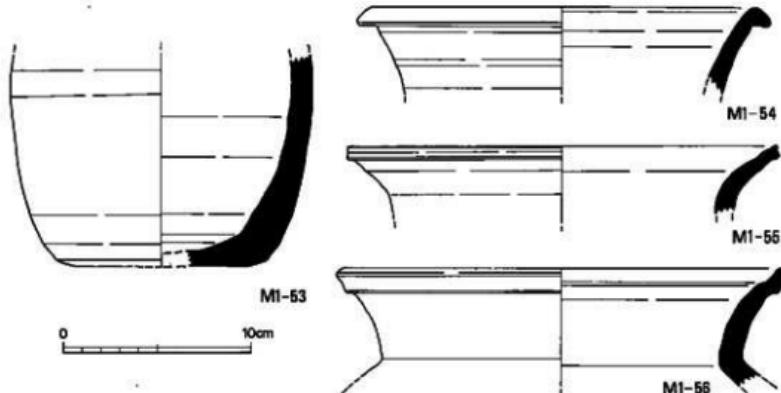
ることに使われたあと投棄されたものと思われる。またM<sub>1</sub>ポイントと土層Cの間に石の集中して存した場所が2ヶ所あった。それをA群・B群としておく。接合資料・同一個体資料・焼塙土器・鉄器については別に述べる。

須恵器 (1~56) 蓋・坏A・B I~B III, III A II・B<sub>2</sub>, 境, 高坏, 壺, 瓶と殆どの器種が出土した。18は重ね焼きをしたときの別個体の粘土が体部内面最下部に付着している。26の内底面には鉄器片及び鉄鏽が付着している。また、外底部は粘土紐巻上げの様子がよくわかる。27は生焼けである。36の外底部にはワラ様の圧痕がある。40の壺は赤茶色を呈し瓦質にちかい。

土師器 (57~107) 売A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・B・C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・D・F, 境I, III A・B・C・D<sub>2</sub>・D<sub>4</sub>, 高坏, 壺, 鉢A・C, 瓶B I・B III<sub>1</sub>・B III<sub>2</sub>・Da・Db, 盆が出土した。60・61はかなり硬質の焼成である。67は内底面にaの字に似た刻線がある。85も内面に刻線がみられる。70・84・65は二次火熱を受けており、あるいは製塩関連に使用されたものか。72は内面に黒い有機物が付着している。64は器形がわからない。須恵器の甕を模したものか。96は口縁端部を指でおさえて片口状をしている。91は肩部内面に櫛痕がある。

## 溝2 (図版17, 第4図, 付図)

溝1のM<sub>1</sub>・M<sub>2</sub>ポイントの間とは平行してその南側にある。溝1のM<sub>1</sub>ポイント南側で二またに分かれ、M<sub>2</sub>ポイント南側ではややカーブしながら調査区外へと延びてゆく。上端幅0.6~1.8mになるが、土層Cでよくわかるように壁面には段がつく。溝底幅は0.35~0.4mである。深さは検出面から0.35~0.6mしかないものの、幅が狭いので深みのある感をうける。溝底レベル



第115図 溝1出土土器実測図④ (1/3)

はM<sub>1</sub>ポイント側からM<sub>2</sub>ポイント側の方へ緩やかに低くなつてゆく。埋土は溝1同様に自然堆積としてよい。

**出土遺物** (図版27、第122図)

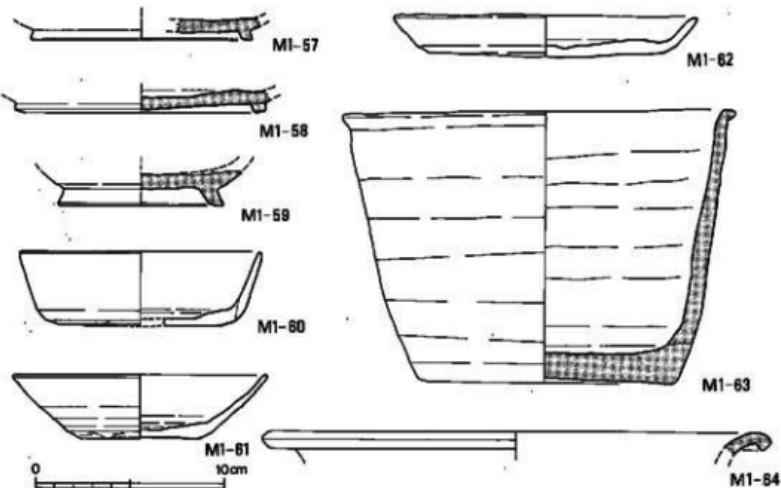
須恵器(1~4)は壺BII、高壺・壺がある。3の腹部中位から底部全面は手持ちヘラ削りである。土師器(5・6)は壺C<sub>1</sub>と壺Dbである。

**溝4** (第4図、付図)

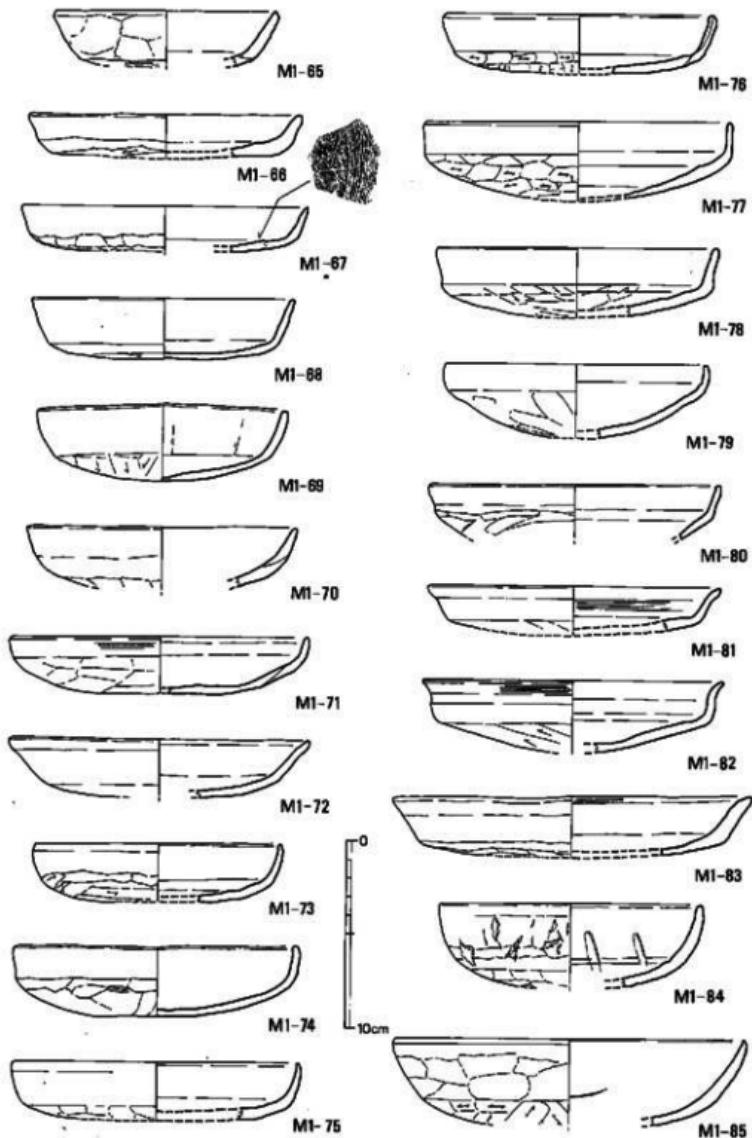
溝1のM<sub>2</sub>ポイントの西側にて、溝1と溝2とを連結する状態で検出した。溝1・2との切合には調査時にははっきりしえなかつた。溝底レベルは溝2から溝1へ向かって傾斜し、溝1の底よりは10cm程度低くなつてそこに段がつく。もし仮に水が流れたのであれば、溝2→溝1へとするしかない。

**出土遺物** (第122図)

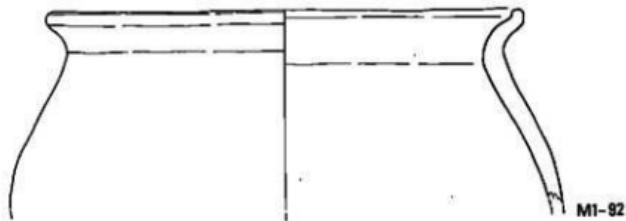
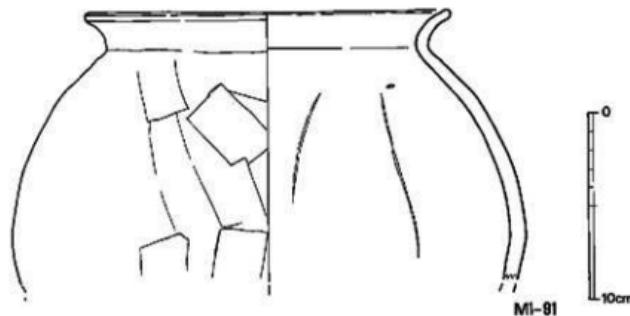
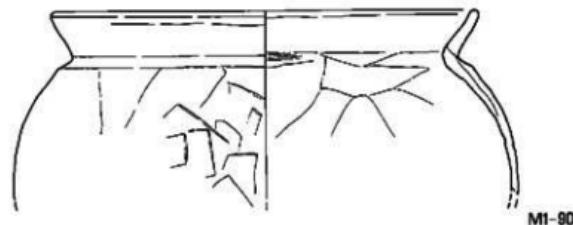
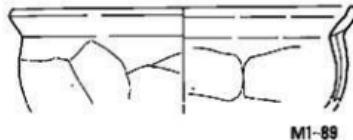
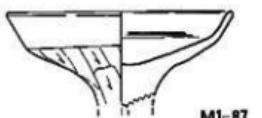
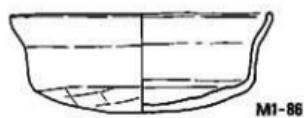
須恵器はなく、土師器の壺G・F、壺B Iが出土している。



第116図 溝1出土土器実測図⑤ (1/3)

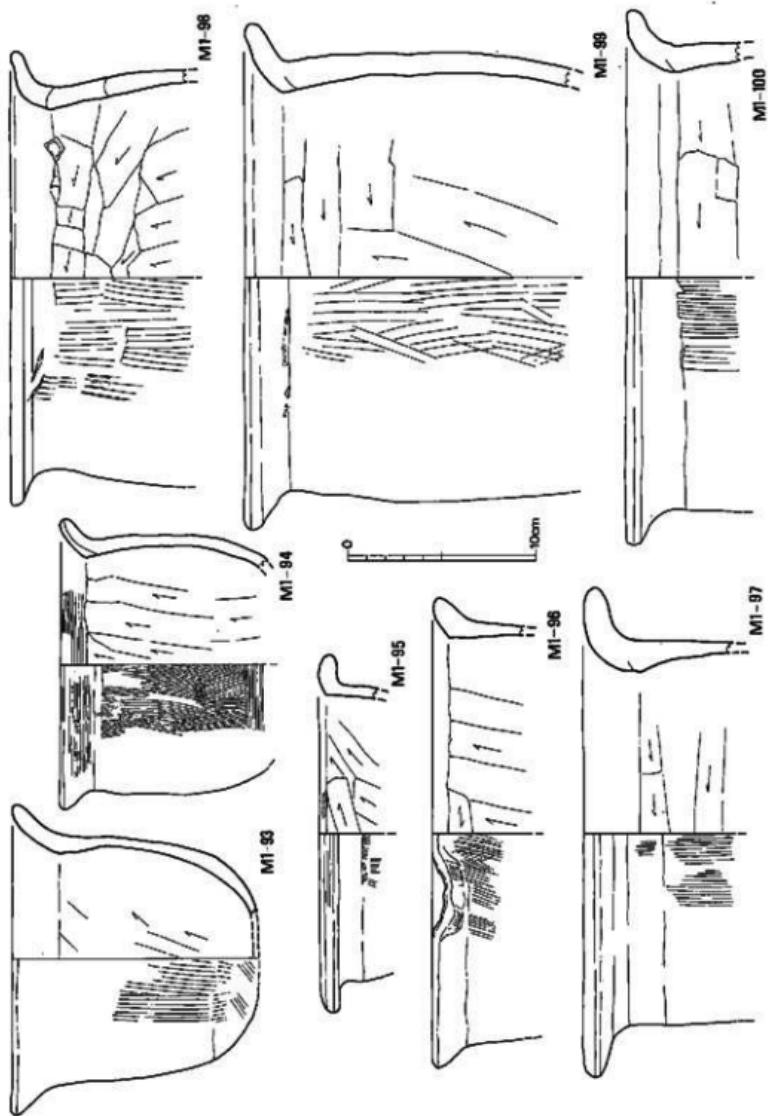


第117図 清1出土土器実測図⑥ (1/3)

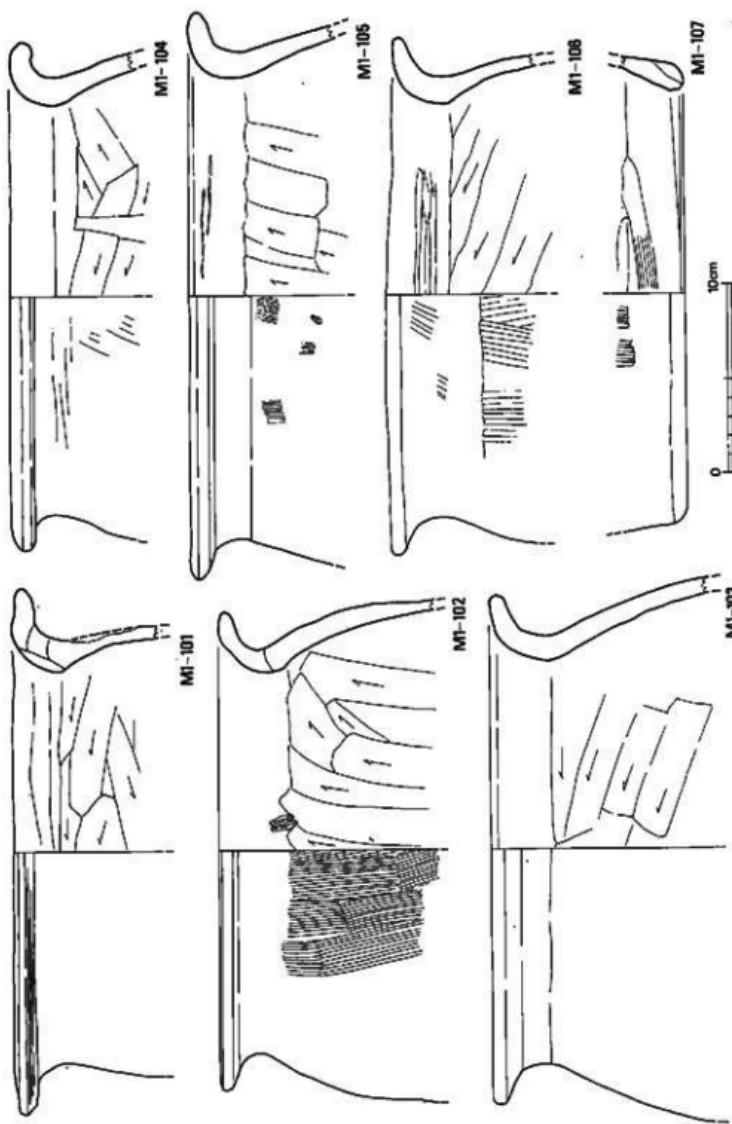


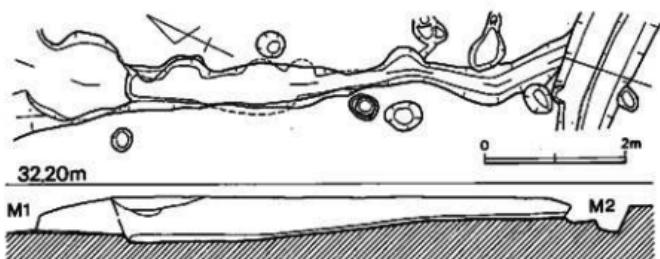
第118圖 溝1出土土器実測図⑦ (1/3)

圖119 漢1山土器物測量圖(1/3)

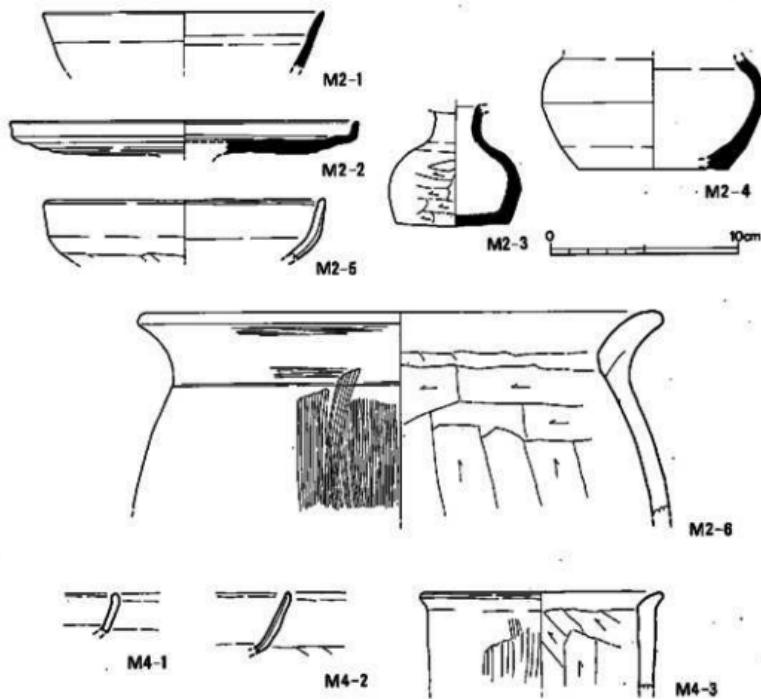


第120圖 溝1出土器物測圖⑨ (1/3)





第121図 池4 断面図 (1/80)



第122図 池2・4 出土土器実測図 (1/3)

## 5. ピットその他

豎穴住居跡・掘立柱建物・土壌・溝以外のピット・包含層・搅乱部分、あるいは特にF・G群の住居検出時に出土した土器を取上げる。

### i. ピット

土器を出土したピットは500個弱を数え、その中には実測にたえうる破片を出土したものも相当ある。しかし、これらのピットの大半は調査時、整理段階を含めて建物としてのまとまりを捉えることはできなかった。特異な例として、カマド煙道先端の煙出し口がピットになって土器の入っていたのが、51・52・17号の各住居跡であった。次のP275も類似した性格を付与するのかもしれない。多くのピットは土器のみを揭示する。

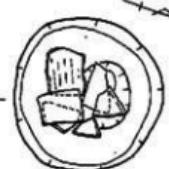
・P275（第123図）は44号住居跡の主軸上にのり、そのカマド奥壁から2.2mの所にある。直径52~55cmの円形プランで深さ13cmを測り土器片3個体分が平らに置かれたようにして底面より浮いて存した。その下にまた直径20~23cm、深さ14cmの小ピットがあった。

土器は土師器の鍋B<sub>1</sub>と瓶の破片（第128図）、それに赤焼きと称しうる須恵器甕の胴部片がある。その須恵器片は次項で同一個体資料として取上げるSH12であり（第136図）。すぐ隣にある44号住居跡や18・19号住居跡、4号掘立柱建物、溝1等からも同様の破片が出土している。

以下に、ピットの出土土器で特に気の付いたものについて述べる。

#### 須恵器（図版27・28、第124・125図）

〔蓋〕 P11は天井部内面が黒ずんでおり硯に転用したものかもしれない。P370は口径がかなり大きいので皿の蓋になろう。P171-1のように口唇部内面に沈線が入る例は少ない。



〔坏〕 P306の体部は内湾気味に立上り、口縁部の外反もない。この形態は少ない。P103の体部外面における沈線状の若干の窪みは意識してなされているのか否か不明。

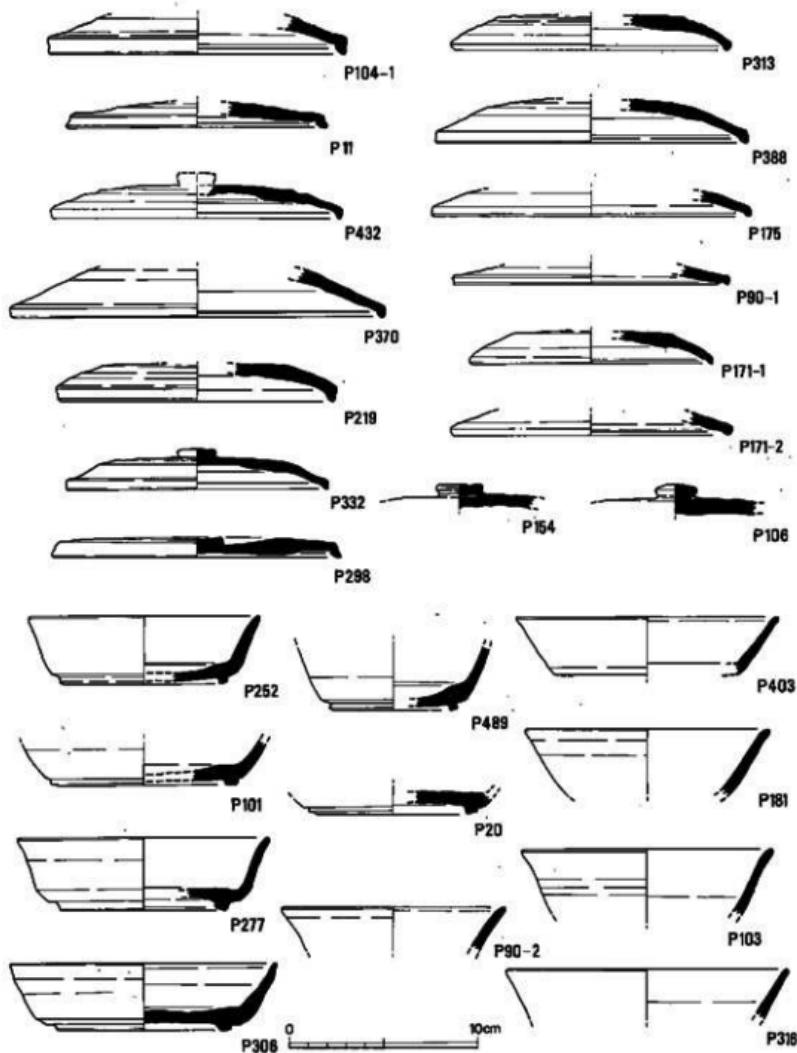
〔III〕 A I・A IIのみがある。P702-1はA IIでかなり浅い。P100の外底部には板の圧痕がある。P309-1は短頭の壺になろう。P263は壺としては大型になる。

#### 土師器（第126~129図）

〔坏〕 P99は二次火熱を受けている。P438も二次火熱を受けたものか。P136-1は内底面にX印の刻線が入る。P188は内底面に木の小口圧痕が見える。P396は内面がすすけている。P325は外面に

第123図

P275実測図 (1/20)



第124図 ピット出土土器実測図① (1/3)

化粧土をかける。P67は内外面ともカキ目風の断続横刷毛目が顕著である。P287はきわめて精良な土器で、体部内外に化粧土をかける。P35も内外に化粧土をかける。

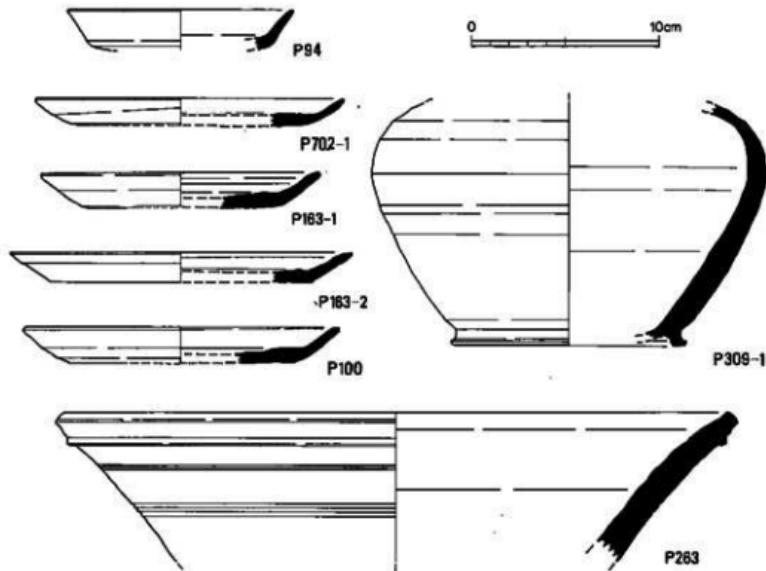
(皿) P431-1は外底面に煤が付着している。P481は内外とも丹塗りらしく見える。P274は二次火熱を受けている。P167は口縁部外面に軽圧痕がある。

他には須恵器模倣の蓋・高坏や鉢・鍋・甕・瓶等がある。ピット内から甕や鍋までが出土すること自体、特殊なことともいえる。

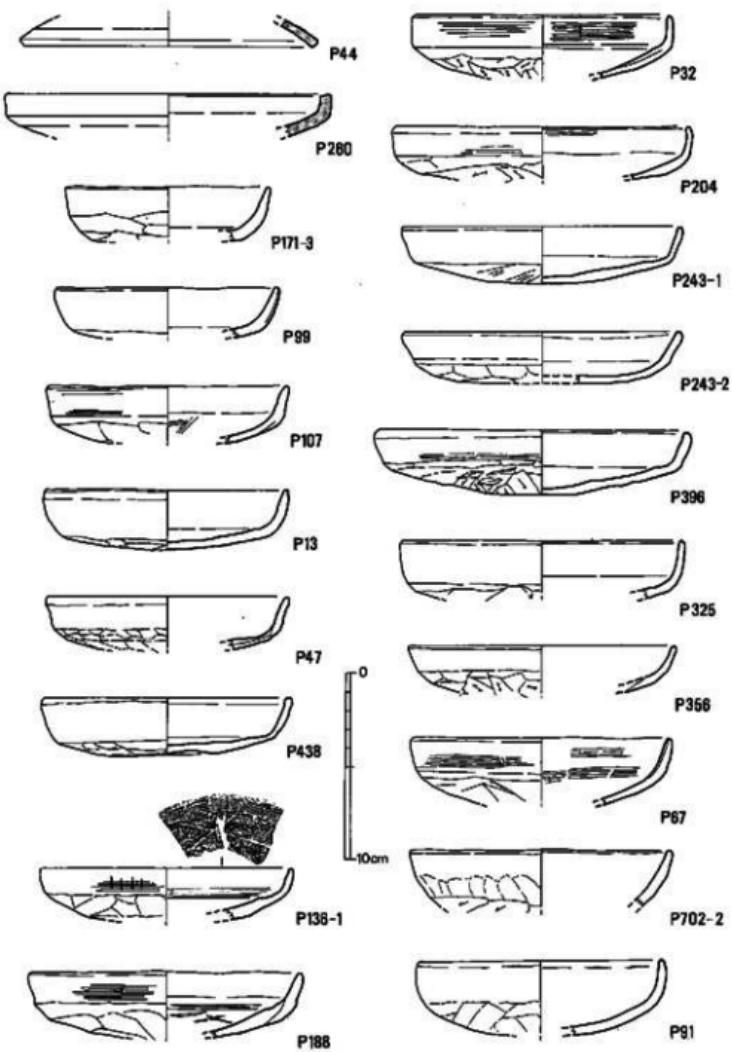
## ii. 遺構上面・その他出土土器 (図版28, 第130・131図)

遺構検出時に採取された土器、整理時に所属不明となったもの及び包含層の土器を取上げる。  
20・21号住居跡周辺の上面で出土した土器が多い。略号に○を冠しておく。

須恵器 (O<sub>1</sub>~O<sub>13</sub>) O<sub>1</sub>はこの塔ノ上遺跡で出土した須恵器の中では最も古い時期に属する。底部外面にヘラ記号を施す。28号住居跡の北、7号掘立柱建物の周辺で出土した。O<sub>2</sub>はあるいは高坏になるのかもしれない。内面に墨らしき黒い物が付着している。O<sub>3</sub>は口縁部から天井部内面にかけて黒色を呈する。生焼けに近い。O<sub>4</sub>は天井部内面に重ね焼きの時に付着した粘土が残存している。

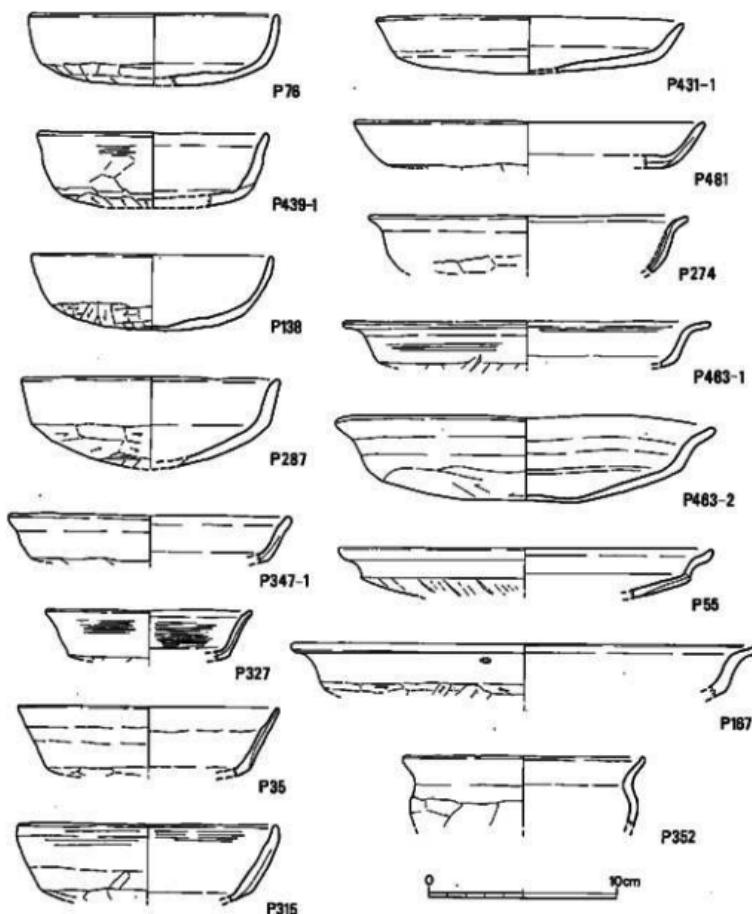


第125図 ピット出土土器実測図② (1/3)



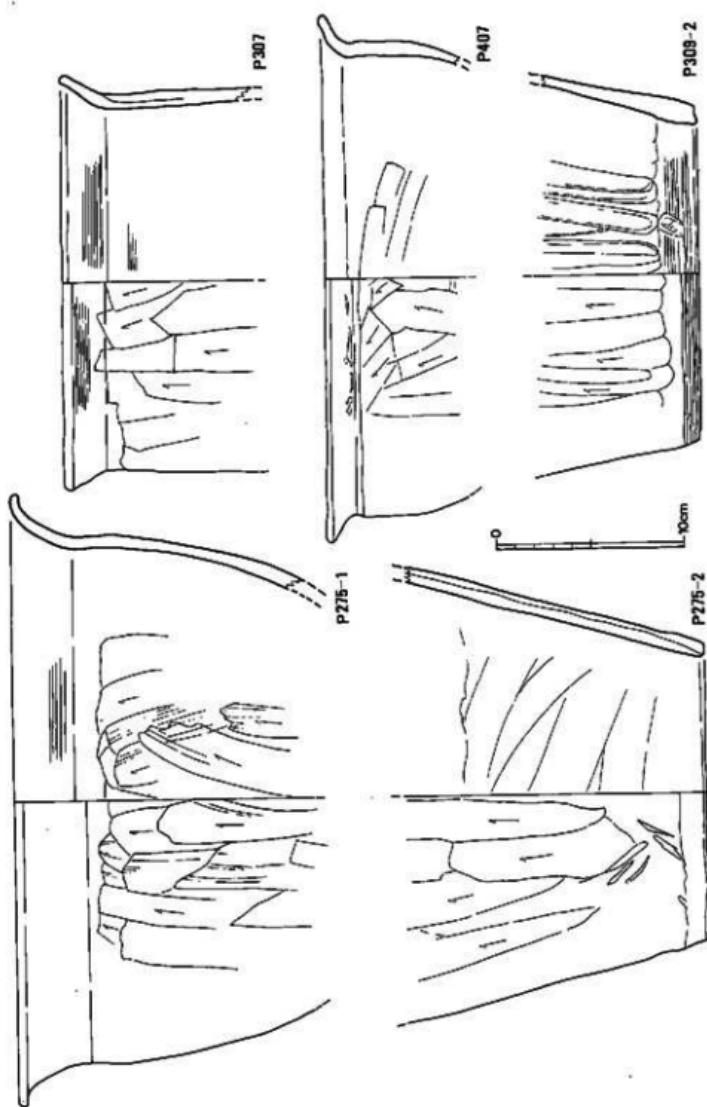
第126図 ピット出土土器実測図③ (1/3)

土師器 ( $O_{14} \sim O_{30}$ )  $O_{14}$ は須恵器を模倣した器形である。 $O_{21}$ は内外面とも化粧土をかけている。 $O_{22}$ は盤と称しうる大形品である。 $O_{24}$ の外面はヘラ先によるたて方向の擦過である。 $O_{27}$ に見る刷毛目はきわめて細い。 $O_{28}$ の内面と $O_{29}$ の外面には煤が付着している。

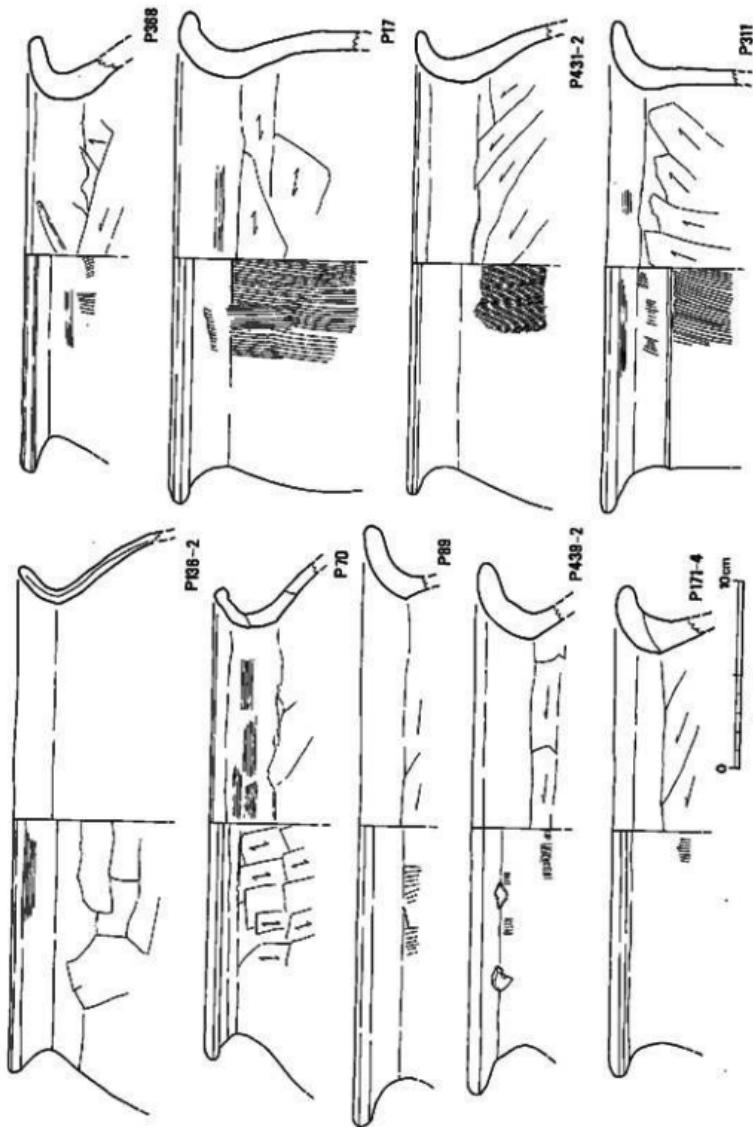


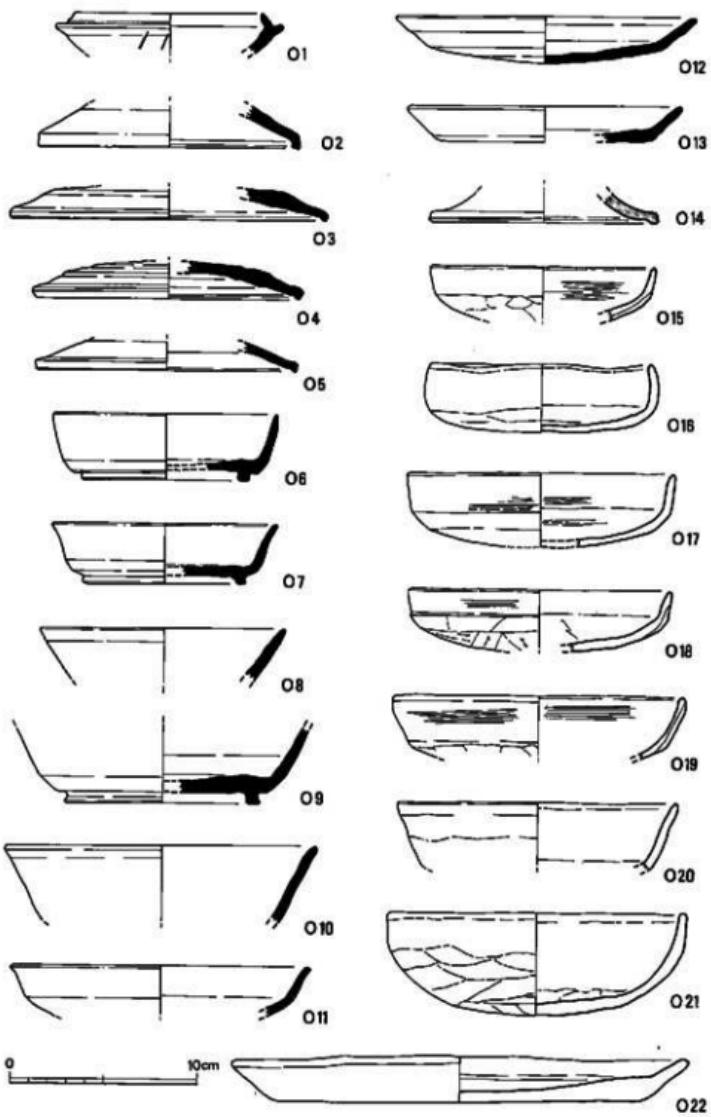
第127図 ピット出土土器実測図④ (1/3)

第128図 ヒヤト出土土器実測図⑤ (1/3)



第129図 ピット出土土器実測図⑤ (1/3)





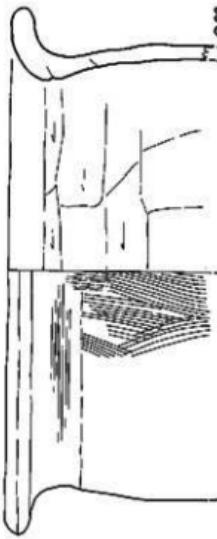
第130図 造構上面・その他の出土土器実測図① (1/3)

020

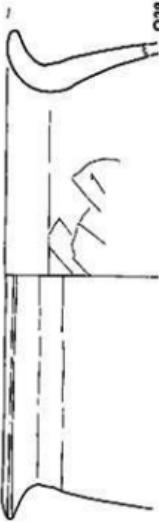
第131図 遺構上面・その他の出土器物測定② (1/3)



029



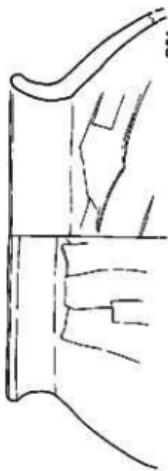
028



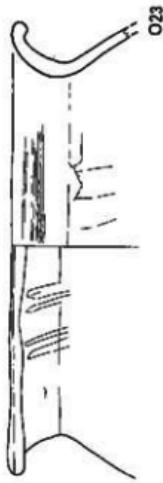
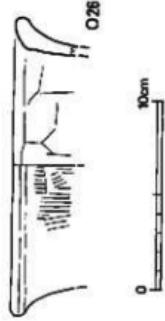
027



024



026



## 6. 遺物各説

### i. 接合資料・同一個体資料

豎穴住居跡・掘立柱建物・土塙・溝・ピットから出土した土器片で、各々の造構をこえて接合したり、また同一個体であろうと思われる資料がある。接合したものについてはJ、同一個体と思われる資料はSの略号を冠して、以下に説明する。

#### a. 接合資料 (図版28・29、第132図)

J 1～J 8は須恵器、J 9・J 10は土師器である。出土場所を見ると不条理な接合の仕方もあるが、今はそのままで報告する。

J 1は蓋で、溝1とP<sub>1</sub>出土破片が接合した。1/2程が残存し、復原口径15.6cm、現存高2.2cm。

J 2は大形の蓋である。45号住居跡床下層と46号住居跡埋土中の破片が接合した。1/6残存で復原口径18.8cm、器高4cm、縦径3cmを測る。

J 3は大形の壺B IIIである。40号住居跡カマド内、45号住居跡埋土中、46号住居跡埋土中2片の計4片が接合し、2/5程の残存となって、口径18.8cm、底径11.8cm、器高5.15cmに復される。高台は断面で見る限りにおいては貼り付けではない。少し瘤みを持って、外端部が接地する。

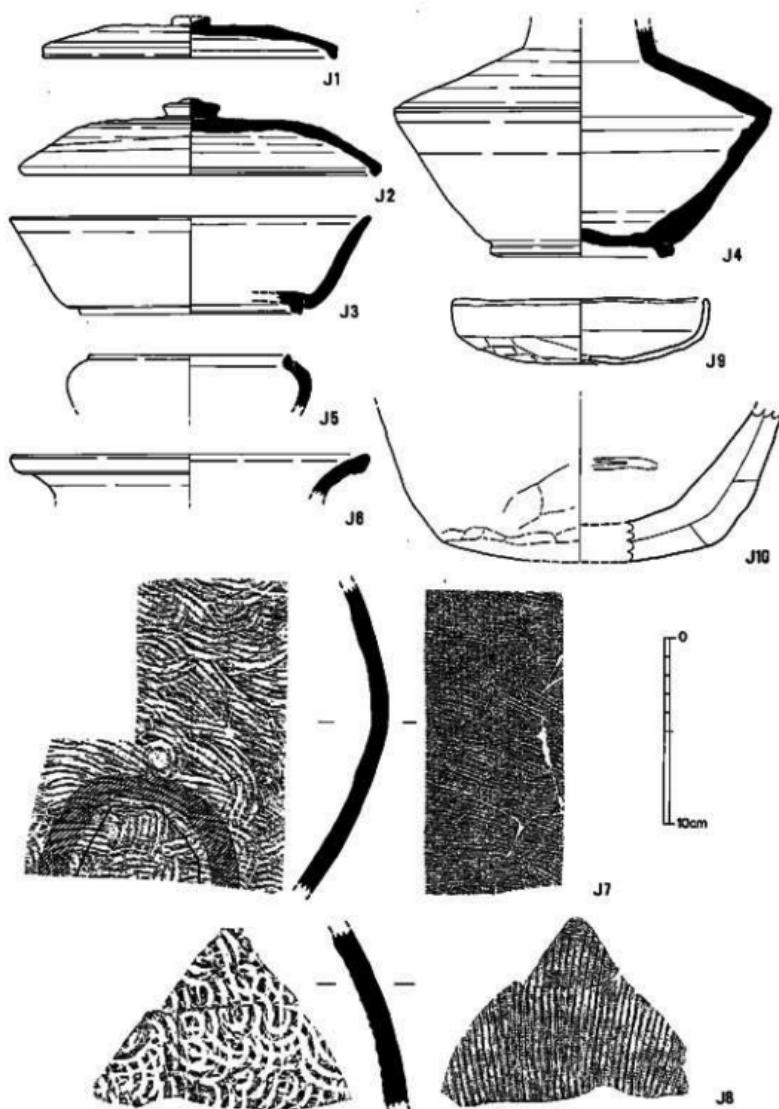
J 4は長頸壺の胴部である。溝1内はI群の南東部の所から出土した破片と、8号住居跡東側の搅乱部分より出土したものとか接合している。胴部の3/5程が残存し、底径8.6cm、胴径20cm、現存高12.3cmになる。胴部は算盤玉状を呈して均整のとれたプロポーションをなす。胴屈折部分の接合痕は明瞭である。

J 5は壺である。11号住居跡埋土中、12号住居跡床面、17号住居跡床下層の破片が接合し、これは12号住居跡床面、38号住居跡カマド内の接合した破片と同一個体である。全体で1/2程の残存になる。復原口径10.6cm、胴径13cm。硬質であるが瓦質に近い焼成を示す。

J 6は壺で、4号住居跡埋土中、6号住居跡床面の破片が接合した。1/6程の残存となり、復原口径19cm。胎土はやや粗い。

J 7は壺胴部の破片である。8号住居跡の床下層P<sub>1</sub>から出土した12～16×23cmの平面台形をなす破片の一片中央に、直径6cmの半円形に近い打欠き(穿孔)があって、その外側には打欠き部分を取り囲むように約1.5cm幅で帯状に黒く変色した部分がある。この打欠き部分が39号住居跡床下層から出土し、きれいにはめ込むか如く接合したのである。おそらく底部に近い部分の破片であろうが、何のための打欠き(穿孔)か、また黒い弧状帶が何故にあるのかはわからない。焼成がややあまく、黒灰色を呈する。

J 8は44号住居跡埋土中と溝2から出土した破片が接合している。大きめの壺の胴部片であ



第132図 接合資料実測図 (J 1 - J 10) (1/3)

る。外面は年輪と直交する平行線を刻んだタタキ板を、内面は粗々しい同心円当具を用いている。J 9は坏C<sub>1</sub>で46号住居跡埋土中、47号住居跡床下層の破片が接合した。約1/2残となり、口径13.8cm、器高3.45cmに復される。

J 10は壺の底部になろうか。かなり分厚い器体である。溝1とP73の破片が接合した。

次の同一個体資料の中で報告するSE 1(59-10)とSE 2(57-9)、SF 4(D 9-19)とSF 8(P 93)も接合した個体であるが、他の破片があるので次項にて説明する。また、J 11は墨書きがあるので併せて説明する。

b. 同一個体資料 (図版28、第133~137図)

主に須恵器の壺の破片の中で、互いに接合はしなくとも明らかに同一個体が割れてバラバラになったものと思われる資料がある。厳密さを期すならば胎土分析が必要であろうが、いまは視覚的に捉えた判断によって説明してゆく。なお、SAのみが土師器で、他は全て須恵器の壺である。各器体の特徴を述べたあと出土箇所を列記しておく。

SA——土師器壺の肩部であるが、外面は須恵器の成形に用いる格子目タタキが施される。内面はケズリ及びなでである。胎土は砂粒が多く、焼成は良好。内外とも化粧土をかけ、また、内面には墨らしき黒いものが付着し赤橙色~茶褐色を呈する。

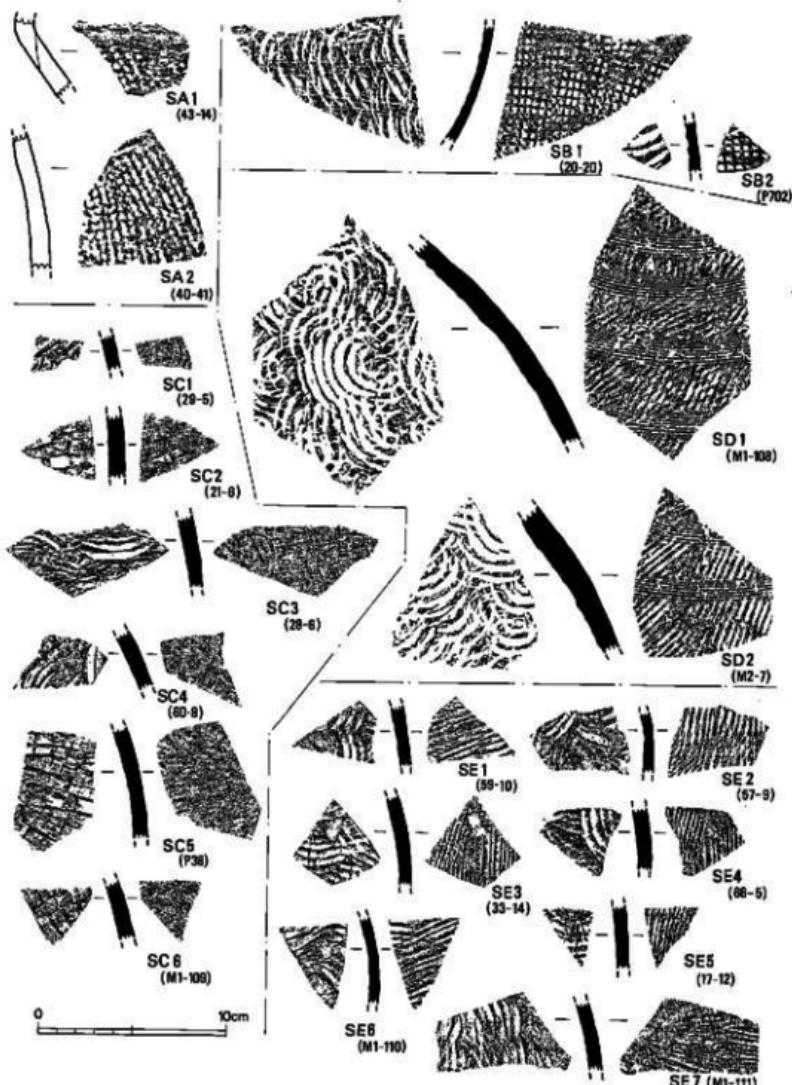
- ・43号住居跡埋土中 1点 (SA 1)
- ・40・41号住居跡上面 1点 (SA 2)

SB——外面は格子目タタキ、内面は同心円の上をともに部分的になでている。胎土は精良で焼成も良好。淡灰色を呈する。

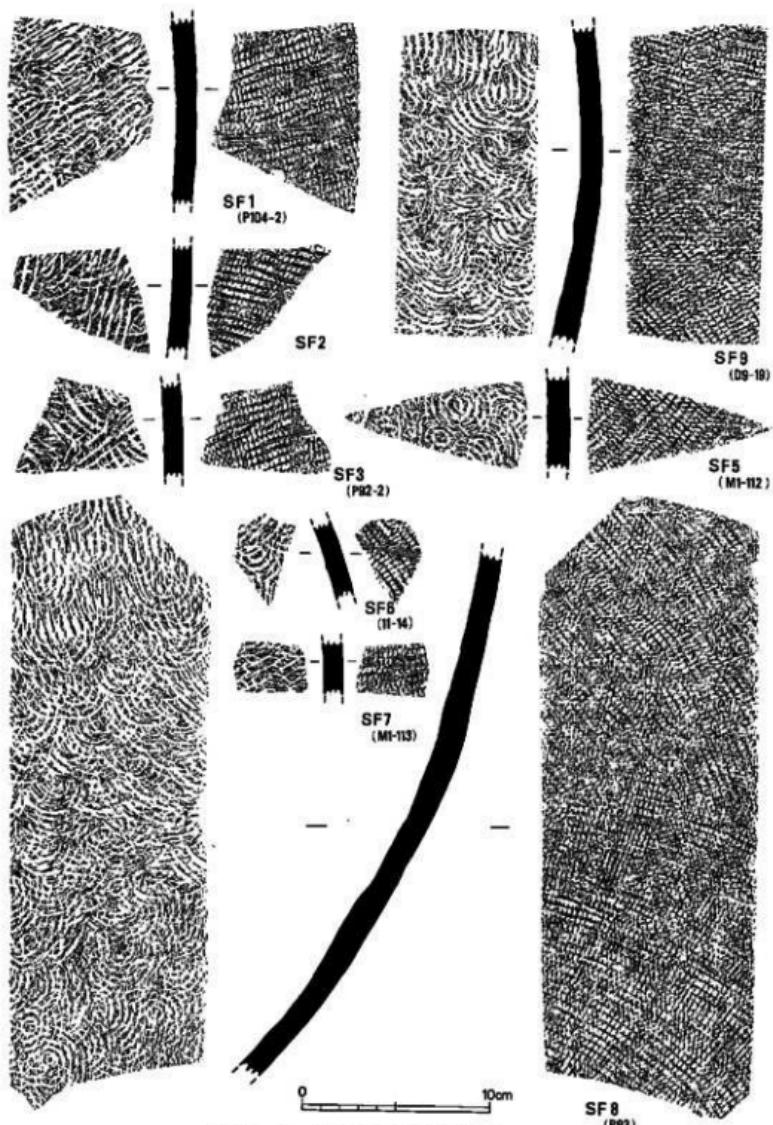
- ・20号住居跡床面 1点・床下層 2点、埋土中 2点 (SB 1)
- ・P702 (30B号住居跡P 3か) 1点 (SB 2)

SC——内外面とも格子目を刻んだタタキ板あるいは当具を用い、SC 3・4は内面に同心円が残る。同一個体中の成形具の使い分けと思われる。外表面はほとんどなで消し、内面もなでてはいるものの格子目・同心円が残る。微砂粒を多く含むが良質な胎土とされる。焼成はややあまく、破損面で見ると器肉中心部が茶色でそれを挟んで青灰色に変色している。内外とも黒灰色を呈す。

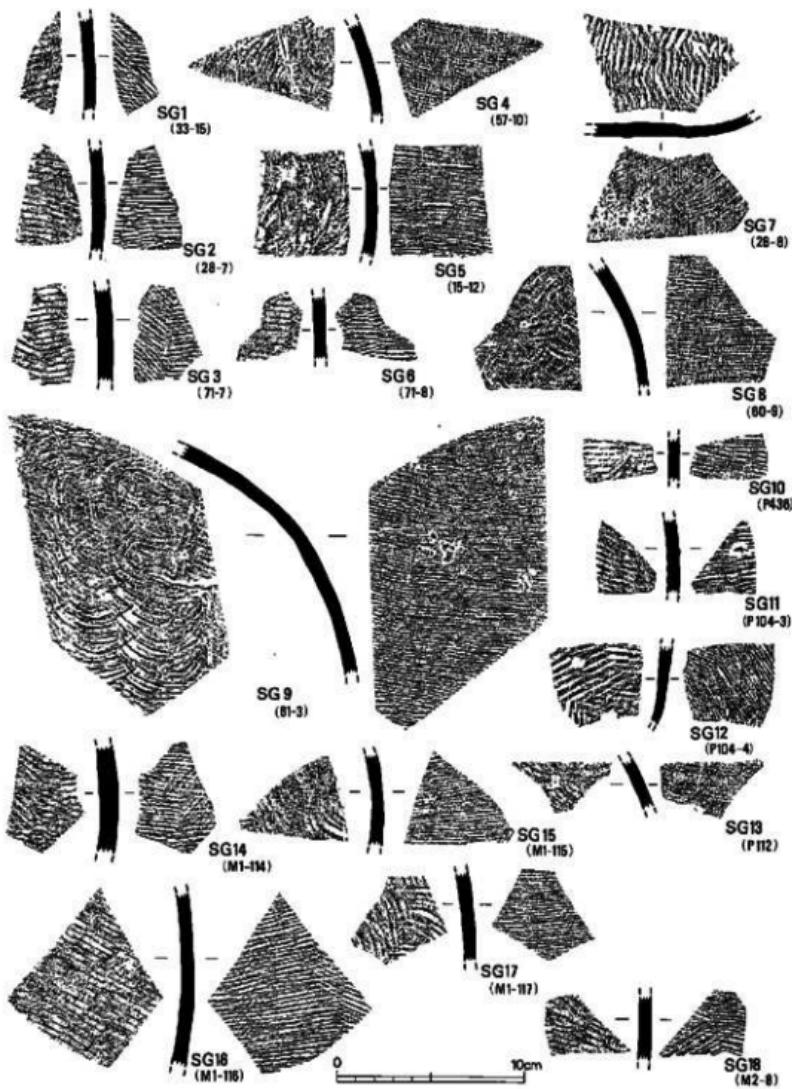
- |            |           |              |           |
|------------|-----------|--------------|-----------|
| ・29号住居跡埋土中 | 1点 (SC 1) | ・溝1          | 1点 (SC 6) |
| ・21号住居跡埋土中 | 1点 (SC 2) | ・P38         | 1点 (SC 5) |
| ・28号住居跡埋土中 | 2点 (SC 3) | ・28号住居跡北側    | 1点        |
| ・60号住居跡埋土中 | 1点 (SC 4) | ・20・21号住居跡周辺 | 1点        |



第133図 同一固体資料実測図① (1/3)



第134図 同一個体資料実測図② (1/3)



第135図 同一個体資料実測図③ (1/3)

**SD** —— 外面は木目と直交して平行の割みを入れたタタキの上に 2 cm 程の間隔をおいてカキ目を施し、内面は粗々しい同心円である。胎土は砂粒が多く粗い。焼成は良好、外面は淡灰色～灰黒色。内面はくすんだ灰色を呈す。

- ・溝 1 3点 (SD 1)
- ・溝 2 1点 (SD 2)

**SE** —— 外面は平行タタキの上を擦過もしくはなで、内面は同心円の当具痕である。SE 3 と 5、それに図示を省いた溝 1 出土品に同心円の弧線と直交する条線を刻んだ当具を使用したものがある。胎土中に砂粒を多く含み、焼成は良好。黒ずんだ灰色をなす。SE 4 の内面は黒色で墨が付着したものらしい。SE 1 と 2 は接合した。

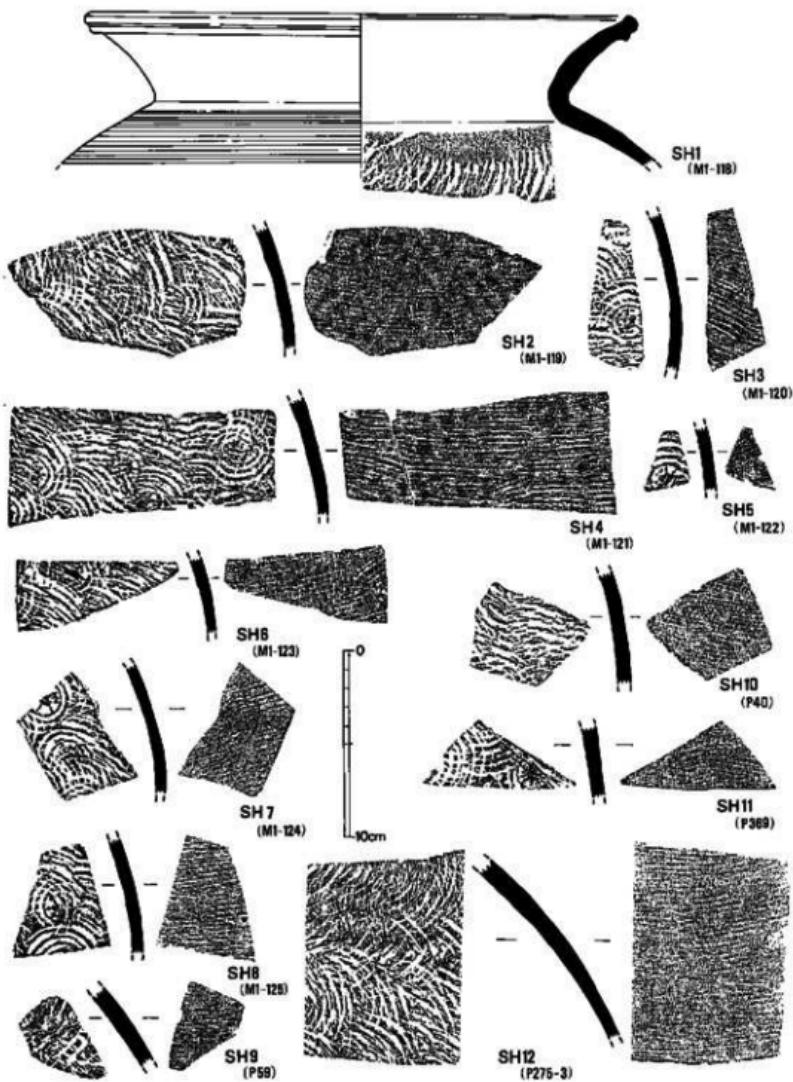
- |             |           |            |             |
|-------------|-----------|------------|-------------|
| ・59号住居跡 P 1 | 1点 (SE 1) | ・66号住居跡埋土中 | 1点 (SE 4)   |
| ・57号住居跡埋土中  | 1点 (SE 2) | ・17号住居跡埋土中 | 1点 (SE 5)   |
| ・33号住居跡床面   | 1点 (SE 3) | ・溝 1       | 3点 (SE 6・7) |

**SF** —— かなり大形になる甕である。外面は木目と直交する刻目の平行タタキゆえ擬格子状となる。内面は同心円及び平行刻目の二種類がある。内外ともその上を所々なでる。胎土は精良、焼成堅微、外面は赤茶色と黄灰色が色分かれしている。内面は黄灰色で所々灰被りとなる。SF 4 と 8 は接合した。

- |            |             |          |           |
|------------|-------------|----------|-----------|
| ・11号住居跡埋土中 | 1点 (SF 6)   | ・P92     | 1点 (SF 3) |
| ・9号土壇      | 1点 (SF 4)   | ・P93     | 1点 (SF 8) |
| ・溝 1       | 2点 (SF 5・7) | ・9号住居跡付近 | 1点 (SF 2) |
| ・P104      | 5点 (SF 1)   |          |           |

**SG** —— 外面はやや細目の平行タタキ、内面は平行と同心円の双方の当具痕を見る。同心円の弧線にたいして直交する条線の刻まれた例がある (SG 5・9・10・13)。胎土良質で焼成ややあまい。外面は黒色～黄灰色を呈し一部が灰被りとなる。器肉は小豆色を呈し、部分的に灰青色を挟み込んでサンドイッチ状になった所がある。

- |                |               |           |                |
|----------------|---------------|-----------|----------------|
| ・33号住居跡埋土中     | 1点 (SG 1)     | ・溝 1      | 33点 (SG 14~17) |
| ・28号住居跡埋土中・床下層 | 各 1点 (SG 2・7) | ・溝 2      | 1点 (SG 18)     |
| ・71号住居跡埋土中     | 2点 (SG 3・6)   | ・P104     | 2点 (SG 11・12)  |
| ・57号住居跡埋土中     | 1点 (SG 4)     | ・P112     | 1点 (SG 13)     |
| ・15号住居跡埋土中     | 1点 (SG 5)     | ・P436     | 1点 (SG 10)     |
| ・60号住居跡カマト内    | 1点 (SG 8)     | ・P116付近攪乱 | 1点             |
| ・61号住居跡床面      | 1点 (SG 9)     |           |                |



第136図 同一個体資料実測図④ (1/3)

**SH** —— 焼成不十分の個体で、外面は横平行タタキでその上をなで、内面は粗い同心円当具痕を有しその上を部分的にならる。同心円の中心には10角形程になる星形を刻んでいる破片を9点程見る (S H 3 ~ 8 · 11 · 13etc)。胎土はやや粗く、内外とも黄茶褐色を呈する。

- ・ 29号住居跡埋土中 1点 (S H16) · P275号 1点 (S H12)
- ・ 18号住居跡床面 1点 (S H19) · P369 1点 (S H11)
- ・ 19号住居跡床面 1点 (S H18) · P40 1点 (S H10)
- ・ 44号住居跡埋土中 1点 (S H17) · P59 1点 (S H9)
- ・ 溝1 33点 (S H1 ~ 8) · 20 · 21号住居跡周辺 2点
- ・ 4号掘立柱建物P<sub>2</sub> (S H13), P<sub>4</sub> (S H15), P<sub>6</sub> (S H14) 各1点

**SI** —— SHと同様に焼成不十分のもので、底部付近の破片が多い。外面は横平行タタキとカキ目を施している。内面は平行及び同心円の当具痕の上を強くなれて消している。胎土・色調等は SHとあまり変わらないが、外面がやや黒ずんでいる。SHと同一個体の底部付近という可能性も無いではないが断言しない。

- ・ 15号住居跡埋土中 (S I 1) · 床下層 (S I 2) 各1点
- ・ 18号住居跡床面 1点 (S I 3) · 36号住居跡埋土中 1点 (S I 5)
- ・ 24号住居跡下層 1点 (S I 4) · 溝1 2点 (S I 6)

以上のはかに、図示しえないけれども上記と同様に同一個体と思われる破片があるので列記しておく。全て須恵器である。

- SJ** —— SGの口縁部～肩部の破片となるかもしれない破片である。
- ・ 71号住居跡埋土中 1点
  - ・ 溝1 1点

**SK** —— 鉢か壺にならうと思われる。胎土はきわめて精良。

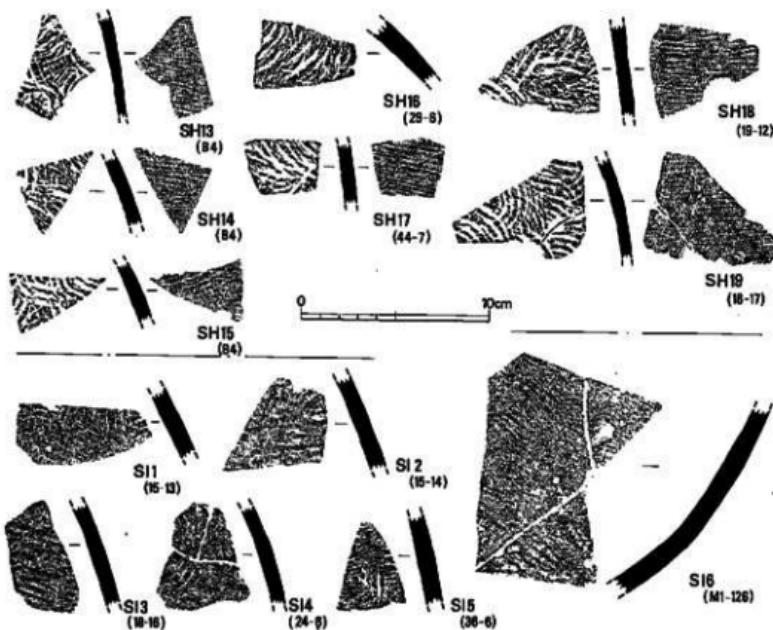
- ・ 20 · 21号住居跡周辺 1点
- ・ 溝2 2点

**SL** —— 壺であろう。外面に黄褐色の自然釉がかかっている。

- ・ 37号住居跡カマド周辺 1点
- ・ 溝2 2点

**SM** —— 鉢か壺にならう。底部付近の破片である。P92は内外に墨が付着している。

- ・ 9号住居跡埋土中 1点
- ・ P92 2点



第137図 同一個体資料実測図⑤ (1/3)

## ii. 墨書土器 (図版29、第138図)

土師器に墨書のあるものが2点出土している。

・P111は18号住居跡の埋道を切っている搅乱土壤の北端に存したピットである。この中から壺C<sub>1</sub>にあたる土師器が出土した。口縁の一部を欠失するもほぼ完形に復される。平らに近い底部から内湾しつつ立上り、一度外湾気味になって又内湾する。口唇部内面は少しくぼむ。外底部は擦過に近いケズリ、口縁周辺は回転なしで、内底部から全体にミガキが施される。胎土は良質、焼成良好、黄褐色を呈する。器壁は薄手である。口径15.2cm、器高3.1cm。

墨書は内底面の端に近い所にあり、四文字があるも下の二文字は判読できない。「財マ□□」となる。「財マ」の字は達筆である。

なお参考までに、財部という姓は、太田亮「姓氏家系大辞典」(1963年、角川書店)には次の記述を見る(3359ページ)。

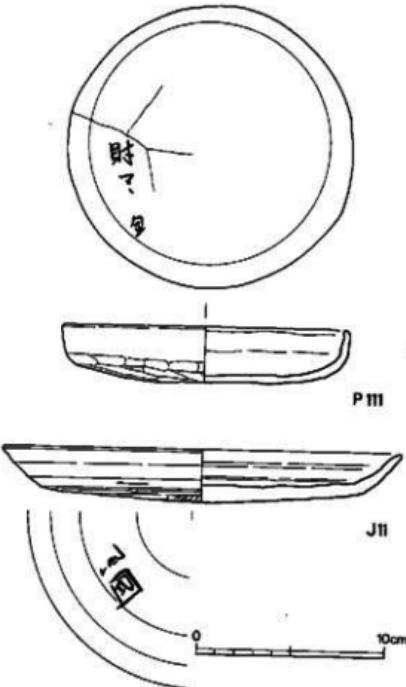
9 築前の財部 川辺里戸籍に、財部阿麻充、また宝亀元年七月紀に「築前國嘉麻郡人財部字代、白雉を獲て、爵・人ごとに二級、稻五百束を賜ふ」など見え、又貞觀十一年十月十五日の文書に財部貞雄などあり。

J 11は12号住居跡床面・埋土中、13号住居跡床面、34号住居跡埋土中出土の破片が接合している。この3軒は(古)34→12→13(新)と切合っており本来がどの住居跡に伴うものか断じえない。接合して1/2程の残存となる。土器器皿A IIにあたり、厚めの底部からやや内湾気味に外上方へ立上る。外底部は回転ヘラ削り、内底部はなで、口縁周辺は回転なでを施すが、そのあとで器体全面にミカキを施す。化粧土をかけている為、所謂丹塗磨研の如くになる。外底部の一部にはタクキに似た圧痕がある。

胎土はきわめて精良、焼成良好。赤褐色を呈す。復原口径21cm、器高2.9cm。

墨書きは外底部のやや外寄りに二字ある。二字ともに不鮮明で、特に第一字は殆どわからないが、「口國」となる。地名のかな人名なのかかも不明とせざるをえない。

なお、この塔ノ上遺跡では硯としてつくられた土器は出土していない。しかし、須恵器の皿・蓋・高环を硯に転用したと思われる個体がいくつか存在した。既に説明してきた48-1, 20-1, 4-5, 9-4, 33-1, 12-2, 16-4等である。



第138図 墓古土器実測図(1/3)

### iii. 焼塙土器 (図版30~34, 第139~143図)

実測した破片が111個で、実測に耐えぬ破片を含めると630片を数えた。しかし、大半が小破片であるため全体の物理的量はそれほどではない。

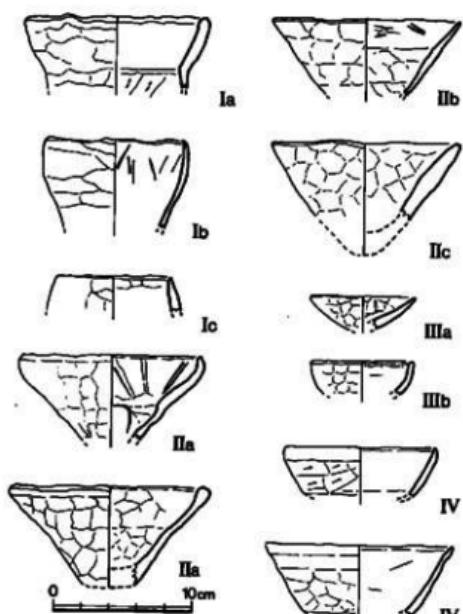
全形を知れる資料が少なく、口縁が波打ったりしているので、図示した個体の口径・器体の傾き等は絶対的なものとは言い難い。それでも大略四つの形態に分けられる。口径は全て復原値である。

III・IV類については焼塙土器とするにやや躊躇もあったが、まず熱を受けていること、その結果としての器表面のあり方等から、やはり焼塙土器であろうと考えた。

I類 尖底の長胴形態になると思われる。口縁の形状でa・b・cに分ける。

Ia：口縁が内湾し、直下で明瞭な屈折部を持つもの。IIaに比すれば口縁が直立に近い。

口縁部は7~10mmの厚さで、口径10~14cmになる。



第139図 焼塙土器分類図 (1/4)

Ib：明瞭な屈折を持たずに大きく内湾した口縁形態を示す。器肉が厚い所でも6mmをこえない。

Ic：Ibに近い形態になるのかも知れないが、判別しうる部分においては口縁が内傾したままなので分けておく。

II類 尖底の鉢形をなす形状で、口縁のあり方で3つに分ける。

IIa：内湾する口縁で、体部との境に屈折部を持つ。口径12~16cmで、器肉は7~13mmとやや厚い。

IIb：IIaに比して器肉の薄いもので屈折部の最も厚い所でも7mmをこえない。内湾の度合も弱く、口唇部の尖る例が多い。

IIc：屈折部を殆ど持たずに外反するが、やや内湾気味に

なる例もある。口縁先端は尖る例が多い。あるいはI類のように円筒形の器形になるものもあるかも知れない。器肉が厚く、8mm以上で16mmになる個体もある。

III類 小型で鉢形(a)と壺形(b)がある。

IIIa: 口径7~9cmで器厚5~8mmになる。

IIIb: 口径5~10cm程度で器厚3~10mm。

N類 器形は通常の土器類C・D・Fに同じものであるが、強烈な熱を受けた個体があるのを参考として2点のみ掲げる。あるいは焼塙と関係のない別個の用途に供された可能性もないではない。

I~III類においては以下の如き特徴を持つ。

成形 — 器壁断面を見ると薄い粘土帯を貼り合わせたものが多い。内面に布目痕を持つものはよく説かれている如く、布を巻きつけた棒状体に粘土を貼り付けての成形と思われる。

調整 — 内面に布目痕を持つものはそのままで未調整と、一部に布痕の上をなでたものがある。他の大多数は木の小口・布・指頭によるなで又は擦過を施す。タタキ板状の原体で擦過した例もある。外面は全て指押えによるなでであり、指紋が見える個体もある。

胎土 — 砂粒を殆ど含まず精良なもの、かなり大きな砂粒・鉱物片を混じえるものがあり、後者には金雲母片・角閃石・赤褐色を含むものがある。

焼成 — おむね良好であるが、全ての個体が二次火熱を受け、強烈な熱でもって器表面がボロボロになったり剝離したりしている例が多い。

色調 — 茶褐色・黄橙色・赤橙色・灰白色・黄褐色・赤褐色・黄灰色などいろんな色あいを示す。熱変により器肉中心部が青灰色に変色したもの、あるいは器表が赤桃色になったものは特徴的といえる。

以下に各住居跡に説明していくが、図示しえなかった破片の数は確認した点数であり、見落しのあることを考慮すればまだふえる可能性はある。

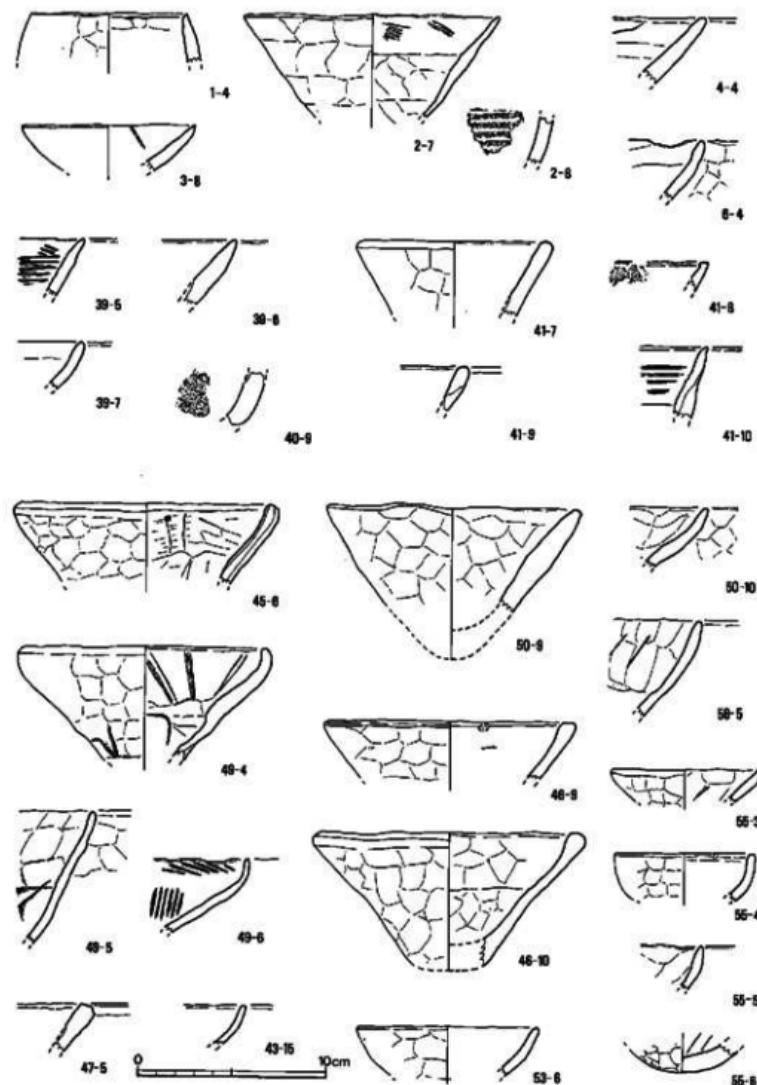
・1号住居跡(1~4) 4はIcで約1/6が残存し、口径8.2cm。床面から出土した。他に床面から3片、カマド内から1片が出土している。

・2号住居跡(2~7~8) いずれも床面から出土している。7はIIbになる精製品で口縁内面にかすかに布目痕が見える。1/4残で口径は13.4cm。8は内面にタタキに似た擦過度がある。別に床面から5片が出土している。

・3号住居跡(3~8) 床面出土でIIIaになる。1/5程の残存で口径9cm。他に埋土中から3片、床下層から2片が出土した。

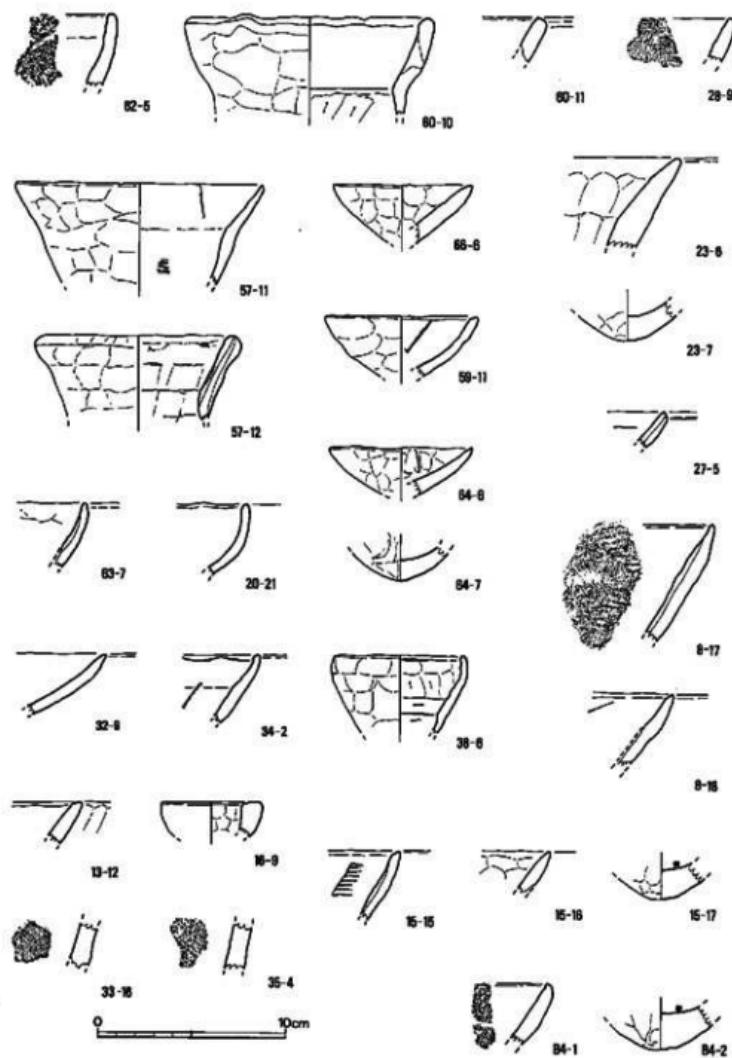
・4号住居跡(4~4) IIcにあたる。埋土中の出土で、別にも1片がある。

・6号住居跡(6~4) IIbになろう。床面から出土している。



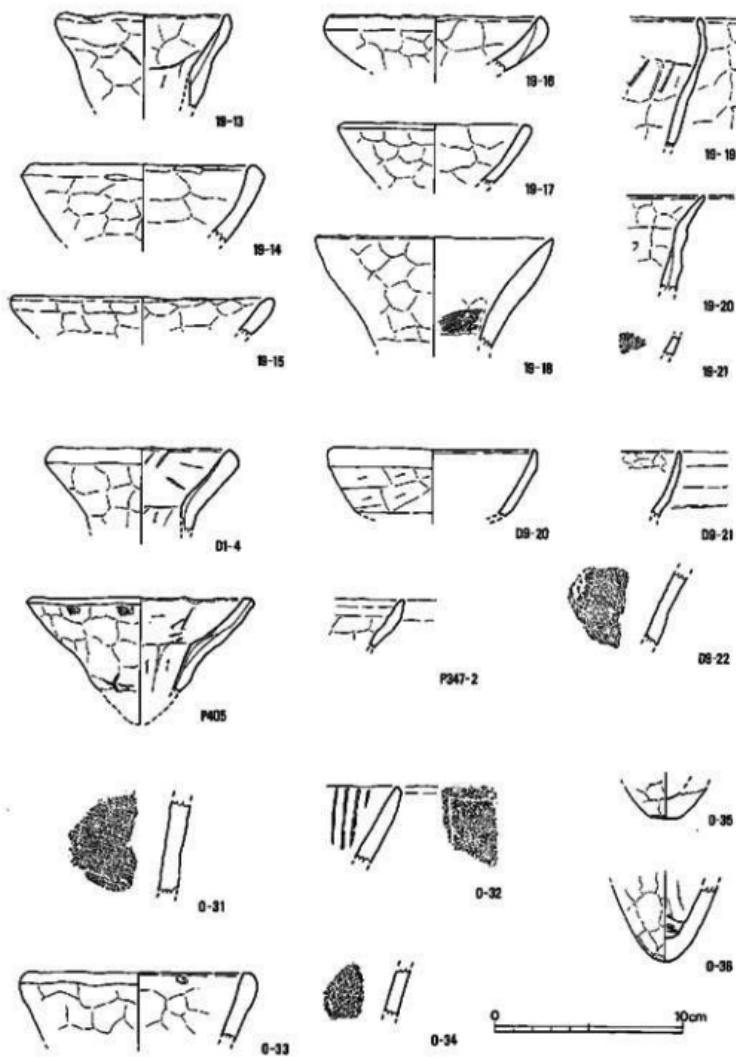
第140図 焼塙土器実測図① (1/3)

- ・40号住居跡 (40-9) 9は内面に布目痕があり、織目は1cmあたり10×10本である。さらに図示しえないがカマドに3片、埋土中11片、床下層3片の計17片が出土している。
- ・39号住居跡 (39-5~7) 5・7はIIb, 6はIIcになろう。7は精製品である。5は床下層、6・7は埋土中の出土で、別に床下層2片、埋土中に布目痕の破片1を含めて12片があった。
- ・41号住居跡 (41-7~10) 7・9はIa, 8がIc, 10がIIcになろうか。7~9はかなりの熱を受けている。7は1/6残存で口径9.2cm。4点とも埋土中に存した。さらにカマド内に3片、埋土中に11片、床下層に2片があった。
- ・42号住居跡 図示しえない破片が埋土中に4片あった。
- ・45号住居跡 (45-6) IIaとしておくが、あるいはIaかも知れない。約1/6が残り口径13.4cm。口縁・内面に布目らしきものが一部見える。埋土中出土。あと2片が埋土中にあった。
- ・48号住居跡 図示不可の破片2がカマド内から出土している。
- ・49号住居跡 (49-4~6) 4がIIa, 5・6をIIbとする。4・6の口縁はかなり内湾し袋状に近い形状となる。4は口縁内面にワラ様の圧痕らしき条線が見える。カマド内にあり1/5残で口径12.4cm。5は床下層、6は埋土中にあった。6の傾きは本来もう少し立つものか。別に埋土中に2片がある。
- ・50号住居跡 (50-9~10) 9はIIc, 10はIIbかIIaになろう。9は1/2程が残り口径13.4cm。ともに埋土中出土。床面4片、床下層3片、埋土中4片が別にある。
- ・58号住居跡 (58-5) IIbで埋土中から出土した。
- ・47号住居跡 (47-5) IIaになろう。床下層から出土した。他に床下層に3片、埋土中に1片がある。
- ・46号住居跡 (46-9~10) ともにIIbでカマド内から出土した。高熱を受けてもろく、器表の剥離がみられる。9は1/4残で口径12cm。10は1/5が残り口径13cm、器高7.3cm程度になる。別にカマド内3片、埋土中13片、床下層6片がある。
- ・43号住居跡 (43-15) IIIbになるか。カマド内の出土。埋土中から5片が出土している。
- ・53号住居跡 (53-6) IIIbでカマド内から出土している。約1/6の破片で口径9.4cm。別にカマド内に1片、埋土中に1片がある。
- ・55号住居跡 (55-3~6) 3がIIIa, 4・5がIIIbになる。3は1/6残で口径7.6cm。4も1/6程の残存で口径6.8cm。6はかなり丸みをもった厚手の底部である。3~6ともに強烈な熱を受ける。精製品。別にカマド内に11片、埋土中に1片がある。
- ・52号住居跡 図示しえない破片がカマド内から1片、床下層から2片出土している。
- ・51号住居跡 カマド内に2片、埋土中に3片あるも図示しない。
- ・44号住居跡 カマド内2片、埋土中1片があるも図示にたえない。
- ・61号住居跡 埋土中に1片があった。



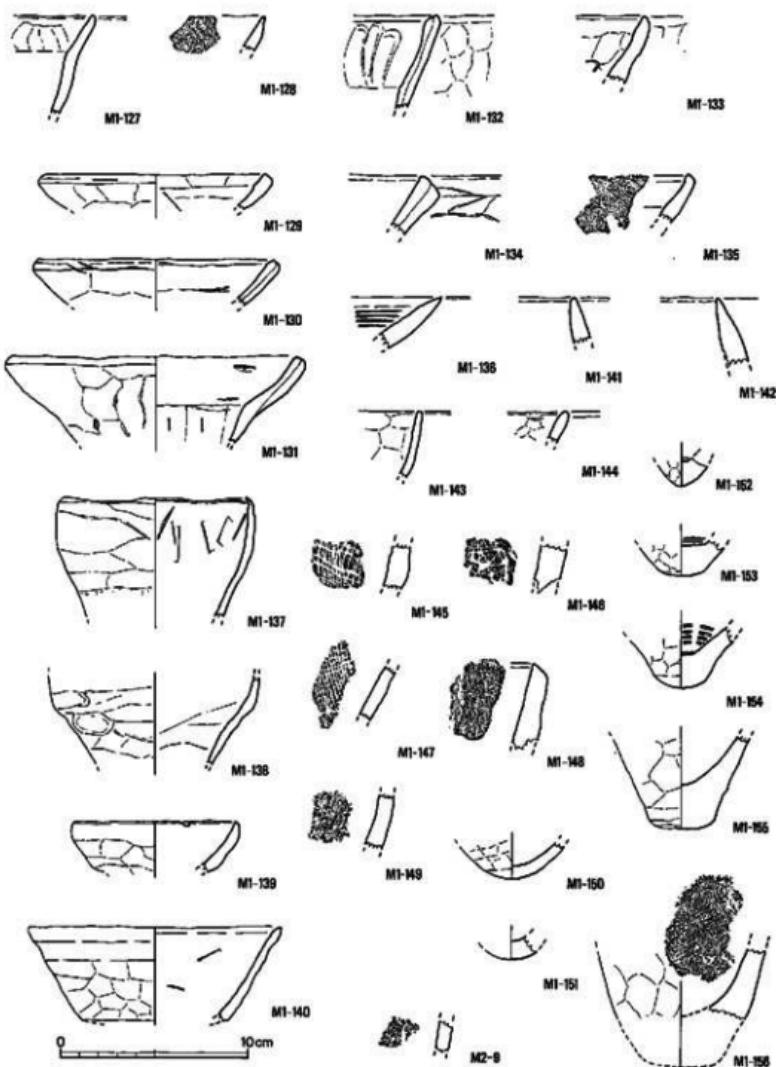
第141図 焼塙土器実測図② (1/3)

- ・62号住居跡（62-5） Iaで内面に布目を持つ。布目は1cmあたり9×8本である。埋土中の出土で、別に埋土中に3片、床下層に1片がある。
- ・60号住居跡（60-10・11）ともにIa。10は1/6程が残り口径12.6cm。屈折部より下は強いなで上げを施す。カマド内出土。11は埋土中の出土。別に埋土中に4片がある。
- ・57号住居跡（57-11・12）11はIIbで1/6程が残り口径13cm。12はIaと同じく約1/6の残存で口径10cm。ともに埋土中から出土した。他にカマド内に3片、埋土中に2片、P<sub>1</sub>に1片が出土している。
- ・66号住居跡（66-6）やや分厚い器体でIIIaになろうか。1/5程が残り口径7.2cm。床下層出土で、別に2片がある。
- ・29号住居跡 埋土中から6片の出土をみるが図示しえない。
- ・28号住居跡（28-9）Iaで内面に布目痕がある。布目は1cmあたり9×9本。埋土中の出土。埋土中にあと3片、床下層に2片がある。
- ・23号住居跡（23-6・7）6はきわめて分厚い器体でIIcになる。埋土中出土。7は床下層の出土で別にもう1片がある。
- ・69号住居跡 床下層から3片が出土している。
- ・27号住居跡（27-5）5は床下層出土。IIaになろうか。他に3片がある。
- ・59号住居跡（59-11）IIIaになる破片で1/4が残り、口径7.2cm。埋土中に存した。他にカマド内に2片、埋土中に1片がある。
- ・25号住居跡 埋土中に1片が存したのみである。
- ・63号住居跡（63-7）IIaになろう。かなりの熱を受けている。埋土中の出土。埋土中に4片、床下層に1片が別にある。
- ・64号住居跡（64-6・7）いずれもカマド内出土で別に5片、埋土中に5片があった。6はIIIaになり口径7.6cm、約1/5残。6の底部は7のようになるのだろう。
- ・22号住居跡 埋土中に4片が存した。
- ・35号住居跡（35-4）内面に布目を持ち、それは1cmあたり7×6本と粗い。床下層の出土。あと埋土中に2片がある。
- ・21号住居跡 床面1片、埋土中2片、床下層1片があるも図示にたえない。
- ・20号住居跡（20-21）口縁の歪みが著しい。Ibになろうか。床面出土。さらに床面1片、カマド内1片、埋土中7片、床下層2片がある。
- ・8号住居跡（8-17・18）2点ともIIcにあたる。かなりの熱を受けていてもらひ。17の内面はタクキ板原体に似た工具で擦過しており、平行沈線が見える。17はカマド内、18は埋土中出土。カマド周辺に3片、埋土中に6片、床下層に3片、P<sub>1</sub>に1片、P<sub>4</sub>に3片がある。
- ・30号住居跡 床面に1片、埋土中に1片が出土した。



第142図 燃塙土器実測図③ (1/3)

- ・36号住居跡 埋土中から4片が出土した。
- ・32号住居跡 (32-9) IIbとしてよいか。床下層出土で、別に3片、埋土中に2片がある。
- ・10号住居跡 床下層に4片が存した。
- ・33号住居跡 (33-16) 厚い器体の内面に布目痕がある。1cmあたり13×9本の縦目である。埋土中出土で別にもう1片ある。
- ・24号住居跡 床下層に2片があった。
- ・19号住居跡 (19-13-21) 住居跡の中では最も出土点数が多く、実測したのも多い。13はIa, 19・20がIb, 14-17がIIbになろうか。13は1/5残で口径8.6cm。14は1/6残で口径11.6cm。赤褐色粒を多く含んでいる。15は1/4残で口径13.4cm。16も1/6残で口径11.2cm。17はあるいはIIIbとすべきか。1/6残の口径10.4cm。18は1/6残で口径10cm。20は口縁の歪みが著しく、残存部では図のように外反するが、本来は直立に近いものと考える。21の布目は0.5cmあたり4×5本である。13・16・17・20・21が床面、他は埋土中の出土で、別に床面10片、埋土中12片、P<sub>1</sub>に1片があった。
- ・18号住居跡 カマド内に2片、床面に4片(布目1を含む)、埋土中に7片があった。
- ・71号住居跡 埋土中に8片存したうち、2片に布目があった。
- ・73号住居跡 カマド付近に3片があり、うち1片は布目を持つ。
- ・11号住居跡 布目痕を持つ1片が埋土中から出土している。
- ・38号住居跡 (38-6) やや小型にすぎる感もあるが1/6程の残存で口径6.6cm。床面出土。IIbになろう。
- ・34号住居跡 (34-2) IIbになろうか。埋土中の出土である。
- ・12号住居跡 床面から2片が出土している。
- ・13号住居跡 (13-12) Iaになろう。埋土中から出土し、他に3片ある。
- ・15号住居跡 (15-15-17) 15・16はIIbになろうか。ともに埋土中の出土。15は内面に刷毛目風の擦過がある。17は内面にわずかに布目が見える。床下層の出土。別に埋土中に4片、P<sub>1</sub>に2片がある。
- ・16号住居跡 (16-9) やや小型にすぎるので、別途の用に供されたものかもしれない。IIIbになる。1/4の残存で口径5.4cm(外径)。埋土中出土。別に埋土中に2片、床下層に1片がある。
- ・17号住居跡 カマド内に2片、埋土中に1片が存した。図示しない。
- ・14号住居跡 床面とカマド内に1片ずつがあった。
- ・37号住居跡 カマド周辺に2片、埋土中に1片があった。
- ・2号掘立柱建物 P<sub>1</sub>から1片が出土している。
- ・3号掘立柱建物 P<sub>1</sub>から3片が出土している。



第143図 焼塙土器実測図④ (1/3)

- ・4号掘立柱建物 (B 4-1-2) 1はP<sub>1</sub>から出土した。IIcになろうか。2はP<sub>2</sub>から出土しており、内面にはかすかに布目痕がある。外底面には擦痕が2つある。
- ・7号掘立柱建物 P<sub>4</sub>から1片が出土している。
- ・9号土壙 (D 9-20-22) 20は土師器坏Fであるが、高熱を受けて赤変してもらい。参考として掲げる。1/7残で口径10.6cm。21はIbになろう。22の布目痕には布のよじれた部分が見られる。1cmあたり8×9本の織目をなす。別に破片1がある。
- ・1号土壙 (D 1-4) Iaになろう。約1/6が残存し口径9.2cm。口縁内面に黒い部分があり墨の付着かと思われる。別に1点がある。
- ・溝1 (M 1-127-156) 総数203片のうち30片を図示する。132-135・148がIa, 137-138がIb, 141・142がIc, 129-131がIIa, 127がIIb, 128・136がIIc, 139・144がIIIb, 140がIVとなる。布目のあるものについては、1cmあたり128-135が11×12本、145が4×7本、147が6×5本、148が10×16本、149が8×8本、156が11×10本となり、146は糸の乱れが著しい。口徑を復しうるものは、129が1/7残で11.4cm、130が1/5残の12.4cm、131が1/6残の14cm、137が1/5残の10cm、139が1/6残の8.6cm、140が1/5残の13.4cmとなる。134は口縁外側が青灰色に変色している。140はつくりは土師器坏Fと同じである。150-156の底部は150-152と153-156とでは器形が異なるのであろう。
- ・溝2 (M 2-9) 2片があった。9は1cmあたり14×12本の布目を持つ。
- ・ピット (P 405, P 347-2) 図示しるのは2点である。P 405はIIaで、1/3程が残存し口径11cm。器高は7cm位になろうか。外面には指紋がよく見える。P 347-2はIIbか。赤色顔料を塗布したような痕跡がある。別に9個のピットから10片が出土している。
- ・その他 (O-31-36) 31・32は20・21号住居跡周辺から出土した。ここには別にあと11片が出土している。31の布目は1cmあたり8×9本。32は外面に直角に刻線が入る。33は27・59号住居跡周辺での出土になり、約1/6残存し口径9.4cm。34は8号住居跡東側の搅乱部から出土し、布目は1cmあたり8×5本を数える。35・36は所属不明の底部片である。他にも所属のわからなくなつた破片が12片ある。

以上をふまえてまとめておく。

#### 1. 確認総数 630片

同一遺構内で明らかに同一個体と見える破片は1としたので、破片数としてはまだ多くなる。また、焼壙土器を全体の出土土器の中から抽出する際に見落しがあったとすれば、この数値は当然大きくなる。逆に、遺構をこえて、例えば特に住居群と溝1との間で同一個体の破片を共有することがあると思われるので、そうすると差し引いた数値を捉えねばならない。ただ、似た個体は識別しえても、熱変で器表の調整が殆どわからない破片の多いことからすれば、同一

個体と認定することは至難のことである。これらを勘案するならば、上記の630という数値は、やや謬謬は覚えるものの、ある程度の増減をふまえつつも、個体数に近いものであると考えておきたい。

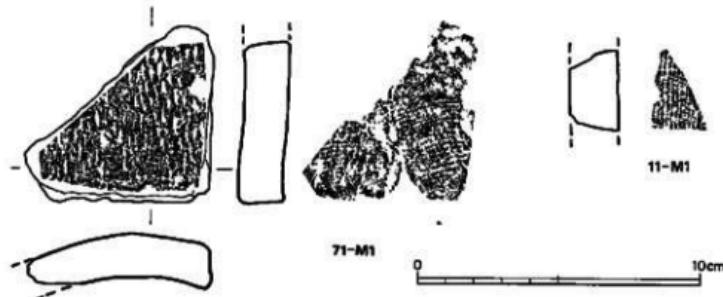
2. 布目痕のある土器は42片であった。
3. 住居跡は61軒から371片が出土した。床面・カマド内という住居に伴っていたとしてよい出土状況にあるものが32軒あり、半数以上にのぼる。
4. 粗窓のある破片は少數を見るが、粗窓の入った破片は見ない。

#### IV. 瓦 (図版35, 第144図)

小破片が2点出土している。いずれも平瓦である。

・71号住居跡 (71-M1) 現存長6.2cm, 幅6.6cm, 厚さは1.6cmを測る。外面は繩目、内面は布目の圧痕があり、いずれもその上をなでている。砂粒が目立つものの胎土は良質で、焼成も良好。黄白灰色を呈す。埋土中から出土した。

・11号住居跡 (11-M1) 現存長が3.1cmしかない小破片である。厚さは1.8cm。外面はなでらしい。内面には布目痕がある。胎土・焼成・色調ともに71-M1とかわらないが、同一個体にはならないだろう。埋土中から出土した。



第144図 瓦実測図 (1/2)

## V. 土製品 (図版35, 第145図)

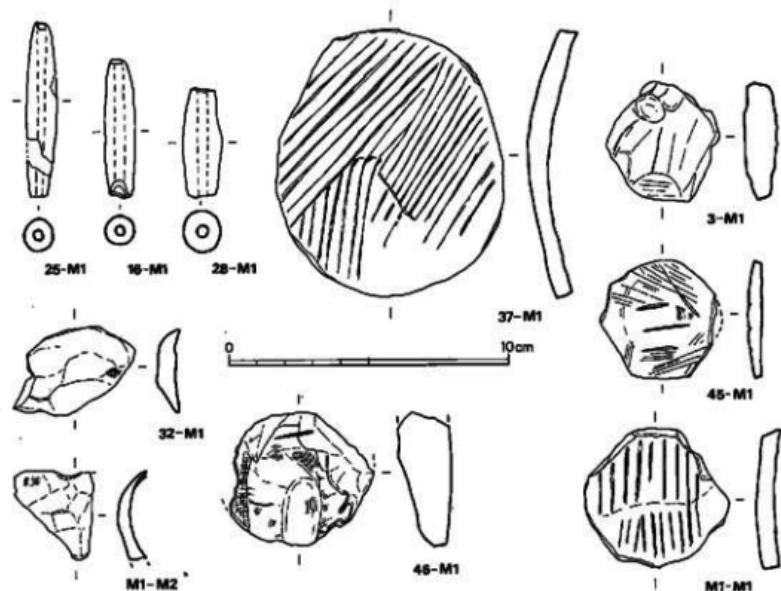
### a. 土錐

3点があり、いずれも管状土錐である。

- ・28号住居跡 (28-M1) 中央部に膨らみがあり、指整形痕が明瞭に残る。長さ3.8cm, 径1.5cm, 重さ7.5g。淡茶褐色を呈する。埋土中出土。
- ・25号住居跡 (25-M1) 長さ6.15cmと長めで、径1.2cm, 重さ8.5g。暗黄灰色を呈す。埋土中の出土。
- ・16号住居跡 (16-M1) 長さ4.9cm, 最大径1.2cm, 重さ5.4gを測る。色調は淡茶褐色。床面から出土した。  
(木下)

### b. 円盤状土製品

土器器の破片を再利用して円形盤状に整形したものである。4点がある。



第145図 土製品実測図 (1/2)

- ・3号住居跡（3-M1） 表裏ともなでを施しているが磨滅が著しい。甕胴部再利用の精製品である。やや不整形ながら直径4~4.4cm、厚さ1.1cmを測る。床下層の出土。
- ・45号住居跡（45-M1） 五角形に近い形状をなす。直径3.9~4.2cm、厚さ0.5cm。薄いことから坏底部を再利用したものか。外面は刷毛目の上をなす、内面は擦過に近いなどである。周縁は手ズレの如き磨れがみられる。精製品。埋土中の出土。
- ・37号住居跡（37-M1） 甕の再利用で、断面は湾曲している。横円形気味の平面形で長径9.5cm、短径8.1cm。外面は木の小口を使っての擦過の上をなす、内面はヘラ削りのあとなどである。外面の2/3程に煤と炭化物が付着し、周縁の一部にも煤が付いている。粗製。カマド内から出土。
- ・溝1（M1-M1） 甕胴部片の再利用で粗製品。直径4.9~5.1cmを測る。外面は擦過、内面はヘラ削りのあとなどで、全体に磨滅している。  
(伊崎)

### c. 不明土製品

用途不明の土製品で、3点とも土師器である。

- ・46号住居跡（46-M1） 粘土塊を押し潰して成形したものらしい。表面はやや膨らみを持ち扁平ではない。表面はなでており、指痕痕と布目痕の一部がある。布目は粗い。裏面は擦過に近いなどを施す。現存長5.3cm、厚さ1.9cm。埋土中の出土。
- ・32号住居跡（32-M1） 広葉樹類の落葉の如き湾曲した形状である。内外ともなでを施す。現存長4.8cm。埋土中から出土した。
- ・溝1（M1-M2） 図示した断面はスプーン状の湾曲をなすが、左右ともに広がっていくので全形はわからない。内外ともなでを施す。  
(伊崎)

## VII. 石製品 (図版36、第146~147図)

### a. 紡錘車

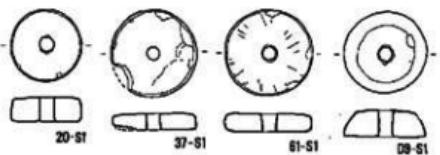
4点のいずれも滑石製である。

- ・61号住居跡（61-S1） 備面は丸味を有す。孔を中心に放射状の繊細な引きキズがある。このキズ状の痕跡は裏面にも若干あるが、これがこの紡錘の使用と関連があるか否かは不明だが、装飾にしては繊細すぎる。径4.48cm、孔径0.7cm、厚さ0.95cm、重さ38g。床面出土。
- ・20号住居跡（20-S1） 1.35cmと厚味があり、側面も直角に近い。径3.78cm、孔径0.7cm、重さ37.5g。カマド内上部より出土した。
- ・37号住居跡（37-S1） 4点のうちでは薄手であり、若干欠損する。径4.55cm、孔径0.68

cm、重さ34g。床面ピット内

出土。

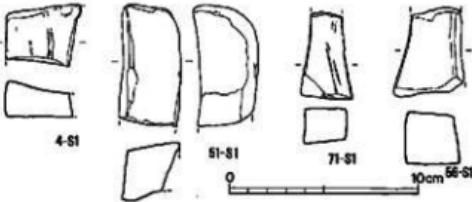
- ・9号土壙(D 9-S 1) 側面が傾斜し台形を呈す。径4.4cm、孔径0.7cm、厚さ1.45cm、重さ44.5g。



### b. 砧石

手持ちの延石が4点と、大形品が3点ある。

- ・4号住居跡(4-S 1)  
上・下の研砥面を有す。砂岩製。埋土中の出土。
- ・51号住居跡(51-S 1)  
4つの研砥面を持つ仕上延で  
厚さ3cm。埋土中出土。
- ・56号住居跡(56-S 1)  
断面が正方形に近いもので、やはり4つの研砥面を有す。床面から出土した。



第146図 石製品実測図①(1/3)

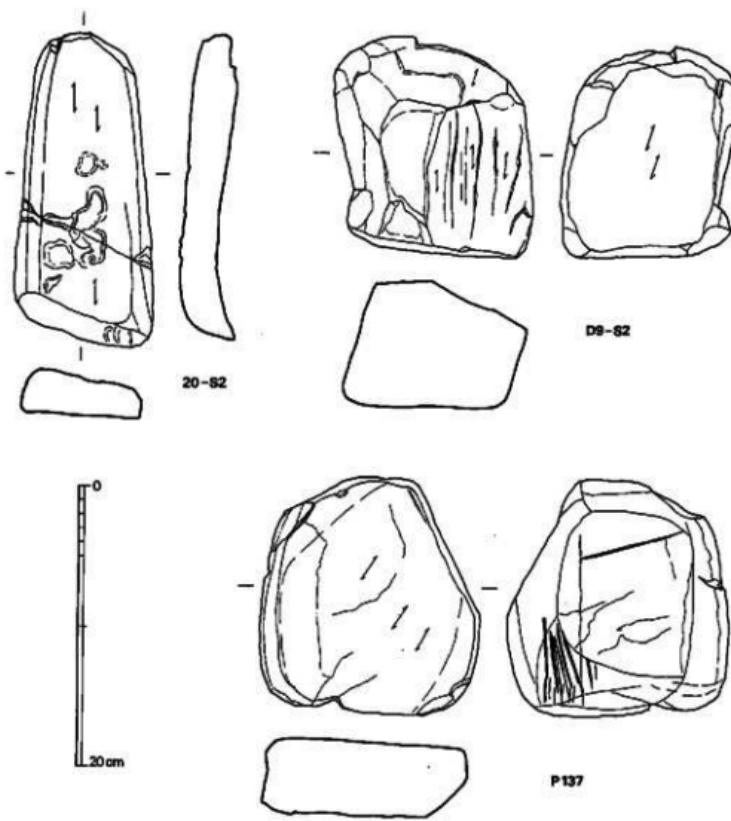
(木下)

- ・71号住居跡(71-S 1) 一面に細い溝状の凹みがある。埋土中の出土。
- ・20号住居跡(20-S 2) 砧石というより擦り石に近く片面のみを使用している。現存長22.2cm。片岩系の石材でP137のそれと同じである。
- ・9号土壙(D 9-S 2) 方柱状の大形品で、現存長15cm。硬質砂岩。
- ・P137 17号住居跡のすぐ西にあるピットである。全体としては扁平に近いが分厚い。現存長17cm。片面には条痕風の擦痕がある。片岩系の石材。

なお、石製品としてよいのかわからぬが、軽石が次の所より出土している。

- ・27号住居跡床下層 1個
- ・20号住居跡床下層 1個
- ・8号住居跡埋土中 3個
- ・32号住居跡床下層 1個
- ・19号住居跡床面 1個
- ・P92 (11号住居跡のすぐ西隣りにある) 1個

(伊崎)

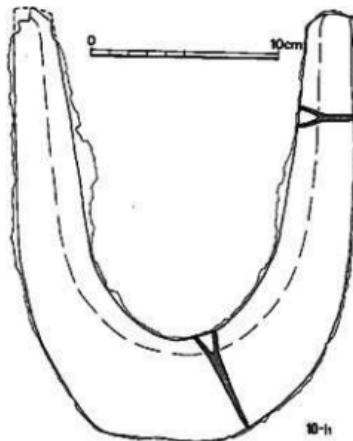


第147図 石製品実測図② (1/4)

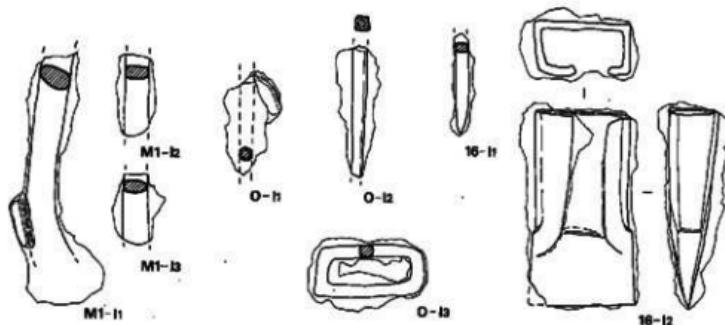
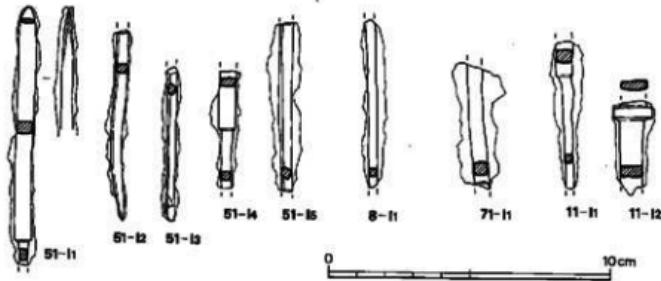
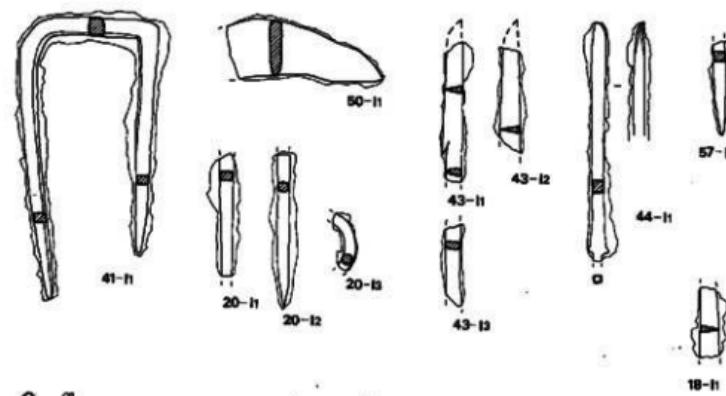
## VII. 鉄製品 (図版37・38, 第148・149図)

全体量としてはあまり多くない。

- ・41号住居跡（41-I 1） 用途不明のコの字形をした製品である。基部は幅4.9cmで、そこから8.1cmと9.8cmの長さに延び、先端は尖っている。床下層から出土した。
- ・50号住居跡（50-I 1） 鐵の刃先に似るが刃がない。現存長5.5cm。埋土中出土。
- ・43号住居跡（43-I 1～I 3） 鐵の破片で、1・2とも片刃になる。別に茎片が2点ある。
- ・51号住居跡（51-I 1～I 5） いずれも鐵の破片である。1は両丸造で身が太い。他は身及び茎の破片で全形を伺い知れない。3と5は床面、他は埋土中から出土した。
- ・44号住居跡（44-I 1） 鐵の破片で身長が8.1cm、逆刃はないらしい。
- ・57号住居跡（57-I 1） 鐵の茎である。
- ・20号住居跡（20-I 1～I 3） 1・2は鐵の茎と思われる。3は環状品の一部であるか何であるかは不明。床面から出土している。
- ・8号住居跡（8-I 1） 鐵の茎で、細身である。床面出土。
- ・10号住居跡（10-I 1） 大形のU字形鋤先ではほぼ完形品である。錆化著しい。全長22.8cm、基部の幅18cmを測る。床面から出土した。
- ・18号住居跡（18-I 1） 片刃式の鐵の破片と思われる。埋土中出土。
- ・71号住居跡（71-I 1） 锈が著しくてよくわからぬが、鐵の茎であろう。
- ・11号住居跡（11-I 1～I 2） 両方とも鐵の破片と思われる。
- ・16号住居跡（16-I 1～I 2） 1は鐵の茎である。2は小型の斧で、全長6.9cm、刃幅3.8cm、抜部幅3.4cmを測る。いずれも床面から出土した。
- ・溝1（M1-I 1～I 3） 形状・用途不明の製品である。いずれも丸味を帯びた扁平棒状になるらしいが、全形を予想できない。
- ・その他（O-I 1～I 3） 1・2はともに鐵の茎で、71号住居跡の南、8号住居跡の東側にある擾乱部分から出土している。3は用途不明で、長軸3.9cm、短軸1.8cmの長方形環状をなす。28号住居跡と9号土壙の中間付近からの出土。



第148図 鉄製品実測図① (1/3)



第149図 鉄製品実測図② (1/2)

なお、スラッグが次の所から出土している。(図版38)

- |                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| ・40号住居跡床下層          | ・8号住居跡床面, P 6   |
| ・50号住居跡埋土中          | ・9号住居跡埋土中       |
| ・58号住居跡床面           | ・71号住居跡カマド内     |
| ・57号住居跡床面・埋土中 各1点   | ・22号住居跡埋土中      |
| ・32号住居跡床下層          | ・溝1             |
| ・33号住居跡カマド内・埋土中 各1点 | ・P77, P144, P 2 |

また、ふいごの羽口かと思われる破片が5点程出土しているものの、小破片ゆえ全形はわからぬ。出土遺構のみ列挙しておく。

- |                  |                      |
|------------------|----------------------|
| ・21号住居跡床下層       | ・P461 (11号住居跡の東6m付近) |
| ・71・73・74号住居跡床下層 | ・不明                  |
| ・溝2 (I群の東側)      |                      |

## VIII. 植物種子

桃の実のものかと思われる核が、12号住居跡カマド左袖上面と13号住居跡床面とから出土している。各々とも1個ずつである。

なお、現実に残存する資料ではないが、土器器の表面に圧痕として桜のみえる例がある。実測した土器についての報道は本文中に触れたが、それ以外で桜痕のある破片を出土した住居を、気付いたものだけであるが列挙しておく。

- |   |     |
|---|-----|
| ・40号住居跡埋土中                                    | 壺外面 |
| ・29号住居跡埋土中                                    | 壺外面 |
| ・8号住居跡埋土中                                     | 壺内面 |
| ・13号住居跡埋土中                                    | 甕内面 |
| ・17号住居跡床面 (壺外面), 床下層2 (壺外面・鍋? 内外面), P 4 (甕内面) |     |
| ・溝1   | 壺外面 |

## V. その他の遺構と遺物

前章まで奈良時代の遺構・遺物を説明してきた。それ以外に、先土器・縄文時代に属する石器・土器、中世期のビット・青磁、そして時期が明確にしえないものの恐らく縄文時代の所産であろうと思われるおとし穴状の土壙がある。以下にこれらを説明する。

(伊崎)

### 1. 土壙（おとし穴）

所謂おとし穴とされている土壙7基を検出した。2号のみが住居群中にあって他とは離れて存し、他は溝1・2の東側、外域とした所にある。D4~8についてはD7を要にD7・6・4とD7・8・5と層状に聞いて位置しているようにも見てとれる。7基ともに出土遺物が全くないため時期は不詳とせざるをえないが、あるいは、押型文土器・曾畠式土器の時期につくられたものかもしれない。

(伊崎)

#### 2号土壙（図版150図）

住居群のG群とI群の中間にある。平面形態は上端では隅丸長方形を呈する。規模は下端面積0.757m<sup>2</sup>、上端の長軸は116cm、短軸は74cm、下端の長軸は114cm、短軸は63cm。最大61cmの深さを計測する。底面は水平で小穴は存しなかった。壁面は垂直に立上る。埋土は自然堆積の様相を示している。長軸方位はN-77°-Eである。

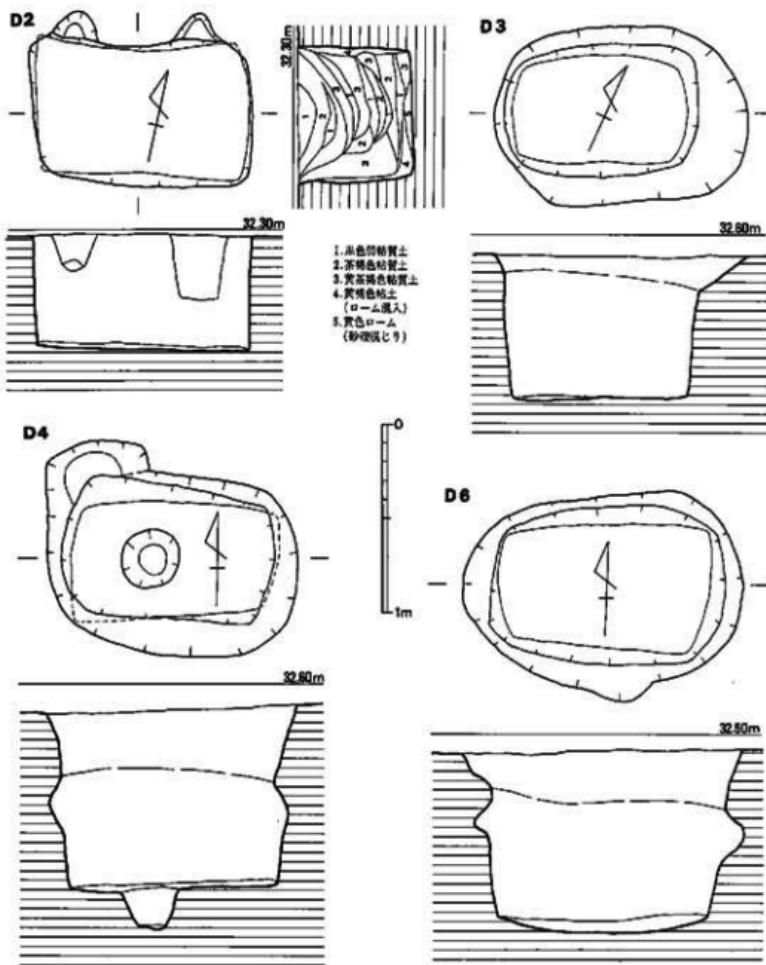
#### 3号土壙（図版39、第150図）

37号住居跡の南西側に位置する。平面形態は上端では梢円形で、下端では隅丸長方形を呈する。規模は下端面積0.483m<sup>2</sup>、上端の長軸は135cm、短軸は92cm、下端の長軸は92cm、短軸は56cm。最大76cmの深さを計測する。底面は水平で小穴は存しない。壁面は上端部分で緩やかな傾斜、以下底面までは垂直に立上る。上の方は崩落したのであろう。また最下部は砂利層にまで掘り込んでいる。長軸方位はN-66°-Eである。

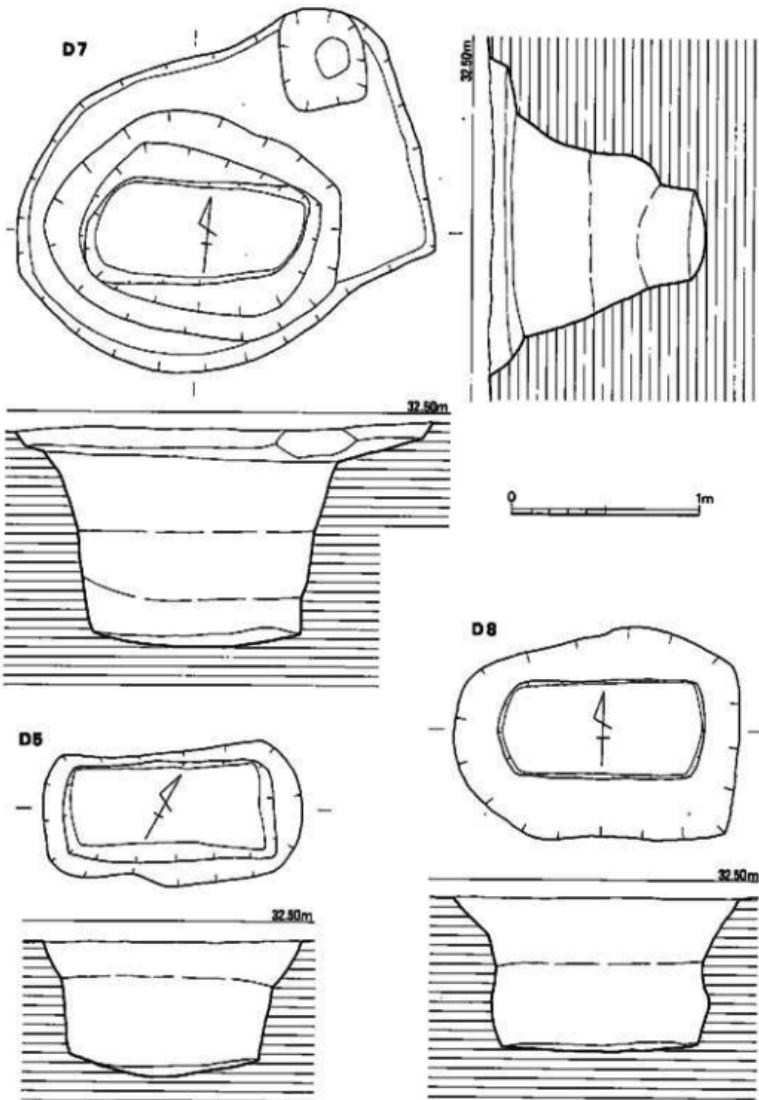
#### 4号土壙（図版39、第150図）

調査区東南端、D6の南10mに位置する。平面形態は上・下端とも隅丸長方形を呈する。規模は下端面積0.628m<sup>2</sup>。上端の長軸は133cm、短軸は96cm。下端の長軸は109cm、短軸は60cm、最大95cmの深さを計測する。底面は水平で西寄り中央部に径30cm、深さ26cmの円形の小穴が存する。

整面は略垂直に立上る。この土壤断面には中位は黄色砂層、下位は黄褐色ロームが見えていた。  
長軸方位は N-88.5°-E である。



第150図 2・3・4・6号土壤実測図 (1/30)



第151図 5・7・8号土壤実測図 (1/30)

### 5号土壌 (図版39、第151図)

D 6より南東14mで調査区東側に位置する。平面形態は上・下端共には長方形を呈する。規模は下端面積0.413m<sup>2</sup>、上端の長軸は138cm、短軸は71cm、下端の長軸は101cm、短軸40cm、最大の深さは73cmを計測する。底面は舟底状を呈し小穴は存しなかった。壁面は底面から中段上部までは垂直な立上りをなす。長軸方位はN-61.5°-Eである。

### 6号土壌 (図版40、第150図)

D 7の南西9mに位置する。平面形態は、上端は隅丸長方形を呈する。底面は長方形。規模は下端面積0.687m<sup>2</sup>、上端の長軸は149cmで短軸は102cm、下端の長軸114cmで短軸は65cm、最大の深さは96cmを計測する。底面は若干舟底状を呈し、小穴は存在しない。最下部は黄褐色の砂疊層にまで掘り込んでいた。壁面は急な傾斜で立上る。長軸方位はN-87.5°-Eである。

### 7号土壠 (図版40、第151図)

D 8より北西3mに位置する。平面形態は、上端は馬蹄形を呈し、下端は隅丸長方形を呈している。東側に張り出してテラス状になっているのは、どのような意味かわからない。規模は下端面積0.467m<sup>2</sup>、上端の長軸は193cmで短軸は169cm、下端の長軸は109cmで短軸は54cm、最大の深さは124cmを計測する。壁面は急な立上りをなす。底面は舟底状をなし、小穴は存しない。長軸方位はN-86°-Eである。

### 8号土壠 (図版40、第151図)

平面形態は上端が長椭円形、下端は長方形を呈する。上端の長軸は145cmで短軸は108cm、下端の長軸は111cmで短軸は51cm、最大の深さは74cmを計測する。底面積は0.483m<sup>2</sup>。底面は舟底状で小穴は存しなかった。壁面は若干東側がオーバーハング気味であるが、上段は緩やかに立上る。長軸方位はN-87.5°-Eである。

(宮田)

## 2. 先土器・縄文時代の石器・土器

### a. 石器 (第152図)

1は細石刃で、中間部である。一側縁に刃こぼれが観察される。長さ1.45cm、幅0.5cm、厚さ0.14cm。漆黒の黒曜石製。11号住居跡の東側で出土した。

2は寸詰まりの縦長剥片を素材とした石鎌で、剥片の末端を鎌先端とするが欠損している。両

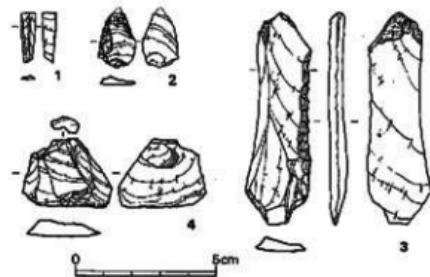
側縁のみに調整を加え、主要剥離面はそのまま残す。残存長1.9cm、最大幅1.3cm、厚さ0.3cmで黒曜石製。出土場所不明。

3は縦に長い剣片を素材とするスクレイパーで、片側に5cm程の直線に近い刃部を有す。上部には両側からノッチ状の調整を施し、縦形石匙を意図したのであろう。長さ7.5cm、最大幅2.25cm、厚さ0.7cm、重さ12.5gで安山岩製。溝1より出土したが、押型文土器と共伴するものであろう。

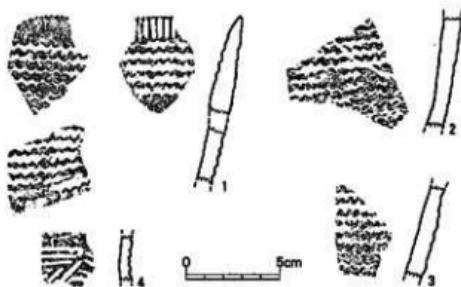
4は46号住居跡のカマド内より出土した幅広の剣片で、末端に使用した痕跡がある。風化しており、あるいは1の細石刃の時期であろうか。  
(木下)

### b. 土器 (図版41、第153図)

56号住居跡付近の下層より縄文土器がやまとめて出土した。旧地形からすると谷部にあたり、この谷部を覆う黒色土中よりの出土である。縄文時代早期の押型文土器と前期の曾畠式土器がある。



第152図 先土器・縄文時代の石器 (1/2)



第153図 縄文土器実測図 (1/3)

1～3は山形押型文土器であるが、山形文が密接し、かつ鈍いため、潰れた様な感じで一見精円文に見える。

1は外方に直に近く開く深鉢の口縁部から胴上半部の破片で、約15片ほどが同一個体と思われる。外面は口縁直下1.5cmほどが無施文で、それ以下を横位施文する。内面は口唇部から幅3～4mm、長さ10mmほどの継位沈線（原体刻文ではない）を配り、その下に5段の山形文を横位施文する。この施文から原体長を測ると3cmである事が判る。口唇部は沈線文の関係で尖り気味となる。器面の調整は内面下位ではヨコ方向の浅い条痕である。器壁は1～1.2cmほどで色調は暗茶褐色を呈す。胎土には黒雲母・長石を割合多く含む。

2も1と同様な原体による施文であるが、色調はやや明るい褐色を呈し、器面は荒れている。3片ほど同一の破片がある。

3は上半は1・2と同様の原体であるが、下半は細い山形文が見られ、二重施文の可能性がある。色調・胎土ともに1に類似する。早水台式であろう。

4はヘラ状工具による斜・直の短沈線文を施したもので、深鉢の胴上半部の小破片であろう。厚さ0.5cmと薄手で灰褐色を呈す。胎土に滑石は含んでいない。曾畠式土器でも古期のものである。

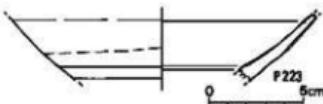
(木下)

### 3. 中世の遺物 (第154図)

P223から青磁の破片が出土した。P223は溝1・2の土層Cの所より西へ3m程で、溝2より南側にある。碗の体部片で1/5程が残存する。黄緑色の釉は内面は全面にかかるが、外面は下半をかき取っている。残存部分には内外とも何ら文様は施されていない。胎土は灰白色を呈し良質。焼成良好。

他にも中世期かそれ以降のピット等が存するのであろうが、遺物の出土したのは上記P223のみである。

(伊崎)



第154図 青磁実測図 (1/3)

## VI. 総括

### 1. 須恵器について

北部九州の須恵器研究は、小田富士雄氏による古窯跡群の発掘調査によって体系づけられてきた。

特に、八女古窯跡群、牛頭古窯跡群内の野添・大瀬窯跡、天觀寺山古窯跡群におけるⅢ期からⅣ期に及ぶ編年作業は北部九州の基準となっている。

八女古窯跡群では、塚ノ谷、菅ノ谷、中尾谷、立山山の各古窯跡の調査がされ、この地域の古墳群出土の須恵器と対比し、需給関係に迫っている。

筑前地方では、牛頭古窯跡群が知られ、Ⅲ期からⅦ期の編年図が示された。近年、当窯跡群は宅地造成、区画整理、ダム建設等に伴って多数の窯跡が調査され、Ⅶ期以降の窯跡の調査が増加し、資料の充実を図る段階にきている。

7世紀後半から8世紀代に至る供給地側の資料の増加に伴い、最大の需要地の1つにあげられる大宰府との需給関係を追求する基礎資料になろう。

この古窯跡群は、磐井の乱以後生産が開始され、律令体制成立以後まで連絡と続いている。

6世紀中頃から7世紀中頃までの時期は、窯の全長10数cmを測り、単独で1基存在する。また、須恵器の蓋環を中心にはラ記号が数多く施されている。

7世紀後半以降の時期は、窯の小型化、複数化が行われ、器種構成は蓋環中心となり、ラ記号も施されなくなり、須恵器生産体制の変革が訪れたものと考えられる。この時期は、大宰府の成立が考えられ、これに伴い須恵器の工人組織の再編成が行われたと思われる。また、この時期は律令社会体制内で貢納制度が完備し、須恵器は特定地域で集約的に生産され、諸国特産品として陶器の貢納が行われた。しかし、一般的な流通圏は一層もしくはその隣接地域に及んでいたと思われる。

塔ノ上遺跡の近辺では、花立山山麓、大平山山麓から朝倉町にかける山麓で生産されたと思われるが、調査がなされず不明な点が多い。断片的な資料ではⅢB期からⅣ期に位置づけられる。それ以降の資料は明確でなく、どの時期まで生産が続けられたかが、問題であろう。

塔ノ上遺跡出土の須恵器の年代決定をどう位置づけるかである。この時期は、供給側の窯の資料と需要地側の大宰府の出土遺物の内面から検討してみる。

塔ノ上遺跡出土の遺物は、蓋環・皿が主体をなし、その他の器種は極めて少ない。环蓋は口縁

端部が鳥嘴状をなし、中には丸味をもって仕上げられたものがある。天井部外面中央部には鉤状のつまみが付されるもの、扁平で中央が凸形状を呈するものがある。天井部外面の調整はヘラ削りを施したものが若干認められるが、ヘラ切り後ナデを施すものが主体を占める。これは調整の粗雑化する過程と考えられる。坏身は高台付きのものと、付かないものが存在する。高台は底端部よりやや内側に付され、断面は四角形状を呈し短い。溝1出土遺物の内には、高台が外方へ踏ん張るような形態をなし、7世紀後半代の高台付坏の系統を引くものと思われ、古い様相を示すものである。

癡資料の編年では上記の3地域（八女古窯跡群、牛頭古窯跡群、天鏡寺山古窯跡群）がある。

当遺跡と同時期の痴資料は、八女古窯跡群・管ノ谷1号窯跡、牛頭古窯跡群、大野城市石坂C1・C2号窯跡、春日市慈利2~8号窯跡、太宰府市向佐野1~3号窯跡が同時期であろう。

大宰府の出土遺物では8世紀前半から中頃をSK1280出土遺物、中頃はSD2340、中頃~後半にかけてSE1081、SK1084出土遺物に代表される。当遺跡と同時期のものは、中でも第83·84·85·87·90次調査で検出したSD2340において「天平6年」（西暦734年）、「天平8年」（736年）と読める木簡と共に多くの須恵器が出土した。出土した坏蓋は天井部外面はヘラ削り、口縁端部は断面三角形や丸味をもつものや小さくなつたものも出土している。坏身は高台を外方へ跳ねるものも極めて少なく、断面は四角形かそれに近いものが主体を占める。体部は丸く仕上げられたものもある。塔ノ上遺跡の須恵器は若干の調整の手法に粗雑化がみられ、若干の時期幅が考えられる。

従って、塔ノ上遺跡出土の須恵器はSD2340から次の段階にかけてのSK1084の時期であろう。

大阪・陶邑古窯跡群を参考にすると、中村浩氏によるIV型式2段階から3段階に比定し、IV型式といふのは蓋坏のかえりが消失する時期にあたり、当遺跡もかえりを有する蓋坏は出土していない。田辺昭三氏は、IV期のMT-21型式より新しい様相を示し、陶邑窯ではKM-16、TK-53窯に該当すると思われる。田辺氏はMT-21を8世紀前半に比定している。田中琢氏は平城宮跡の出土遺物の検討を行い、田辺氏の編年のIV期との境を784年から824年の間に限定した。これによるとTK-7型式は8世紀の後半代に比定される。

従って、塔ノ上遺跡出土の遺物は、大宰府の出土遺物、痴資料からみると、8世紀中頃から後半に至る50~60年程の幅に納まるものと思われる。

また、各遺跡の須恵器の占める割合は、牛頭窯跡群周辺部では6世紀代80~90%、7世紀代~8世紀代でも少なくとも70%で、大宰府内のSD2340出土の須恵器の割合は80%を越し、孰れも高い割合を示す。これに対して、甘木・朝倉地方の遺跡では、6世紀の立野遺跡で14%、7世紀代の千潟遺跡25%、中野遺跡は40%、当遺跡は13%にすぎず、須恵器の流通のあり方や

集落内での食器具としての使用度が低く、当時、須恵器は貴重品として取り扱われた可能性があり、地元での生産は現時点では可能性が薄く、牛頭古窯跡群からのルートを指摘しておきたい。

50~60年程の時間幅があり、その中で住居の建てかえが多数あるので、使用された土器の変遷も捉えられるが、いずれ改めて検討したい。

## 註

1. 福岡県教育委員会「野添・大浦窯跡群」 福岡県文化財調査報告書 第43集 1970
2. 北九州市埋蔵文化財調査会「天觀寺山窯跡群」 1977
3. 八女市教育委員会「城ノ谷窯跡群」 八女古窯跡群調査報告 I 1969  
八女市教育委員会「皆ノ谷窯跡群」 八女古窯跡群調査報告 II 1970  
八女市教育委員会「中尾谷窯跡群」 八女古窯跡群調査報告 III 1971  
八女市教育委員会「立山山窯跡群」 八女古窯跡群調査報告 IV 1972
4. 牛頭窯跡群内の慾利1・9号窯、神ノ前1・2号窯、中通A-1・B・C窯、平田D-1号窯などがあげられる。
5. 慾利2~8号窯、浦ノ原窯跡などがある。
6. 小田富士雄「九州の須恵器」『世界陶磁全集』2(日本古代)
7. 中村謙「甘木市に於る新発見の窯跡とその資料」 地域相研究II 1982
8. 大野城市教育委員会「牛頭石坂窯跡」 大野城市文化財調査報告書 第14集 1985
9. 春日市教育委員会「春日地区遺跡群」II 春日市文化財調査報告書 第14集 1983
10. 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」VI 1975
11. 九州歴史資料館「大宰府史跡一昭和52年度発掘調査概報」 1978  
森田勉「大宰府の出土品—土器・陶磁器—」 仏教藝術146 1983
12. 九州歴史資料館「大宰府史跡一昭和58年度発掘調査概報」 1983
13. 九州歴史資料館「大宰府史跡一昭和51年度発掘調査概報」 1977
14. 大阪府教育委員会「陶邑」III 大阪府文化財調査報告 第30輯 1978
15. 田辺昭三「陶邑古窯跡群I」 平安学園研究論集 第10号 1966
16. 田中琢「須恵器製作技術の再検討」『考古学研究』42号 1964
17. 春日市教育委員会・平田定幸氏より御教示
18. 福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告一8—」 1986
19. 福岡県教育委員会「干潟遺跡」I 福岡県文化財調査報告書 第59集 1980
20. 小郡市教育委員会「中勢遺跡」 小郡市文化財調査報告書 第33集 1986

この遺跡では窯の着工資料が数多くみられ、みくに丘陵内にも6世紀~7世紀にかけての窯跡が存在する可能性がある。

## 2. 焼塩土器について

1

万葉の歌人・山上憶良に貧窮問答歌がある（巻五 892）。

風まじり 雨降る夜の 雨まじり 雷降る夜は 術もなく 寒くしあれば  
堅塩を 取りつづしろひ 柏湯酒 うちすすろひて .....

伏いほの 曲いほの内に 直土に 露解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子  
どもは 足の方に 囲みて 膜ひ吟ひ かまとには 火気ふき立てず  
こしきには 蜘蛛の巣かきて 飯炊く 事も忘れて .....

里長が声は 渡屋處まで 来立ち呼ばひぬ .....

世間を憂しとやさしと思へども飛びたちかねつ鳥にしあらねば

第11

子らを思う歌（巻五 802, 803）とともに山上憶良の代表的な、著名な歌である。これの前半は貧者たる知識人の問い合わせられ、後半はそれに対する窮民の答えである。

山上憶良は齊明天皇の6年（660）に生まれ、大宝元年（701）には遣唐使小錄として渡唐している。帰国してやや間をおいて神亀3年（726）に筑前國守として赴任してきたという。その出自があまり明確でないところから渡来人脱も流布するが、いまはそれは大きな問題ではない。山上憶良が筑前に赴任して2年後には、万葉歌人としてこれまで著名な大伴旅人が大宰帥として着任する。ここに万葉の筑紫歌壇は、「遠の朝廷」を彩るに十分な陣容を整えたのであった。

さて、さきの貧窮問答歌は天平四・五（732・733）年頃に詠まれたものと推定され、その時には山上憶良は既に京（平城京）へ帰着していたもようである。しかし、歌の内容としては筑前國守時分に任務として国内各處を巡回する中で、その折に目にしたことを歌にしたとする可能性も無いとはいえない。実際に、筑前嘉麻郡にて撰定した歌があるのは（巻五、800～801）国内巡査の任務を遂行していた折のこととされている。

ともあれ、8世紀前半代に詠まれたこの歌に、

“伏いほの曲いほ”に起居し、 “かまとには火気ふき立てず こしきには蜘蛛の巣かきて 飯炊く事も忘れ”るほどの窮民（庶民）

“楚取る”里長

“寒くしあれば堅塩を取りつづしろひ 柏湯酒うちすすろひ”うほどにある貧しい知識人が登場する。貧者たる知識人とは山上憶良自身とされるが、窮民から租税を徴収する里長が登場するからには、それは心情の置換を行っての視座としてのみ首肯しうることであろう。

前置きがいさか冗長にすぎた。この歌を取り上げたのはほかでもない，“堅塩を取りつづしろひ”という語句が見えるからである。上に触れてきたことで重要なのは、貧しいとはいえる知識人層にある人の手もとには堅塩・柏湯酒があったという点である。それが困窮する民衆のもとにまでゆき渡っていたか否か、これは大きな問題である。

## II

塔ノ上遺跡では、製塩土器と総称されるうちの焼塩壺あるいは焼塩土器と言われる土器片が相当数出土した。

これら土器片は大半が細片であり、器体の全容を知りうる資料は殆どないと言ってよい。土器片は程度の差はあるにしても一様に二次火熱を受けており、また器表の剥離した例を多く見る。このことからこれらが焼塩処理を行うのに使われたのはほぼ間違いないとしてよいだろう。焼塩土器による焼き塩とは、ふつうには固型塩製造のためと言われるが、この塔ノ上遺跡での様相を見るにおいては、むしろ潮解性の除去に主眼を置いた焼き塩が多くなされていたように思えるのである。<sup>(註3)</sup>

## III

塔ノ上遺跡にて出土した（確認した）焼塩土器の総量は630片であり、この数値は個体数に置きかえてもさほど遠くないものと考えている。これの出土遺構・箇所ごとの内訳は次のようにあった。

- ・住居跡61軒から371片——床面44、カマド内54、埋土中207、床下層58、柱穴8
- ・建物4棟の柱穴5個から7片
- ・土壙2基から6片
- ・溝2条から205片
- ・ピット11個から12片
- ・その他遺構上面・攪乱部分等から29片

ここで注意されることは、焼塩土器を出土した住居が、总数74軒の実に82%にも及ぶこと、<sup>(註4)</sup>また住居内の出土箇所としても床面・カマド内といった、その住居に本来伴っていたとしてよいものが32軒にのぼるという点である。特にカマド内からの出土という事例が23軒において見られることは、焼塩処理を各住居のカマドで行っていたと考えざるを得ない。この塔ノ上遺跡へ運びこまれた塩は全てが固型塩であったとは考えにくいのである。<sup>(註5)</sup>

## IV

この塔ノ上遺跡の周辺で、岩塩あるいは塩泉があるとかいう話は聞かない。また、現在の朝倉郡全体（甘木市を含む）の小字名を見ても、塩に関係するような地名はないようである。<sup>(註6)</sup>

塩そのものの生産地は玄界灘沿岸のいざこかとして誤りないであろう。あるいは福岡市海の中道遺跡をその候補のひとつに挙げることも可なりである。筑後川の注ぐ有明海を考慮するには現時点では無理が多い。

玄界灘沿岸で生産された塩は、恐らく一度は大宰府に集荷され、その後に各地へ流通したのではないと思われる。この塔ノ上遺跡に運びこまれた塩も、確証はないが、大宰府から豊後に通ずる道に沿ってもたらされたとすることもできよう。

焼塩土器は塩といっしょに持ち込まれたのか、あるいは在地にてつくられたのか、この点は生産地・中継地で出土する土器を含めて胎土分析等をすすめてゆかない限り断定できないだろう。ただ、塔ノ上遺跡に関していえば、器形の様相を見るにおいては在地産のものもかなり存するのではないかという気がする。

#### ▼

この塔ノ上遺跡では、集落が機能していた期間（8世紀中葉～後半）を通じて、住居内のカマドにおいて焼き塩を行っていた。ある一時期に東西両群で10軒が存したとして、そのうち最低7軒程度焼き塩を行っていたことになるのである。それが固型塩を得るために、あるいは散状塩にするためか、いずれにしろこの集落で焼き塩を行っていたことについては、集落の性格に関連していろいろな解釈が可能である。

1. この塔ノ上集落が、塩の集散地的性格を帯びていたとする。

この集落へ持ち込まれた塩を、焼き塩処理したうえで周辺集落へ供給したものと考えるのである。このとき塔ノ上集落は、周辺に存したいいくつかの集落の核ともなるべき存在であったとせねばならない。

2. 逆に、駅家かそれに近い公的機関とすべき遺構（建物群）が調査区外の所に存したとして（あるとすれば北東方向であるが）、それに従属した集落とする。焼き塩はその公的機関へ供給されたと考えるのである。

3. この塔ノ上集落自体で塩を消費するために、各住居内で焼き塩を行っていたとする。この場合、(a) 日常の生活必要物資としての塩、(b) 工業用原料としての塩、(c) 祭祀関連の固型塩、といったことが考えられる。(b)の工業用で冶金に使用されたとすれば、スラッグが20点弱出土していることは注意すべきかもしれない。(c)の祭祀的様相という点は、集落・住居においての“まつり”の実態があまり明確ではない。ただし、(b)・(c)はむしろ遺跡自体が前記2の如き性格であったときの方が妥当性が高いであろう。

他にも幾つかの解釈が可能であろうが、ここではこれ以上言及することはせず、今後のさらなる事例增加をふまえての検討に期することとしたい。

註

1. 佐々木信綱編『新調万葉集』 岩波文庫版による。旧字体は新字体にかえた。
2. 土屋文明「山上憶良」(新装版文藝訳本『万葉集』 河出書房新社 1983 所収)  
山上憶良についてはこの訳本に挿るところが多い。
3. 焼塙土器Ⅳ類とした個体は、一般的な土器の坏と何ら変わらない器形のものをとりあげている。ただひとつ、かなりの二次火熱を受けて器表面がザラつくという点のみ異なる。これは塙をその中に入れて熱したと断定はできぬでもきわめて可能性は高いと考えている。これならば固型塙製造とするより、溶解性の除去、散状塙の生成を行った器とするが妥当であろう。ただ、他のI~III類の土器が固型塙製造のものでないということでは決してない。
4. 建て替え等で88軒としても69%になる。
5. 固型塙ではなかった、とするものではない。固型塙として運びこまれたものが吸湿その他の理由で原形を損ねるために、再度固型化しようとしたとも考えうるからである。
6. 古賀益城『朝倉風土記』(1964)に収録されている明治15年の字小名調の項目にはひとつもなかった。
7. 福岡市教育委員会『海の中道遺跡』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第87集 1982)
8. 森田惣「焼塙叢考」(『大宰府古文化論叢』(下巻) 吉川弘文館 1983)
9. 搬入の経路がこの様に想定されるのであって、遺跡の性格とは別問題である。
10. 他遺跡出土例を殆ど実見していないので感覚的記述にならざるをえないが、当遺跡で分類したI c, III類などは報告書等においてあまり見ない。
11. 本書VI-3参照
12. 参考までに、貞原益軒『筑前国続風土記』の中の夜須郡甘木町の項には、「……福岡、博多、姪浜より魚塙多く持来りてあきなう。豊後、筑後、肥前の内には、海味おおくは是より貢ゆけり。……」とみえる。江戸期の寛永6年(1629)を前後する頃、甘木にて塙の交易がなされていたことが伺える。

参考文献

- ・近藤義郎『土器製塙の研究』 青木書店 1984
- ・近藤義郎・岩本正二「塙の生産と流通」 「岩波講座 日本考古学 3」 岩波書店 1986
- ・岩本正二「7~9世紀の土器製塙」 「文化財論叢」 同朋舎 1983

### 3. 奈良時代の集落について

塔ノ上遺跡の主体を占める奈良時代の集落および竪穴住居の様相について、いくつかの点をとりあげてこの時期のまとめとしたい。

#### A. 集落について

##### i. 時期

74軒（または88軒）の住居や土塙・溝・掘立柱建物の柱穴を含めたピット等から出土した土器の大半は、今までに積み重ねられてきた研究成果としての幾つかの編年表に照らし合わせるならば、大略8世紀中葉のやや古い頃から同後半で比定できる。この年代幅の中で細分すれば、大きく二期に分けられ、さらに細分して計4期ほどにはなろうかと思う。但し、この4期とするのが4型式になるというのではない。いまは各々の資料を細かく見る余裕がないが、先に述べた年代観をもう少し詳しく言えば、8世紀第2四半期のある時点から同第4四半期に及ぶ間に集落が営まれたと考えられる。それは実年数としては50～60年を前後とする間であろうと私考する。

なお、大宰府跡のSD2340は天平6年（734）と同8年（736）の年号を記した木簡を出土しているが、この溝に投棄されていた土器の最も新しい型式のものは上記木簡の年代（734）を測ることはありえない。塔ノ上遺跡出土の須恵器の殆ど全てが、大宰府S D2340の須恵器よりも新しく位置づけられ、ごく一部が併行する型式と思われる。これをもって塔ノ上集落の上限は抑えられよう。

##### ii. 単位とあり方

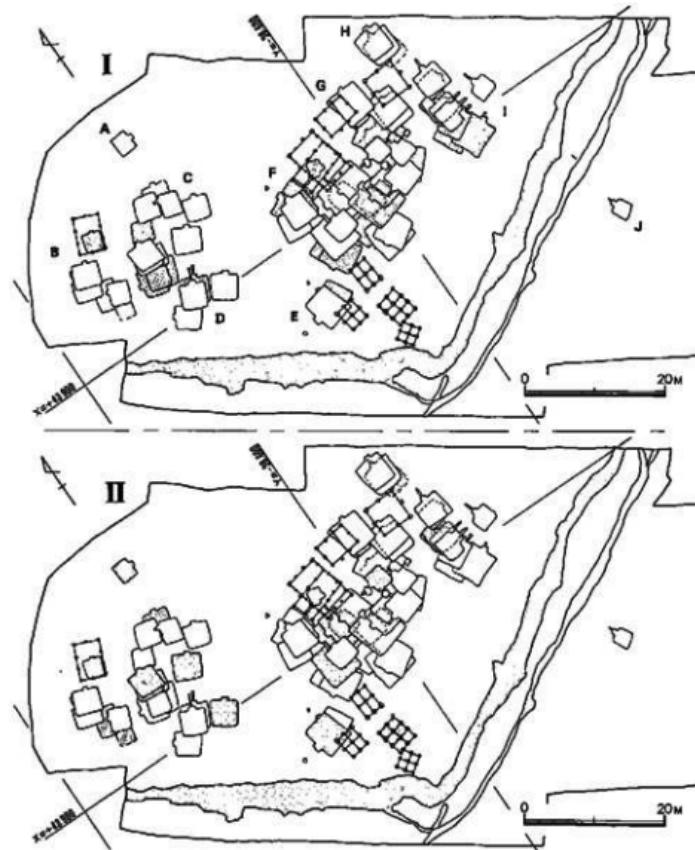
50～60年前後の間に集落が営まれていたとして、ある一時期には何軒の住居が機能していたであろうか。F・G群では35軒以上の住居が重複しているけれども、この中の切合いと近接度からすれば最大見積もっても一時期に5軒の併存しか考えられない。これを単純に計算すれば、7回の建てかわりで50～60年を経過するから、ほぼ7～8年に1回程度の建て替えを行っているとされよう。

もちろん、耐久度の長い住居もあるうし、逆に1年かそれ未満で建てかわった住居もあるだろうから、一律に建て替え年数を算出することは暴挙ではあるが、しかし一応の目安とはなろう。1軒の住居が7～8年に1回の建てかえを行ったとすれば、50～60年のうちに74軒（または88軒）になるには10軒前後が一组（一単位）として存したと考えれば計算上のつじつまは合うことになる。

この砂上の棲間的な仮説が、果たして遺跡の実態に合致するのであろうか。出土した土器（特

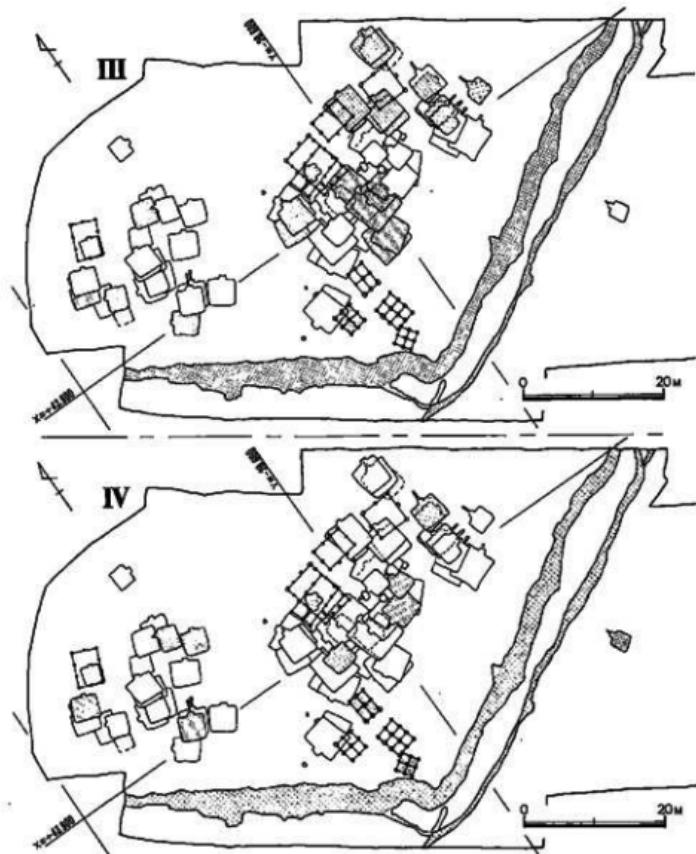
に須恵器)の型式学的変化と住居相互の切合い、それに接合資料・同一固体資料のあり方を参考して作成したのが第155・156図の変遷図である。

これを見て、各期の中で併存しうる住居の最大数を抽出すると、I期9~10軒、II期10~11軒、III期10軒、IV期6軒という数値が得られる。これはIV期を除いて、先の10軒前後を一単位



第155図 塔ノ上遺跡住居群変遷図① (1/800)

とする想定に近い数を示している。しかし、それは併存しうる住居が最も多かった場合であって、各期の中にはまた、同時に併存しない住居が多々存している。最低でもⅠ期6回、Ⅱ期5回、Ⅲ期5回、Ⅳ期3回の変遷があったことを考慮しなければならない。各期に属する住居数がこの変遷の回数に単純に対応するとすれば、3～4軒ずつを一単位とすることが可能と



第156図 塔ノ上遺跡住居群変遷図② (1/800)

なる。だが、そうすると各住居は全てが3~4年周期で建てかわったことになり、また、東西両群が別単位と考えることから、両群は1~2軒ずつで変遷したということになる。これでは集落の実情にそぐわないだろう。むしろ一部の住居のみにおいて建てかえが頻繁にあったとしても、多くはやはり10年前後は存続して、一期には10軒前後が併存していたと考えたい。

今まで述べてきたのは内城の東西両群をひとまとめにして考えてきた。しかし、この両群は一目見て知られる如く、占地上において分離しうることから各々がひとつの単位として変遷したと考えられる。先に挙えたI期9~10軒、II期10~11軒、III期10軒、IV期6軒を東西両群に分けて最大併存軒数を求めると、西群が4→5→6→3→3、東群が5→6→5→7→3と変遷する。ここで東群のみを見ると、各期ともにF群とG群とで分かれていることがわかる。東群自体がE・F群とG~I群との二単位の変遷とすることができる。そのとき、E・F群は4→2→3→1、G~I群は2→3→4→2という軒数の変化となる。

つまり、この塔ノ上遺跡の調査した範囲内では少くとも三個の集団の変遷を捉えることができるのであり、各々は5軒以内の軒数で変遷していると考えられる。

掘立柱建物のうち3~6号の倉庫については、堅穴住居群が営まれた時期に併行するものがあるのは確かと考えるが、全てが併存していたか否かは定かでない。1・2・7・8号の建物は全て住居群より新しいとしてよいが、大きな時期的隔たりではなく、あるいはIV期とは併行しているとも考えうる。

溝1は集落がいとまなれた当初から存し、廃絶に至るまで埋りきっていなかったと考えられる。つまりずっと集落を固していたのである。溝2はIII期頃に掘削されたものらしい。

### iii. 特殊な住居

37号住居跡のあり方は特異である。溝1・2に画された内城から離れて、ただ1軒のみ存するという特殊性は何を意味するのであろうか。まことに、この類の、他の群と離れて存したり、方向を異にして存する住居をHG住居と呼んで、成人女性がひと月に一度は籠る住居ではなかったかと考えた。この考えは今でも変わらない。しかし、この遺跡ではカマドの付く方向は三様があり、それは時期毎の住居の配置に規制されてのあり方であるらしいから、カマドの方向のみでは異質とは言えない。

37号住居跡はIV期に位置づけたが、III期においては14号を、II期においては1号をHG住居とすることもできよう。I期についてはよくわからない。

なお、住居の面積において、37号住居跡は僅かに4.83m<sup>2</sup>しかなく、この遺跡で最も小さい。試みに床面積が10m<sup>2</sup>に満たない住居を抽出すると、1・2・4・(7)・45・41・50(以上西群)、21・19・18・72・13・38・14(以上東群)、そして37号の15軒を数える。これらは調査した中での東西両端に集中して存しており、これでもって何か意味があるのかもしれない

い。

#### iv. 広がり

今までこの塔ノ上遺跡の調査した範囲内に限って考えてきたが、集落としては検出した部分のみで完結するとは思われない。諸条件を加味して見れば、住居群はさらに東から北東方向へ広がるものと予想される。

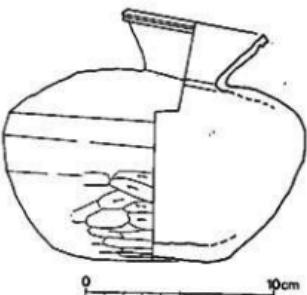
まず地形から見ると、この塔ノ上集落は旧地形台地の最西端部の突端に位置していると思われる。B群の西側から南側にかけては低くなっているので、この方向に集落が伸長することはありえない。溝1もM<sub>3</sub>ポイントとした所から西方へは少しうねりがあることは自然消滅するものと思われる。北方へは第3図に見る如く現況で1m近い段差があるので、この方向への伸展もあり期待できない。残るはやはり溝1のM<sub>1</sub>ポイントから北西の方向であって、ここにも別の単位の集團が存していると思われる。

溝1・2より東及び南方向の外域とした所の調査区外に、もし集落が存するとすれば、それは当然のことながらこの塔ノ上集落とは別個の集團と考えねばならない。

ところで、この塔ノ上遺跡で最も古い土器（縄文土器を除く）は、28号住居跡の北側、9号土壙の付近から出土した須恵器坏身（第130図O1）である。この時期（7世紀初頭前後）の遺構は検出していないが、調査区北東方の畠地から出土したという須恵器平瓶（第157図・図版42）を、近くの牛鶴集落に住している人が所有しておられる。これは口径7.3cm、胴径16.0cm、器高13.4cmの完形品である。平瓶という器種と完形品であることから、多分に土壙墓等の副葬品ではないかと思われる。この土器も時期的には前記の坏身とあまり変わらないであろう。とすれば、調査区の北東方向には7世紀代の住居か墓地の存することが予想されるのである。

#### V. 性格

この塔ノ上集落は、8世紀中～後半代という奈良時代の後半期にあって、どのような社会史的位置づけがなされるだろうか。すでに律令制社会に入った中で、特に大宰府との関連を見すごすわけにはゆかないだろう。筆者には、この時代背景の中に遺跡を投影してその性格の位置づけをしうる力量も余裕もない。従って、肝要な点は後日に期すこととしたいが、前述してきたことをふまえて集落を規定するとすれば、この塔ノ上集落は一見して計画村落ではないとしてよい。駅家・官衙等の公的機関に関連する遺跡から多く出土している焼



第157図 塔ノ上遺跡周辺出土土器実測図 (1/3)

塩土器、識字層の存在を思わせる墨書き土器・転用硯、それに瓦の破片といった遺物はあるものの、住居のあり方としては一般農村集落の様相を示していると考えるのが最も自然である。

ただ、上記遺物の存在をもってすれば、大宰府との人間の往来を考慮すべきと思われる。9号土壙出土の壺（D 9-11）はこの遺跡の出土土器の中では異色であり、輸入品としてよいだろう。大宰府に出仕して持ち帰った品物もあったことと思われる。

## B. 住居について

竪穴住居跡のいくつかにおいて興味ある事例があったので、ここでまとめておく。

### i. カマドの煙道先端部と主軸上にあるピット

住居のカマド煙道先端にピットがあり、土器の入っている例がある。51・52・17号住居跡がそれであり、37・54号住居跡においてはピットはあるけれども土器は入ってなかった。特に17号住居跡に隣接してのP703は完形の土師器壺に須恵器蓋が被せられており、中には何かを入れて埋置したものと思われる。<sup>(註4)</sup>

また、カマドから煙道は延びていないけれども、その主軸延長上にピットがあって土器の入っている例がある。55・44・56・61・8号住居跡等であり、特に44・61号のそれ（P275とP431）は土器もまとまっている。これらのピットが住居跡と確実に関係あると断言しうる訳ではないが、44号住居跡の例をもってすれば無関係と一蹴することも憚られるのである。そもそもピットの中に土器（片）を置いた如くにしているという所作が、何か意味ありと考えねばならないだろう。

こういった例から類推しうるのは、これらピットから出土した土器は、地鎮というような意味を込めて埋置されたのではないか、ということである。“地鎮”的な具体的な内容は計り知れないが、土地に宿るカミの存在を意識しているとも推測される。カマドの煙出し口あるいは延長上にあるというのは、カマド=家という観念からのことかも知れない。

同様の例は甘木市柿原野田遺跡でも知られる。

<sup>(註5)</sup>

### ii. カマド前面の床面下の焼土ピット

カマド前面の床下層にピットがあって、その中に焼土の入っている例を見る。9（あるいは33）・13・15号住居跡において見られたもので、ピットの壁は焼けておらず、焼土を入れ込んだだけであるが、15号住居跡のそれは灰白色粘土と焼土とが入っていた。これらのピットを覆って床面（貼床）があるので、住居構築時にピットが埋られ、床を貼ったあとはそのピットは人目に触れないことになる。これも住居構築時の地鎮的な意味があるのかもしれない。甘木市宮原遺跡（横断道11地点）でも同様の例が見られた。

以上述べたことには、多くの推測を混じえた部分がある。それが奈良時代後半期には人々の住む集落であった塔ノ上遺跡の実態から、あるいは懸念した結果を述べていないかと危惧するものである。今後、他遺跡の検討をも含めて、より深く遺跡の実態に迫れるようにしたいと念じつつ筆を下す。

## 註

1. 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和58年度発掘調査概報』 1984  
同 『大宰府史跡 昭和59年度発掘調査概報』 1985  
上記報告の第83・84・85・87・90次調査において検出された溝である。85・87次で天平6年、87・90次で天平8年を記した木簡がある。
2. このとき外城にある37号住居跡は数に含めていない。
3. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告——8——』 1986
4. このP703は17号住居跡カマド煙道先端にあるP701を切って存在した。従って17号住居跡にではなく別の新しい住居に伴う可能性もある。しかし、本文中においても17号住居跡に関連するとしたのは、切合いで時間差は当然あるとしても時期差はないと考えたからである。それはP703の存在する位置も大きなウェイトを占めている。もしこのP703が別の13・16号住居跡とかに関連するものではあったとしても、その持つ意義が減じることはない。
5. 植原野田遺跡調査団『植原野田遺跡』 1976

## あとがき

横断道19-A地点・塔ノ上遺跡の発掘調査が終わってしばらく経ったある日、ある新聞社から電話が入った。発掘調査の時に使う“カキ板”と呼ぶ道具のことや遺跡の内容について尋ねられ、一読者から投書のあったことを告げられた。

数日後に、同僚が新聞を持ってきてくれた。

「遺跡発掘のお手伝いをしてみませんか」と近所の方に誘われて始めた塔ノ上の遺跡発掘の補助作業が終わりました。作業は「カキ板」と呼ばれ、「くわ」のよくなもので、土をきれいにかいてゆきました。初日は、カキ板を十分も使うと、切れはるし、腰は痛いし、目が回りました。しかも、機の人と同じ速度でやってゆかないで、遅れた分だけつまると土が残つていきました。必死に合わせてゆこうとあせり、余計に「カキ板」がきれないのです。かいてゆくと、くつきりと土の色

が、黒色、黄土色、赤褐色等に分かれています。

発掘現場は家から一分。こんな日と夜の先で千三百年前も昔の奈良時代の人々の生活にふれられるということがなど思つてもみなかつたことで、得るものが多くありました。

柱の跡、溝の跡、かまど時、土器の破片、鐵器。昔の人々は一休何を考え、何を見話をし、何を食べ、何を見たのだろうかと想像するとすぐそこにいにしえの人の息遣いが伝わってきそうな錯覚さえ感じました。

三ヶ月という作業期間は肉体的には労苦の連続でしたし、いろいろ失敗もして先生方を嘆かせましたが、精神的には満足度一〇〇パーセントでした。(甘木市、宮田雅子・39歳)

(1985年3月28日 読売新聞)

このコラムを読んだとき、12月～2月という寒い期間の発掘調査などは私たちにとっては毎年通り過ぎてゆく一コマでしかないのが、あらたままで新鮮にも思えたし、また次に控える調査への活力を呼びおこしてくれたように感じた。と、いまこの報告書をまとめるにあたって追憶にふけったところである。

調査の期間中およびその後に御協力いただいた方々に感謝します。

なお、本文中の説明と挿図の位置とにバランスを欠くなど、不備な点が多々あるのは全て編集者の責に帰する。短期間でまとめた故でもあるが、御寛恕を願う。

第1表 塔ノ上遺跡竪穴居跡一覧表①

No.	国名	神名	主軸方位	プラン	絶対面積 (S) m <sup>2</sup>	主柱間 (S) m	S/S.	たて (cm)						よこ (cm)						カマド	土器	基盤	塔	その他の遺物	備考	群			
								a1	a	c	d1	d	d2	a1	a	a2	b1	b	b2										
1	3	11	N-82°-E	B	6.886	1.858	0.270	70	110	64	64	131	65	61	167	48	84	137	60	東	IIa	0	5	5	土製支脚		A		
2	3	12	N-20.5°-E	C	6.694																北	IIa	3	20	7	B1より古、2軒か		B	
3		14	N-22°-E	B	12.367	1.659	0.134	105	184	40	108	125	48	73	224	76	81	218	86	北	IIa	0	71	6	3B・5・6より新、2軒か				
3a		14	N-10°-E (C)		1.976			109			110															3・5より古			
5		14	N-21.5°-E	B	(10.538)	2.632	0.250	(86)	155	50	(83)	160	45	120	165	90	110	165	95	(北)		1	24		3より古、6より新				
4		15	N-67.5°-W	B	(7.491)										(100)	(115)	(85)				西	IIa	0	17	2	J 6	6・7より新		
6		15	N-98°-E	B	11.494	2.661	0.232	105	160	(45)	(70)	165	60	90	160	(120)	(120)	130	103	(東)		1	26	1	J 6	3・4・5より古、7より新、2軒か			
7		15																								4・6より古			
39	5	17	N-97.5°-E	A	12.217	2.221	0.182	110	(150)	(80)	110	150	95	100	140	115	(100)	(165)	100	東		2	26	17	J 7	41より古、40・45より新	C		
40	5	17	N-9°-E	A	11.324	3.409	0.301	60	200	60	55	210	60	95	165	100	(100)	55	77	北	IIb	5	38	18	J 3, S A, スラッグ、錐底土器	39・41より古			
41	5	17	N-78°-W	B	9.504	1.820	0.189	80	110	(105)	90	105	80	90	170	78	85	165	82	西	III	4	20	20	S A, 鉄器	42より古、39・40より新			
42	5	20	N-17.5°-E	A	11.209	1.980	0.177	95	150	90	110	140	85	115	125	104	85	145	98	北	IIb	3	41	4		41より新			
45	5	21	N-20.5°-E	A	7.828	2.122	0.271	75	140	(50)	70	145	(50)	70	140	84	70	160	70	北	IIb	2	13	3	J 2, J 3	39・46より古			
46	5・6	23	N-4°-E	A	12.739	2.896	0.227	115	170	55	110	180	65	105	160	105	90	175	102	北	III	6	35	24	J 2, J 3, J 9	45・47・48より新			
47	5	23	N-6°-E	B	11.229															北	IIa	0	15	5	J 9	46より古、48・49・50より新			
48	5	23																							46・47より古、50・58より新				
49	5・6	27	N-79.5°-E	B	(14.674)	4.374	0.298	110	190	25	150	150	(85)	60	250	(105)	45	270	(115)	西	IIb	0	12	5	石製支脚	47・50・58より古			
50	5	27	N-8°-E	A	8.819	2.761	0.313	(60)	165	53	80	155	67	70	165	65	65	175	75	北	I	6	30	18	鉄器、スラッグ	47・48より古、49・58より新			
58	5	27	N-17°-E	A	(16.697)	3.425	0.205	100	195	123	125	170	113	100	205	127	125	165	124	(北)		1	13	1	スラッグ	48・50より古、49より新			
43	5	29	N-38.5°-E	A	13.985	4.301	0.308	75	185	117	85	180	72	90	245	63	95	225	70	北	IIb	4	41	6	S A, 鉄器	D10・11より新、2軒か			
51	5	31	N-21°-E	A	11.597	5.514	0.475	35	235	66	55	215	62	55	235	65	55	250	33	北	III	0	36	5	鉄器	S2・S3より新、櫛道先端にP392	D		
51a	5	31			2.853	(0.246)		150			155			195	42		175												
51c	5	31			2.132	(0.184)		130			140			135		175													
52	5	31	N-35°-E	A	(13.075)															北	III	0	11	3		51より古、櫛道先端にP393			
53	5	34	N-55°-E	C	11.442	1.877	0.164	90	160	100	100	155	102	100	115	106	110	130	(90)	西	IIa	1	13	3		51より古、カマドM表面にP354			
55	5・6	35	N-36°-E	A	12.699	3.006	0.237	110	145	94	87	160	93	110	185	87	90	200	76	北	IIb	1	3	6		2軒か、カマド底板上にP379			
44	7-8	37	N-105.5°-W	B	20.034	4.820	0.240	110	205	105	100	200	100	135	230	127	135	230	118	西	IIb	5	22	3	J 8, S H, 鉄器	66より新、B6より古 2軒か、カマド底板上にP275	E		
56	7-8	37	N-23°-W	B	(18.144)	3.994	0.220	95	185	(115)	(105)	190	100	(130)	215	120	(110)	215	132	北	IIb	0	6			44より古、2軒か			
57	7-8	39	N-2°-W	C	15.106	4.674	0.309	85	230	85	100	245	78	80	190	77	100	200	85	北	III	8	42	8	S E, S G, 鉄器、スラッグ	60・61・62・66より新	F		

第1表 塔ノ上遺跡竪穴住居跡一覧表 ②

No.	版図	神社方位	プラン 断面面積 (S) <sup>2</sup> m <sup>2</sup>	主柱間 柱柱間 (S <sub>1</sub> )m <sup>2</sup>	S/S	たて (cm)				よこ (cm)				二 (cm)				カマド 位置	カマド 形態	土器 種類	塗	その他の遺物				群			
						a <sub>1</sub>	a <sub>2</sub>	d <sub>1</sub>	d <sub>2</sub>	a <sub>1</sub>	a <sub>2</sub>	b <sub>1</sub>	b <sub>2</sub>	a <sub>1</sub>	a <sub>2</sub>	b <sub>1</sub>	b <sub>2</sub>	位置	形態	調査	測定	土器	塗	その他の遺物	備考				
60	7-8	39	N-45°-E	A	14.397	3.034	0.211	135	175	72	110	85	120	120	180	90	90	220	83	北	IIb	3	28	6	SC, SG	57より古、59-61、62より新	F		
61	7-8	39	N-23°-W	B	(21.037)	4.305	0.205	105	230	(90)	105	195	(105)	155	220	160	(105)	205	168	北	IIb	2	6	1	SG, 絹織車	57-60、62より古、カマド延長上にP431	#		
62	7-8	39	N-94°-W	B	(14.082)	2.423	0.172	85	(130)	(120)	100	127	135	(110)	190	110	(110)	190	110	(圓)		0	14	5		57-60、62より古、61より新	#		
28	7-8	43	N-102.5°-W	A	(18.475)			115	285	51	115	240	51	(105)	235	112	(105)	220	118	西	IIa	7	33	6	SC, SG, 土器	21-22、23より古、29-54より新、B7より古	#		
39	7-8	43	N-98.5°-W	B	(13.968)	2.623	0.188	60	155	(100)	75	185	(100)	(165)	170	110	170	185	93	西	IIa	6	13	6	SC, SH, 粘土器	23-25、28より古、54-62、67より新	#		
31	7-8	43																								25-66より古、59より新	#		
54	7-8	43	N-11°-W	(A)	(11.233)																北	III	0	3			23-25、28-29より古、67より新	#	
66	7-8	43	N-99.5°-W	(A)	(16.216)																西	IIb	2	14	3	SE	25-29、57より古、31-62より新	#	
25	7-8	46	N-9°-W	B	11.592	4.012	0.346	62	160	90	(60)	(160)	(90)	60	(250)	(70)	50	(250)	(65)	北	IIb	2	18	1	七輪	29-31、59-65、66-67より新	#		
59	7-8	46	N-8.5°-W	C	26.213	5.351	0.304	150	240	148	(150)	230	158	130	220	120	130	235	(135)	北	I	2	38	4	SE	25-31-30-60-62より古、25-27-65より新	#		
26	7-8	47	(N-16.5°-W)	(A)	(18.478)	4.096	0.222		180		125	200			215	115	215	(北)								27-50より古	#		
27	7-8	47	N-118°-W	A	19.649	3.506	0.178	185	180	(120)	180	180	(130)	120	200	150	120	190	130	西	IIb	1	19	4	粘石	59-83より古、26より新	#		
21	7-8	49	N-76.5°-E	A	(9.712)															(東)		2	27	4	SC	20より古、22-23-28-68-70より新	#		
22	7-8	49	N-95.5°-W	(A)	(15.737)															西	IIb	3	16	4	スラッグ	20-21より古、23-28-69-70より新	#		
33	7-8	49	N-10°-W	A	32.435															北	IIb	0	14	3		21-22より古、28-29-63-64-65-67-69-70より新	#		
67	7-8	49																			0	1				23-25-29より古	#		
69	7-8	49	N-10°-W	A	(11.147)															北	IIb	2	10	3			22-23より古	#	
70	7-8	49	N-6.5°-W	(A)	(25.824)															北	IIa						21-22-23-28より古	#	
63	7-8	50	N-96°-W	A	27.050	6.096	0.225	150	245	140	130	250	125	140	255	145	135	230	(140)	西	I	1	32	6			23-64より古、65より新	#	
63a	50				24.200	4.896	0.202				228			210			195												#
64	7-8	50	N-117°-W	A	17.838	4.265	0.239	90	215	120	90	185	165	100	215	124	100	205	(100)	西	IIb	1	17	12			23より古、63より新	#	
65	7-8	50	N-72.5°-E	(C)	(15.633)	4.375	0.280	(105)	210	(110)	(100)	220	88	90	195	(90)	(80)	205	(85)	(東)		0	1				23-25-59-63-64より古	#	
8	8	54	N-5°-W	C	21.655	4.136	0.191	150	220	125	150	240	95	140	180	115	120	160	137	北	IIb	12	68	15	J T, 热器, スラッグ 粘石, 粘土器	9-30-30Bより古, B2より古	G		
8a	54				22.196	6.374	0.287	130	260	108	130	270	88	130	245	80	110	240	90										#
30	8	54	(N-15°-W)							43			43				25	160	35	(北)		1	8	2			9-30Bより古, 10より新	#	
30a	54																									8-9-30より古, 10より新	#		
9	8	57	N-3.5°-W	C	20.057	4.418	0.320	145	210	108	145	200	100	135	205	122	120	225	83	北	IIb	13	67		SM, スラッグ	8-8-9より古, 10-30-33より新	#		
33	8	57	N-5°-W	C	17.595	3.436	0.195	130	200	115	115	210	115	120	170	103	(125)	170	115	北	IIb	6	34	2	SE, SG, スラッグ	9-8-9より古, 10-32-36より新 P5-P6に焼土	#		
36	8	57																			4	15	4	S1	10-19-32-33より古, D1より新	#			

第1表 塔ノ上遺跡堅穴住居跡一覧表(3)

第2表 塔ノ上遺跡出土土器法量表<sup>①</sup>

②

遺物	持因物	性質	器形	分類	種	法量	備考
						①口徑 ②深さ ③底径 ④側面	
1 (第13回) 1 土器器 蘭 BII %	1	126.0 ②64.0	粗、カマド内			①21.6 ②1.6	
2 土器器 蘭 D4 %	2	12.8	カマド内			①13.2 ②3.5	内外とも黒皮り 底面
3 x 支脚 1	3	14.8	床面				床下層
2 (第13回) 1 順意器 蘭	4	13.2 ②2.7	床面			①18.8 ②1.2	
2 x 环 B I %	5	12.8 ②3.1	床面			①17.6 ②0.1	真杯か? 床下層
3 土器器 x Cac %	6	12.6 ②3.4	底付瓶、 カマド内			①12.4 ②0.2	床下層
4 x x C1a %	7	14.5 ②12.4 33.3	穿孔あり、 カマド内			①20.0 ②15.2 ③2.7	カマド底面内
5 x 瓶 B %	8	12.6 ②6.7	カマド内			①16.9 ②13.9	カマド
6 x 瓶 B I %	9	15.9 ②13.7 ③13.2	机、床面			①27.4 ②12.6 ③20.8	机
3 (第16回) 1 土器器 环 B %	10	26.1 ②1.4	床面			①18.4 ②11.0	床下層
2 x x F %	11	14 ②0.1	床面			①14.4 ②0.1	
3 x x Cx %	12	12.5 ②8.9				①13.4 ②0.4	重複計
4 x x III Ds %	13	17.7 ②0.5	床下層			①13.6 ②2.7	内面化粧土
5 x 瓶 B %	14	21.7 ②0.8	床面			①13.5 ②3.2	2次火熱を受け る。床面
6 x 瓶 B I %	15	16.6 ②0.2	机、片口状にな る			①13.5 ②0.0	粗底あり
7 x 瓶 %	16	14.6 ②7.6	床面			①15.3 ②10.7 ③2.0	粗底 2
4 (第16回) 1 土器器 环 Cx %	17	11.8 ②3.1				①14.9 ②4.5	机、カマド内
2 x 瓶 Ds %	18		2次火熱を 受けた			①02.0 ②3.3	机、煤付痕
3 x 瓶 B I %	19	13.2 ②4.3	机			①14.6 ②3.1	
5 (第16回) 1 順意器 蘭	20	18.0 ②1.4	机に痕跡か カマド内			①14.5 ②3.8	
2 土器器 环 Cx %	21	13.5 ②3.2				①17.9 ②4.3	
3 x x Cx %	22	13.5 ②0.3				①18.4 ②8.7	内面化粧土、 床下層
4 x 瓶 Ds %	23	18.4 ②6.4	机			①14.9 ②2.6	机に敷用か
6 (第16回) 1 土器器 环 Cx %	24	13.4 ②0.8	床面			①13.5 ②3.3	
2 x 瓶 Ds %	25		床面			①02.0 ②3.3	
3 x 瓶 C %	26	11.8 ②5.2 ③12.0	床面			①15.0 ②1.5	
40 (第18回) 1 濁意器 瓶 %	27	18.8 ②2.3	重ね焼き底あり 床下層			①14.6 ②1.4	
2 x x 瓶 %	28	15.8 ②1.7	カマド内			①21.1	
3 x 瓶 AII %	29	18.0 ②1.7	床下層			①18.0 ②3.0	2次火熱を受け る。床面
4 x x B1 %	30	19.0 ②0.4				①14.2	
5 土器器 环 Cx %	31	14.0 ②0.6				①15.6	
6 x x E %	32	18.0 ②4.0	カマド内				
7 x 瓶 B1 %	33	13.0 ②3.7	机				
8 x x C %	34	22.6 ②0.1	カマド内				
39 (第18回) 1 順意器 蘭	35	17.4 ②1.4					

③										④										
地番	持田名	種別	都道	分類	地質	成層	成層	成層	成層	持田名	種別	都道	分類	地質	成層	成層	成層	成層	備考	
50	7	土師器	环	B II	%	①14.6				瓦質に透かし										
	8	*	瓦手		1															
58	(第28回)	調査器	环	B II	%	①38.8	②4.0			床下層										
	1					②30.0														
	2	土師器	II	B I	%	①38.8	②3.2													
	3	*	瓦	B	%	①17.4	②6.1			床面										
	4	*	瓦	C	%	①38.0	②5.9			一部片口底										
47	(第28回)	土師器	瓦		%	①33.8	②0.8			床下層										
	1					②35.6														
	2	*	环	Cu	%	①13.6	②3.7													
	3	*	环	D	%	①22.5	②3.2			床下層										
	4	*	环	F	%	①12.6	②4.4			カマド内										
48	(第29回)	調査器	瓦		%	①16.6	②2.0													
	1					②34.6	②1.4													
	2	*	*		%	①34.6	②1.4													
	3	土師器	环	Cu	%	①22.3	②2.5			床下層										
	4	*	*	Cu	%	①22.2	②2.8			カマド内										
	5	*	*	Cu	%	①22.6	②3.4			カマド内										
	6	*	*	Cu	%	①22.8	②4.1													
	7	*	*	C	%	①24.6	②3.3													
	8	*	瓦	A	%	①28.0	②7.7													
49	(第30回)	調査器	瓦		1	①30.0	②12.1			床面										
	1					②11.7														
	2	土師器	环	Cu	%	①22.4	②3.2													
	3	*	*	Cu	%	①24.7	②6.2													
	4	*	II	Dz	%	①25.7	②2.8			床下層										
	5	*	*	Dz	%	①27.4	②3.7			床下層										
	6	*	*	Dz	%	①27.7	②3.0													
	7	*	环	B	%	①27.0	②7.5			内側裏ウルシ塗り										
	8	*	瓦	B	%	①20.0	②8.7			床面										
	9	*	*	*	%	①27.7	②3.5			カマド内										
	10	*	瓦	A	%	①27.8	②4.3													
	11	*	瓦	B	%					床面										
	12	*	瓦	A	%	①25.0	②9.8			床下層										
	13	*	瓦	B	%	①25.4	②10.4			床面										
53	(第38回)	調査器	环	B II	%	①20.0	②1.6			カマド内										
	1					②19.2	②8.0													
	2	土師器	*	Cu	%	①25.6	②3.0													
	3	*	*	Cu	%					カマド内										
	4	*	*	Cu	%					カマド内										
	54	*	*	Cu	%					カマド内										
	55	5	土師器	环	Cu	%					①12.5	②9.0								
	1					②4.3					床面									
	2	土師器	瓦	B I	1	①15.7	②13.1			カマド内										
56	(第39回)	土師器	环	Cu	%	①13.0	②2.8													
	1					②16.0	②4.2													
	2	*	*	*	1	①15.0	②0.0			床下層										
	3	*	瓦	A	%	①14.0	②0.0													
	4	*	环	F	%	①14.0	②0.9			カマド内										
	5	*	瓦	B	%	①20.8	②12.2			PJ99、焼付窓										
	6	*	*	D	%	①24.4	②22.4			①25.6	②13.6									
57	(第40回)	土師器	瓦		%	①15.8	②1.5													
	1					②10.7	②3.6													
	2	*	环	Cu	%	①10.0	②0.8			床下層										
	3	*	瓦	C	%	①14.6	②0.0			化粧土をかける										
	4	*	环	Cu	%	①17.6	②0.1													
	5	*	瓦	B	%					カマド内										
	6	*	瓦	Dv	%	①16.2	②0.0			帆										
	7	*	*	Cu	%	①15.0	②0.8			PJ99										
	8	*	*	Cu	%	①14.7	②0.5			外壁凹凸										
	9	*	瓦	B	%	①24.4	②22.0													
	10	*	瓦	I	1	①20.9	②10.0													
58	(第39回)	土師器	瓦		%	①21.7	②25.6													
	1					②22.0	②25.6													
	2	*	环	F	%					床下層										
	3	*	瓦	A	%					焼付窓、床下層										
59	(第40回)	土師器	瓦		%	①16.2	②1.6													
	1					②13.6	②0.6													
	2	*	环	Cu	%	①14.8	②3.0			カマド内										
	3	*	瓦	D	%	①19.7	②0.5													
	4	*	环	B	%	①18.7	②3.5			カマド内										
	5	*	瓦	C	%	①15.5	②7.3			帆、2次大熱を受ける										
60	(第40回)	調査器	瓦		%	①22.6	②1.0			カマド内										

造編	種別No.	種別	品種	分類	現	法度	①口徑 ②耕作 ③底床 ④耕作	備考	⑥		
									径	深	幅
60	2	土耕器	环	C <sub>1a</sub>	%	①12.2 ②8.4					
	3	x	x	C <sub>1a</sub>	%			底か、床面			
	4	x		C <sub>1a</sub>	%						
	5	x	變	BII <sub>2</sub>	%			底、表面			
	6	x	底		%	②12.6 ③7.6					
	7	x	支脚		1	③17.6		10面体 カマド内			
57	〔第44回〕 1	須恵器	蓋		1						
	2	x	x		%	②4.7 ③1.5					
	3	x	x		%	③17.7 ④1.5					
	4	土耕器	环	C <sub>1a</sub>	%						
	5	x	x	C <sub>1a</sub>	%			カマド内			
	6	x	底	B	%			カマド内			
	7	x	鉢	C	%	②15.5 ③6.5 ④15.0	2次火熱を受け る。底付型、P1				
	8	x	變	D <sub>4</sub>	%	③24.3 ④6.4	机				
54	〔第44回〕 1	土耕器	體	B	%			床下層			
	2	x	輪	C	%			軸、床下層			
65	〔第44回〕 1	須恵器	環	A	%	②14.0 ③2.5	瓦礫に近い。				
	2	土耕器	輪	B	%						
	3	x	底	BII	%	③15.6 ④2.6	根				
	4	x	x	D <sub>4</sub>	%	③21.0 ④4.4	机				
29	〔第44回〕 1	須恵器	蓋		1	②15.2 ③1.3					
	2	x	x		%			内面に墨付型			
	3	土耕器	环	C <sub>1a</sub>	%						
	4	x	支脚	1		③2.5	11面体、 カマド内				
28	〔第44回〕 1	須恵器	環	BIII	%	②17.8 ③10.8 ④5.5					
	2	土耕器	底	D <sub>4</sub>	%	③14.7 ④1.8	カマド内				
	3	x	變	BII <sub>2</sub>	%	③27.0 ④6.0	根				
	4	x	鉢	C	%	③31.0 ④9.1	机、墨付型				
	5	x	支脚	1		③6.7	カマド内				
23	〔第52回〕 1	土耕器	蓋	D <sub>4</sub>	%	②15.7 ③3.3	床下層				
	2	x	环	F	%	③15.3 ④4.7	床下層				
	3	x	x	F	%	③15.4 ④4.8	床下層				
	4	x	變	D <sub>4</sub>	%			机、床下層			
	5	x	支脚	BII <sub>2</sub>	%	③18.2 ④3.7	机				
69	〔第52回〕 1	土耕器	环	C <sub>1a</sub>	%			カマド附近			

造編	持因No.	種別	器種	分類	現	法度	①口徑 ②耕作 ③底床 ④耕作	備考	⑥		
									径	深	幅
69	2	土耕器	III	C	%	②17.8 ③2.2		床下層			
	3	x	底	BII	%	③14.8 ④6.4	机、2次火熱を 受けた。床下層				
27	〔第48回〕 1	須恵器	环	B I	%	②10.5 ③3.0		床下層			
	2	土耕器	x	F	%	②14.8 ③3.4		床下層			
	3	x	底	A	%	②11.2 ③4.8		床下層			
	4	x	x	C	%	②12.6 ③4.7	机、内面が焼け た。床下層				
59	〔第48回〕 1	須恵器	环	B II	%	②15.8 ③2.8 ④4.5					
	2	土耕器	底		%	②20.0 ③1.0		床下層			
	3	x	底	B	%	②14.6 ③1.6		床下層			
	4	x	底	C <sub>1a</sub>	%	②14.0 ③3.4	外側部に別格、 カマド附近				
	5	x	x	C <sub>1a</sub>	%	②15.0 ③3.3		カマド内			
	6	x	x	C <sub>1a</sub>	%	②14.6 ③3.5		カマド内			
	7	x	x	F	%	②15.3 ③5.0	内外とも黒煙 カマド内				
	8	x	底	A	%						
	9	x	底	D <sub>4</sub>	%	②27.4 ③6.5	机、カマド内				
25	〔第48回〕 1	土耕器	环	C <sub>1a</sub>	%			カマド附近			
	2	x	x	D	1	②14.4 ③4.7					
	3	x	x	B	%	②21.8 ③1.6					
	4	x	底	B I	%	②17.6 ③4.7	机、口縁が焼け た。カマド附近				
	5	x	x	B II	%	②15.2 ③5.2					
65	〔第53回〕 1	土耕器	环	C <sub>4</sub>	%	②14.6 ③2.1		床下層			
	63	〔第53回〕 1	須恵器	蓋		②15.7 ③2.7		床下層			
	2	土耕器	环	D	%	②10.5 ③3.3		床下層			
	3	x	x	F	%	②15.1 ③3.4		床下層			
	4	x	x	F	%	②13.7 ③4.2					
	5	x	x	A	%	②10.5 ③6.0		床下層			
	6	x	x	D <sub>4</sub>	%	②15.5 ③4.0	机、床下層				
64	〔第53回〕 1	土耕器	环	C <sub>1a</sub>	%	②13.4 ③2.6		カマド内			
	2	x	x	C <sub>1a</sub>	%	②13.0 ③3.6	2次火熱を受ける た。カマド内				
	3	x	x	D	%	②17.2 ③3.6		カマド内			
	4	x	把手	I				カマド内			
	5	x	支脚	I		②15.5		カマド内			
22	〔第72回〕 1	須恵器	蓋		%	②14.4 ③1.2					
	2	土耕器	环	C <sub>1a</sub>	%	②14.0 ③2.9					
	3	x	底	D <sub>4</sub>	%	②16.0 ③6.5	机、カマド内				

造價	持因物	種別	部位	分類	法量	①山腹②谷内 ③堤壁④河床		備考
						①	②	
22	4	土砂器	壁	B II	%	①16.0	②0.9	机、底付面
	5	#	板		%			
23	(第73回) 1	須志器	环	B I	1	①11.7	②6.3 ③3.9	
	2	土砂器	环	C II	%	①2.6	②2.4	
	3	#	壁	D I	%	①7.6		
24	(第73回) 1	須志器	壁					生焼付
	2	#	#		%	①7.0	②1.6	
	3	土砂器	环	C II	%			底下層
	4	#	#		%			底下層
	5	#	壁	C I	%			机、底下層
66	(第73回) 1	土砂器	环	C I	%			底下層
20	(第71回) 1	須志器	壁		%	①12.0	②1.7	機に転用
	2	#	#		%	①12.6	②1.1	P 1
	3	#	#		%	①13.6	②1.4	底下層
	4	#	#		%	①14.2	②1.6	機に転用か
	5	#	#		%	①14.4	②2.1	#、底下層
	6	#	#		%	①16.0	②1.4	底下層
	7	#	#		%	①17.0	②1.6	重ね焼きの底 底下層
	8	#	环	B I	%	①20.4	②2.3	底面
	9	#	#	B II	1	①17.2	②10.0 ③5.6	底面
	10	#	#	B I	%	①20.0	②1.7	P 1
	11	#	壁	A II	%	①18.2	②1.6	底面
	12	土砂器	高壁		%	①21.5	②2.0	
	13	#	环	C II	%	①13.6	②3.6	外側化粧土
	14	#	#	F	%	①15.7	②4.6	内面に塗装 底下層
	15	#	#	C II	%			底面
	16	#	壁	B I	%	①15.4	②2.9	机
	17	#	#	B III	%			机、底面
(第72回)	18	#	#	#	%	①29.6	②21.4 ③27.3	机、底面
	19	#	#	#	%	①27.2	②24.5 ③13.9	机、底面
8	(第59回) 1	須志器	壁		%			
	2	#	环	B II	%	①14.6	②10.0 ③4.4	内面に皮膜あり P 4
	3	#	#	B II	%	①11.4	②2.0	P 9
	4	#	#	B II	%	①15.4	②1.9	
	5	#	壁	A I	%	①14.4	②11.0 ③3.9	底下層

造價	持因物	種別	部位	分類	法量	①口付②本面 ③底付④側面		備考
						①	②	
6	6	須志器	壁		%	①20.0	②10.8 ③19.7	カマド前回
	7	土砂器	环	B	%			
	8	#	高環		%	①14.0	②2.0	
	9	#	环	C II	%	①14.8	②3.4	底面
	10	#	#	B	%	①14.2	②0.1	
	11	#	#	C II	%	①13.6	②4.0	
	12	#	壁	D I	1	①17.9	②4.2	外側面に鉛錆付 P 2
	13	#	底	B	%	①19.4	②7.4	底面
	14	#	壁	D II	%	①18.0	②6.1	机、底下層
	15	#	#	B III	%	①19.2	②9.2	机、底下層
	16	#						カマド煙体か 内面
9	(第59回) 1	須志器	蓋		%	①17.8	②1.2	口縫縫合が黒色
	2	#	#		%	①20.4	②0.9	P 4
	3	#	环	B III	%	①18.2	②11.0 ③5.3	底面、P 3
	4	#	壁	A I	%	①14.0	②11.6 ③1.9	机に転用か 底下層、底土中
	5	土砂器	环	C II	%	①13.5	②2.9	
	6	#	#	C II	%	①10.0	②3.5	底下層、P 1
	7	#	壁	B I	%	①14.1	②12.2 ③12.0	机、底下層
	8	#	#	A	%	①15.5	②6.0	机、底下層、P 1
	9	#	#	B	%	①13.6	②5.8	机、カマド内
	10	#	#	B III	%	①19.2	②4.7	机
30	(第59回) 1	土砂器	环	C II	%			底面
	2	#	壁	B I	%	①18.8	②4.7	机、P 1
35	(第62回) 1	須志器	蓋		%	①14.0	②1.7	
	2	土砂器	环	D	%	①10.6	②3.6	
	3	#	#	B	%	①11.8	②4.9	2次火薬を受ける 点
	4	#	#	F	%	①16.8	②4.8	
	5	#	壁	D II	%	①22.5	②4.8	
32	(第62回) 1	須志器	蓋		%	①15.0	②1.5	底面、底土中
	2	土砂器	环	C II	%	①15.6	②4.0	底下層
	3	#	#	F	%	①14.6	②4.3	底面
	4	#	壁	D II	%	①17.8	②5.3	カマド内
	5	#	壁	A	%	①11.8	②3.3	底面
	6	#	#	B	%	①23.5	②7.0	
	7	#	#	B III	%	①21.0	②5.9	机、底付病 カマド内

遺構	持因化	性質	器種	分類	性	法量	①口縁 ②内縁 ③外縁 ④底縁		備考	⑩
							⑤	⑥		
32	8	土師器	把手						底下層	
(第6回)	1	須恵器	坏	B II	%	⑪9.3 ⑫9.6				
10	2	土師器	坏	F	%				内面に化粧土。 底面	
	3	x	盤	D <sub>1</sub>	%				底面	
	4	x	甕	BIII	%				初、2次火熱を 受ける。底面	
33	(第6回)	1	須恵器	花	%	⑪44.7 ⑫1.6			瓶に似てか	
	2	x	坏	B I	%	⑪11.0 ⑫1.9				
	3	x	v	v	%	⑪11.5 ⑫6.8 ⑬4				
	4	土師器	坏	C <sub>1</sub>	%	⑪15.0 ⑫0.6				
	5	x	v	C <sub>1</sub>	%	⑪16.2 ⑫0.1			カマド内	
	6	x	v	C <sub>1</sub>	%	⑪12.2 ⑫0.7 ⑬3.7				
	7	x	v	C <sub>1</sub>	%					
	8	x	v	F	%	⑪32.6 ⑫3.3				
	9	x	钵	C	%	⑪29.0 ⑫6.5				
	10	x	甕	B I	%	⑪5.5 ⑫7.1			瓶	
	11	x	v	v	%	⑪6.0 ⑫0.6			瓶、内面に洗付 窓。カマド内	
	12	x	v	v	%	⑪5.6 ⑫12.0			瓶。下層P 1	
	13	x	v	B II	%	⑪14.4 ⑫0.5			瓶。2次火熱を 受ける。カマド	
24	(第6回)	1	須恵器	坏	B II	%	⑪9.0 ⑫1.9		生焼け。底下層	
	2	土師器	v	C <sub>1</sub>	%	⑪11.7 ⑫2.5			底下層	
	3	x	皿	C	%	⑪5.6 ⑫0.9			内底面に付着物 あり。底面	
	4	x	瓶	B I	%	⑪35.4 ⑫4.7			瓶。底面	
	5	x	v	D <sub>1</sub>	%	⑪16.4 ⑫3.0			瓶。底下層	
19	(第6回)	1	須恵器	蓋	%	⑪5.4 ⑫0.8				
	2	x	v	v	%	⑪4.3 ⑫1.6			ヘラ記号。底面	
	3	x	皿	A I 1	⑬13.6 ⑭0.9 ⑮1.8				カマド内	
	4	x	蓋		%	⑪16.0 ⑫14.4 ⑬2.8			蓋。カマド内	
	5	土師器	坏	C <sub>1</sub>	%	⑪3.6 ⑫2.5			底面	
	6	x	v	C <sub>1</sub>	%	⑪22.0 ⑫2.4			底下層	
	7	x	皿	C	%	⑪16.8 ⑫2.1			底面	
	8	x	甕	D <sub>1</sub>	%	⑪19.4 ⑫4.7			底面	
	9	x	v	B I	%	⑪5.6 ⑫13.2 ⑬14.6			瓶。底面	
	10	x	v	BIII	%	⑪21.8 ⑫4.5			瓶。底面	
	11	x	v	BII	%	⑪20.2 ⑫7.4			瓶	
18	(第6回)	1	須恵器	蓋	1				底面	
18	2	須恵器	蓋				⑪16.5 ⑫0.2			⑪
	3	x	v				⑪15.6 ⑫0.8		底下層	
	4	x	v				⑪19.6 ⑫1.1		底面	
	5	x	坏	B II	%		⑪28.8 ⑫1.9		底面	
	6	x	皿	A II	%		⑪18.4 ⑫14.6 ⑬3.5			
	7	x	v	v	%		⑪17.8 ⑫0.2			
	8	土師器	蓋				⑪23.2 ⑫1.4			
	9	x	v				⑪19.0 ⑫1.1		底下層	
	10	x	v	B	%		⑪29.5 ⑫1.9			
	11	x	v	C <sub>1</sub>	%		⑪13.4 ⑫0.4		2次火熱を受ける。 底下層。カマド内	
	12	x	v	C <sub>1</sub>	%				底面	
	13	x	蓋		%		⑪34.4 ⑫4.5		底面	
	14	x	v		%		⑪10.6 ⑫6.0			
	15	x	甕	C	%		⑪18.4 ⑫6.8		底面	
71	(第75回)	1	須恵器	蓋			⑪16.6 ⑫1.2			
	2	x	坏	B III	%		⑪16.4 ⑫6.2			
	3	土師器	皿	C	%					
	4	x	坏	F	%					
	5	x	甕	B I	%		⑪11.6 ⑫8.3		瓶	
	6	x	v	D	%		⑪14.2 ⑫9.8			
72	(第76回)	1	須恵器	蓋			⑪13.4 ⑫1.8		底下層	
	2	x	v	v	%		⑪15.0 ⑫1.6		底下層	
	3	x	坏	A	%		⑪12.0 ⑫2.6		底下層	
	4	x	v	B III	%		⑪16.8 ⑫4.3		底下層	
	5	土師器	坏	C <sub>1</sub>	%				カマド附近	
	6	x	v	D	%				カマド附近	
	7	x	蓋		%		⑪16.5 ⑫5.4		底下層	
11	(第77回)	1	須恵器	蓋			⑪16.6 ⑫1.3			
	2	x	坏	B II	%		⑪14.4 ⑫3.2		五箇に近い	
	3	x	v	A I	%		⑪12.2 ⑫9.4 ⑬1.7			
	4	土師器	蓋				⑪14.0 ⑫1.6			
	5	x	坏	B	%		⑪26.6 ⑫2.2			
	6	x	皿	A I	%		⑪14.5 ⑫12.5 ⑬2.2			
	7	x	坏	A	%		⑪13.0 ⑫27.4 ⑬4.0		-	
	8	x	v	C	%		⑪11.5 ⑫2.7		底面	

①							
造紙	特徴No.	種別	形態	分類	性状	法規	備考
11	9	土器器	壺	B I	%	①15.6 ②4.8	根
	10	+	+	B II	%	①20.8 ②4.0	根
	11	+	+	Db	%	①25.6 ②0.7	粗。カマド
	12	+	+	B III	%	①29.2 ②8.5	粗
	13	+	支脚			①13.2	
38 (第60回)	1	模造器	壺		%	①15.2 ②1.5	床面
	2	+	环	B III	%	①11.4 ②0.0	カマド前 土器内
	3	土器器	坛	C I	%	①12.2 ②6.0	床面
	4	+	+	C II	%		床面
	5	+	壺	A	%		床下槽
34 (第60回)	1	土器器	坛	C I	%	①14.0 ②3.0	
12 (第60回)	1	模造器	壺		%	①16.8 ②0.9	
	2	+	+		%	①13.0 ②2.5	根江軒用か。 床面
	3	+	环	B I	%	①12.8 ②0.7	床面
	4	+	壺		%	①5.1 ②17.4	床面。柱土中
	5	土器器	坛	C I	%	①12.7 ②2.6	
	6	+	+	C II	%		床面
	7	+	壺	D I	%		
	8	+	壺	B I	%	①12.0 ②6.7	粗。草付瓶。 床面
	9	+	+	B III	%	①20.6 ②4.1	粗。床面
13 (第60回)	1	模造器	壺		%	①17.0 ②1.7	P 1
	2	+	+		%	①16.5 ②1.7	束ね巻きの瓶あ り
	3	+	+		%	①16.8 ②1.6	
	4	+	+		%	①19.5 ②1.3	床下槽
	5	+	环	B III	%	①17.4 ②11.5	②5.5
	6	+	+	B II	%	①15.2 ②2.3	
	7	+	+	B I	%	②7.0 ②1.7	
	8	土器器	壺	A I	%	①17.0 ②2.2	
	9	+	环	C II	%		床面
	10	+	环	B	%		口輪削に塗付有
	11	+	壺	A	%		
15 (第60回)	1	模造器	环	B I	%	②6.0 ②1.6	
	2	+	+	B I	%	②7.6 ②0.5	生焼付
	3	+	壺	A II	%	①16.0 ②13.2	③2.2
	4	土器器	环	C II	%	①13.3 ②8.0	P 5

②							
造紙	特徴No.	種別	形態	分類	性状	法規	備考
15	5	土器器	环	C II	%	①14.7 ②33.1	
	6	+	+	B	%	①15.4 ②3.8	床面
	7	+	壺	B I	%	①14.0 ②5.5	カマド内
	8	+	壺	A	%	①15.6 ②7.5	粗。P 5
	10	+	+	A	%	①12.6 ②6.2	
	11	+	+	B I	%	①15.3 ②6.6	床面。カマド内 P 5
16 (第60回)	1	模造器	壺		%	①14.0 ②1.4	床面
	2	+	+				高杯か。床面
	3	+	环	B II	%	①14.4 ②9.0	
	4	+	高体		%	①10.2 ②1.7	現に使用。床面
	5	+	+	C II	%	①10.4 ②0.8	床面
	6	土器器	环	C II	%	①12.5 ②3.5	床面
	7	+	壺	A	%	①15.0 ②6.5	床面
	8	+	+	D II	%	①10.0 ②6.5	床面
17 (第60回)	1	模造器	壺		%	①15.0 ②2.5	床下槽
	2	土器器	高环		%	①11.4 ②1.5	床面
	3	+	环	C I	%	①12.7 ②0.1	カマド内
	4	+	+	C II	%	①12.0 ②4.1	床面
	5	+	壺	A	%	①12.4 ②4.4	床面
	6	+	环	F	%	①14.3 ②0.7	床面
	7	+	壺	B I	%	①12.2 ②3.1	粗。床面
	8	+	环	C II	%	①13.0 ②4.9	P 701
	9	+	壺	D II	%	①19.0 ②0.2	P 701
(第60回)	10	+	壺		1	①20.5 ②4.4	P 703
	11	+	壺	D II	1	①20.0 ②4.4	P 703
14 (第60回)	1	模造器	壺		%	①20.4 ②1.1	床面
	2	+	+		%		床面
	3	+	+		1		床面
	4	土器器	环	C II	%		煤付瓶。床面
	5	+	+	C II	%	①12.6 ②2.9	床面
	6	+	+	F	%		床面
	7	+	环	B	%	①16.2 ②6.2	P 3
	8	+	壺	A	%		床面
37 (第60回)	1	模造器	环	B I	%	①7.0 ②1.9	

①									
逃げ	押出物	種別	部材	分類	残	法規	①口径	②耐火	備考
37	2	土断筋	環	Csa	%	①12.2 ②30.7	③10.8	構造上、試験を 受けた。カマド通風	
	3	x	x	C1	1	①12.0 ②3.2		底付環。2次火薬 を受ける。底面	
	4	x	x	Csa	%				
	5	x	熱	C	%	①00.4 ②0.0		底付窓。カマド 通風内	
	6	x	窓	C	%	①04.8 ②7.8		底付窓	
B2	1	(第10回)	底断筋	環	BII	%	①9.2 ②3.8	P12	
	2	土断筋	環	C1	%	①13.1 ②3.5	P12		
	3	x	費	BIII	1	%	①5.8 ②3.9	P8	
B7	1	(第10回)	土断筋	環	Csa	%	①13.5 ②3.0	P10	
B9	1	(第10回)	底断筋	底	1				
D10	1	(第10回)	土断筋	費	Da	%	①00.4 ②7.1		
	2	x	体	B	%	①22.8 ②13.6		内面に帯目底	
D9	1	(第10回)	底断筋	蓋			①4.8 ②1.5		
	2	x	x		%	①13.6 ②1.4		並みがある	
	3	x	x		%	①4.8 ②1.2			
	4	x	x	BII	%	①16.7 ②4.2	②6.5		
	5	x	x		%	②6.9 ②3.4	②2.5		
	6	x	x	A	%	①22.2 ②3.4	②8.0		
	7	x	x	x	%	①12.6 ②3.9	②6.5	外底面に横小口 底あり	
	8	x	x	N	%	①12.8 ②3.4	②8.8		
	9	x	x	C1	%	①13.0 ②2.8	②10.0	口縁周囲は黒色	
	10	x	x	A	%	①13.8 ②3.9	②8.5	口縫周辺が黒色	
	11	土断筋	環	A	1	①16.8 ②3.1	②8.1	底質で内外とも 塗装ヘラミグリ	
	12	x	x	F	%	①16.0 ②3.4	②5.4		
	13	x	x	x	%	①16.2 ②3.3	②8.3	内底面に頸度	
(第10回)	14	x	底	BII	%	①16.4 ②3.6	②9.5	底	
	15	x	x	x	%	②8.6		底	
	16	x	x	BIII	%	②7.0 ②3.1	②7.8	底	
	17	x	x	x	%	②5.9 ②3.3	②6.3	底	
	18	x	x	x	%	②9.0 ②3.8	②6.8	底。2次火薬を受ける 口縫底付筋	
	19	x	鍋	C	%	②0.6 ②0.8		底。炉管付	
D1	1	(第10回)	土断筋	環	E	%	①5.3 ②2.9		
	2	x	底	BII	%	①22.0 ②1.1	②18.2	底	
	3	x	x	BIII	%	②24.5 ②23.4	②20.1	BL. 塩化物	
	4	x	鍋	C	%			底	
②									
逃げ	押出物	種別	部材	分類	残	法規	①口径	②耐火	備考
M1	1	(第10回)	底断筋	底	1		①15.8 ②2.7		
	2	x	x		%	①14.6 ②2.2			
	3	x	x		%	①14.4 ②1.8		並みがある	
	4	x	x		%	①16.5			
	5	x	x		%	①16.8			
	6	x	x		%	①16.0 ②1.3			
	7	x	x		%	①13.5 ②2.6		A部	
	8	x	x		%	①14.2		B部	
	9	x	x		%	①15.4		A部	
	10	x	x		%	①16.0 ②2.2		x	
	11	x	x		1			12と同一個体か	
	12	x	x		%	①20.0			
	13	x	环	BII	%	②6.4			
	14	x	x	x	%	①10.9 ②3.4	②6.2		
	15	x	x	x	%	②6.7			
	16	x	x	x	%	①11.5 ②3.5	②6.4		
	17	x	x	x	%	①12.4 ②3.1	②6.0	A部	
	18	x	x	x	%	①12.6 ②3.5	②7.7	底ねじ込みの薄 あり	
	19	x	x	x	%	①13.0 ②4.3	②8.8		
	20	x	x	BII	%	②9.2			
	21	x	x	x	%	①10.0			
	22	x	x	x	%	①14.0 ②3.7	②4.0		
(第10回)	23	x	x	x	%	①13.8 ②3.7	②10.3		
	24	x	x	x	%	②9.8			
	25	x	x	x	%	①9.6			
	26	x	x	x	1	①13.8 ②3.4	②9.5	内面に鉄鋸片と 鋼球が付着	
	27	x	x	x	%	②6.8		生錆け	
	28	x	x	x	%	①10.0			
	29	x	x	x	%	①15.5 ②3.4	②9.3		
	30	x	x	x	%	①14.6 ②3.4	②11.2		
	31	x	x	x	%	①13.2			
	32	x	x	x	%	①14.7		A部	
	33	x	x	x	%	①15.7 ②3.4	②11.6		
	34	x	x	BIII	%	①16.4 ②3.5	②10.5		
	35	x	x	x	%	①11.8			

遺傳	持因率	種別	部位	分類	成年魚	性別	注記	参考	考	
									♂	♀
M1	36	原生鰓	环	B III	%		①19.0 ②12.5 外成因にワラ棒の圧痕	③6.6		
	37	x	x	x	%		①19.3 ②13.2 ③6.5			
	38	x	x	A I	1		①12.8 ②8.3 ③4.7		山型が出来ず	
	39	x	x	x	%		①14.0 ②9.0 ③6.2			
(M100)	40	x	x	A	%		①13.3 ②6.5 ③6.3			
	41	x	城		%		①16.2 ②12.5 ③6.2			
	42	x	Ⅲ	A II	%		①17.2 ②12.4 ③6.7			
	43	x	x	x	%		①19.0 ②15.1 ③6.0			
	44	x	x	Bz	%		①21.0 ②18.2 ③6.1			
	45	x	高塚		1		山型が出来ず	5.0		
	46	x	x		1		①10.0			
	47	x	x		%		②13.7			
	48	x	塗		%		山型が出来ず	5.0		
	49	x	x		%		①10.2			
	50	x	x		%		②12.0			
	51	x	x		%		①23.0			
	52	x	x		%		②10.0		外成因にワラ棒の圧痕	
(M100)	53	x	x		%		①29.2 ②16.0 概か			
	54	x	塗		%		②20.3			
	55	x	x		%		①22.5		脳内に暗色	
	56	x	x		%		②23.0			
(M100)	57	x	环	B	%		①11.8		ミガキが苦しい	
	58	少鱗鰓	x	x	%		②13.4			
	59	x	x	x	%		②6.8			
	60	x	x	A	%		①12.6 ②8.8 ③4.0		硬質のあき、A群	
	61	x	x	x	%		①13.6 ②10.4 ③3.3		堅直、直行性	
	62	x	Ⅲ A II	%			①15.7		近縁形玉へうねり	
	63	x	体	A I	1		①20.8 ②13.6 ③4.5		瓦面に近い	
	64	x	x		%		①27		豊か。化粧土をかける	
(M100)	65	x	环	F	%		①11.6		2次火熱を受ける、強風送り	
	66	x	Ⅲ	C	%		①14.2 ②2.4			
	67	x	环	Cx	%		①15.2 ②2.4		内成因に弱味	
	68	x	x	x	%		①34.0 ②3.2			
	69	x	x	x	%		①13.4 ②4.1			
	70	x	x	D	%		①34.2		2次火熱を受ける、強風送り	

遺傳	持因率	種別	部位	分類	成年魚	性別	注記	参考	考	
									♂	♀
M1	71	土の器	环	Cib	%		①16.0 ②3.0			
	72	x	環	C	%		①15.9		内成因に有機物付着	
	73	x	环	Cia	%		①13.0 ②3.2			
	74	x	x	a	1		①14.0 ②3.8		内外に化粧土	
	75	x	x	Cib	%		①15.4 ②3.1		A群	
	76	x	x	Cia	%		①14.0 ②3.1		x	
	77	x	x	Cz	%		①15.0 ②4.3			
	78	x	x	Cic	%		①14.8 ②3.7		A群	
	79	x	x	Cz	%		①15.4			
	80	x	x	Cio	%		①15.6 ②3.2			
	81	x	Ⅲ	Da	%		①15.6 ②3.6		硬質	
	82	x	x	D	%		①16.0 ②3.9			
	83	x	x	C	%		①19.0 ②3.3			
	84	x	体	D	%		①13.6		外成因に弱味、内部の有機物がふるえ、堅直	
	85	x	x	x	%		①14.0 ②6.2		内面に弱味あり	
(M100)	86	x	环	A	%		①12.0			
	87	x	高塚		%		②12.8		A群	
	88	x	塗		%		①9.6 ②10.8			
	89	x	体	C	%		①16.0 ②17.4			
	90	x	體	Da	%		①22.7 ②26.6			
	91	x	x	a	%		①19.0 ②27.4		内外に弱味あり	
	92	x	x	a	%		①25.4		外成因付着	
(M100)	93	x	x	B 1	%		①16.5 ②13.1 ②12.5		初	
	94	x	x	a	%		①14.6 ②13.7		軽	
	95	x	x	x	%		①19.0		B群	
	96	x	x	B II	%		①25.0		軽、片口端にならむ	
	97	x	x	x	%		①26.0 ②20.4		外成因付着	
	98	x	x	x	%		①24.0 ②22.0		軽、化粧土をかけ、B群	
	99	x	x	x	%		①25.7 ②23.6		軽、運行時	
	100	x	x	x	%		①26.8		軽	
(M100)	101	x	x	B III	%		①22.3 ②24.0		粗	
	102	x	x	Db	%		①22.2 ②25.7		粗	
	103	x	x	v	%		①27.0		粗	
	104	x	x	v	%		①26.2		粗	
	105	x	x	v	%		①26.0		粗、外側に輕量化土をかけた	

直角	探査No	種別	器種	分類	測量	①山形②降水量		備考
						③気温	④地盤	
M 1	106	土師器	甕	Dh	%	①27.3		
	107	x	甕		%	②22.4		焼ける
(第12回)	1	瓦窯器	甕	B II	%	①14.9		
	2	x	高環		%	①18.6		
	3	x	甕		%	②6.0 ④7		
	4	x	x		%	②0.0 ④11.6		
	5	土師器	甕	Cia	%	①14.7		
	6	x	甕	Dh	%	②28.0 ④28.6	粗	
(第13回)	1	土師器	甕	Cia	%			
	2	x	x	F	%			
	3	x	甕	B I	%	①10.2 ④12.0	喉	
(第14回)	104-1	瓦窯器	甕		%	①25.6		
	11	x	x		%	①4.0	天井部内面に墨付有り	
	432	x	x		%	②15.4		
	370	x	x		%	①19.6		
	219	x	x		%	①14.6	舐んでいる	
	313	x	x		%	①14.4		
	388	x	x		%	①16.6		
	175	x	x		%	①15.8		
	90-1	x	x		%	①14.7		
	171-1	x	x		%	①12.8		
	171-2	x	x		%	①14.6		
	332	x	x		%	①13.8 ②2.2		
	296	x	x		%	①15.4 ②1.1		
	154	x	x	1		①15.2.4		
	105	x	x	1		②12.2		
	252	x	环	B I	%	①12.3 ②8.9		
	101	x	x	B II	%	②0.6		
	277	x	x		%	①13.2 ②8.0	③3.9	
	306	x	x		%	①14.1 ②9.3	③3.5	
	489	x	x	B I	%	②8.8		
	30	x	x	B II	%	②8.0		
	90-2	x	x	B I	%	①11.7		
	403	x	x	B II	%	①13.7		
	181	x	x	A	%	①12.9	生焼けに近い	

直角	探査No	種別	器種	分類	測量	①山形②降水量		備考
						③気温	④地盤	
P	103-1	須恵器	壺	B II	%	①13.0		
	316	x	x	x	%	②14.6		
(第12回)	94	x	III	A I	%	①11.9 ②9.5		
	203-1	x	x	A II	%	②16.6 ②18.7		
	163-1	x	x	x	%	①14.8 ②10.6	③1.6	
	163-2	x	x	x	%	②18.2 ②14.0		
	100	x	x	x	%	①16.6 ②11.9	外壁部に板状痕あり	
	306-1	x	壺		%	②12.6 ②21.0		
	263	x	壺		%	②35.4		
(第13回)	44	土師器	壺		%	②16.0		
	260	x	高環		%	②17.4		
	171-3	x	壺	Cia	%	①10.7		
	99	x	x	x	%	①11.6	2次火熱を受けている	
	107	x	x	Cic	%	①12.5		
	13	x	x	Cia	%	①12.8 ②3.2		
	47	x	x	Cic	%	①13.0		
	438	x	x	Cib	%	①13.0 ②3.1	2次火熱を受けている	
	136-1	x	x	Cia	%	①13.2	内壁部に斑模み	
	188	x	x	Cic	%	①14.2		
	32	x	x	Cz	%	①13.5		
	204	x	x	Cib	%	①15.5		
	243-1	x	x	Cia	%	①15.0 ②3.05		
	243-2	x	x	Cic	%	①15.0 ②2.75		
	336	x	x	Cic	%	①16.4 ②3.5	内面に斑模	
	325	x	x	Cia	%	①14.8	外面上に化粧土	
	356	x	x	Cia	%	①14.0		
	67	x	x	Cia	%	①13.5		
	702-2	x	x	D	%	①13.7		
	91	x	x	D	%	①13.0		
(第14回)	76	x	x	Cz	%	①13.4 ②3.8		
	439-1	x	x	Cz	%	①12.0 ②4.1		
	138	x	x	D	%	①13.0 ②4.0		
	287	x	x	D	%	①13.8 ②4.9	内外に化粧土	
	347-1	x	x	E	%	①14.6		
	327	x	x	F	%	①10.7		

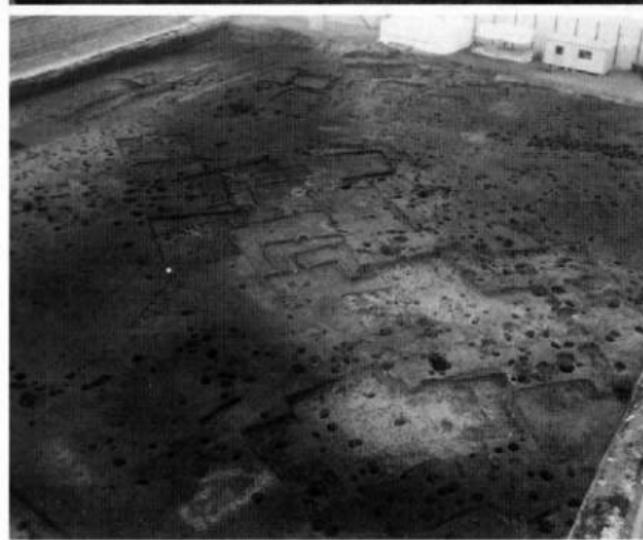
地番	井戸番号	種別	岩相	分類	換算係数	①回復率 ②砂質率 ③粘土率			備考
						法量	①回復率	②砂質率	
P	35	土壌器	場	F	%	①13.6			内外に化粧土
	315	#	#	#	%	①13.5			
	431-1	#	Ⅳ	C	%	①16.4	②3.1		外壁面に吸着物
	461	#	#	#	%	①18.4	②2.5		内外と6万粒か
	274	#	#	D <sub>3</sub>	%	①16.8			2次丸石を含む
	463-1	#	#	D <sub>1</sub>	%	①20.2	②4.5		
	463-2	#	#	D <sub>1</sub>	1	①20.2	②4.5		
	55	#	#	D <sub>4</sub>	%	①20.0			
	167	#	#	#	%	①24.4			外壁に鐵錆あり
	352	#	鉢	C	%	①12.7	②1.1		
(512908)	275-1	#	鉢	B	%	①22.5			
	275-2	#	瓶		%	①15.4			
	307	#	瓶	A	%	①21.4	②0.3		
	407	#	瓶	B	%	①28.0			外壁吸着物
	309-2	#	瓶		%	①17.8			
(512908)	136-2	#	瓶	D <sub>4</sub>	%	①26.4			
	70	#	#	#	%	①24.2			
	88	#	#	BIII <sub>2</sub>	%	①24.2			瓶
	439-2	#	#	D <sub>5</sub>	%	①26.7			瓶
	171-4	#	#	BIII <sub>2</sub>	%	①19.0			瓶
	368	#	#	D <sub>6</sub>	%	①16.3			瓶
	17	#	#	BIII <sub>2</sub>	%	①24.0	②24.3		瓶 吸着物
	431-2	#	#	D <sub>6</sub>	%	①23.8			瓶
	311	#	#	BIII <sub>2</sub>	%	①18.8			瓶
その他(512908) (O)	1	吸着器	場	A	%	①9.8			北
	2	#	瓶		%	①14.0			20・21回目、高 温化
	3	#	#		%	①16.7			
	4	#	#		%	①14.0			重ね焼き物あり
	5	#	#		%	①13.7			
	6	#	瓶	BII	%	①11.8	②0.9		
	7	#	#	#	%	①11.8	②6.0		
						②6.2			
	8	#	#	A	%	①12.8			9付近
	9	#	#	BIII	%	①20.4			20・21回目
	10	#	#	#	%	①16.4			7付近
	11	#	Ⅳ	CII	%	①11.8			20・21回目

地番	井戸番号	種別	岩相	分類	換算係数	①回復率 ②砂質率 ③粘土率			備考
						法量	①回復率	②砂質率	
0	12	吸着器	里	CII	%	①16.0	②2.5		20・21回目
	13	#	#	A I	%	①14.4	②1.9		28東北
	14	土壌器	高環		%	①12.2			34東南
	15	#	瓶	Cia	%	①11.8			55東
	16	#	#	Cib	%	①12.0	②0.6		20・21回目
	17	#	#	Cis	%	①14.4	②3.9		28南
	18	#	#	Cic	%	①13.7			不明
	19	#	#	F	%	①15.1			#
	20	#	#	S	%	①14.8			28北
	21	#	境	B	%	①15.4	②6.4		不明、化粧土含 含む
	22	#	里	A II	%	①24.0	②19.4		不明
(512908)	23	#	瓶	Da	%	①22.7			20・21回目
	24	#	#	#	%	①16.7			#
	25	#	#	B I	%	①12.0			9付近、相
	26	#	#	#	%	①16.0			不明、瓶
	27	#	#	B III	%	①25.7			不明、瓶
	28	#	#	Db	%	①24.0			名余居、相、瓶 付
	29	#	#	B III <sub>2</sub>	%	①25.4	②24.1		不明、瓶、瓶付 物
	30	#	瓶		%	①25.6			25回、瓶

# 図 版



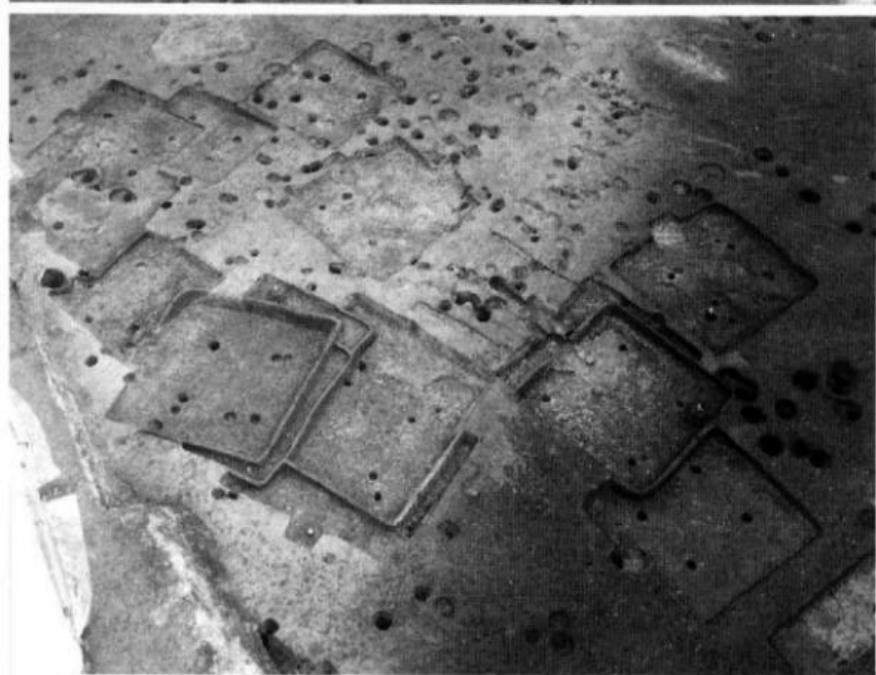
塔ノ上遺跡全景 上、西からの航空写真 下、東から



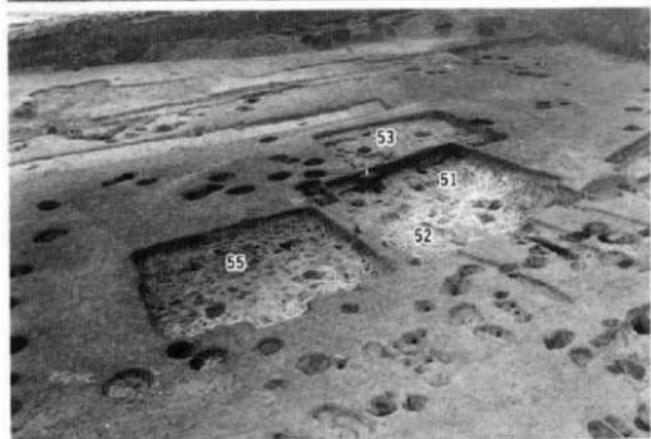
塔ノ上道路全景  
上、東から  
中、東北から  
下、西から



下・1号住居跡カマド  
中・2号住居跡（東から）  
上・1号住居跡（南から）



C・D群全景 上、北から 下、南から



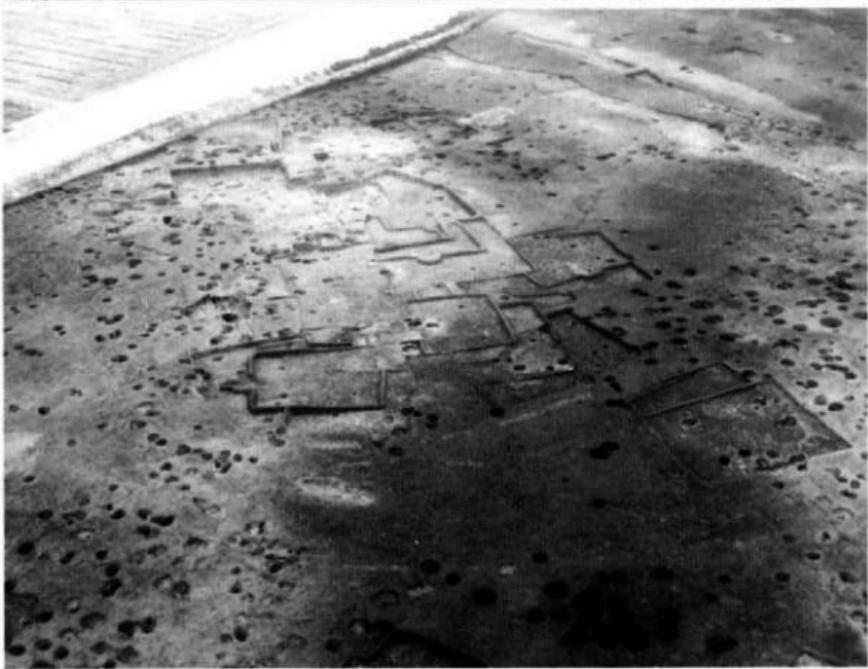
上. C群全景  
(東から)

中. D群全景  
(東北から)

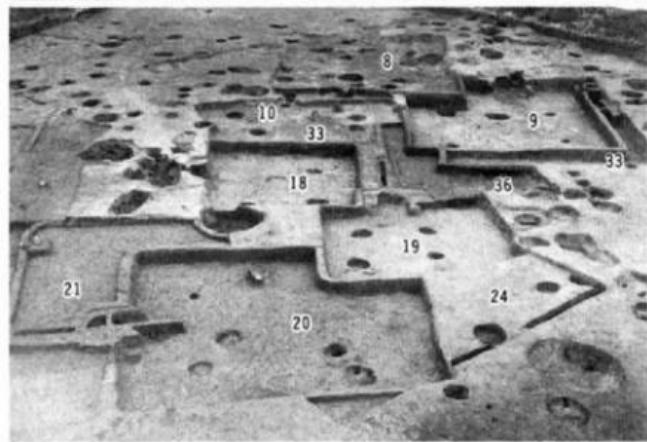
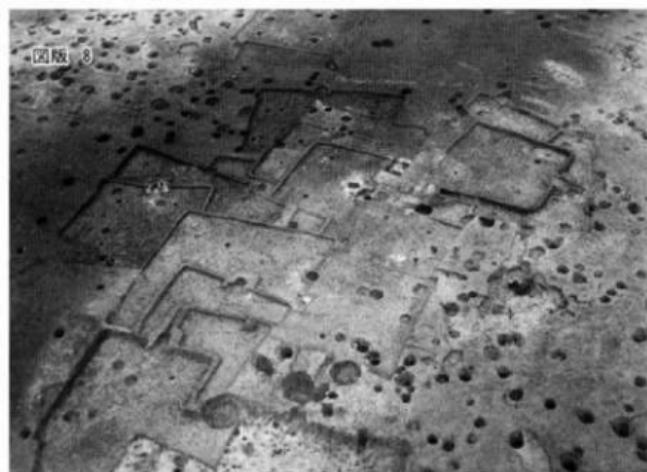
下. 43号住居跡  
カマド



上、46号住居跡カマド  
中、49号住居跡カマド  
下、55号住居跡カマド



上. E・F群全景(北から) 下. E-I群全景(西から)



上. E・F群全景  
(東から)  
中. G群全景  
(南から)  
下. 57号住居跡カマド



上、29号住居跡カマド  
中、59号住居跡カマド  
下、64号住居跡カマド



上、8号住居跡カマド  
中、9号住居跡カマド  
下、18号住居跡カマド



I群全景 上、西から 下、南から

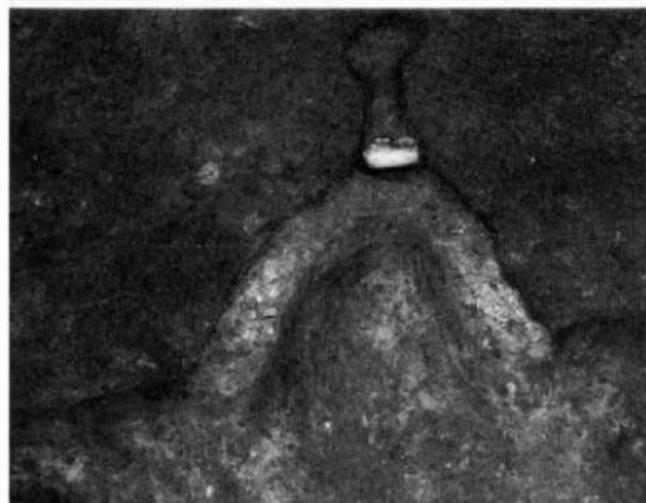
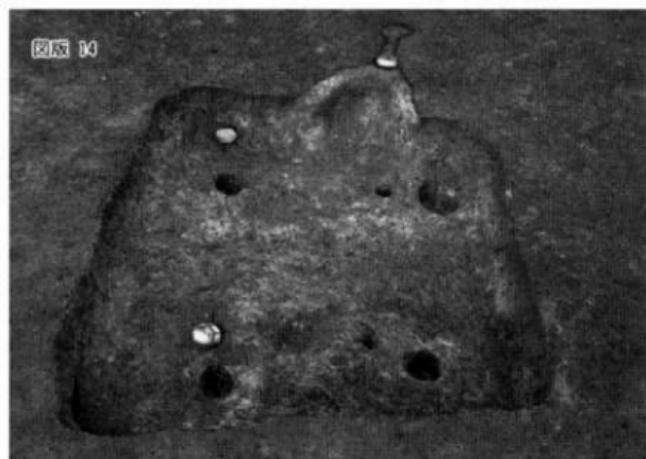


上. 11・72号住居跡  
(南から)  
中. 14号住居跡 (南から)  
下. 14号住居跡カマド



上、15号住居跡カマド  
中、13号住居跡カマド  
下、17号住居跡カマド煙道  
先端ピット（P701・703）





3号住居跡  
上、全景（南から）  
中・下、カマド

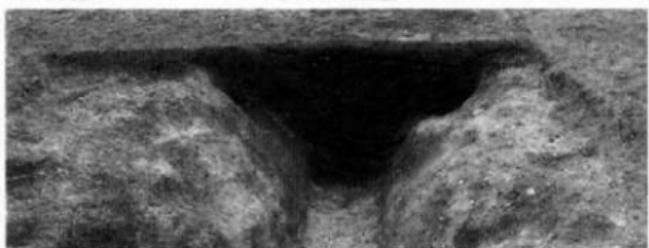


E群掘立柱建物全景 上、北から 下、東から

D 10

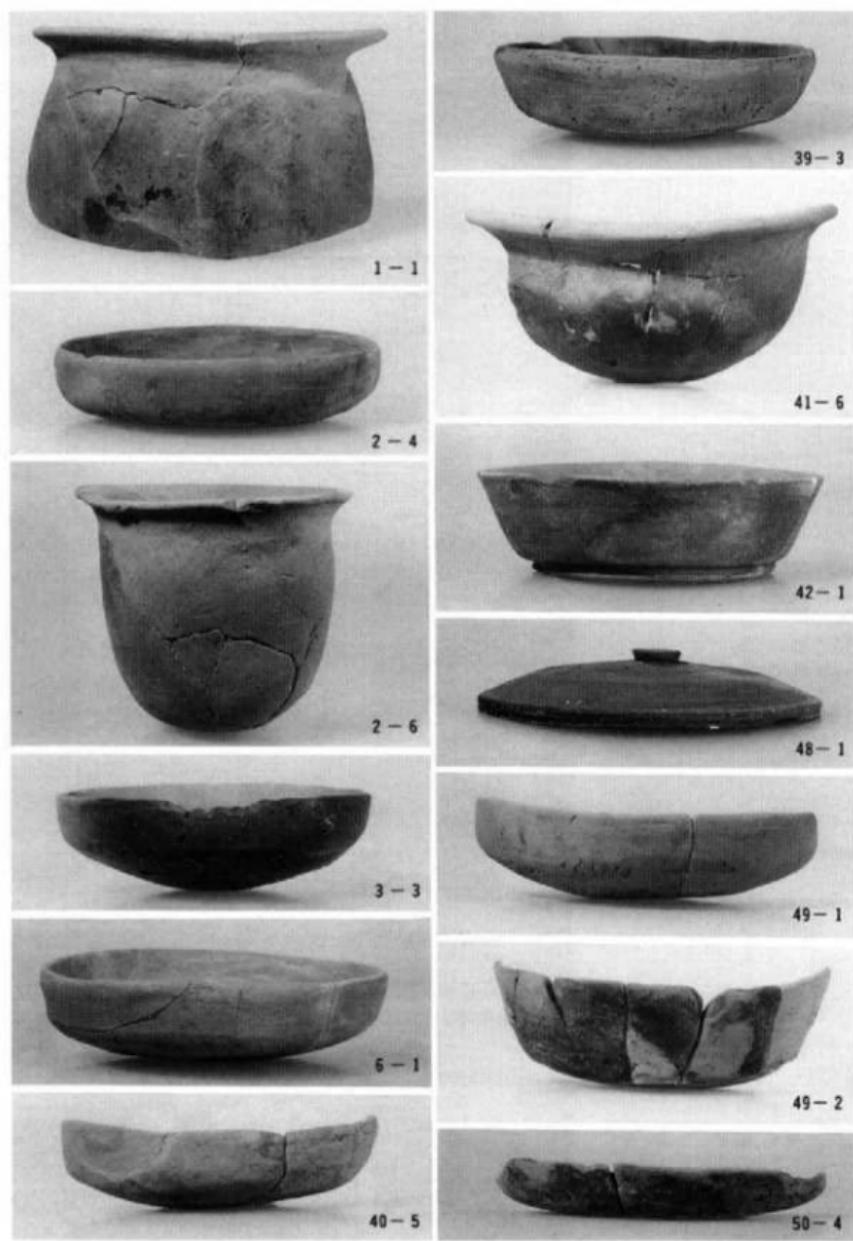
D 11

上. 10・11号土壤 (南から)  
中. 9号土壤 (西から)  
下. 1号土壤 (北から)



### 溝1・2

上、全景（東北から）  
中上、土層D（溝1）  
中下、土層C（溝2）  
下、溝1 A群



塔ノ上遺跡出土土器①（1-3・6・39-42・48-50号住居跡）



塔ノ上遺跡出土土器② (43・46・58・55・28・25・35号住居跡)



52-5



51-7



52-6



51-8



60-7

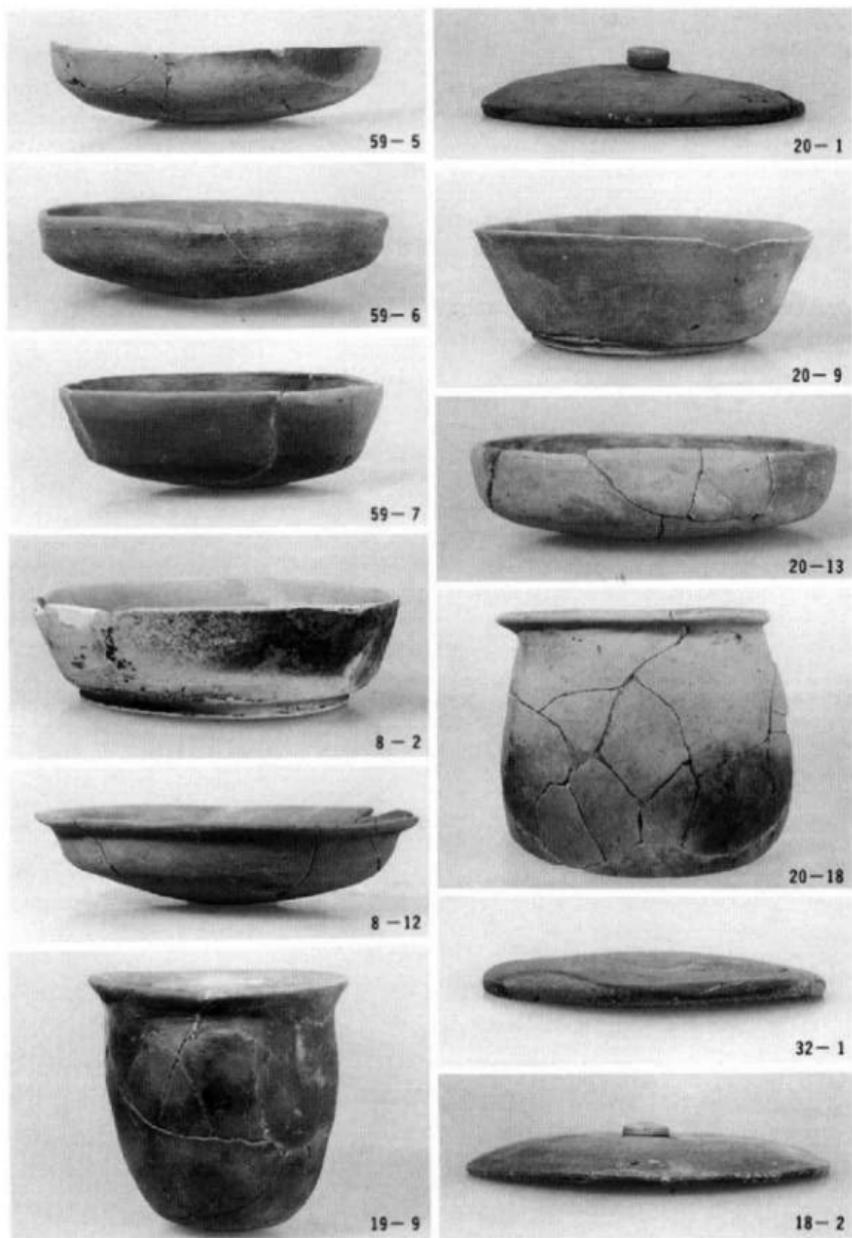


64-5

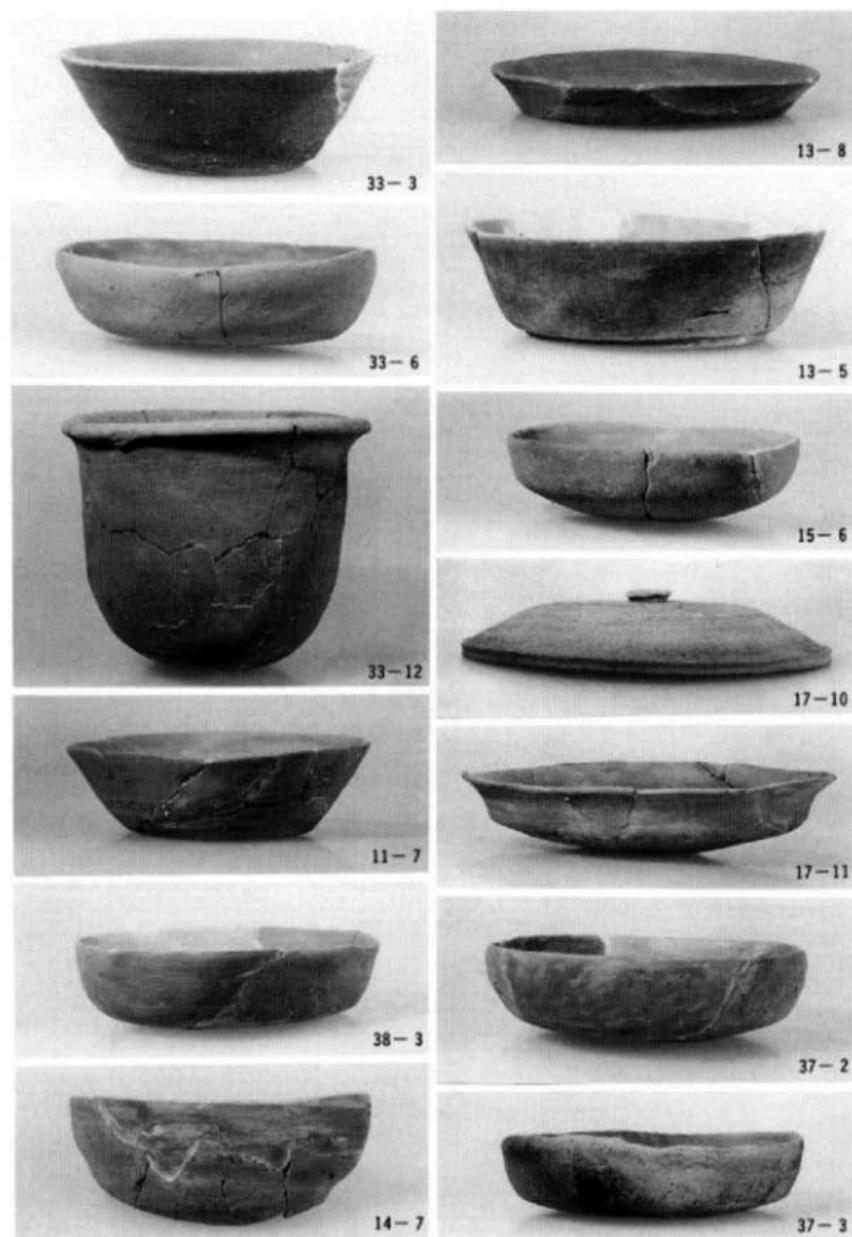


51-10

塔ノ上遺跡出土土器③ (51・52・60・64号住居跡)



塔ノ上遺跡出土土器④ (59・8・19・20・32・18号住居跡)



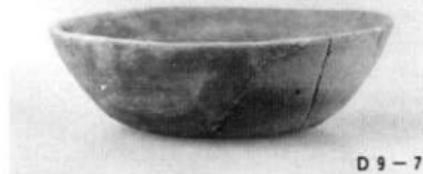
塔ノ上遺跡出土土器(33・11・38・14・13・15・17・37号住居跡)



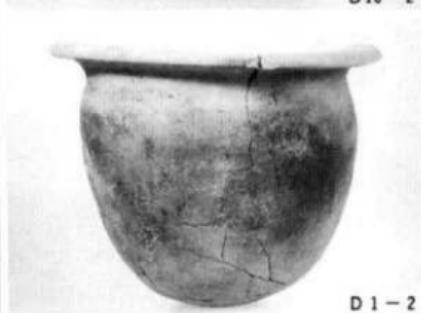
B 2 - 2



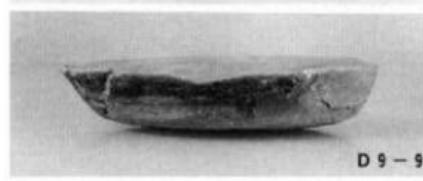
D 10 - 2



D 9 - 7



D 1 - 2



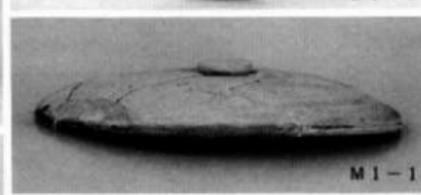
D 9 - 9



D 1 - 3



D 9 - 11



M 1 - 1

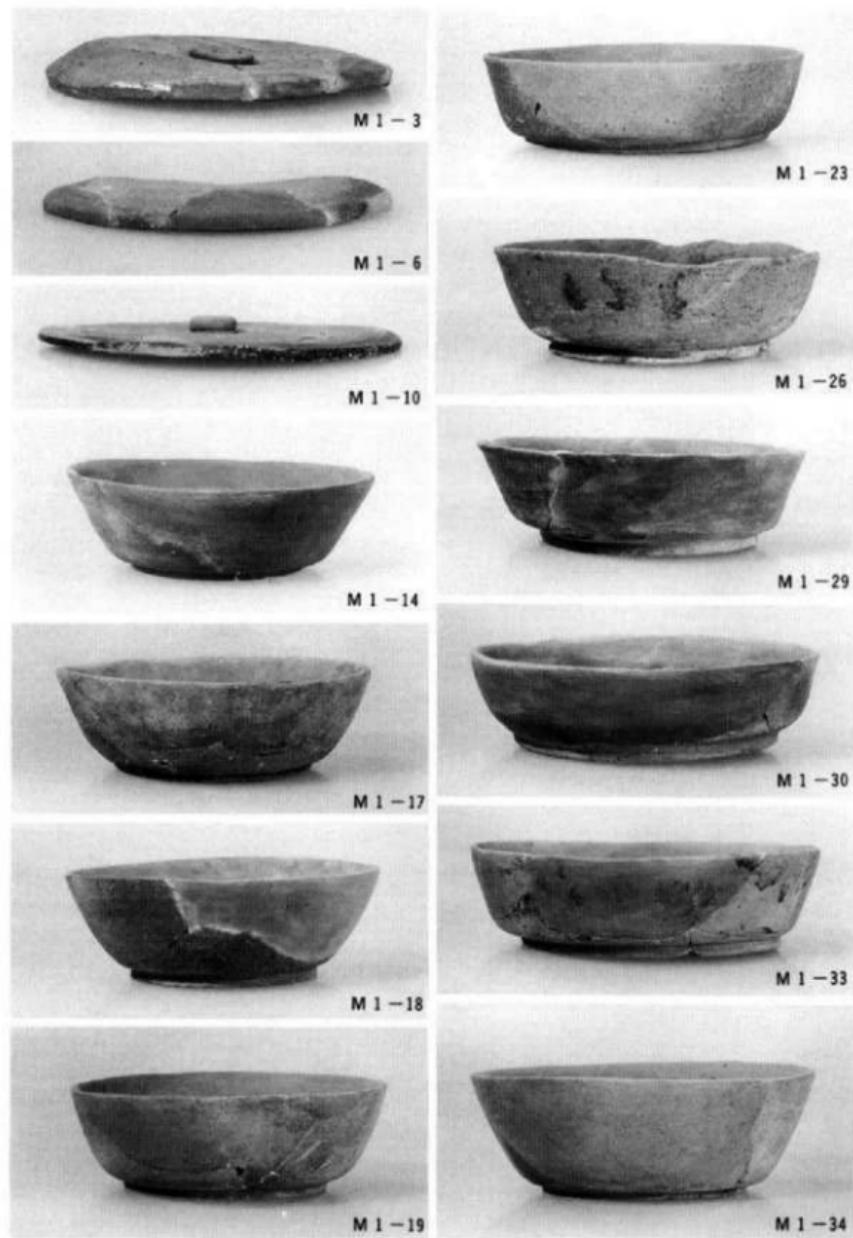


D 9 - 12



M 1 - 2

塔ノ上遺跡出土土器⑥ (B 2 ; D 9 - 10 - 1 ; M 1 )



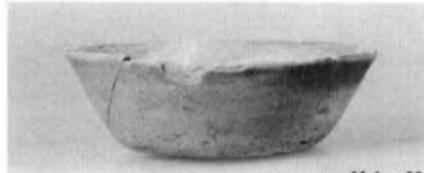
塔ノ上遺跡出土土器⑦ (M 1)



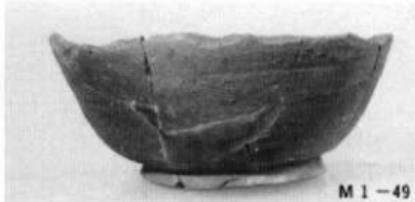
M 1 - 37



M 1 - 46



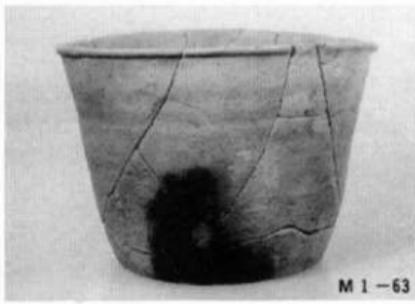
M 1 - 38



M 1 - 49



M 1 - 39



M 1 - 63



M 1 - 40



M 1 - 66



M 1 - 41



M 1 - 68

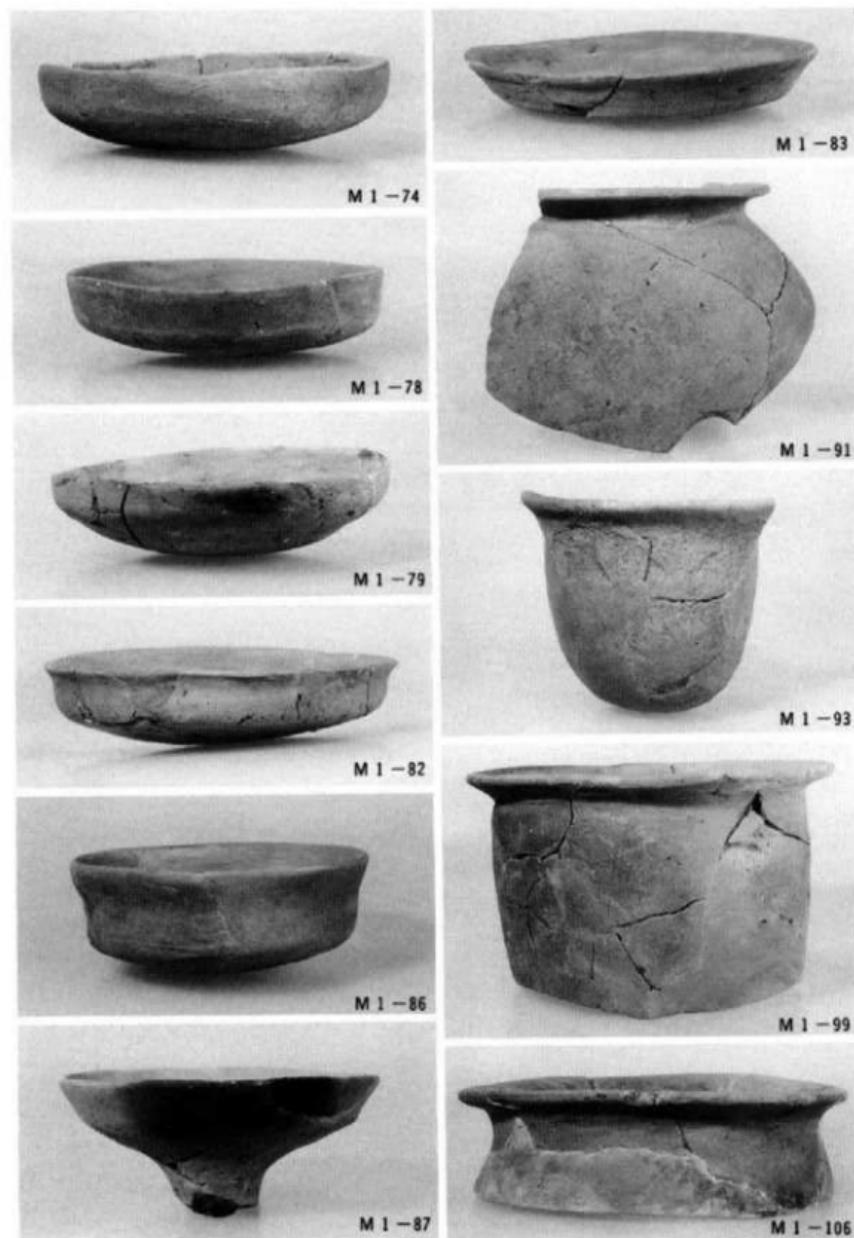


M 1 - 44

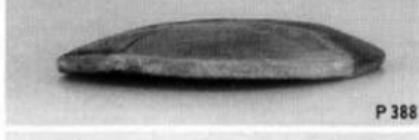
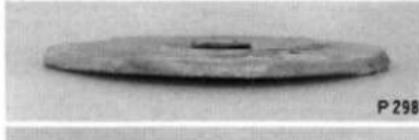
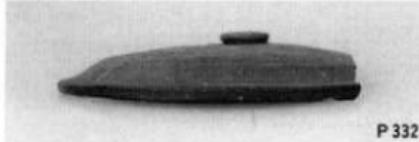


M 1 - 69

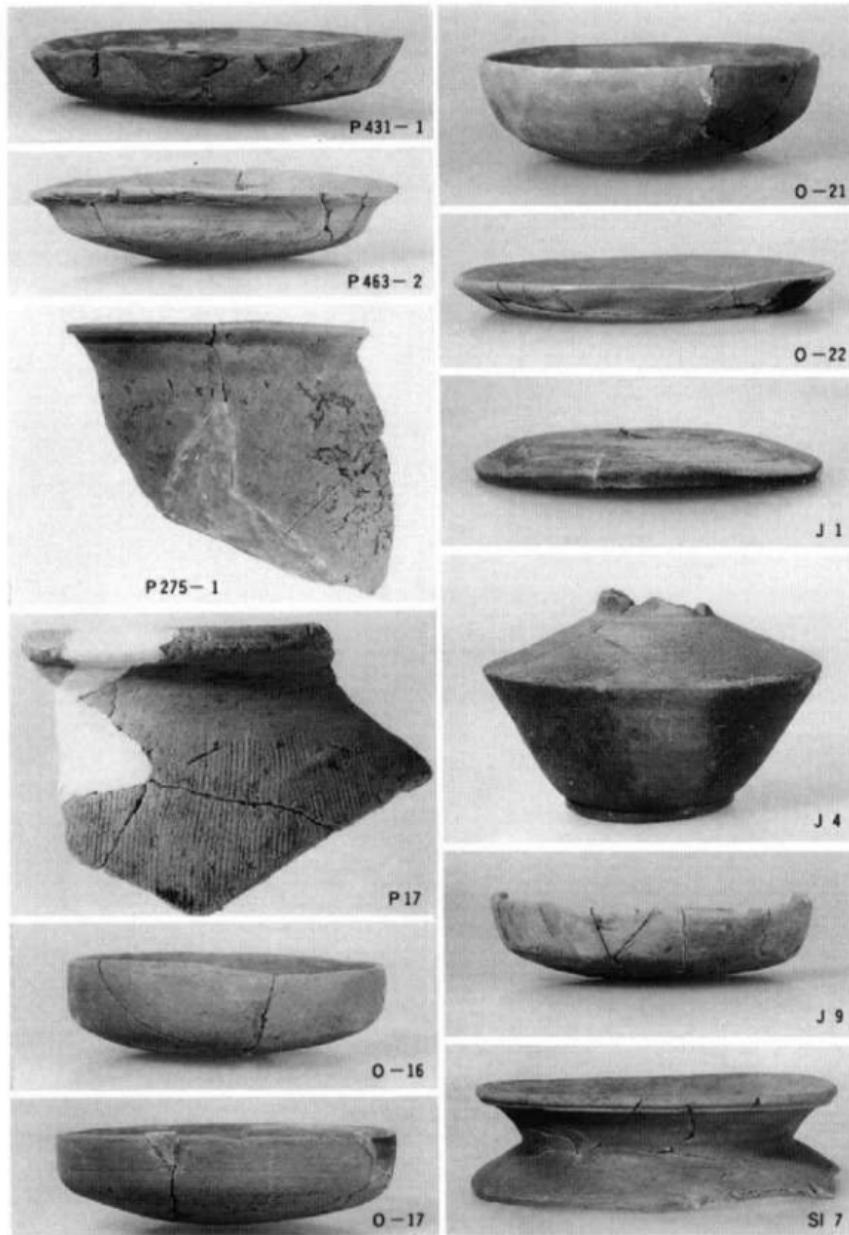
塔ノ上道路出土土器⑧ (M 1)



塔ノ上遺跡出土土器⑨ (M1)



塔ノ上道路出土土器⑩ (M 2, ピット)



塔ノ上遺跡出土土器⑪（ピット、その他、接合・同一個体資料）



J 7



P 111



J 11

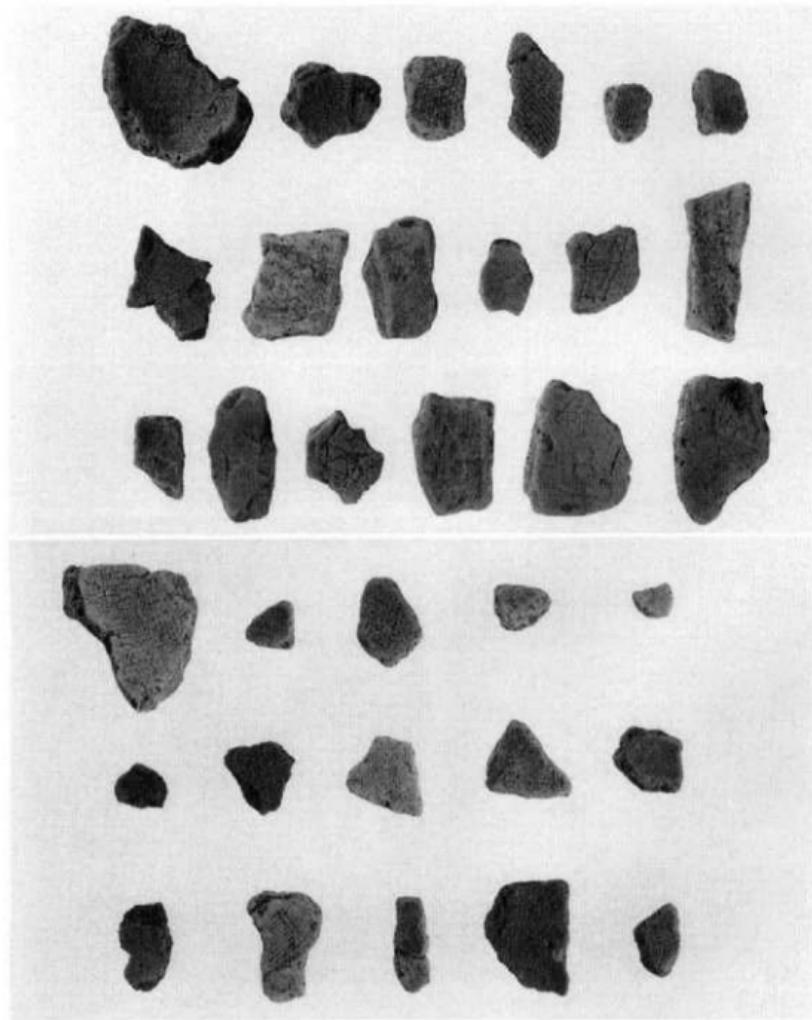


46-10

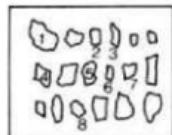


50-9

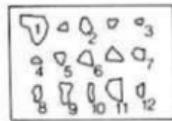
塔ノ上遺跡出土土器⑫（接合資料；墨書き器；燒塗器①）



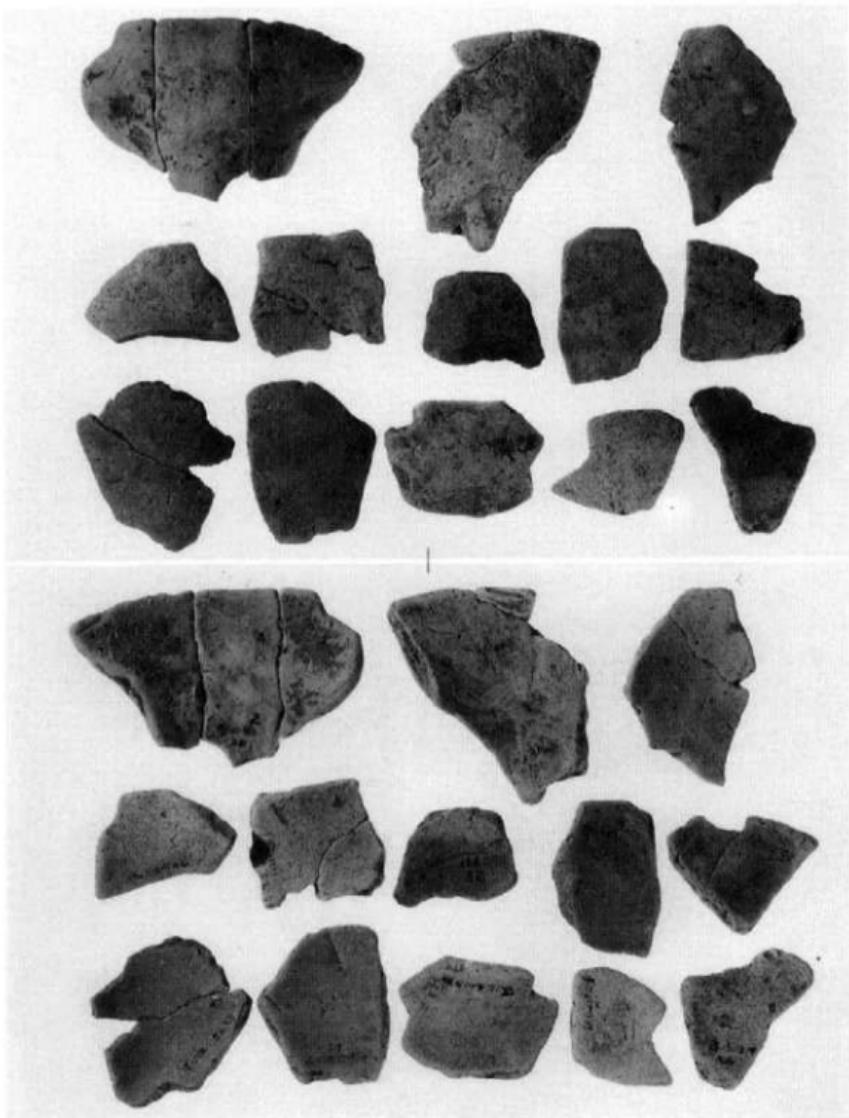
塔ノ上道跡出土燒塗土器②



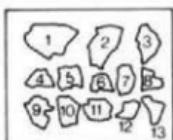
上、M1出土  
1.156 5.148  
2.149 6.128  
3.147 7.145  
4.135 8.146



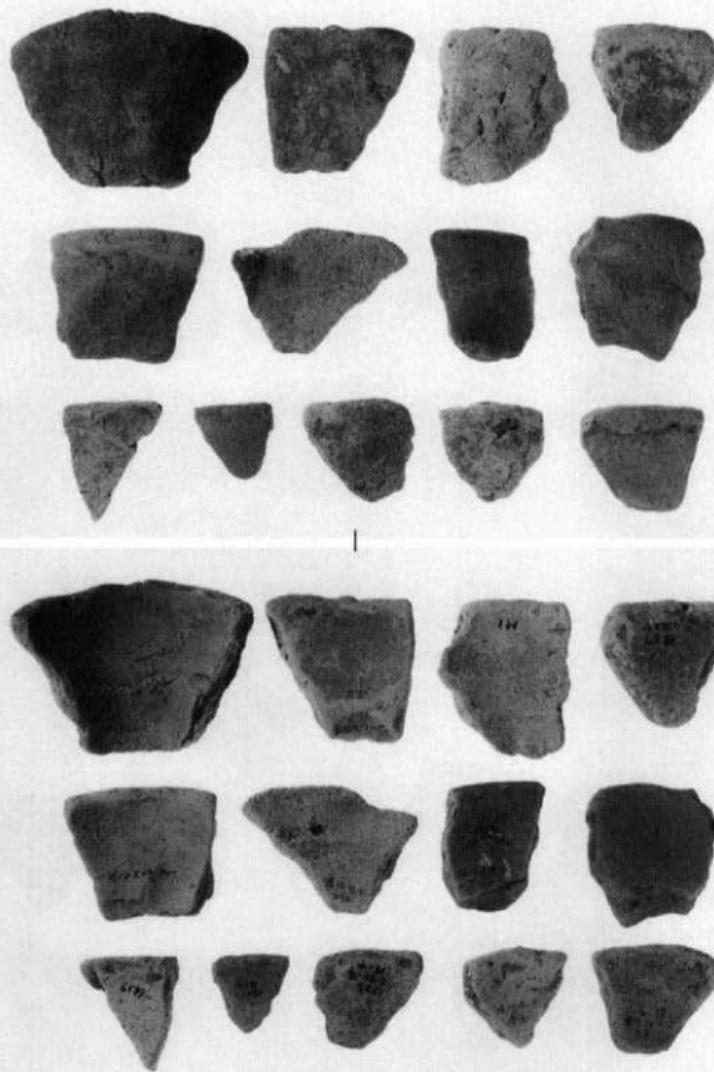
下  
1.0-31 7.33-16  
2.0-34 8.40-9  
3.19-21 9.62-5  
4.41-8 10.B4-1  
5.35-4 11.O9-22  
6.28-9 12.M2-9



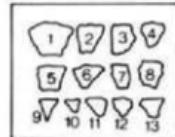
塔ノ上遺跡出土焼塙土器③



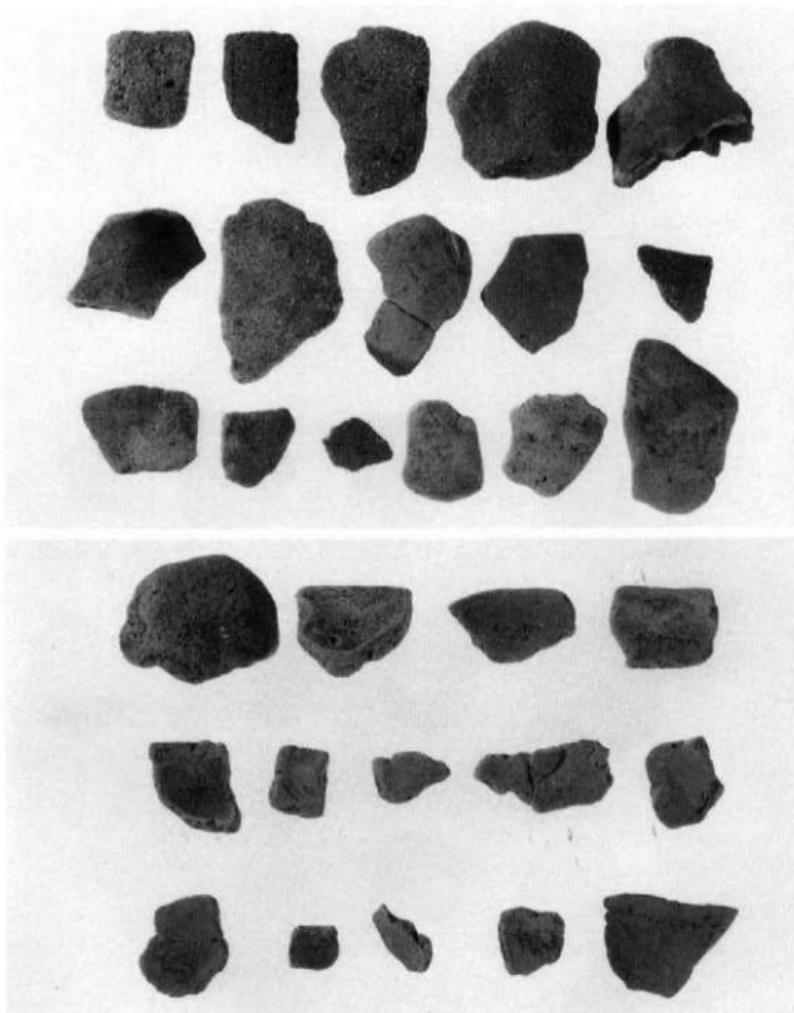
1. 2 - 7	8. 59 - 11
2. 49 - 4	9. 10
3. 19 - 19	10. 57 - 11
4. 5. 19	11. 20 - 21
6. 6 - 4	12. 64 - 6
7. M1 - 127	13. 19 - 20



塔ノ上遺跡出土焼塙土器④

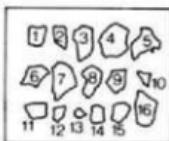


- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1. P405   | 8. 19-13  |
| 2. 60-10  | 9. 19-14  |
| 3. M1-131 | 10. 47-5  |
| 4. 57-12  | 11. O-33  |
| 5. 45-6   | 12. 19-16 |
| 6. 4-4    | 13. 19-17 |
| 7. D1-4   |           |



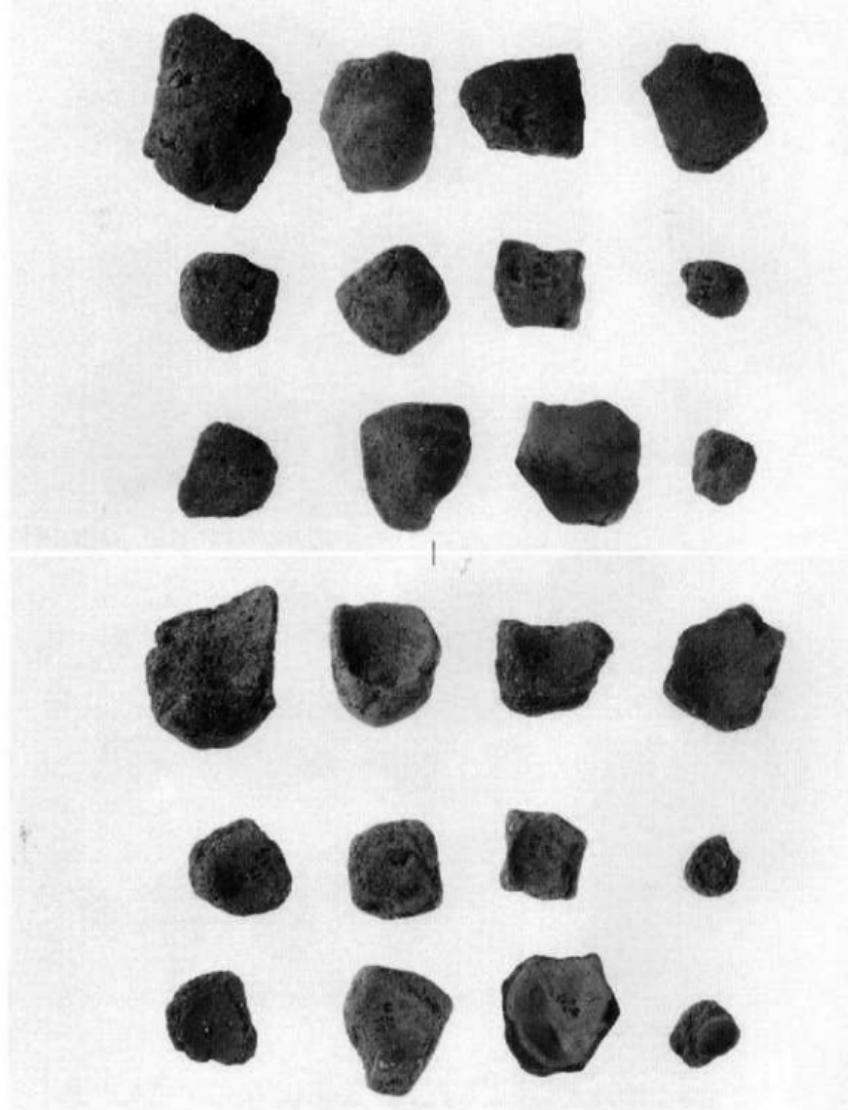
塔ノ上遺跡出土焼塙土器⑤

上.

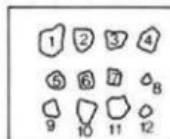


1. M1-142	7. 8-17	13.36
2. O-32	8.50-10	14.53-6
3. 19-18	9.38-6	15.16
4. 23-6	10. 1-4	16.49-6
5. 8-18	11. 3-8	
6. D1	12.25	

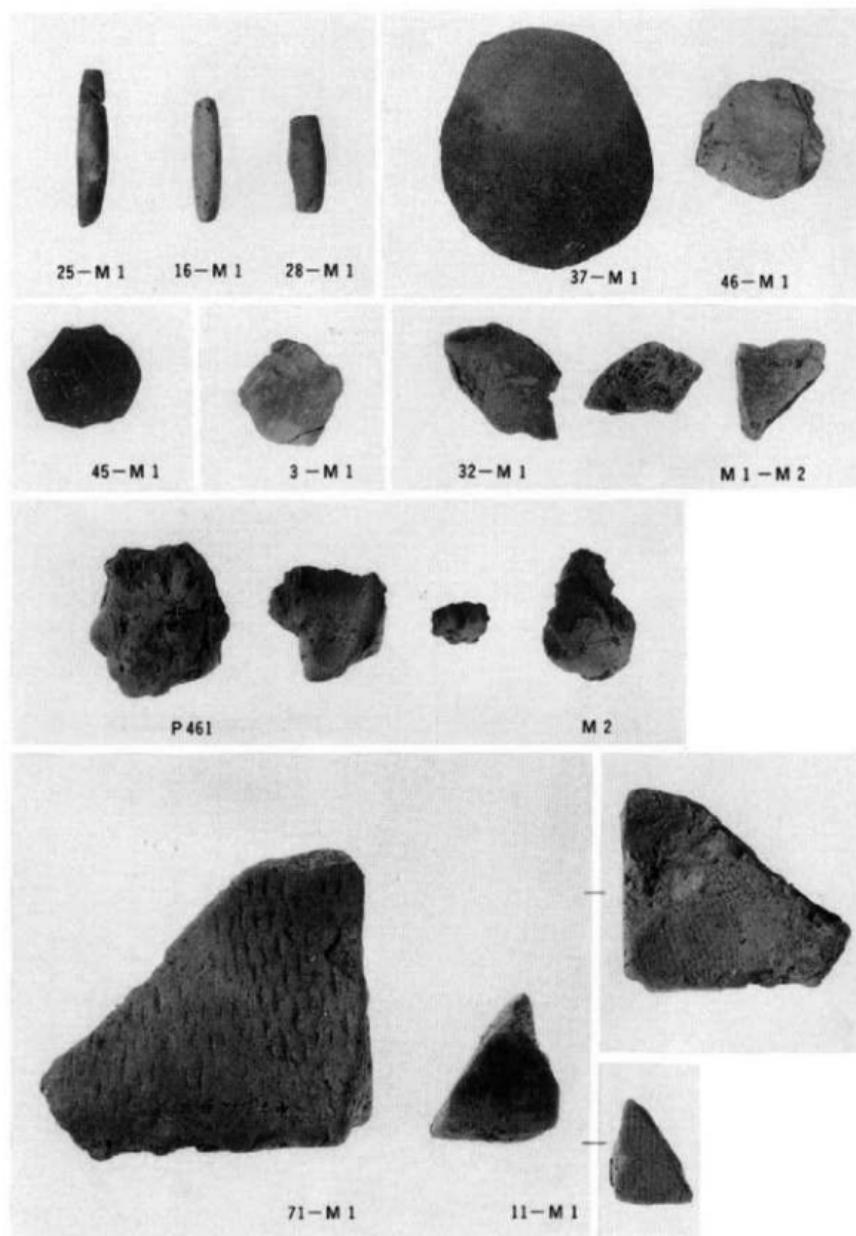
下. 55号住居跡カマド内



塔ノ上遺跡出土焼塙土器⑥



- |           |            |
|-----------|------------|
| 1. M1-155 | 7.37       |
| 2. M1-154 | 8. M1-152  |
| 3. B4-2   | 9. M1      |
| 4. 64-7   | 10. 23-7   |
| 5. 15-17  | 11. O-36   |
| 6. M1     | 12. M1-151 |



土製品・瓦



D 9-S 1



37-S 1



20-S 1



61-S 1



71-S 1



4-S 1



51-S 1



56-S 1

石製品（上，研鍊車，下，砥石）



41



44



43



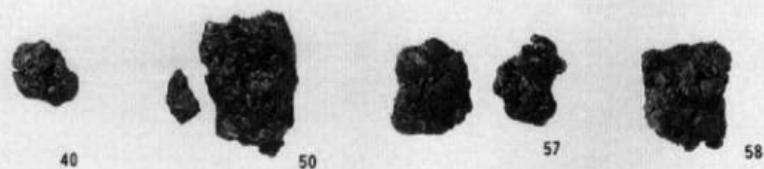
50



51



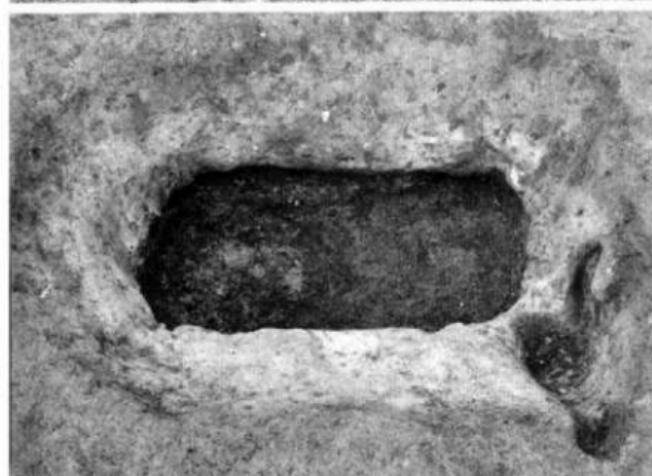
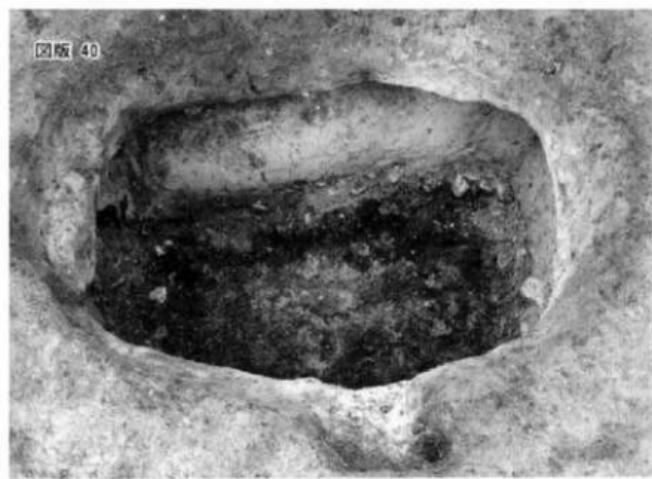
10



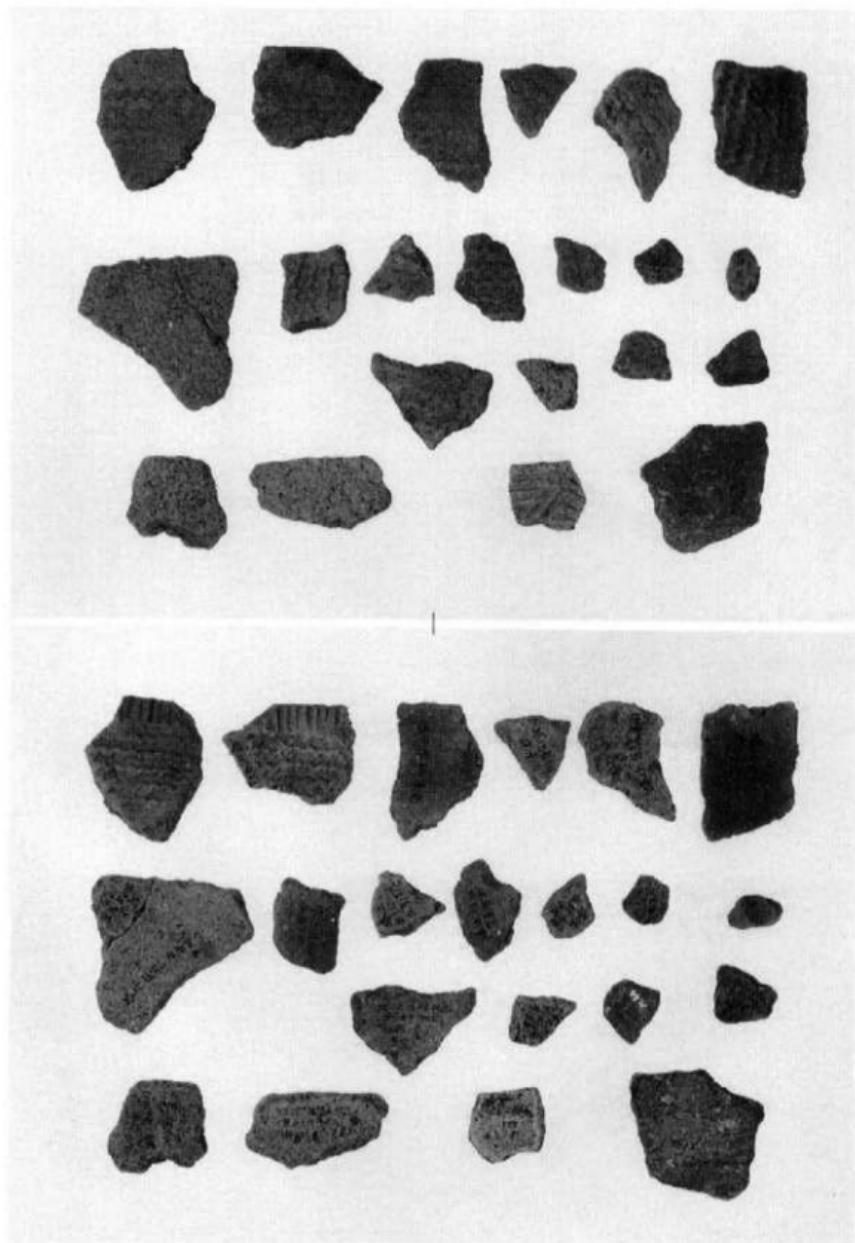
鉄製品②、スラッグ



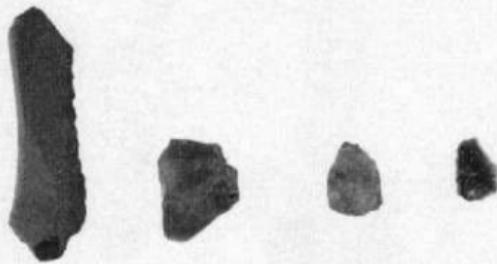
上. 3号土壤(南から)  
中. 4号土壤(南から)  
下. 5号土壤(南から)



上. 6号土壤(南から)  
中. 7号土壤(南から)  
下. 8号土壤(南から)



縄文土器



上、石器 中、周辺出土土器 下、雪に覆われた道路

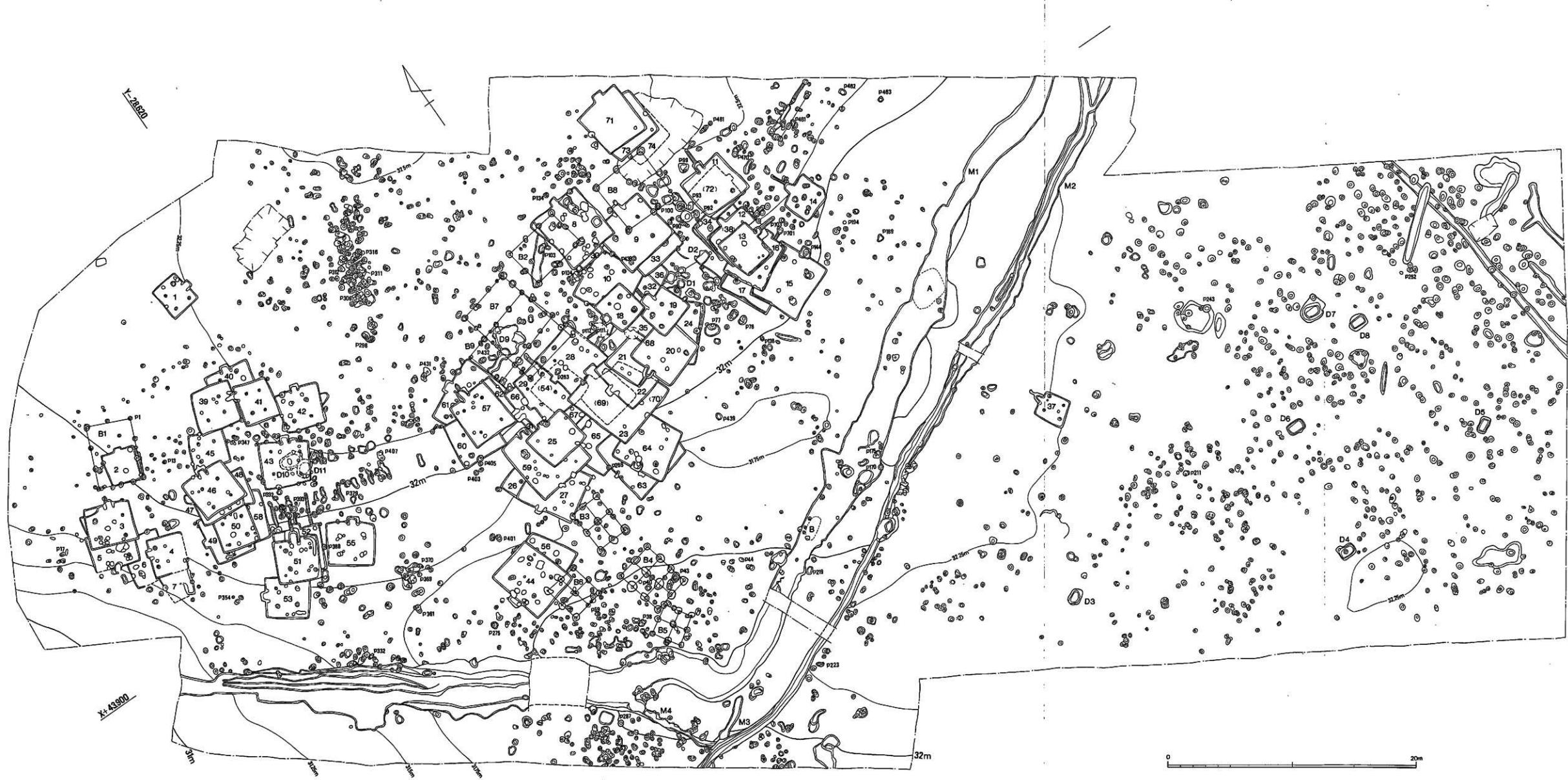
福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 6 1	登録番号 1 5

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 — 9 —

昭和 62 年 3 月 31 日

発行 福岡県教育委員会  
福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印刷 赤坂印刷株式会社  
福岡市中央区大手門 1 丁目 8-34



付図 塔ノ上遺跡全図 (1/200)